三重県埋蔵文化財調査報告115－33

一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う

にんごう遺跡・にんごう古墳群
発掘調査報告

２０１４（平成26）年３月

三重県埋蔵文化財センター

にんごう古墳群を望む（西から）

Ｄ地区調査後風景（西から）

２号墳全景（北から）

２号墳墳丘盛土断面（北から）

２号墳鉄剣出土状況（北から）

２号墳出土遺物

序

三重県の北東部に位置する伊勢平野は、西側に鈴鹿山脈と布引山地がそびえ、東側は伊勢湾に臨む、豊かな自然が残された地域です。この伊勢平野の中央、津市を流れる安濃川・岩田川流域は肥沃な土壌に恵まれ、また日本三津で知られる安濃津が所在し、古くから人々の生活が連綿と営まれてきました。

今回報告するにんごう遺跡・にんごう古墳群では、一般国道23号中勢道路建設に伴い現状保存が困難な部分について、緊急発掘調査が実施されました。

調査地のすぐ北では、団地造成のため稲葉古墳群・鎌切古墳群が調査されており、いずれも６世紀代を中心とする後期古墳９基であることがわかっていました。しかし今回の調査では、５世紀代にさかのぼる古墳が含まれることがわかり、この丘陵上の古墳造営の契機となる重要な遺跡であることが判明いたしました。

にんごう遺跡・にんごう古墳群は、記録保存という形で調査されたため、現地はすでに消滅しました。古来より新しい文化を受容し、多くの人が行き交ったこの地には、新たな道路が建設され、より多くの人が訪れることとなるでしょう。本書がこの地域の重要性を知り、さらには埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご協力を賜る契機となることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり多大なるご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成26年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　河北　秀実

例　言

１．本書は、三重県津市大字神戸地内に所在するにんごう遺跡・にんごう古墳群の発掘調査報告書である。

２．本遺跡の調査は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局長より委託を受けて、平成24年度に一般国道23号中勢道路建設に伴って実施した。また、整理・報告書作成業務を平成24･25年度に実施した。
調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。

３．調査および整理は、次の体制により実施した。
　調査主体　　三重県教育委員会
　調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　調査協力　　津市教育委員会
　土木作業　　株式会社アート

４．現地調査は、にんごう５号墳は竹内和昭・山中由紀子、それ以外は山中が担当した。

５．本書は山中が執筆・編集した。遺構写真撮影は現地調査担当者が行い、遺物写真撮影は山中が担当した。室内整理業務は黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代が補佐した。特に、三辻利一氏（鹿児島国際大学客員教授）には埴輪の蛍光Ｘ線分析をお受けくださり、また玉稿を賜った。

６．発掘調査及び整理作業においては、周辺在住の方々や津市教育委員会にご協力いただいた。特に以下の方には様々なご教示をいただいた。（敬称略、順不同）
　藤田充子　村木一弥（以上、津市教育委員会）　三辻利一（鹿児島国際大学）

７．本書に関連した調査成果については、『中勢道路調査ニュース』№58（三重県埋蔵文化財センター　2013年）や報告会等で随時報告してきたが、本報告書をもって正式報告とする。

８．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　例

〈地図類〉

１．本書で使用した地図類は国土地理院発行1/25,000地形図、津市地形図及び都市計画基本図1/2,500である。
２．挿図の方位は全て座標北で示している。磁針方位は西偏７度01分、真北方位は座標北の西偏０度16分（平成24年度）である。
３．本書で用いた座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高である。

〈遺構類〉

１．土層図は層の区分は実線で、実際に掘り下げた部分を破線で表現している。また、遺構に関わる土層の中で、本来は更に続くが側溝等で切られている場合、その壁は破線で表現している。その他、遺構面や遺構のライン、層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
２．遺構平面図で、調査に関わる畔や側溝により不明であるが想定される遺構のラインは破線で表現している。
３．土層図の色調は基本的に、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）に準拠した。
４．当報告書での遺構番号はＤ地区でのみ付与した。また、通番としている。
５．遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、見通し図となっている。
６．遺構番号の頭には、遺構の種別を示す以下の記号と、通番の数字の組合せにより表記している。
　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　pit：ピット・柱穴

７．遺物出土状況図の遺物に付された数字は報告番号を示す。
８．古墳の規模は下図の通りであるが、方墳の場合、墳丘中心点を通る位置で周溝中央部の、外側岸間の距離で計測した。円墳は、にんごう古墳群の場合古墳の残存が２分の１以下であることから、残存する周溝から墳丘中心点を推定し、それと残存する周溝外側岸との距離を半径として直径を出した。また、墳高は周溝底と墳頂との比高差で計測した。

〈遺物類〉

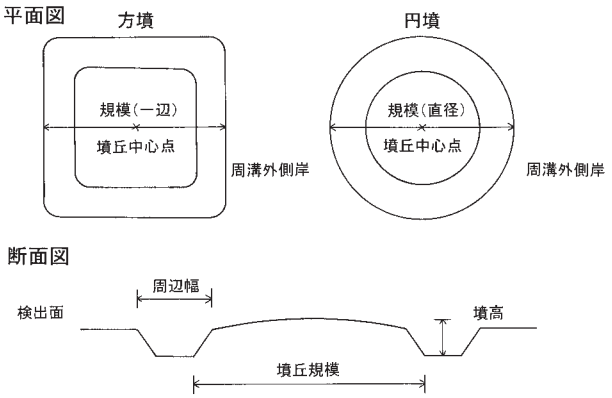
１．遺物番号は、遺物の種別に関わらず、通し番号で付与した。
２．当報告での遺物実測図は実物の1/4を基本とし、それ以外の縮尺のものについてはその都度表記している。
３．出土遺物は基本的に番号順に配置したが、レイアウトや整理上の都合等で若干前後した部分がある。
４．本書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。
５．本書における円筒埴輪の各部名称は、下図の通りである。
６．遺物観察表は、全ての遺物を合わせて、以下の要領により作成している。

報告番号・・・・・挿図掲載番号である。
実測番号・・・・・実測段階の登録番号である。
種類・・・・・・・遺物の大分類を示す。土師器、須恵器、埴輪、石器、鉄器等。
器種等・・・・・・種類を細分した器種・器形等を示す。
出土地区・・・・・調査時の大地区を示す。
出土遺構・・・・・出土した遺構を記した。No.を付した土器等は取り上げ時の区分番号である。
グリット・・・・・調査時に設定した地区名を示す。
法量・・・・・・・遺物の法量を示す。口径は口縁部径、器高は遺物の高さ、底部径を示す。
調整技法の特徴・・遺物観察時に確認した主な調整技法を記した。外は外面、内は内面を示す。
胎土・・・・・・・小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
焼成・・・・・・・焼成時の状態を「良～不良」で区別した。
色調・・・・・・・その遺物の代表となる色調を記載した。但し、大きく色調が異なるものは部位も表記している。外は外面、内は内面を示す。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存・・・・・・・残存度を主な部位を示した上で分数表記した。但し、部位が表記していないものは全体からみた残存度を分数で表記し、残存がわずかなものは小片、全体が残っているものは完存と記した。
備考・・・・・・・遺物の特徴となる事項を記した。

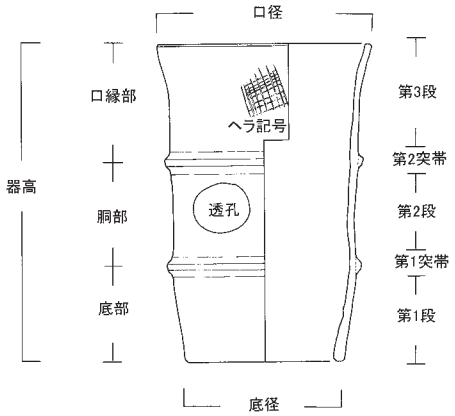
７．本書では、遺構・出土土器の年代については、全体を通じて以下の文献を参考にした。
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
『古代の土器１　都城の土器集成』1992年、『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』1993年、『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』1994年、いずれも古代の土器研究会編

〈挿図・写真〉

１．挿図と写真図版の遺構・遺物番号は、報告番号と対応している。
２．遺物の写真は、すべて縮尺不同である。



〈古墳規模模式図〉



〈円筒埴輪部分名称図〉

本　文　目　次

Ⅰ　前言 …… （山中） 1

1　調査の契機 …… 1

2　調査の体制 …… 1

3　調査の経過 …… 1

4　調査の方法 …… 7

5　整理・保管の方法 …… 7

6　文化財保護法等にかかる諸通知 …… 7

Ⅱ　位置と環境 …… （山中） 8

1　地理的環境 …… 8

2　歴史的環境 …… 8

Ⅲ　調査の成果－遺構と出土遺物－ …… （山中） 12

1　地形と基本層序 …… 12

2　Ａ地区 …… 14

3　Ｂ地区 …… 16

4　Ｃ地区 …… 23

5　Ｄ地区 …… 31

Ⅳ　自然科学分析 …… （三辻・山中） 53

1　自然科学分析の目的 …… （山中） 53

2　分析試料出土遺跡の概要 …… （山中） 53

3　三重県内古墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析 …… （三辻） 57

4　分析結果を受けて …… （山中） 73

Ⅴ　調査のまとめ …… （山中） 96

1　縄文時代陥し穴状遺構について …… 96

2　安濃郡における弥生後期～古墳後期の墳墓と集落 …… 96

3　総括 …… 98

挿　図　目　次

第１図　中勢道路（８－２～12工区）内遺跡位置図 …… 2

第２図　Ｄ地区範囲確認調査トレンチ位置図 …… 5

第３図　調査区位置図 …… 6

第４図　周辺遺跡位置図 …… 10

第５図　Ａ地区調査前地形図 …… 12

第６図　遺構全体図 …… 13

第７図　Ａ地区調査後地形図、出土遺物実測図 …… 14

第８図　Ａ地区墳丘土層断面図 …… 15

第９図　Ｂ地区調査前地形図 …… 17

第10図　Ｂ地区調査後地形図 …… 18

第11図　Ｂ地区土層断面図 …… 19

第12図　Ｃ地区調査前地形図 …… 20

第13図　Ｃ地区調査後地形図 …… 21・22

第14図　Ｃ地区土層断面図 …… 24

第15図　Ｃ地区土層断面図、出土遺物実測図 …… 25

第16図　１号墳遺構図・土層断面図、
主体部遺物出土状況図・土層断面図 …… 26

第17図　Ｄ地区調査前地形図 …… 27・28

第18図　Ｄ地区調査後地形図 …… 29・30

第19図　Ｄ地区土層断面図 …… 32

第20図　Ｄ地区南北方向・旧４号墳・２号墳土層断面図 …… 33
第21図　２号墳遺構図、ＳＫ５遺物出土状況図、ＳＫ６土層断面図 …… 35
第22図　２号墳周溝遺物出土状況図１ …… 36
第23図　２号墳周溝遺物出土状況図２ …… 37
第24図　３号墳遺構図、土層断面図 …… 38
第25図　８号墳遺構図、ＳＤ４・８土層断面図 …… 39
第26図　陥し穴状土坑（ＳＫ７・12・18）遺構図・土層断面図 …… 40
第27図　にんごう古墳群分布図（調査後） …… 44
第28図　にんごう古墳群出土埴輪分類図 …… 45
第29図　Ｄ地区２号墳出土遺物実測図１ …… 46
第30図　Ｄ地区２号墳出土遺物実測図２ …… 47
第31図　Ｄ地区２号墳出土遺物実測図３ …… 48
第32図　Ｄ地区２号墳出土遺物実測図４ …… 49
第33図　Ｄ地区ＳＤ４・包含層他出土遺物実測図 …… 50
第34図　胎土分析実施遺跡分布図 …… 54
第35図　上野遺跡出土埴輪の両分布図 …… 59
第36図　一色古墳群出土埴輪の両分布図 …… 59
第37図　庄田２号墳出土埴輪の両分布図 …… 59
第38図　高茶屋大垣内遺跡出土土師器の両分布図 …… 59
第39図　にんごう2号墳出土埴輪の両分布図 …… 60
第40図　稲葉３・４・５号墳、鎌切５・６号墳出土埴輪の両分布図 …… 60
第41図　志保遺跡出土埴輪の両分布図 …… 60
第42図　殿村１号墳、殿村古墳群出土埴輪の両分布図 …… 60
第43図　赤塚古墳、元井池古墳、メクサ３号墳出土埴輪の両分布図 …… 63
第44図　迎山遺跡出土埴輪の両分布図 …… 63
第45図　門脇北古墳出土埴輪の両分布図 …… 63
第46図　西河辺古墳、堂山１号墳出土埴輪の両分布図 …… 63
第47図　明合古墳出土埴輪の両分布図 …… 64
第48図　ヲノ坪遺跡出土埴輪の両分布図 …… 64
第49図　西岡古墳出土埴輪の両分布図 …… 64
第50図　日余１号墳出土埴輪の両分布図 …… 64
第51図　大里西沖遺跡出土埴輪の両分布図 …… 65
第52図　石山古墳、車塚古墳、王塚古墳（伊賀市）出土埴輪の両分布図 …… 65
第53図　新堂古墳（伊賀市）出土埴輪の両分布図 …… 65
第54図　城山古墳（亀山市）出土埴輪の両分布図 …… 65
第55図　木ノ下古墳（亀山市）出土埴輪の両分布図 …… 66
第56図　馬塚古墳（名張市）出土埴輪の両分布図 …… 66
第57図　娘塚古墳（名張市）出土埴輪の両分布図 …… 66
第58図　殿塚古墳、貴人塚古墳（名張市）出土埴輪の両分布図 …… 66
第59図　宝塚２号墳、高地蔵１号墳（松阪市）出土埴輪の両分布図 …… 67
第60図　宝塚１号墳（松阪市）出土埴輪の両分布図 …… 67
第61図　高塚古墳（明和町）出土埴輪の両分布図 …… 67
第62図　藤谷窯跡群出土埴輪の両分布図 …… 67
第63図　稲生山窯跡群（鈴鹿市）出土埴輪の両分布図 …… 68
第64図　内多窯跡、久居窯跡群出土埴輪の両分布図 …… 68
第65図　胎土分析試料１ …… 78
第66図　胎土分析試料２ …… 79
第67図　胎土分析試料３ …… 80
第68図　胎土分析試料４ …… 81
第69図　胎土分析試料５ …… 82
第70図　胎土分析試料６ …… 83
第71図　胎土分析試料７ …… 84
第72図　胎土分析試料８ …… 85
第73図　胎土分析試料９ …… 86
第74図　胎土分析試料10 …… 87

表　目　次

第１表　中勢道路（８－２～12工区）内遺跡発掘調査経過一覧 …… ３
第２表　Ｄ地区土層断面注記 …… 34
第３表　遺構一覧表 …… 41
第４表　遺物観察表１ …… 51
第５表　遺物観察表２ …… 52
第６表　胎土分析値一覧表１ …… 69
第７表　胎土分析値一覧表２ …… 70
第８表　胎土分析値一覧表３ …… 71
第９表　胎土分析値一覧表４ …… 72
第10表　胎土分析試料観察表１ …… 88
第11表　胎土分析試料観察表２ …… 89
第12表　胎土分析試料観察表３ …… 90
第13表　胎土分析試料観察表４ …… 91
第14表　胎土分析試料観察表５ …… 92
第15表　胎土分析試料観察表６ …… 93
第16表　胎土分析試料観察表７ …… 94
第17表　胎土分析試料観察表８ …… 95

写　真　図　版　目　次

巻頭１　にんごう古墳群を望む、Ｄ地区調査後風景
巻頭２　２号墳全景、２号墳墳丘盛土断面
巻頭３　２号墳鉄剣出土状況、２号墳出土遺物

図版１　A地区調査前(伐採前)状況、A地区調査前(伐採後)状況 …… 101
図版２　A地区調査後全景、A地区引き渡し後状況 …… 102
図版３　Ｂ地区調査前状況、Ｂ地区調査後全景 …… 103
図版４　Ｂ地区調査後全景 …… 104
図版５　7号墳全景、近代以降の改変、7号墳西部落ち込みと鉄塔への道 …… 105
図版６　Ｃ地区(調査前、伐採後)と久居台地を望む、
　　１号墳調査前(伐採後)状況 …… 106
図版７　Ｃ地区調査後全景、１号墳調査後全景 …… 107
図版８　１号墳墳丘、１号墳主体部 …… 108
図版９　１号墳主体部、１号墳主体部土器出土状況、１号墳主体部土層断面、１号墳主体部(拡張後)土器出土状況、１号墳墳丘土層断面、１号墳墳丘裾土器出土状況、１号墳周溝土層断面 …… 109
図版10　１号墳谷部断ち割り土層断面１～４、
　　Ｃ地区東半部全景 …… 110
図版11　D地区調査前(伐採後)状況、２号墳調査前状況 …… 111
図版12　２号墳調査前状況、Ｄ地区調査後全景 …… 112
図版13　D地区と西の丘陵を望む、C地区(消滅)とD地区全景 …… 113
図版14　Ｄ地区全景 …… 114
図版15　２号墳調査後全景 …… 115
図版16　２号墳周溝北東隅付近と東周溝、
　　２号墳北周溝、２号墳西周溝 …… 116
図版17　２号墳鉄剣出土状況、２号墳墳丘土層断面 …… 117
図版18　２号墳墳丘土層東西方向南面、
　　２号墳墳丘土層東西方向北面 …… 118
図版19　２号墳墳丘・周溝土層断面、北周溝埴輪出土状況 …… 119
図版20　東周溝埴輪出土状況、
　　東周溝埴輪出土状況(畔撤去後) …… 120
図版21　北周溝埴輪出土状況、周溝北西隅須恵器出土状況、
　　西周溝須恵器出土状況、周溝北西隅付近土層断面 …… 121
図版22　２号墳墳丘下旧表土土層断面、旧表土と旧地山土層断面、
　　３号墳北周溝土層断面、３号墳東周溝土層断面 …… 122
図版23　３号墳全景 …… 123
図版24　８号墳と２号墳全景、
　　８号墳周溝(ＳＤ４)南西隅土層断面 …… 124
図版25　８号墳西周溝(ＳＤ４)、
　　８号墳西周溝(ＳＤ４)北土層断面、
　　８号墳西周溝(ＳＤ４)南土層断面、
　　８号墳東周溝(ＳＤ８)南土層断面、
　　８号墳周溝(ＳＤ４)南西隅拡張部 …… 125
図版26　旧４号墳付近全景、
　　旧４号墳付近南北方向土層断面、
　　旧４号墳付近東西方向土層断面 …… 126
図版27　ＳＫ７完掘状況、ＳＫ12完掘状況、ＳＫ７土層断面
　　ＳＫ12土層断面、ＳＫ18完掘状況、ＳＫ17土層断面
　　ＳＫ18土層断面、ＳＫ15土層断面 …… 127
図版28　出土遺物１ …… 128
図版29　出土遺物２ …… 129
図版30　出土遺物３ …… 130
図版31　出土遺物４ …… 131
図版32　出土遺物５ …… 132
図版33　出土遺物６ …… 133
図版34　出土遺物７ …… 134
図版35　報72(正面)Ｘ線透過写真 …… 135
図版36　報72(側面)Ｘ線透過写真 …… 136
図版37　胎土分析試料１、２ …… 137
図版38　胎土分析試料３、４ …… 138
図版39　胎土分析試料５、６ …… 139
図版40　胎土分析試料７、８ …… 140
図版41　胎土分析試料９、10 …… 141
図版42　胎土分析試料11、12 …… 142
図版43　胎土分析試料13、14 …… 143
図版44　胎土分析試料15、16 …… 144
図版45　胎土分析試料17、18 …… 145

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

昭和58年４月、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和と周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するため、一般国道23号のバイパスとなる中勢道路（鈴鹿市玉垣町から松阪市小津町）が都市計画道路として決定された。

この計画地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和58年度に三重県教育委員会が行った分布調査の結果をもとに、建設省中部地方建設局（当時、以下同）と三重県教育委員会が協議を行い、現状保存が困難な場合には事前に発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなった。

事業の実施にあたっては、昭和63年度から平成17年度までは、建設省中部地方建設局（平成13年度より国土交通省中部地方整備局）・三重県・社団法人中部建設協会の三者で協定書を締結し、事業を進めてきたが、平成18年度以降は、現地作業を含めた委託契約書を国土交通省中部地方整備局と三重県で締結し、事業を推進している。

2　調査の体制

中勢道路の発掘調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センター調査研究２課が担当している。本書で報告するにんごう遺跡・にんごう古墳群の調査・整理年度の体制は以下のとおりである。

〔平成23年度〕調査研究Ⅱ課

課　　長　　田村陽一
中勢道路担当
主　　幹　　竹内和昭
主　　査　　松葉和也・西口剛司・星野浩行
　　水橋公恵
業務補助職員　　黒川敬子・太田浩子・森川絹代
　　北岡佳代子・平井治代・山口香代

〔平成24年度〕調査研究２課

課　　長　　田中久生
主　　幹　　竹内和昭
主　　査　　岩脇成人・山中由紀子
業務補助職員　　黒川敬子・太田浩子・森川絹代
　　北岡佳代子・山口香代

〔平成25年度〕調査研究２課

課　　長　　田中久生
主幹（課長代理）穂積裕昌
主　　査　　岩脇成人・山中由紀子
業務補助職員　　黒川敬子・太田浩子・森川絹代
　　北岡佳代子・山口香代

3　調査の経過

昭和58年から始まった中勢道路建設に伴う埋蔵文化財の協議では、にんごう１～４号墳は周知の遺跡として登録されていたが、道路路線外のため協議対象とはならなかった。その後、平成元年にゴルフ場造成事業が上がったため、津市教育委員会により分布調査が実施され、５～７号墳が新たに確認された。しかし開発中止のため本調査は実施されていない。ちなみに５号墳は直径11.5m、６号墳は直径13.5m、７号墳は直径20mの円墳とされている。

しかし、平成24年度に着手される中勢道路建設事業に伴う工事用道路建設範囲にその１～５号墳がかかり、すでに一部が掘削されていることが判明した。また、後で発見された７号墳が路線内に含まれることがわかり、平成24年度の早い段階での発掘調査が必要となった。そこで、まず７月から原因者からの労務提供により５号墳230㎡の緊急調査を平成24年７月９日～25日に実施した（Ａ地区①）。そして、Ｄ地区が主要県道久居河芸線地方特定道路整備事業地にかかることから、3,900㎡を対象に６本のトレンチを設定し（第２図）範囲確認調査を実施した（７月17日～18日、担当：調査研究１課　伊藤裕偉）。Ａトレンチにおいて古墳時代以前の円形土坑、２号墳と４号墳の間に周溝状遺構、Ｂトレンチでは２号墳の西に周溝状遺構を、Ｃ１トレンチでは古墳墳丘の可能性のある段を確認した。Ｃ２・３、Ｄトレンチでは遺構・遺物とも確認できなかった。この結果から、新たに「にんごう遺跡」を把握した。

第１図　中勢道路（８－２～12工区）内遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院1：25,000『津西部』『津東部』『松阪港』『大仰』から）

第１表　中勢道路（８－２～12工区）内遺跡発掘調査経過一覧

工区		遺　跡　名	所在地	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	S63	H元	H２	H３	H４	H５	H６	H７	H８	H９	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
8-2工区	18	丸市遺跡	津市河芸町南黒田	1,600	128						128																			
					0																									
	19	山王遺跡	津市河芸町南黒田	3,700	128						128																			
					0																									
	20	内垣内遺跡	津市河芸町南黒田	4,200	128						128																			
					0																									
	21	天堤古墳	津市大里睦合町	900	55						55																			
					0																									
	22	河崎遺跡	津市大里睦合町	10,600	256						256																			
					0																									
	23	六大Ａ遺跡	津市大里窪田町	17,800	448						352	96																		
					13,220							8,830	4,130	260																
小　計				38,800	1,143	0	0	0	0	0	1,047	96	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
					13,220	0	0	0	0	0	0	8,830	4,130	260	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9工区	24	六大Ｂ遺跡	津市大里窪田町	26,235	444	416				28																				
					26,235			17,525	3,420	3,350	1,270	670																		
	25	橋垣内遺跡	津市大里窪田町	12,000	176	176																								
					12,000		7,000	4,925	75																					
	26	大古曽遺跡	津市一身田	12,435	692	352		300		40																				
					12,435				5,160	240	7,035																			
	27	新池2号墳	津市一身田	—	198									198																
					0																									
	28	新池1号墳	津市河辺町	—	20	20																								
					0																									
	29	西岡1号墳	津市河辺町	2,000	70				70																					
					2,000					2,000																				
	30	西岡2号墳	津市河辺町	—	30				30																					
					0																									
	31	山籠遺跡	津市河辺町	1,100	208	208																								
					1,100		1,100																							
	32	門脇北古墳	津市河辺町	1,100	0																									
					1,100		1,100																							
	33	ヨウゼンジ遺跡	津市河辺町	—	80	80																								
					0																									
	34	宮ノ前遺跡	津市長岡町	2,800	144	144																								
					2,800		2,700				100																			
	35	森山東遺跡	津市長岡町	5,230	240	240																								
					5,230	4,230	1,000																							
	36	太田遺跡	津市長岡町	3,320	469	469																								
					3,320	3,320																								
	37	松ノ木遺跡	津市安東町	7,800	144	144																								
					7,800		7,800																							
	65	長遺跡	津市河辺町	3,700	0																									
					3,700								3,700																	
小　計				77,720	2,915	2,249	0	300	100	68	0	0	0	198	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
					77,720	7,550	20,700	22,450	8,655	5,590	8,405	670	3,700	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10工区	38	蔵田遺跡	津市納所町	12,800	1,356		608						748																	
					16,340							5,600	6,810	3,300			630													
	39	位田遺跡	津市北河路町	7,100	416		416																							
					5,260									4,600				660												
	40	碧田遺跡	津市南河路	7,900	432		176							256																
					10,830									6,620	4,210															
	41	弐ノ坪遺跡	津市野田	5,700	320		320																							
					5,100										5,100															
	42	里前遺跡	津市野田	3,000	256		160							96																
					2,810											1,280						1,530								
	66	梁瀬遺跡	津市野田	—	1,152									474	678															
					3,620											3,620														
	43	鎌切５号墳	津市神戸	—		昭和59年津市教育委員会が発掘調査																								
	68	にんごう古墳群	津市神戸		134																									134
					2,689																									2,689
小　計				36,500	4,066	0	1,680	0	0	0	0	0	748	826	678	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	134
					46,649	0	0	0	0	0	0	5,600	6,810	14,520	9,310	4,900	630	660	0	0	0	1,530	0	0	0	0	0	0	0	2,689
11工区	45	鳥羽見城跡	津市神戸	4,400	410																							410		
					0																									
	46	上はんの木古墳	津市神戸	1,600	190																							190		
					0																									
	47	藤谷窯跡群	津市半田	—	—	昭和50年津市教育委員会が発掘調査																								
小　計				6,000	600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	600	0	0
					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12工区	48	相川西方遺跡	津市久居相川町	18,000	1,940																					1,000	940			
					8,742																						3,472	3,000	2,270	
	49	丸地遺跡	津市垂水	7,100	560																						560			
					0																									
	50	城ノ越遺跡	津市久居小野辺町	16,300	1,430																						240	1,070	120	
					0																									
	51	東山神遺跡	津市久居小野辺町	13,300	1,210																							1,030	180	
					0																									
	52	本宮遺跡	津市久居野村町	11,300	1,600																						1,200	400		
					2,850																								2,850	
小　計				66,000	6,740	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,000	2,000	3,440	300	0
					11,592	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,472	3,000	5,120	0

※　調査面積の上段は第１次調査、下段は第２次以降の調査　　アミカケは、津市教育委員会による調査

この調査結果も合わせて、2,500㎡を対象に「にんごう遺跡・にんごう古墳群」として８月16日から調査を実施した。調査は、工事との兼ね合いから７号墳調査区（Ｂ地区）、１・３号墳調査区（Ｃ地区）、２・４号墳調査区（Ｄ地区）と進め、随時引き渡しを行い現地調査は平成25年２月５日に終了した。最終調査面積は2,689㎡で、２号墳出土埴輪を主体とするコンテナケース15箱分の遺物が出土した。

〔調査日誌（抄）〕

作業中は降雨も少なく、また丘陵上の現場のため天候が理由となる遅延はさほどなく順調に進んだ。反対に、作業が連日続き、後半は寒風吹き付ける現場であったため、作業員の方には体調管理が難しい現場となった。調査の経過は以下のとおりである。

平成24年４月５日　国交省、工事業者との現地協議。

４月19日　Ｂ地区調査前測量（田中・竹内・岩脇・

山中・門野・浅野・矢田・宮﨑)。

4月24日　Ｂ地区調査前写真撮影。

6月28日　調査の進行及び隣接する県道部分について現地協議（国交省・工事業者・県津建設部・センター【田中・伊藤・山中】)。

7月４日　Ｃ地区、工事業者と調査区設定。Ｃ地区の(仮)１号墳東側で須恵器甕体部片表採。Ａ地区・Ｃ地区の調査前写真撮影。

7月９日　Ａ地区調査前測量（竹内・岩脇・山中)。

7月10日　Ａ地区、作業員が加わっての調査開始。

7月11日　墳丘西部裾にて須恵器杯蓋、高杯片出土。

7月13日　主体部精査。平面・土層観察において確認できず、調査区内にはないものと判断。

7月17日　県道関係部分（Ｄ地区）範囲確認調査開始（～18日。田中・伊藤)。

7月20日　Ａ地区掘削完了写真撮影。午後より降雨。

7月23日　調査後測量（竹内・岩脇・山中)。

7月25日　重機による墳丘断割り作業。撤収。

7月26日　Ａ地区現地引き渡し。

7月30日　古墳群の号数について、津市教育委員会・村木氏と田中・山中とで現地協議。

8月21日　調査受託業者・工事業者・センター（田中・森田・山中）で現地協議。

9月３日　調査前空撮。

9月12日　Ｂ地区表土掘削開始。

9月20日　７号墳東半部を精査。墳頂部は近代以降に改変を受けていると判断。

9月24日　Ｃ地区調査前測量開始（～26日)。

10月１日　台風17号で流入した土砂の掘削。

10月10日　Ｂ地区包含層掘削完了。

作業風景

10月11日　Ｃ地区表土掘削開始（～12日)。１号墳東側で須恵器片出土。

10月15日　Ｂ地区写真撮影のための清掃。

10月16日　Ｂ地区写真撮影。Ｃ地区、排土置場整地。

10月19日　強風のため空撮中止。

10月22日　Ｂ地区完掘後空撮。

10月24日　Ｂ地区調査後測量。Ｃ地区、１号墳において須恵器杯蓋出土。

10月25日　Ｃ地区包含層掘削・精査開始。

10月30日　１号墳西部分にて黒色土層の広がりを確認。トレンチ掘削により黒色土とその下の黄色土を切る溝状の落ち込みを確認。黒色土は古墳造営前の旧表土か。

10月31日　明日から11月というのに風もなく暑い。黒色土内で土師器片出土、古墳時代か。

11月２日　風が強く寒い。

11月５日　包含層掘削継続、Ｌ25で須恵器杯蓋出土。

11月７日　包含層掘削、Ｐ24で須恵器甕体部片、Ｏ23の高まり上で寛永通宝出土。

11月８日　Ｄ地区立木伐採開始（～17日)。

11月13日　Ｎ列南北アゼ土層断面図作成。この部分に谷が入り込む。１号墳主体部掘削。

11月19日　包含層掘削、精査、遺構掘削完了。

11月20日　Ｄ地区調査前写真（伐採後）撮影。三重大学工学部学生約20名が来訪。埋蔵文化財・調査の内容について説明。

11月21日　Ｃ地区掘削後地形測量開始（～22日)。

11月22日　Ｄ地区調査区設定、測量開始（～28日)。

11月26日　降雨のため休工

11月27日　Ｃ地区、写真撮影のための清掃。

11月28日　Ｃ地区写真撮影。

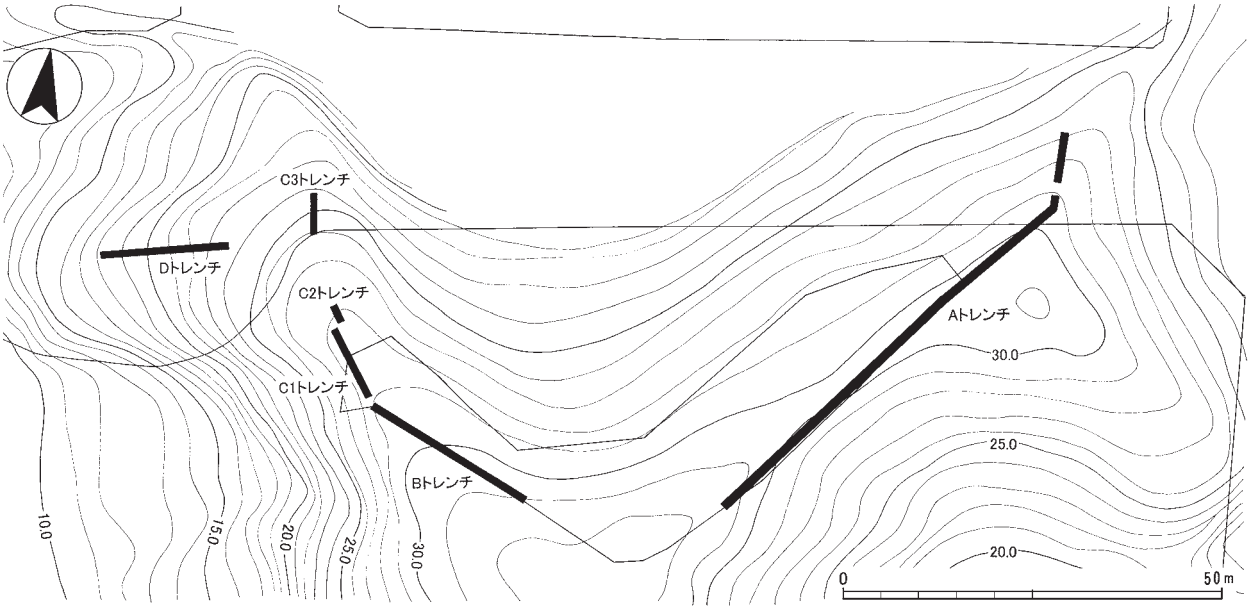
11月29日　Ｃ地区完掘後、Ｄ地区調査前（伐採後）空撮。Ｄ地区環境整備を実施。

11月30日　Ｃ地区、１号墳主体部断割り、主体部を調査区外に拡張。須恵器杯蓋出土。谷状部の断割り。

12月３日　Ｃ地区断割部の断面図作成、Ｄ地区、地区杭設定（～４日)。

12月４日　曇り時々雨、強風など荒天。杭設定など環境整備のみ作業。Ｂ地区現地引き渡し。

12月５日　Ｃ地区現地引き渡し。



第２図　Ｄ地区範囲確認調査トレンチ位置図（1:1,000）

12月10日　Ｄ地区表土掘削開始。２号墳北側で円筒埴輪片が多く出土。調査区北側（住宅地との境界）立木伐採開始（～17日）。

12月12日　伐採で現場から長谷山が見えるように。

12月14日　現場初霜。

12月18日　２号墳周辺精査開始。方墳か。Ｄ・Ｅ12・13付近の溝は３号墳周溝か。

12月19日　今季で一番寒い！３号墳周溝精査。一辺11m程か。

12月20日　２号墳墳丘精査、鉄剣出土！

12月21日　鉄剣出土状況写真撮影、出土状況図作成、取り上げ。包含層掘削、家形埴輪？片出土。

12月22日　鉄剣出土土坑は主体部に付属する土坑と仮定、引き続き盛土を掘り下げ精査。

12月26日　昼前より横殴りの雪。昼休みを前倒し、午後から作業再開。作業終了間際にまた雪。盛土掘削・精査継続、白色ブロック混じり土を下げるが遺構は見られない。２号墳周溝北西隅から須恵器杯身出土。

12月27日　今年最後の作業。昨日と打って変わって穏やか。２号墳主体部精査を行うも、検出は叶わず、来年への宿題となる。

平成25年１月７日　新年初日。引き続き主体部精査。２号墳の東に溝検出。新たな古墳か。

１月８日　主体部精査。旧表土まで断割りを入れ、旧表土を掘り抜く遺構がないか精査するも確認できず。旧表土から土師器片出土、弥生～古墳前のものか。

１月10日　西の方に雪雲が見られる。２号墳盛土は旧表土まで掘り下げる。新発見の古墳付近で縄文の陥し穴と思われる土坑検出。

１月15日　青山高原・鈴鹿山脈が雪化粧。現場にも時折雪が吹き付ける。

１月16日　ＳＤ４（８号墳西周溝）から須恵器瓹出土。包含層出土のものと同一個体。

１月18日　積雪のため午前中は安全研修。ＳＫ12掘削、縄文の陥し穴か。包含層掘削完了。

１月21日　２号墳墳丘精査。旧表土内から古墳前期以前と思われる土師器高杯片出土。

１月22日　昨日来の雨が止み次第作業開始。４号墳としていた高まりは自然地形と判断。

１月23日　西から地形測量開始（～24日）。

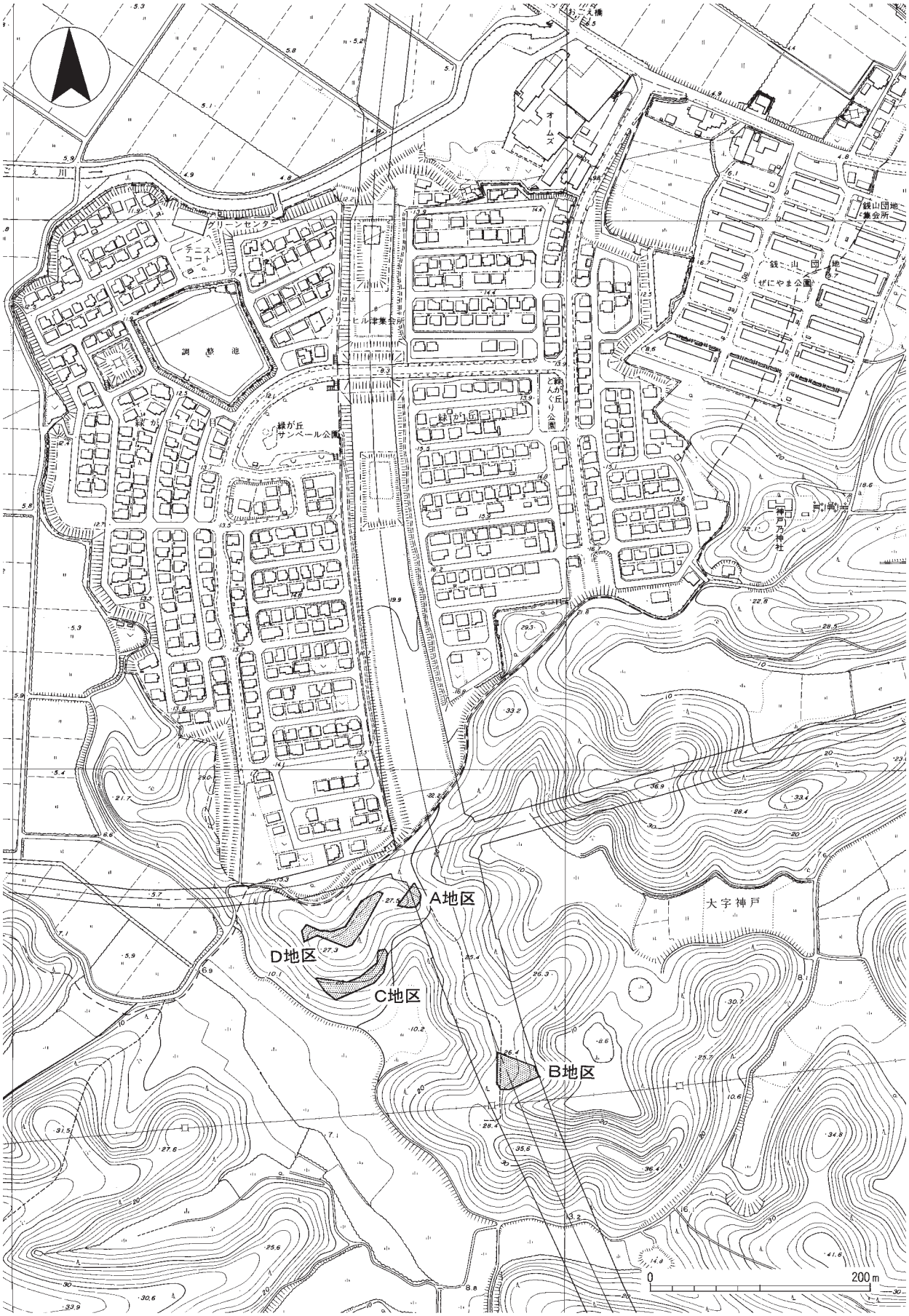
１月25日　西半部の写真撮影。風が強く、立っているのがやっと。風の止み間を狙い撮影。

１月29日　東半部の写真撮影。午後より片付け作業。

１月31日　空撮。風もなく絶好の空撮日和。

２月１日　２号墳墳丘断割。旧表土下の地山まで掘り抜く。主体部、下層遺構なし。２号墳西周溝を拡張、大量の埴輪片と須恵器瓹出土。ＳＤ４南部を拡張。方墳角検出。

２月５日　２号墳墳丘旧表土完掘。現地作業終了。



第３図　調査区位置図（1:5,000）（『津市地形図及び都市計画基本図』（1:2,500）から）

２月７日　撤収。
２月15日　Ｄ地区現地引き渡し
３月９日　発掘調査報告会「おもろいもんでましたんやわ@2012」にて遺物・写真を展示。
３月23日　津市西部市民センターにて地元自治会向け説明会を開催、17人の参加を得た。

4　調査の方法

本調査は、以下の手順で進めた。

① 表土及び旧耕作土を人力で除去した。
② 緊急調査となったＡ地区以外の調査では、遺構・遺物の位置情報の基準となる地区杭を設定した。これらは、座標にあわせてグリッドを設定した。グリッドは４ｍ四方の方眼で、南北方向に算用数字（１～25)、東西方向にローマ字（Ａ～Ｙ）を当て、その組み合わせにより個別のグリッド名称（例：Ｅ８など）とした。このグリッドは、Ｂ地区は単独で、Ｃ・Ｄ地区は統一して設定した。
③ 包含層掘削および遺構検出を人力で行ない、Ａ地区以外では検出された遺構についての略測図（縮尺1/100）を作成、重複状況や色調などについても記録した。
④ 遺構を人力掘削し、遺物を取り上げた。
溝・土坑などの遺構には、地区毎の通し番号を付与し、ピットについては地区（グリッド）ごとに通し番号を付けた。
⑤ 調査区壁面・遺構断面の土層図、遺物出土状況図などを作成し、写真撮影を行った。
図面の縮尺は1/20または1/10、写真は４×５inch判、ブローニー（６×９㎝判）・35㎜判で、モノクロネガとカラーリバーサルのフィルムを使用した。
⑥ ⑤に加えて、調査前状況・調査後状況については空中写真撮影を実施し、ブローニー（６×７㎝判）にて撮影した。
⑦ 調査後の遺構平面図・等高線図等の作成は業務委託により行った。
⑧ 遺構の断ち割りなどをＡ地区では重機で、それ以外の地区では人力で行い、記録した。

5　整理・保管の方法

整理作業は、以下の手順で進めた。

遺物

① 調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄・乾燥・接合を行った。
② 報告書に掲載する遺物を選別し、実測図作成・写真撮影（４×５inch判、ブローニー（６×９㎝判））を行なった。
③ 金属製品は調査現場で取り上げた後、速やかに整理所でエチルアルコールを用いて洗浄し、実測および４×５inch判での写真撮影を行った。その後、必要に応じた保存処理作業を進めた。
④ 報告書掲載遺物については報告書番号順に並べ、遺物実測を行わなかったものは、出土遺構・グリッド毎に遺物整理箱に収納し、台帳を作成して保管した。

図面・写真類

現場で作成した図面（平面図・土層断面図・航測図面など)、調査日誌、写真類などと、整理段階で作成した遺物実測図、遺物写真について、適切な順序に並べ所定の番号を付け、台帳を作成して保管した。

6　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法などにかかる諸通知は、以下のとおりである。

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査報告
（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）
にんごう５号墳：
平成24年７月11日付教埋第143号
にんごう古墳群（１～３、７・８号)：
平成24年８月23日付教埋第192号
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知
（津警察署長宛県教育長通知）
にんごう５号墳：
平成24年８月３日付教委第12－4409号
にんごう古墳群（１～３、７・８号)：
平成25年２月27日付教委第12－4440号

【註釈】
① 調査時は、予想された古墳号数をその調査区呼称としたが、調査の結果、検出古墳と一致しなかった調査区もあり、本報告において新たに調査区名をアルファベットにて付与する。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

にんごう遺跡・にんごう古墳群は、行政上は三重県津市大字神戸地内に所在する。旧国でいう伊勢国安濃郡石田郷に含まれる。津市高茶屋から連なる半田丘陵、続く野田まで東西に横たわる野田・神戸丘陵の西端、現在は泉が丘団地と称される住宅団地のすぐ南に位置する。現況は山林である。当該丘陵は、岩田川と相川にはさまれた鮮新世第三紀の奄芸層群に属する標高40m前後の低丘陵である。

津市の地勢は、西に布引山地・高見山地・紀伊山地が連なり、東は伊勢湾に面する。北から、志登茂川・安濃川・岩田川・雲出川などの河川が東流して伊勢湾に注いでいる。

津市の土地基盤は、布引山地にあたる榊原町西部の第三紀層が広がる。その東部には第四紀古層が伊勢湾方面へのび、戸木町、新家町、高茶屋小森町にかけて台地を形成している。その南方の雲出川流域の低地部には、第四紀新層の沖積地が広がっている。

調査地の北を流れる岩田川は、津市片田薬王寺の山中に源を発し、津市浜垣内にて三泗川と、津市神戸にて小川と合流し、津市岩田を通って伊勢湾へと注ぐ延長11.7km・流域面積33.0㎢の二級河川である[①]。江戸時代には、北を流れる安濃川とともに津城の堀の役目も果たした。洪水の折には安濃川の水を三泗川を介して岩田川へと通し、水が城下へ流れ込まないようにしたという。

遺跡は、神戸丘陵上の標高29～33m付近に所在する。北に長岡丘陵を望み、安濃川と岩田川が形成する沖積地を見下ろす高地にある。

2　歴史的環境

にんごう遺跡・にんごう古墳群（1）の所在する丘陵上には多くの古墳が造営されるが、周辺地域では縄文時代から多くの遺跡が展開し、人々の活発な活動の様相がうかがえる。以下、時代毎にみていく。

（1）縄文時代

安濃川流域では、松ノ木遺跡[②]（2）において晩期の竪穴住居1棟が、替田遺跡[③]（3）では石器類と晩期の土器が、納所遺跡[④]（4）において晩期の土器が、蔵田遺跡[⑤]（5）において中～晩期の縄文土器が確認されており、特に後期以降の活動の痕跡がうかがえる。

久居台地上へ目を移すと、本宮遺跡[⑥]（6）において草創期の尖頭器が出土している。また高茶屋台地北側に位置する垂水A遺跡[⑦]（7）では遺構は確認されていないが、早期前葉の押型文土器や中期後葉～後期初頭の土器や石器が出土している。

（2）弥生時代

畿内から伊勢地域に到来した弥生文化は、雲出川右岸松阪市中ノ庄遺跡[⑧]にその端緒を見る。そこから漸次周囲へと広がり、伊勢平野の主要河川沿いに拠点集落を形成している。

納所遺跡は、弥生時代前期から後期まで盛衰はありながらも継続して集落が営まれ続けたと考えられており、中期中葉以降には墓域も見られる。また、前期に属する大溝から出土した大量の木製品は、当遺跡における農耕活動などの生産活動の一端もうかがえ、中でも未成品の存在は、自家生産をも示すものである。その北には水田遺構の検出された森山東遺跡[⑨]（8）のような生産遺跡が所在する。また、半田丘陵に所在する上村遺跡[⑩]（9）は、遺構はないものの前期から後期にかけての土器が出土している。高茶屋大垣内遺跡[⑪]（10）では、前期と思われる土器片が出土している。

中期には替田遺跡・弐ノ坪遺跡[⑫]（11）で竪穴住居で構成される集落が営まれ、その西に位置する惣作遺跡[⑬]（12）では方形周溝墓群が展開する。また、蔵田遺跡では方形周溝墓や水田跡が見られる。長岡丘陵では中期後半から山籠遺跡[⑭]（13）と160基もの竪穴住居が調査された長遺跡[⑮]が展開する。半田丘陵では高松C遺跡[⑯]（14）があり、中後期の竪穴住居29棟が確認されている。

後期になると半田丘陵では神戸銅鐸[⑰]（15）の出土が知られる。大正6年（1917）、土砂採掘中に発見され、奈良県・兵庫県・大阪府出土銅鐸と同范で

あることが指摘されている。周辺には上村遺跡・宮前遺跡[18]（16）、やや離れるが尺目遺跡[19]（17）のように３基程度の小規模な竪穴住居群があり、高松弥生墳墓[20]（18）において墳墓が確認されている。

また、江戸時代（宝暦年間）に津市野田から出土した野田銅鐸[21]（19）が津市専修寺に所蔵されている。この野田集落にも５棟の竪穴住居の柳谷遺跡[22]（20）、壇場遺構が確認された大ヶ瀬遺跡[23]（21）、大ケ瀬弥生墳墓[24]（22）、竪穴住居３棟の平栄遺跡[25]（23）など同時期の集落・墓域が広がる。以上のように、三重県内出土銅鐸件数は19件であるが、このうち２件が神戸周辺から出土しているのである。

その他後期の遺跡としては、宮ノ前遺跡[26]（24）で集落が、殿村遺跡[27]（25）・鎌切遺跡[28]（26）で台状墓などが、替田遺跡では土坑墓61基が、位田遺跡[29]（27）では方形周溝墓群がある。また、生産関連遺跡として半田丘陵南側の相川西方遺跡[30]（28）では弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての700基以上の粘土採掘坑が調査され、銅鐸を中心とした集落・生産を中心とした経済活動など、当該地域における弥生時代には課題が多い。

（３）古墳時代

古墳時代に入ると、岩田川左岸中流域丘陵上では坂本山６号墳[31]（29）が築かれる。弥生時代後期の墳墓である大ヶ瀬弥生墳墓と比較的近く、継続した墳墓形成がうかがえる地域である。やや遅れて５世紀初め、海岸寄りの半田丘陵東端部に全長約87ｍの前方後円墳、池ノ谷古墳[32]（30）が築造され、この地域最大の古墳として知られる。相川を挟んだ南には、池ノ谷古墳よりやや遡るが、塀で区画される大型掘立柱建物と円形に配置される竪穴住居で構成される４世紀代の特殊な集落である高茶屋大垣内遺跡がある。これらは、伊勢湾を見下ろす高台に位置し、海上交通の要所としてのこの地域の重要性を物語るものである。そこから西へ約３㎞離れた本宮遺跡でも竪穴住居１棟と掘立柱建物４棟が調査されている。

中期になると、安濃川右岸に双方中方墳の明合古墳、遅れて方墳の平田35号墳[33]（31）が、安濃川の左岸には円墳の門脇北古墳[34]（32）、方墳の西岡古墳[35]・堂山１号墳[36]などが造営される。そして後期になると爆発的に群集墳が広がる。長谷山東麓の400基以上の長谷山古墳群[37]（33）は横穴式石室を主体とする古墳群で、平底を呈する須恵器壺や青銅製簪など特殊遺物が出土している。

野田・神戸丘陵上には、鎌切古墳群[38]（前方後円墳２基含む）、稲葉古墳群[39]（34）、全長29ｍの前方後円墳のおこし古墳[40]（35）が築造される。また、西垣内古墳[41]（36）（前方後円墳）が近在する。ここから南東に連なる丘陵上にも尾根毎に古墳が所在し、元井池古墳[42]（37）や半田丘陵南側に大釜池古墳[43]（38）がある。にんごう古墳群と谷を挟んだ西の丘陵には、坂本山古墳群と同一丘陵の先端に前方後円墳１基を含む殿村古墳群、メクサ古墳群[44]（39）が造営される。

７世紀に入っても、横穴式木芯室を持つ君ヶ口古墳[45]（40）、横穴式石室を持つ鳥居古墳[46]（41）などの古墳の造営が続く。

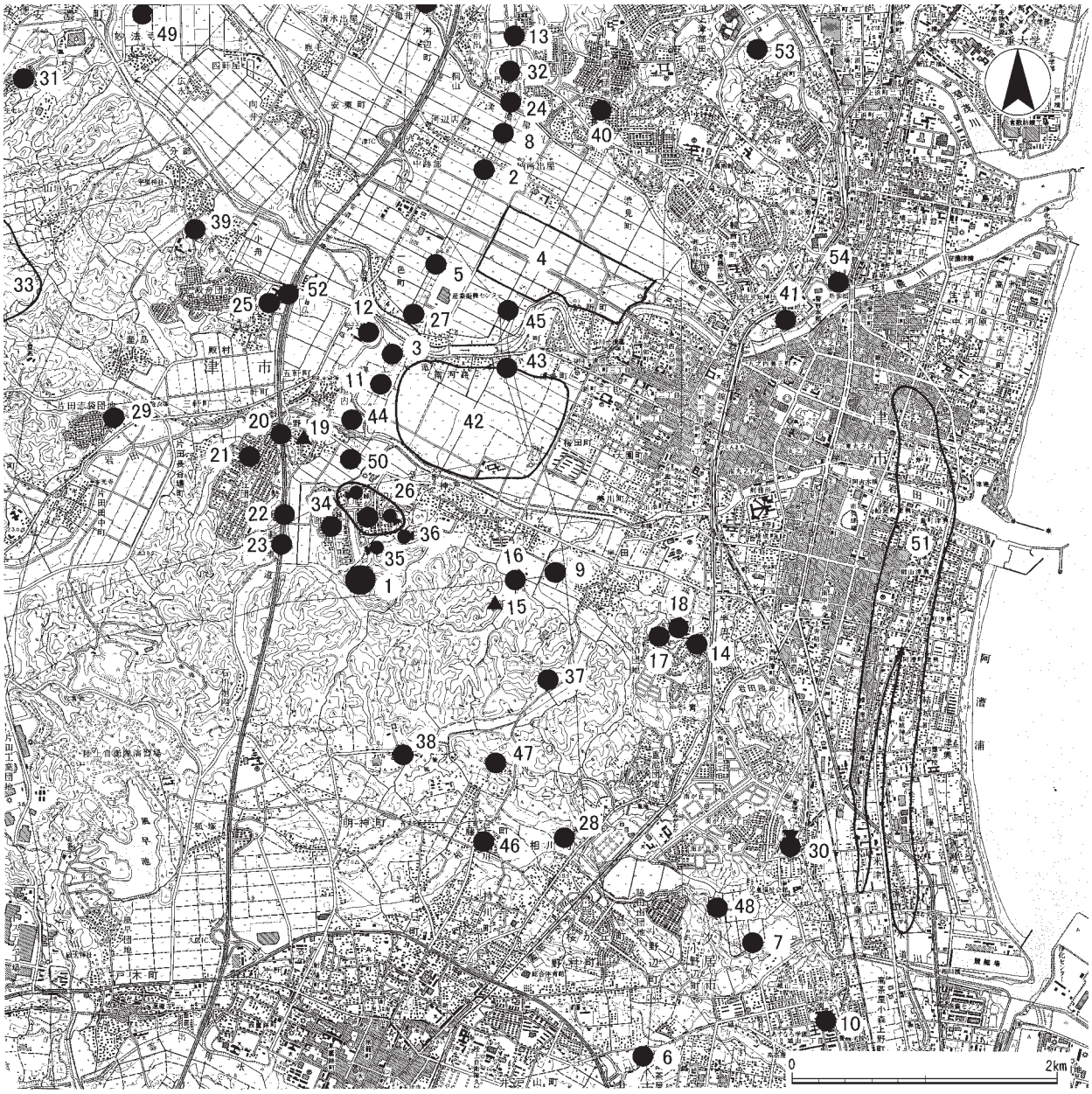
このように、この地域は県内でも古墳の集中地域といえるが、これに対する集落の様相はどうであろうか。前期集落には、替田遺跡や高松Ｃ遺跡、大ヶ瀬遺跡、高茶屋大垣内遺跡がある。中後期となると、蔵田遺跡から５世紀中～後半の掘立柱建物10棟等が、神戸遺跡[47]（42）で５世紀後半～６世紀代の掘立柱建物２棟が、高茶屋大垣内遺跡で竪穴住居を主体とした集落が展開するが、その他は替田遺跡・立花堂遺跡[48]（43）で溝などが、里前遺跡[49]（44）・養老遺跡[50]（45）などで土器が出土する程度である。

半田丘陵周辺の特徴として、生産遺跡の展開・集中が挙げられる。高茶屋大垣内遺跡の土師器焼成坑を伴う大集落や、５世紀後半に操業開始した久居窯跡群[51]（46、須恵器中心の埴輪併焼窯）がある。また、その北方約１㎞の藤谷窯跡群[52]（47、埴輪中心の須恵器併焼窯）、東方約3.5㎞の法ヶ広窯跡[53]（48、埴輪窯）があり、いずれも５世紀末から６世紀初頭操業とみられる。これらはいずれも相川左岸に位置し、良質な原料・豊富な燃料の所在がうかがえる。

（４）古代

古代には、東海道から現在の亀山市関町で分岐して伊勢神宮、志摩へと繋がる官道「古代伊勢道」[54]が神戸丘陵の西部を縦断し、現松阪市へと伸びると想定されている。

安濃川の右岸、替田遺跡・惣作遺跡において飛鳥～奈良期の掘立柱建物が調査されているが、いずれもこの地域の条里方向N28°Eとは異なる主軸を持つ建物である。また、浄土寺南遺跡[55]（49）では規格性を持った配置の建物群が検出されている。平安時代に入ると、平安前期の弐ノ坪遺跡では条里方向の掘立柱建物群と溝が、それに続く平安中期以降には神戸遺跡や位田遺跡で、後期には替田遺跡や立花堂遺跡で、末期以降には蔵田遺跡でそれぞれ掘立柱建物群が見つかっている。また、岩田川右岸の梁瀬遺跡[56]（50）や弐ノ坪遺跡、立花堂遺跡において東西方向の道路遺構と推定される二条の溝が確認さ



1 にんごう遺跡・にんごう古墳群　2 松ノ木遺跡　3 替田遺跡　4 納所遺跡　5 蔵田遺跡　6 本宮遺跡　7 垂水Ａ遺跡　8 森山東遺跡　9 上村遺跡　10 高茶屋大垣内遺跡　11 弐ノ坪遺跡　12 惣作遺跡　13 山籠遺跡　14 高松Ｃ遺跡　15 神戸銅鐸出土地　16 宮前遺跡　17 尺目遺跡　18 高松弥生墳墓　19 野田銅鐸出土地（出土地不詳）　20 柳谷遺跡　21 大ヶ瀬遺跡　22 大ケ瀬弥生墳墓　23 平栄遺跡　24 宮ノ前遺跡　25 殿村遺跡・殿村古墳群　26 鎌切遺跡・鎌切古墳群　27 位田遺跡　28 相川西方遺跡　29 坂本山古墳群　30 池ノ谷古墳　31 平田古墳群　32 門脇北古墳　33 長谷山古墳群　34 稲葉古墳群　35 おこし古墳　36 西垣内古墳　37 元井池古墳　38 大釜池古墳　39 メクサ古墳群　40 君ヶ口古墳　41 鳥居古墳　42 神戸遺跡　43 立花堂遺跡　44 里前遺跡　45 養老遺跡　46 久居窯跡群　47 藤谷窯跡群　48 法ヶ広窯跡　49 浄土寺南遺跡　50 梁瀬遺跡　51 安濃津遺跡群　52 本馬領遺跡　53 ヲノ坪遺跡　54 四天王寺瓦窯

第４図　周辺遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院1:25,000『津西部』『津東部』『松阪港』『大仰』から）

れており、伊勢道から安濃津方向へと延びる道路が想定がされている。これはまた、伊勢道の東への進路変更を想定する向きもある。古代伊勢道に伴う市村駅家[57]の存在、安濃津遺跡群[58]（51）など交通の要衝としての当地域の一面がうかがえる。この安濃津を見下ろす高茶屋大垣内遺跡では、「美濃」刻印須恵器が出土しているが、県内では斎宮跡から出ているのみであり、この資料の持つ重要性は大きい。

安濃郡には、『延喜式』大神宮式によると「卅五戸」の封戸があり、天禄四（973）年太政官符により一郡が神宮に追加施入され、封戸数三八九烟となった。この数は神三郡の一つ度会郡四四七烟に次ぐ。これは、前述の伊勢道が安濃郡内を通過し、また、後世に「三津」として知られる安濃津が郡内に所在することも関係するのであろうか。交通の要衝である安濃郡を配下とすることで、神宮はその力を磐石なものとし、安濃郡は安定した力を得ることができたのである。

【註釈】

① 『岩田川水系河川整備基本方針』三重県　2003年
② 『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993年
③ 『替田遺跡（第５～第８次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2007年、『替田遺跡（第1・２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2008年
④ 『納所遺跡Ⅰ－遺構・土器・木製品編－』三重県埋蔵文化財センター　2012年
⑤ 『三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報　蔵田遺跡　平田遺跡　位田東遺跡』津市教育委員会　1993年、『蔵田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年、『蔵田遺跡（第４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2008年
⑥ 『本宮遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2013年
⑦ 『垂水Ａ遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　2000年
⑧ 『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972年
⑨ 所属時期には若干の検討が必要ではある。前掲註②文献
⑩ 『上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1972年
⑪ 『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000年
⑫ 『弐ノ坪遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2005年
⑬ 『惣作遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002年、『惣作遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002年
⑭ 『大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995年
⑮ 『長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000年
⑯ 『高松Ｃ遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1999年（『津市埋蔵文化財センター年報３　平成９年度』　津市埋蔵文化財センター　1999年　に所収）
⑰ 新田剛「銅鐸」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005年
⑱ 前掲註⑭文献
⑲ 『尺目遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1975年
⑳ 『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市文化財保護協会　1970年
㉑ 県内唯一の三遠式である。新田剛「銅鐸」『三重県史　資料編考古１』三重県　2005年
㉒ 「３．柳谷遺跡」『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会　1974年
㉓ 「２．大ヶ瀬Ａ遺跡」・「３．大ヶ瀬Ｂ遺跡」『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会　1974年
㉔ 「Ⅳ　大ケ瀬遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1973年
㉕ 「Ⅴ　平栄遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1973年
㉖ 『大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995年
㉗ 『殿村１号墳・殿村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　2005年
㉘ 『稲葉古墳群・鎌切古墳群発掘調査報告』津市教育委員会　2005年
㉙ 『位田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年
㉚ 『相川西方遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2014年
㉛ 『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会　1970年
㉜ 藤田充子「池の谷古墳出土の円筒埴輪」『埋文センターニュース』９　津市埋蔵文化財センター　1999年、中村光司「57　池の谷古墳」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005年
㉝ 『平田古墳群』安濃町教育委員会　1987年
㉞ 『門脇北古墳発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993年
㉟ 『西岡古墳発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995年
㊱ 三重大学歴史研究会『堂山１号墳』安芸郡安濃村教育委員会　1974年
㊲ 「長谷山群集墳分布調査報告」『ふびと』40　三重大学歴史研究会　1983年
㊳ 『稲葉古墳群・鎌切古墳群発掘調査報告』津市教育委員会　2005年
㊴ 前掲註㊳文献
㊵ 藤田充子「おこし古墳測量調査」『津市埋蔵文化財センター年報７　平成13年度』津市埋蔵文化財センター　2002年
㊶ 『三重県津市遺跡地図』津市教育委員会　2011年
㊷ 『元井池古墳発掘調査報告』津市教育委員会　1969年
㊸ 「八 大釜池古墳」『久居市史』久居市史編纂委員会　1972年
㊹ 『メクサ３号墳発掘調査報告』津市教育委員会　1991年
㊺ 『君ヶ口古墳発掘調査報告』津市教育委員会　1974年
㊻ 『鳥居古墳』三重県立博物館　2007年
㊼ 『神戸遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年、『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2001年
㊽ 『立花堂遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2008年。安濃川右岸流域の遺跡の状況は、当文献内の柴山圭子「Ⅵ　結語　２　周辺遺跡を含めた遺構の変遷」を主に参考とした。
㊾ 『里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002年
㊿ 『養老・森山Ｂ・桐山遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972年
(51) 『久居古窯址群発掘調査報告－２号窯、４号窯－』久居古窯址群発掘調査団　1968年
(52) 『藤谷窯跡群発掘調査報告』津市教育委員会　2000年（『津市埋蔵文化財センター年報４』平成10年度　津市埋蔵文化財センター　2000年　に所収）
(53) 岡田登「三重県津市垂水発見の埴輪窯について－藤形の贄土師部との関連をめぐって－」『皇學館論叢』第15巻第２号　皇學館大學人文學會　1982年
(54) 足利健亮「平安京から伊勢神宮への古代の道」（上田正昭編『探訪古代の道』第２巻　株式会社法藏館　1988年）
(55) 「Ⅶ安芸郡安濃町　浄土寺南遺跡」『昭和五十五年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981年
(56) 『梁瀬遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2004年
(57) 津市安濃町大市神社や津市殿村本馬領遺跡（52）、津市野田付近がその候補地とされる。岡田登「伊勢国市村駅所在地考」『皇學館論叢』第13巻第６号　皇學館大學人文學會　1980年
(58) 『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997年

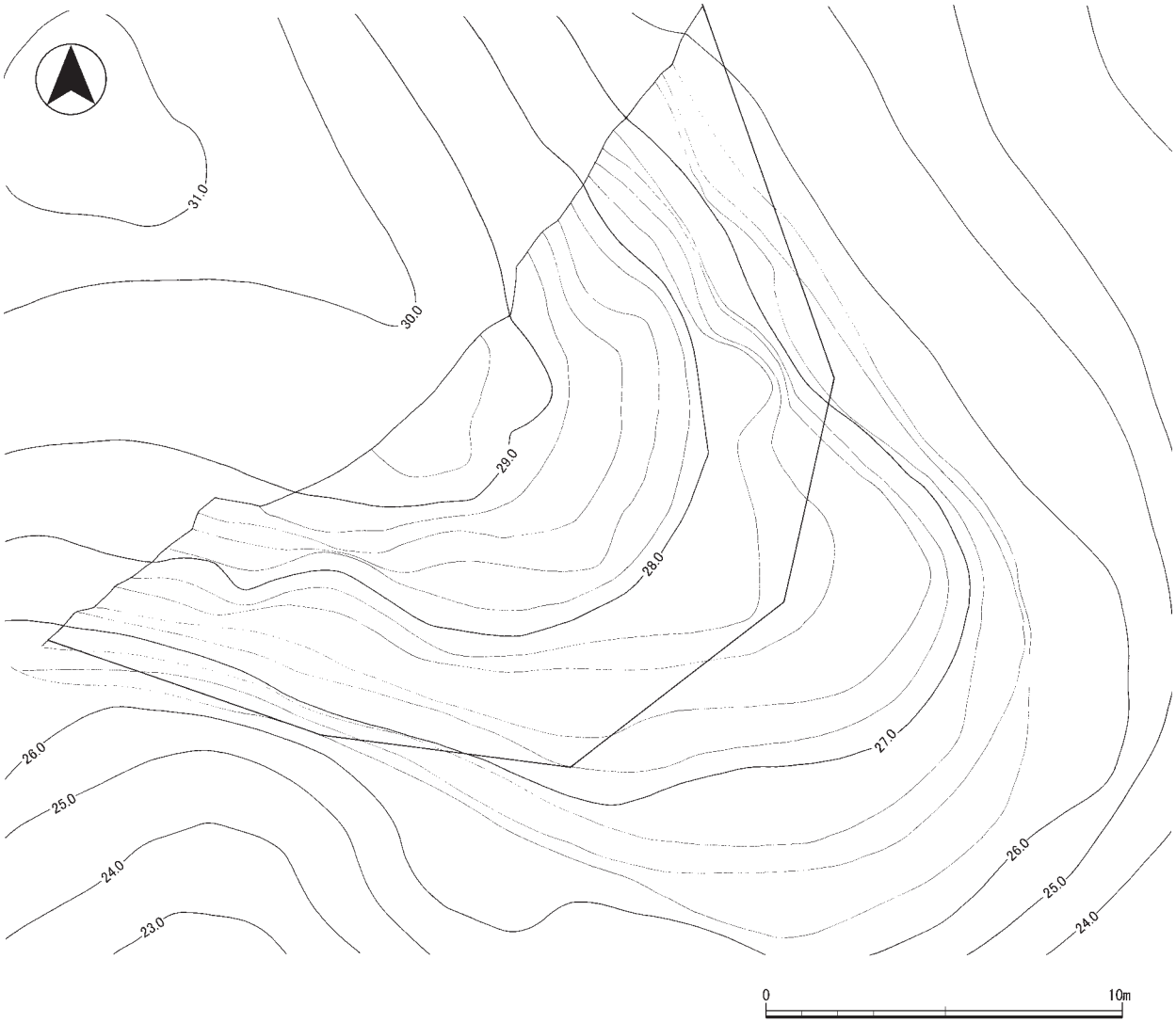
Ⅲ　調査の成果－遺構と出土遺物－

当初は、半壊された状況ではあるが１～５号墳と７号墳の周溝や主体部などが期待された。調査の結果、６基の古墳が検出され、遺跡地図による位置と号数が若干異なるが、遺跡地図を元に号数を付与した。すなわち、１・２・３・５号墳が残存しており、４号墳と思われた高まりは自然地形であることが判明、７号墳については全体が大きく攪乱を受けていたため遺構・遺物が確認されず、自然地形の可能性も考えられた。また、２号墳の東で検出した方墳は、４号墳とはやや位置も離れることから、新たに８号墳とした。

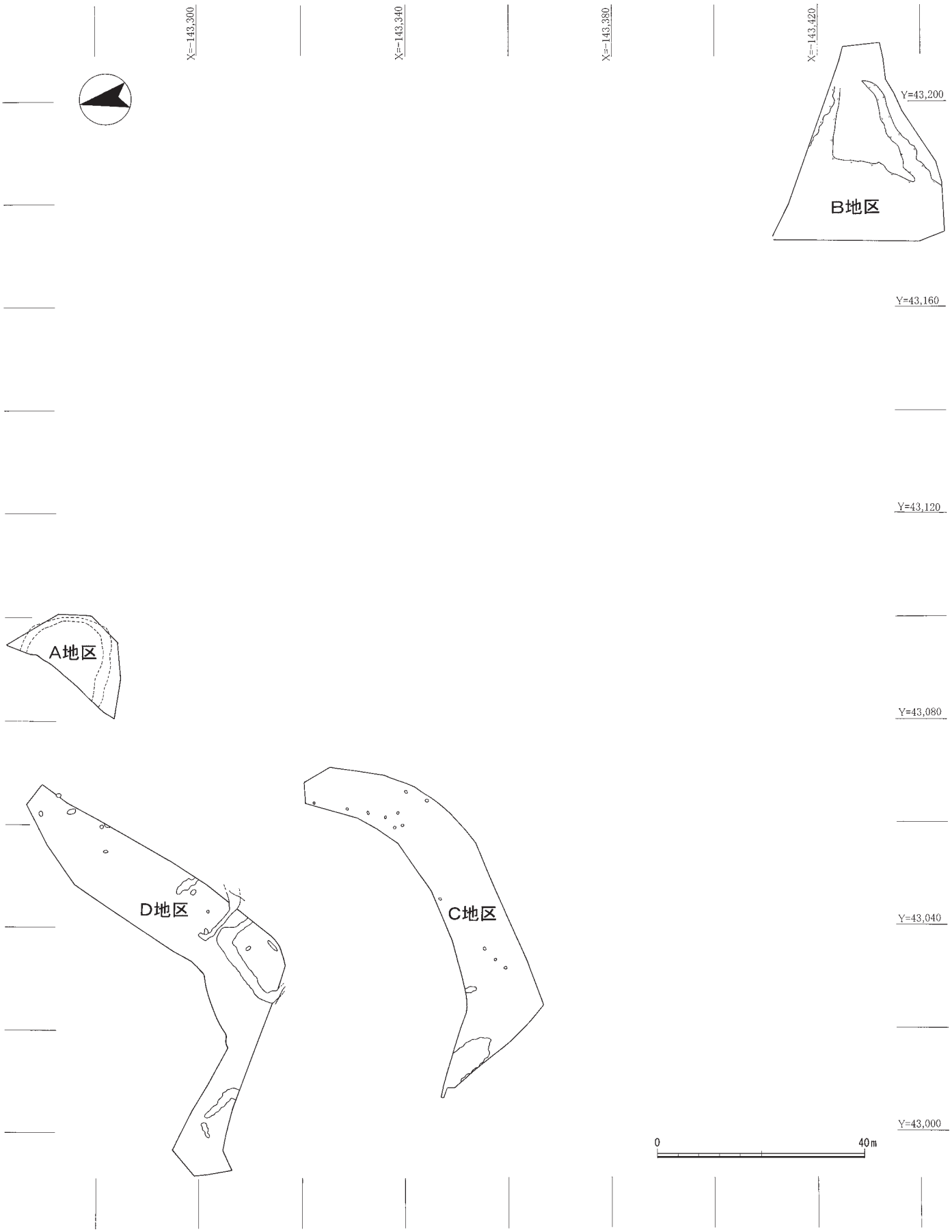
遺物は、２号墳出土の埴輪が大半を占め、コンテナケース15箱分の量が出土した。

１　地形と基本層序

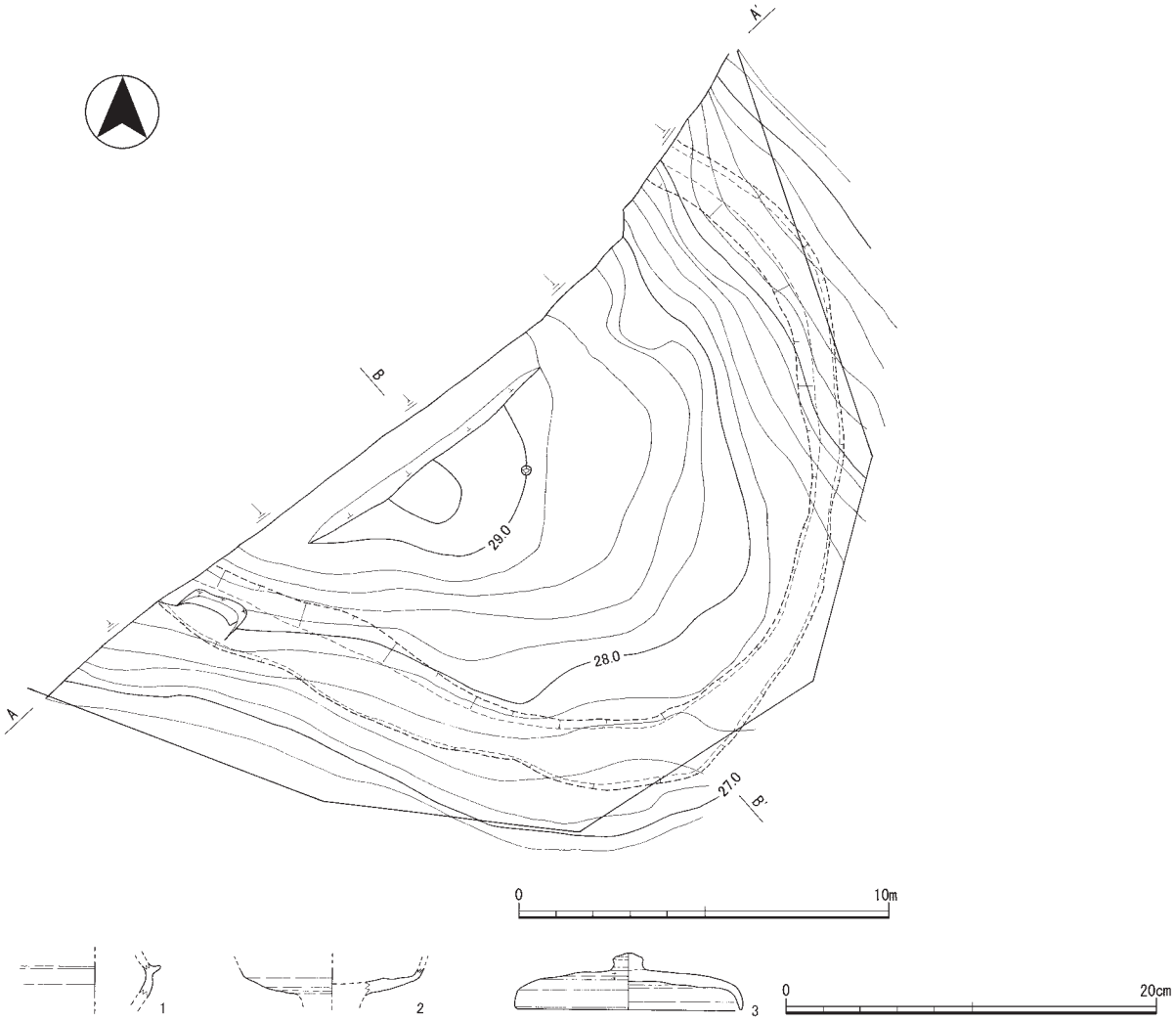
東海湖に由来する奄芸層群が広がり、その上に明褐色土がのる。場所によっては、奄芸層群の上層部分の、風化による黄白色を呈するブロックが露出している。Ｃ地区の西端・Ｄ地区の西半部で遺物包含層となる暗褐色土が確認できたが、それでも層としては薄く、包含される遺物もわずかであった。ちなみにこの層は７世紀前半造営の１号墳周溝に切られるが、５世紀後半代造営と思われる３号墳周溝の上に堆積していることから、６世紀代に堆積したものと考えられる。それ以外では良好な包含層は確認できなかった。また、Ｄ地区の北部分の一部は南から



第５図　Ａ地区調査前地形図（1:200）



第６図　遺構全体図(1:1,000)



第７図　Ａ地区調査後地形図（1：200）**、出土遺物実測図**（1：4）

北方向の地滑りが見られた。

掘削前の標高（最高地点）はＡ地区29.3m、Ｂ地区28.9m、Ｃ地区25.2m、Ｄ地区32.7mである。

掘削作業は全て人力にて行い、腐植土・崩落土を除去し、旧地形を検出することに努めた。

２　Ａ地区（第５～８図）

工事用道路により北西部が道路下まで完全に掘削され、調査前よりその工事用道路の法面で周溝状の埋土が確認されていた。また『津市遺跡地図』[①]の記載からにんごう５号墳の存在が想定されていた。検出された遺構は５号墳のみで、それ以外の遺構は見られなかった。

（１）基本層序

古墳群全体の地山となる奄芸層群由来の岩盤の上に、その岩盤の灰色ブロックが混じった褐色土が約10cm堆積し、その上に表土約５cmが載る。５号墳の周溝はこの褐色土を切って掘削され、周溝底では岩盤が露出した。

（２）５号墳

①　墳丘

墳丘北西部は工事用道路により完全に掘削されている。調査では、墳丘は５cm程掘り下げるとすぐに褐色粘質土が、その５cm程下ですぐに岩盤が見られた。このことから、灰色ブロックの混じる褐色粘質土が盛土である可能性も考えられたが、その厚みが５cm程と薄いこと、同様の土が工事用道路を挟んだ反対側壁面においても、岩盤の上に堆積して見られることから、これは盛土ではなく地山であると判断した。古墳造営後に表面が削平されている可能性は捨てきれないが、全体的に盛土の痕跡が確認されないことから、地山削り出しによる墳丘形成がなされ

第８図　Ａ地区墳丘土層断面図(1:100)

たものと考えられる。削平の可能性はあるが、標高28.6～29.0mのコンターライン付近がやや平坦面を形成するようである。

古墳の形態・規模は、後述する周溝の状況などから、やや不定形の円墳で、直径20.2m・墳高2.8m以上に復元できると判断した。

②　周溝

周溝は表土除去後の精査による平面観察では褐色土の分布によりその存在がうかがえた。しかし掘削したところ、幅50cmほどの平坦面を呈する形状となり、溝状に窪むことはなかった。それは工事用道路法面による土層断面（第８図Ａ－Ａ′）観察においても同様で、褐色土下の灰色ブロックの混じる褐色土上面は平坦を呈する。しかし、東西方向土層断面（Ｂ－Ｂ′）では、灰色ブロックの混じる褐色土上面はやや船底状を呈することから、褐色土はやはり周溝埋土であり、後述のＣ地区につながる墳丘南西側はＣ地区との間に入る小さな谷をほぼ利用するような形で墳丘の境とし、傾斜する北東側は溝を掘削して墳丘を区切ったと考えられる。

③　主体部

主体部は、近隣の古墳で主体部が調査されているものはみな木棺直葬であることもあり、その墓坑の検出に努めたが、すぐに地山が現れ、その痕跡は確認できなかった。墳頂部は削平を受けていると考えられ、また北西部も破壊されていることから、主体部は調査区内には残存していないと考える。

④　遺物の出土状況

墳丘南部で表土掘削中に出土した須恵器蓋（３）と、周溝北東部、工事用道路で切られた部分から須恵器高杯片（２）が出土した。その他、図化していないが墳丘東部分で包含層掘削時に灰釉陶器壺体部細片が出土している。

（３）出土遺物（第７図）

１は須恵器杯身の破片である。細片であるが時期はＭＴ15型式併行期か。２は須恵器高杯である。杯部のみであるが、底部に接合痕があったため脚部が欠損した高杯と判断した。口縁部は残存していないが、形状から無蓋高杯かと思われる。杯部内面に焼成時の降灰が見られ、正位で上に何も重ねず窯詰めが行われたと考えられることもそれを補強する。３は須恵器蓋である。宝珠状摘みを持つが、口縁部は天井部よりほぼ垂直に降りる形状を呈する。高杯蓋の可能性もあるが、２とは法量・形状等が合致しない。内面天井部中央付近に研磨が見られる。摘みの形状からＴＫ217型式併行期のものと判断した。

３　Ｂ地区（第９～11図）

１～５、８号墳とは谷を挟んだ南の尾根上の調査区である。調査前より、最高所から東への傾斜面、西部の谷部以外は重機による撹乱を受けていた。

（１）基本層序

全体が撹乱を受けている。西部の谷状地形では、表土下に崩落土である黄褐色粘質土が堆積し、これを除去すると安定した明黄褐色粘質土が検出できた。調査区南部には重機で移動された土が1.1m堆積していたが、その下には旧地形が残存した。

（２）７号墳

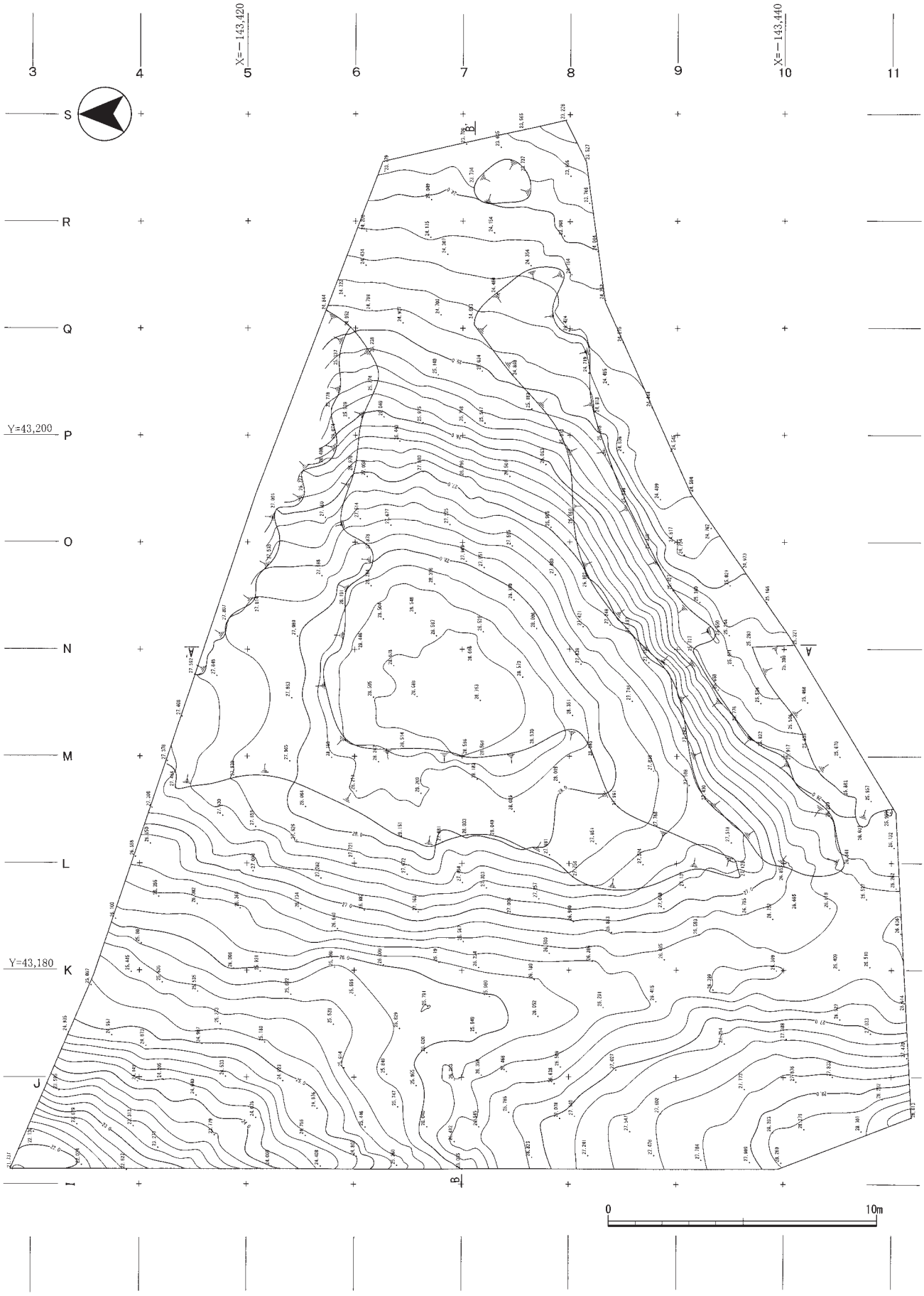
前述のように、大部分が掘削を受けていることから周溝や主体部の痕跡を検出することを目的とし、重機により移動した土、表土を掘り下げていった。しかし、盛土・周溝・主体部は検出できず、出土遺物もなかった。

表土下はにぶい黄褐色土が薄く堆積し、その下に奄芸層群に由来する岩盤がある。このにぶい黄褐色土は盛土とも考えられたが、黄白色ブロックを含みぼそぼそと軟らかいことから自然堆積もしくは盛土の崩落土と判断した。よって、墳丘構築は、地山削り出しあるいは盛土によるものかは判断できなかった。

東西土層断面の最高所から西の谷へと落ちる部分の観察で、中央の高まりが近年に崩落し、その土が堆積した痕跡が見られた。その堆積土中にビン等が含まれることから、その時期は近代以降と考えられる。７号墳南西には高圧線鉄塔があり、その建設時のものの可能性があり、現在も高圧線管理も兼ねた山道が７号墳西部の谷部を通っていることもその傍証となる（図版５右下）。

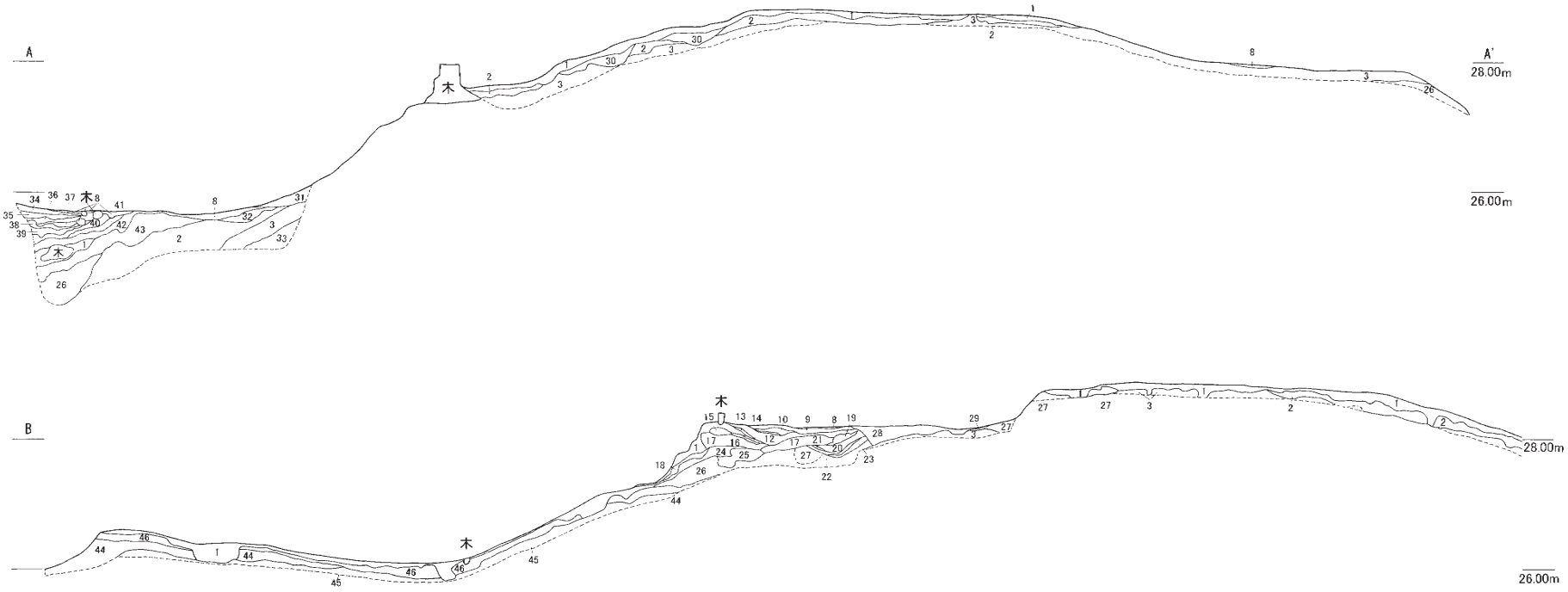
７号墳は調査区内では古墳に伴う遺構は検出できず、出土遺物もなかったことから、墳形・規模・築造時期は不明といわざるを得ない。

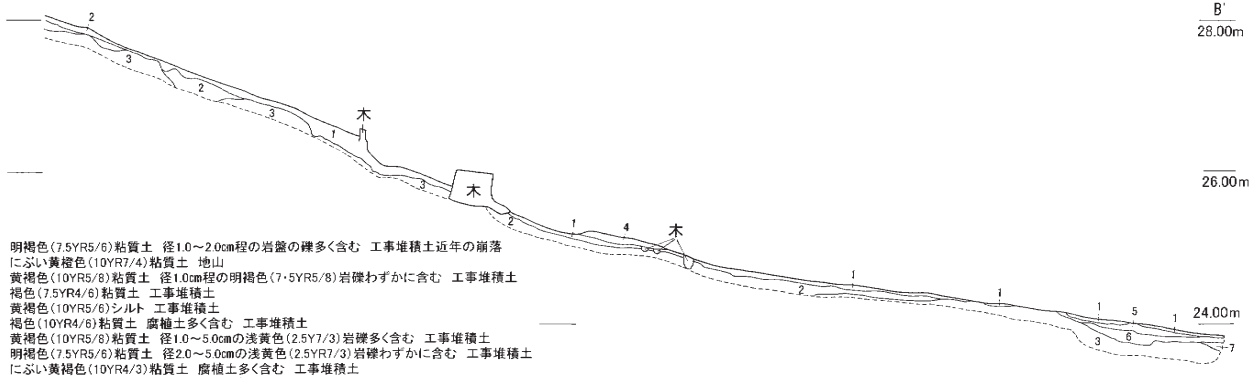
第９図　Ｂ地区調査前地形図(1:200)



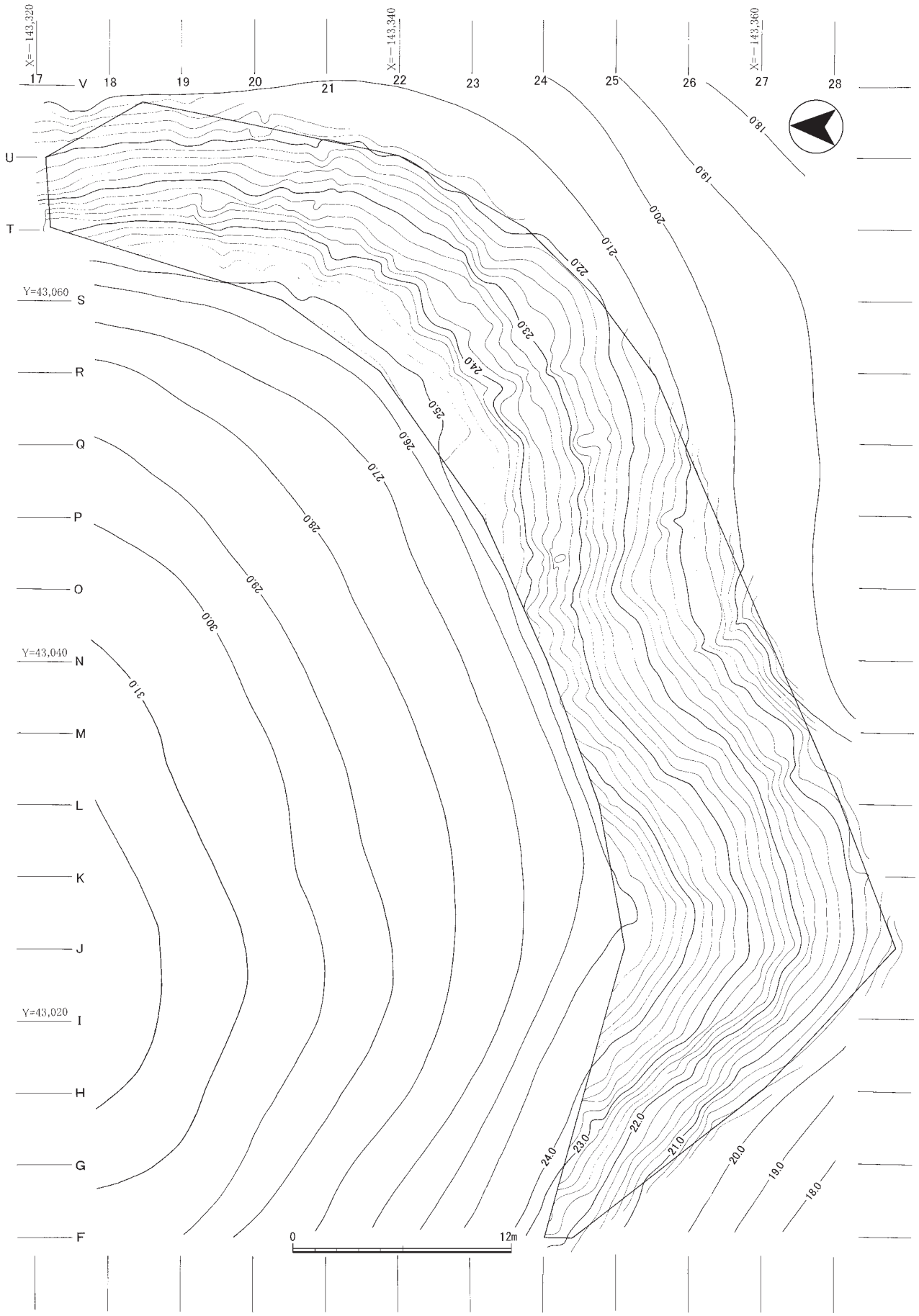
第10図　B地区調査後地形図(1:200)

第11図　B地区土層断面図(1:200)

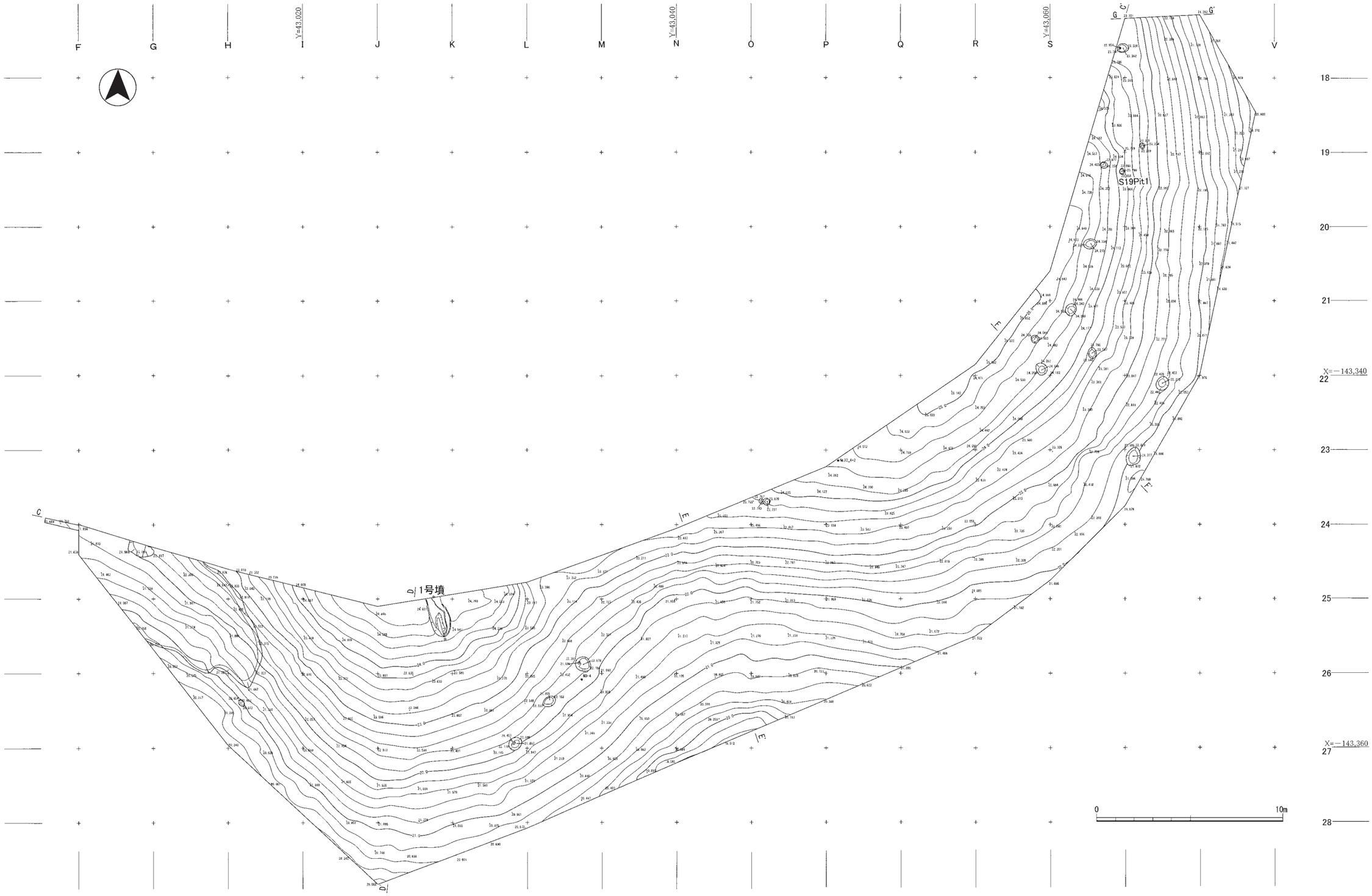




1　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトをベースとして腐植土混じる　表土
2　にぶい黄橙色(10YR7/4)粘質土
3　橙色(7.5YR6/6～6/8)シルトに黄褐色(10YR5/8)シルトブロック混じる　地山(岩盤)
4　にぶい黄橙色(10YR6/4)～明黄褐色(10YR6/6)粘質土に黄褐(10YR5/8)粘質ブロック混　客土
5　にぶい黄褐色(10YR5/3～5/4)シルト　径1.0cm程の明黄褐(10YR7/6)シルトブロック含む　くぼみ堆積物
6　黄褐色(10YR5/6)シルト　径～5.0cm程のブロック多く含む　くぼみ堆積物
7　灰黄色(2.5Y7/2)シルト　地山
8　黄褐色(2.5Y5/3)シルトに浅黄色(2.5Y7/3)シルトブロック、黄褐色(10YR5/6)シルトブロック(いずれも直径2.0cm内)含む　カクラン
9　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトに浅黄色(2.5Y7/3)シルトブロック(直径3.0cm以上)多く含む　カクラン
10　黒褐色(10YR3/2)砂質土　腐植土多く含む　カクラン
11　灰黄褐色(10YR6/2)シルト　カクラン
12　にぶい黄橙色(10YR7/3)シルトに灰黄色(2.5Y7/2)シルトブロック多く含む　カクラン
13　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト
14　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土ににぶい黄褐色(10YR5/4)～黄褐色(10YR5/6)砂質土が層状に混じる
15　にぶい黄橙色(10YR6/4)～にぶい黄褐色(10YR5/4)弱粘質土
16　にぶい黄褐色(10YR5/4)弱粘質土ににぶい黄橙色(10YR6/4)シルトブロック(直径2.0cm程)含む
17　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルトににぶい黄色(2.5Y6/3～6/4)粘質ブロック(直径2.0～5.0cm程)多く含む
18　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
19　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルトに植物痕多く含む
20　19に浅黄色(2.5Y7/3)シルトブロック(岩盤の石)多く含む
21　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質土　上面に腐植土・植物痕が層を成す
22　にぶい黄色(2.5Y6/3～6/4)シルトに浅黄色シルトブロック(岩盤の石)多く含む
23　褐色(10YR4/4)シルトに浅黄色ブロック(岩盤の石　径1.0cm以下)多く含む
24　灰黄褐色(10YR4/2)～にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土・腐植土多く含む
25　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルトに浅黄色(2.5Y7/3)シルトブロック(岩盤の石)多く含む
26　明黄褐色(10YR6/6)～黄褐色(10YR5/6)シルト　地山
27　黄褐色(10YR5/6)シルトブロックと浅黄色(2.5Y7/3)シルトブロックで構成される　地山
28　にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト
29　灰黄色(2.5Y7/2)シルト
30　褐色(10YR4/6)弱粘質土硬くしまる
31　にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質土　径1.0～3.0cm程の岩盤の礫多く含む　工事堆積土近年の崩落
32　明褐色(7.5YR5/6)粘質土　径1.0～2.0cm程の岩盤の礫多く含む　工事堆積土近年の崩落
33　にぶい黄橙色(10YR7/4)粘質土　地山
34　黄褐色(10YR5/8)粘質土　径1.0cm程の明褐色(7・5YR5/8)岩礫わずかに含む　工事堆積土
35　褐色(7.5YR4/6)粘質土　工事堆積土
36　黄褐色(10YR5/6)シルト　工事堆積土
37　褐色(10YR4/6)粘質土　腐植土多く含む　工事堆積土
38　黄褐色(10YR5/8)粘質土　径1.0～5.0cmの浅黄色(2.5Y7/3)岩礫多く含む　工事堆積土
39　明褐色(7.5YR5/6)粘質土　径2.0～5.0cmの浅黄色(2.5YR7/3)岩礫わずかに含む　工事堆積土
40　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土　腐植土多く含む　工事堆積土
41　褐色(10YR4/6)粘質土　腐植土含む　工事堆積土
42　明褐色(7.5YR5/6)粘質土　工事堆積土
43　褐色(7.5YR4/4)シルト　崩落土
44　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土　径5.0mm以下の浅黄色(2.5Y7/3)粒多く含む　地山
45　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　地山
46　黄褐色(10YR5/)粘質土　崩落土



第12図　C地区調査前地形図(1:300)



第13図　C地区調査後地形図(1:200)

4　C地区（第12～16図）

Ａ地区の南西に位置するが、Ａ地区との間にはやや小さな谷が入り込む。調査前より二つのピークが確認でき、遺跡地図より東のピークを１号墳、西のピークを３号墳と想定して調査に着手した。しかし調査の結果、当初１号墳とした高まりは自然地形であり、３号墳としたものが１号墳であると結論付けた。その他、ピットが数基検出された。

（１）基本層序

東西方向の土層（Ｃ－Ｃ′、等高線並行方向）は、高所にある調査区北側壁面を利用したが、調査区が屈曲していることを考慮する必要がある。南北方向（等高線直交方向）については、二つのピークそれぞれに土層観察アゼを設定し、それを補足する形でピーク間の中間、谷が入り込む部分にアゼを設定した。また、調査区北端壁面土層も図化した。

東西方向でみると、西側のピーク（１号墳）は表土下約10㎝で奄芸層群の岩盤が見られる。Ｃ地区内でこの岩盤が見られるのはここのみである。１号墳の西側では明褐色粘質土が、１号墳の東は黄褐色弱粘質土が地山となるが、東へ行くほどに赤褐色味を強める。表土下から地山までの堆積は傾斜していることもあり当然南部ほどその厚みを増すが遺物はほとんど含まれない。わずかに、１号墳の西側において地山上に暗褐色粘質土が見られ、土師器片が少量含まれることから遺物包含層と考えられるが、この暗褐色土層を切って１号墳周溝が掘削されている。

中央の谷部は、表土下に褐色シルト土・褐色粘質土等が何層にも堆積している。表土の５層下から植物痕などを多く含む暗褐色粘質土層・その下に赤褐色粘質土層が見られるが、岩盤である奄芸層群は確認できず、谷が徐々に埋まっていったと考えられる。

（２）１号墳

調査区西半部で検出した。北半部が工事用道路のため掘削されている。

①　墳丘

基本層序でも見たように、墳頂部は表土直下で奄芸層群が確認できる。墳丘西裾に見られる褐色砂質土層は盛土の可能性を残すが、墳丘南～東裾を見ると地山削り出しによる成形と考えられる。また、西部は溝で区切り墳丘裾を造るが、南・東部には見られない。南・東部では、22.4ｍライン付近が墳丘裾に当たり、直径25.5ｍ・墳高3.2ｍの円墳と思われる。

②　周溝

前述のように、周溝はＨラインより東では確認できなかった。この範囲は１号墳造営以前の包含層である暗褐色粘質土が見られる範囲に一致する。つまり、暗褐色粘質土上でしか検出が難しかったともいえるが、１号墳の南北土層観察でも周溝埋土は見られず、該当部分がやや平坦面を呈する程度であり、少なくともＪ列から東は周溝は掘削されず、自然地形を利用したと考えられる。

周溝幅は北側壁面で見ると幅2.4ｍ・深さ40㎝（周溝外側岸の高さから計測）である。

③　主体部（第16図）

墳丘中央において浅い土坑を検出したが、北半部は調査区外へと伸び、工事用道路により掘削されている。残存長2.55ｍ・最大幅1.06ｍ・深さ21㎝で、平面形は不整楕円形を呈する。木棺直葬の可能性を考えて精査したが、棺痕跡は確認できなかった。土坑内からは、内面を上に向けた須恵器杯蓋２点（４・５）が出土した。

④　遺物の出土状況

主体部以外のものは、Ｌ26区、墳丘裾想定ラインの90㎝東において須恵器杯蓋（６）が出土している。

（３）その他の遺構

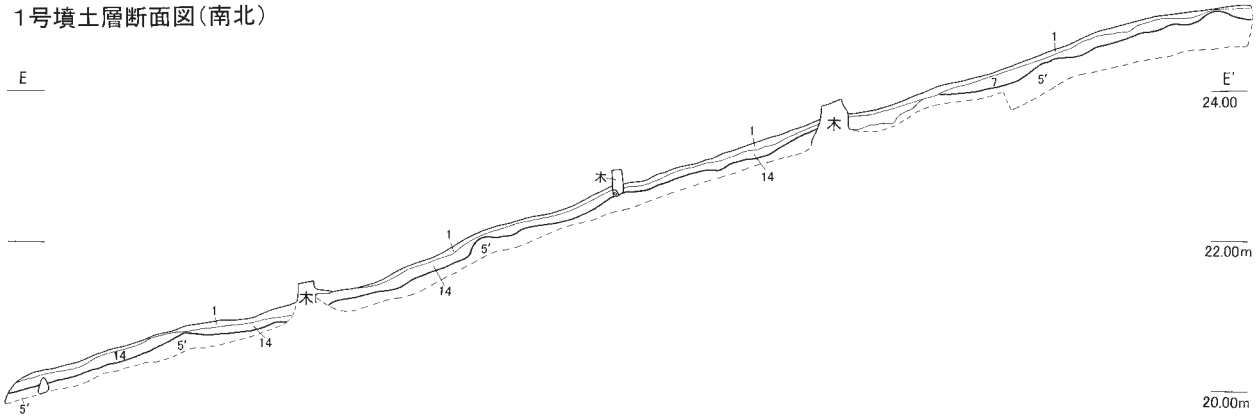
ピットを１号墳南西部のＫ26・Ｌ25・Ｌ26区とＲ～Ｔ列付近で検出した。Ｓ19pit1で土師器片と炭化物・焼土が見られた以外は出土遺物はなかった。また、建物などにはまとまらなかった。

（４）出土遺物（第15図）

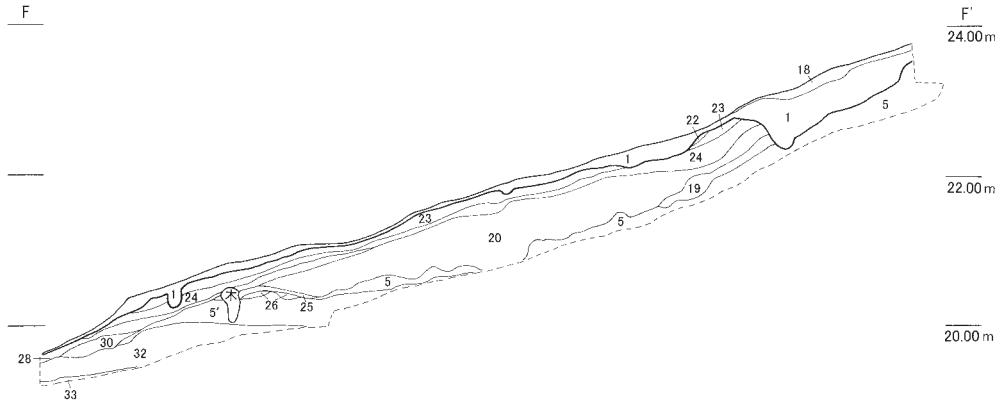
出土遺物はごく僅かである。４～６は須恵器杯蓋である。４は摘みが欠損している。４・５は端部返り部が上方に跳ね上がり、６は端部とその返り部がほぼ同じ接地面を呈す。４は天井部が丸く膨らむが、５・６は屈曲部が見られ天井部に面をつくる。５・６は天井部に降灰が著しく、自然釉が見られる。６は端部内面に別個体片が融着し、杯身等と重ねて窯詰したのであろう。４の内面天井部中央をわずかに研磨をしている可能性がある。これら須恵器の特徴

第14図　C地区土層断面図(東西方向)(1:100)

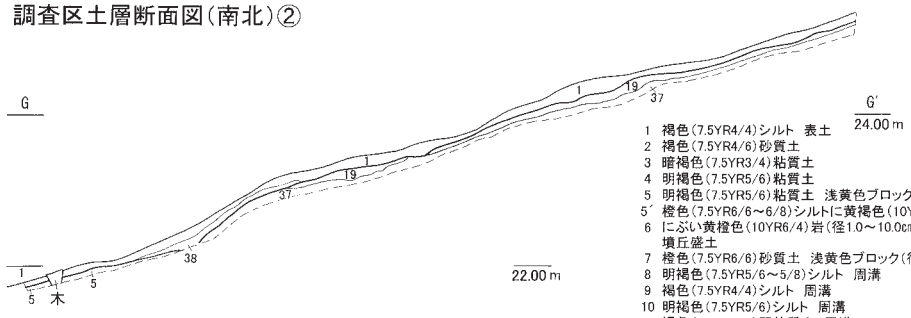
1号墳土層断面図（南北）



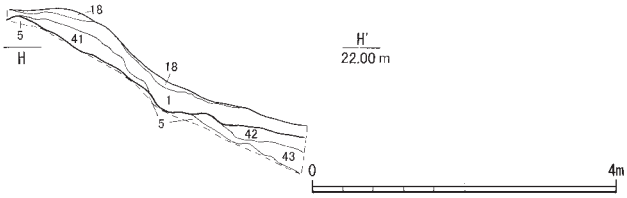
調査区土層断面図（南北）①

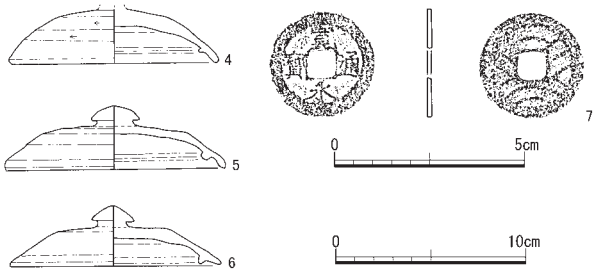


調査区土層断面図（南北）②



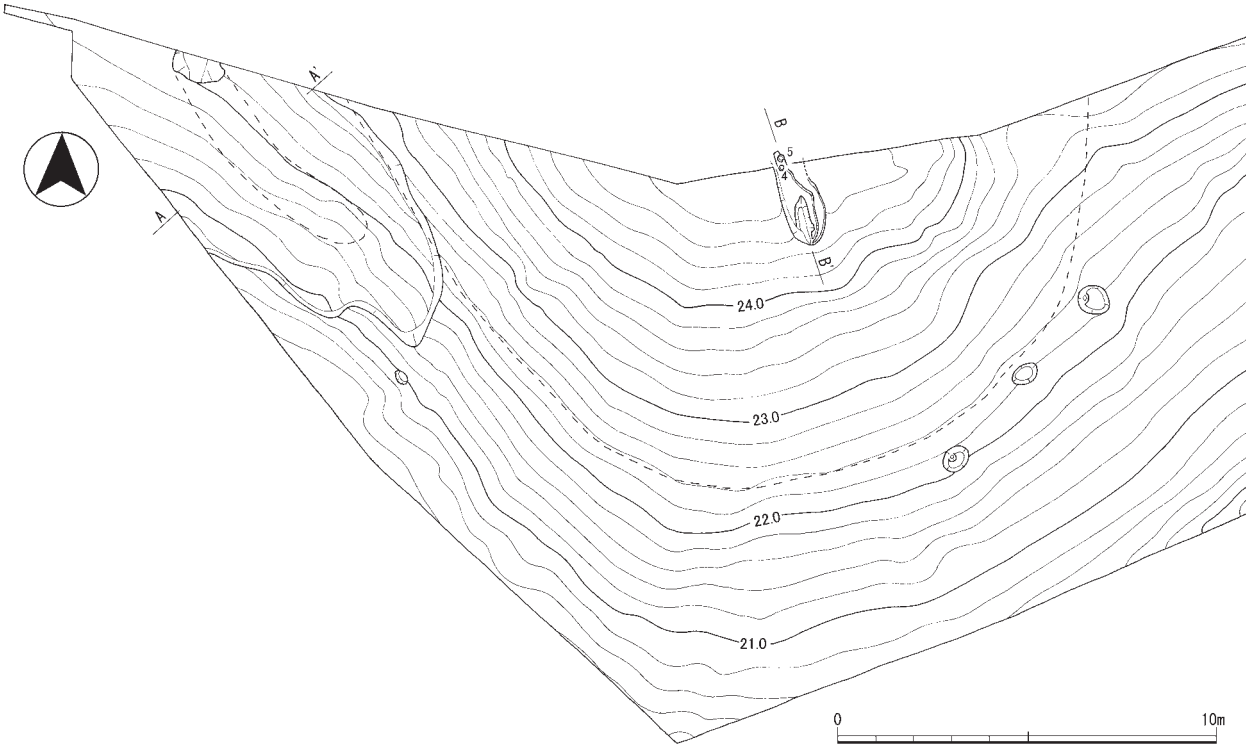
調査区土層断面図（東壁）

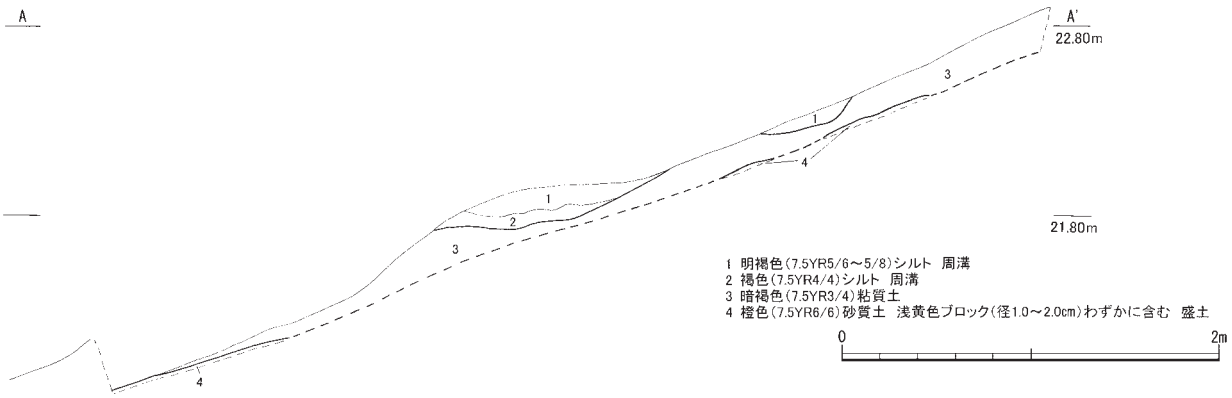


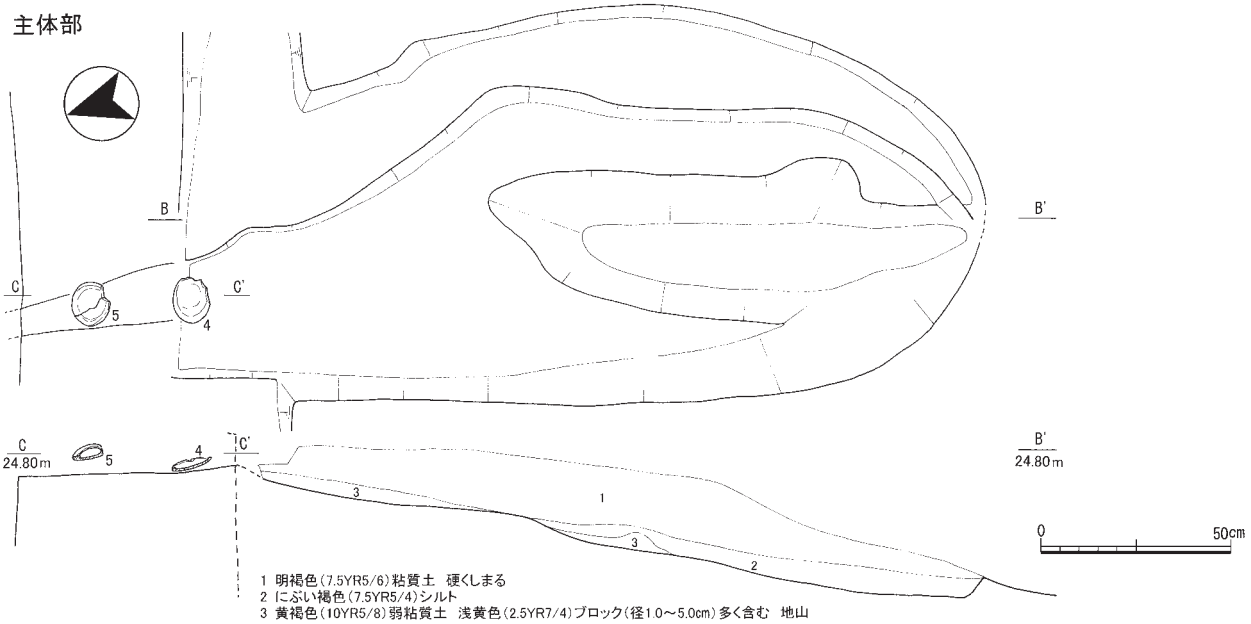


1 褐色（7.5YR4/4）シルト　表土
2 褐色（7.5YR4/6）砂質土
3 暗褐色（7.5YR3/4）粘質土
4 明褐色（7.5YR5/6）粘質土
5 明褐色（7.5YR5/6）粘質土　浅黄色ブロック多く含む　地山
5′ 橙色（7.5YR6/6～6/8）シルトに黄褐色（10YR5/8）シルトブロック混じる　地山（岩盤）
6 にぶい黄橙色（10YR6/4）岩（径1.0～10.0cm）で構成されるが、かなりぼろぼろでもろい
墳丘盛土
7 橙色（7.5YR6/6）砂質土　淺黄色ブロック（径1.0～2.0cm）わずかに含む　盛土
8 明褐色（7.5YR5/6～5/8）シルト　周溝
9 褐色（7.5YR4/4）シルト　周溝
10 明褐色（7.5YR5/6）シルト　周溝
11 褐色（7.5YR4/4）弱粘質土　周溝
12 明褐色（7.5YR5/6）シルト　周溝
13 明褐色（7.5YR5/8）砂質土　周溝
14 明褐色（7.5YR5/6）弱粘質土　崩落
15 橙色（7.5YR6/6）粘質土　浅黄色ブロック（径1.0cm以下）わずかに含む　盛土
16 黄褐色（10YR5/8）弱粘質土　地山
17 明褐色（7.5YR5/6）弱粘質土　主体部埋土
18 褐色（7.5YR4/6）弱粘質土　工事用道路建設時の盛土
19 褐色（7.5YR4/4）粘質土　地山
20 褐色（10YR4/6）粘質土　径5.0mm弱の鉄分粒多く含む　にぶい褐色（7.5YR5/3）粘質土が混在する
谷部堆積土
21 欠番
22 褐色（10YR4/6）粘質土
23 褐色（10YR4/4）シルト
24 褐色（7.5YR4/4）粘質土
25 明褐色（7.5YR5/6）シルト　浅黄色ブロック（径1.0cm以下）多く含む
26 明赤褐色（5YR5/8）粘質土
27 黄褐色（10YR5/6）粘質土　水分多く含む
28 にぶい褐色（7.5YR5/4）粘質土
29 欠番
30 明褐色（7.5YR5/6）シルト　浅黄色ブロック（径1.0cm程）わずかに含む
31 欠番
32 暗褐色（7.5YR3/3）弱粘質土　植物痕など多く含む　岩盤下の層
33 赤褐色（5YR4/8）粘質土
34 褐色（10YR4/6）シルト
35 褐色（7.5YR4/6）粘質土
36 明赤褐色（5YR5/6）～赤褐色（5YR4/6）粘質土
37 赤褐色（5YR4/6）シルトににぶい黄橙色（10YR6/4）シルトブロック（径1.0cm程度）をわずかに含む
38 褐色（7.5YR4/6）粘質土　浅黄色（2.5YR7/4）シルト粒（径0.5cm程）含む　カクラン
39 明褐色（7.5YR5/6）シルトににぶい黄橙色（10YR6/4）シルト・明黄褐色（10YR6/6）シルトブロック
（径1.0～3.0cm）を多く含む
40 明褐色（7.5YR5/6）粘質土に明黄褐色（10YR6/6）シルトブロック（径1.0～2.0cm程）・にぶい黄橙色
（10YR6/4）シルトブロック（径1.0cm程）を含む
41 褐色（7.5YR4/4）弱粘質土
42 褐色（7.5YR4/6）粘質土
43 赤褐色（5YR4/6）粘質土

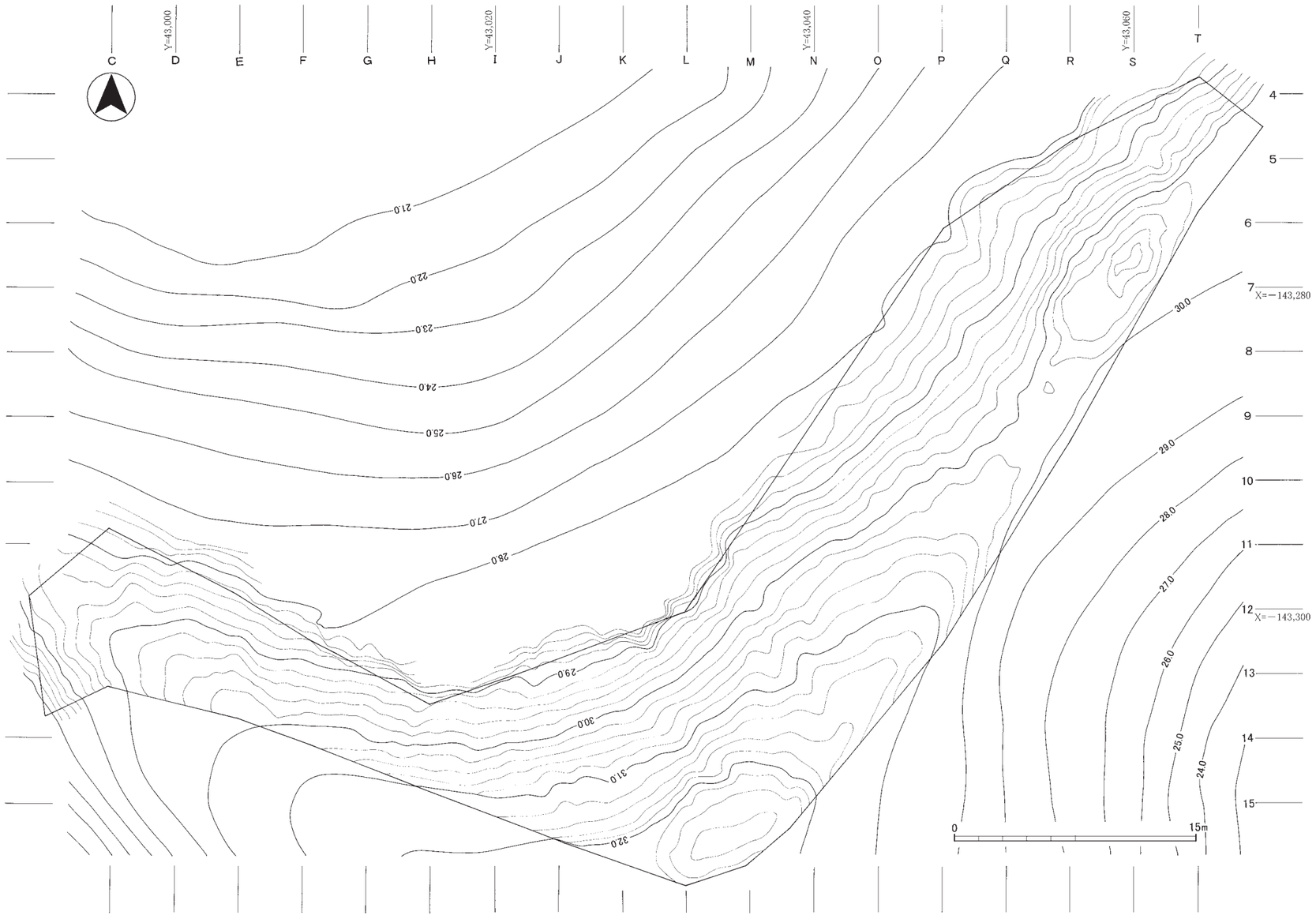
第15図　C地区土層断面図（南北方向）（1:100）、**出土遺物実測図**（4～6は1:4、7は1:2）



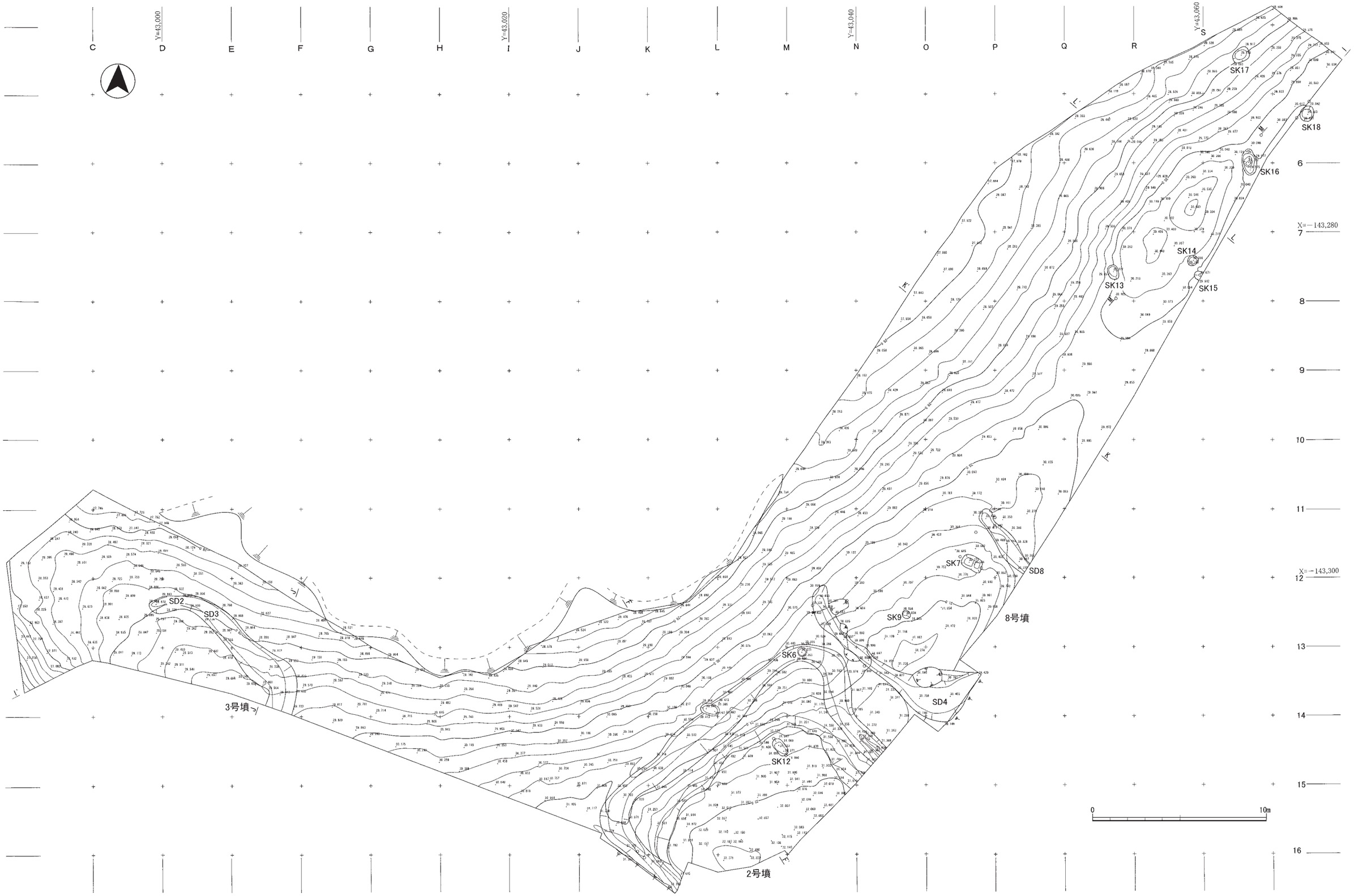




第16図　1号墳遺構図(1:200)・土層断面図(1:40)、主体部遺物出土状況図・土層断面図(1:20)



第17図　D地区調査前地形図(1:300)



第18図　D地区調査後地形図(1:200)

から、いずれも、ＴＫ217型式併行期の範疇に収まるものと思われる。

他に、Ｏ23区からは寛永通宝（７）が出土している。また、Ｓ19pit1から古墳時代前期と思われる土師器片が出土し、Ｐ23区では須恵器甕体部片数点が表採されたが、図化できる大きさではない。

5　Ｄ地区（第17～26、29～33図）

Ｃ地区の北、にんごう古墳群では最高所に所在する調査区である。

調査前より最高所の埴輪が表採される箇所が２号墳、遺跡地図から東のピークが４号墳と想定して調査に着手した。しかし調査の結果、４号墳は自然地形であり、２号墳の西側・東側にそれぞれ方墳が検出された。西側の方墳は遺跡地図から３号墳とし、東側の方墳は新たに８号墳とした。その他、土坑が数基検出された。

（１）基本層序

等高線に並行する方向の土層（Ｉ－Ｉ′）は、高所にある南東側調査区壁面を利用したが、調査区は屈曲していることを考慮する必要がある。等高線に直交する方向の土層は、二つのピーク（２・４号墳）それぞれに土層観察アゼを設定し、それを補足する形で２号墳と調査区西壁との中間、二つのピーク間の中間に土層観察アゼを設定した。

層序は、地山となる明褐色土がＯ列より西側で見られる。Ｐ列より東は奄芸層群の白色岩盤もしくはその上にやや薄く堆積する赤褐色土層上面を地山として調査を行った。北側に向かって傾斜するため、崩落土が厚く堆積する。また、Ｃ地区でもあったような暗褐色土（Ｄ地区では褐色弱粘質土として認識）はＪ列より西側でのみ確認できた。

（２）２号墳

標高32.7ｍと古墳群の中で最高所に造営された古墳である。南半部が工事用道路により掘削されており、調査前より円筒埴輪が表採されていた。一辺約15.2ｍ・墳高2.4ｍの方墳である。

①　墳丘

墳丘は、最も残りのよい部分で約50㎝の盛土を施し構築している。盛土は、奄芸層群に由来する灰白ブロック土を含む褐色土と明褐色土などを10㎝程の厚みで積み重ねている。墳丘裾に土嚢・板止めなどの土止めの痕跡は確認できなかった。葺石は施されていないが埴輪が見られ、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪などが立てられていたものと思われる。埴輪の掘形は検出できなかった。

墳丘盛土下に旧表土が確認でき、古式土師器高杯片が含まれたことから、墳丘墓の可能性を考え更に断ち割りを入れたがその痕跡はみられなかった。

②　周溝

周溝北東コーナーが突出しやや鋭角を呈するため、調査途中で前方後円墳の後方部の可能性を検討したが、周溝が北東コーナーを過ぎた後はまた方墳を形作るように直伸し、北西コーナーがほぼ直角を呈する。また、後円部が南にあるとすると、前方部よりも下がった位置になり、稲葉・鎌切古墳群を含めても一番高所に立地するにもかかわらず、北の沖積地から見ると後円部が前方部に隠れてしまうこととなる点などから、その可能性は否定した。

周溝の規模は、北辺中央で計測して幅2.2ｍ・深さ19㎝（周溝外側岸の高さから計測）である。

周溝北東コーナー底においてＳＫ６を検出した。深さ27㎝と浅く、遺物はなかった。その近くで砥石(69）が出土している。後述するが、その他須恵器、多量の埴輪が周溝内から出土している。

③　主体部

墳丘上ほぼ表土直下で長辺2.6ｍ・短辺約45㎝の断面船底形の土坑ＳＫ５が検出され、鉄剣１点（72）が出土した。切っ先は西に向けており、柄部はやや斜め上方を向いており、ほぼ表土直下であったため欠損している。出土遺物はこれ以外にはない。

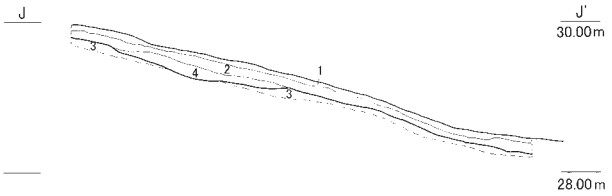
土坑の規模が小さいため、その下部に本来の埋葬主体部がある可能性を考え盛土を掘り下げていったが、盛土の状況に変化はなく旧表土に達した。その間木棺直葬の痕跡は見られず、旧表土を切るような遺構が確認できなかった。以上のことから、ＳＫ５は遺物埋納土坑であり、調査区内には埋葬主体部はなかったと判断した。

④　遺物の出土状況

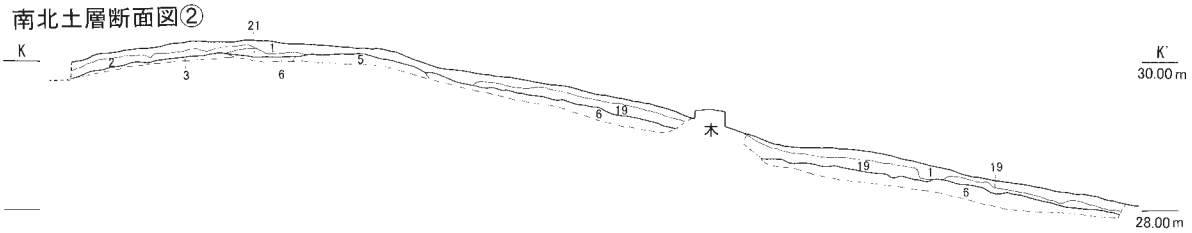
主体部以外の遺物を見ていく。周溝内からは円筒埴輪が多く出土し、どこかに集中するということはなくまんべんなく出土することから、埴輪が本来は

第19図　D地区土層断面図(東西方向)(1:100)

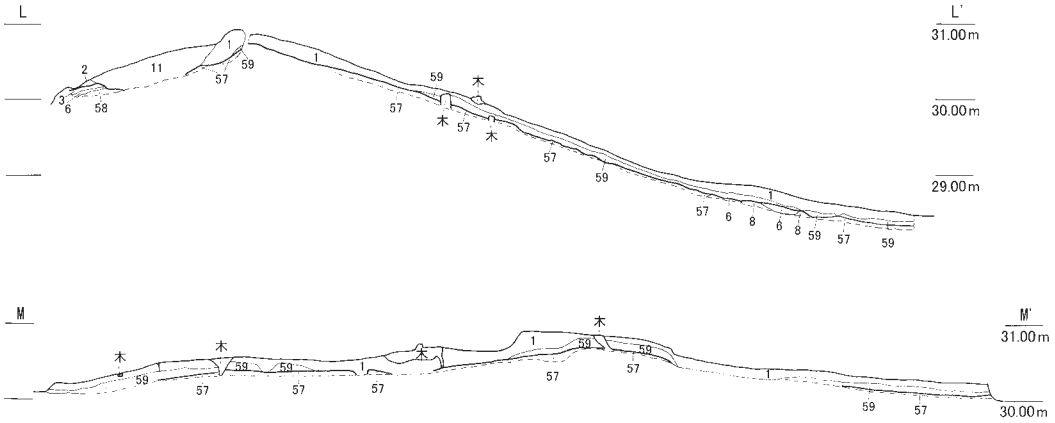
南北土層断面図①



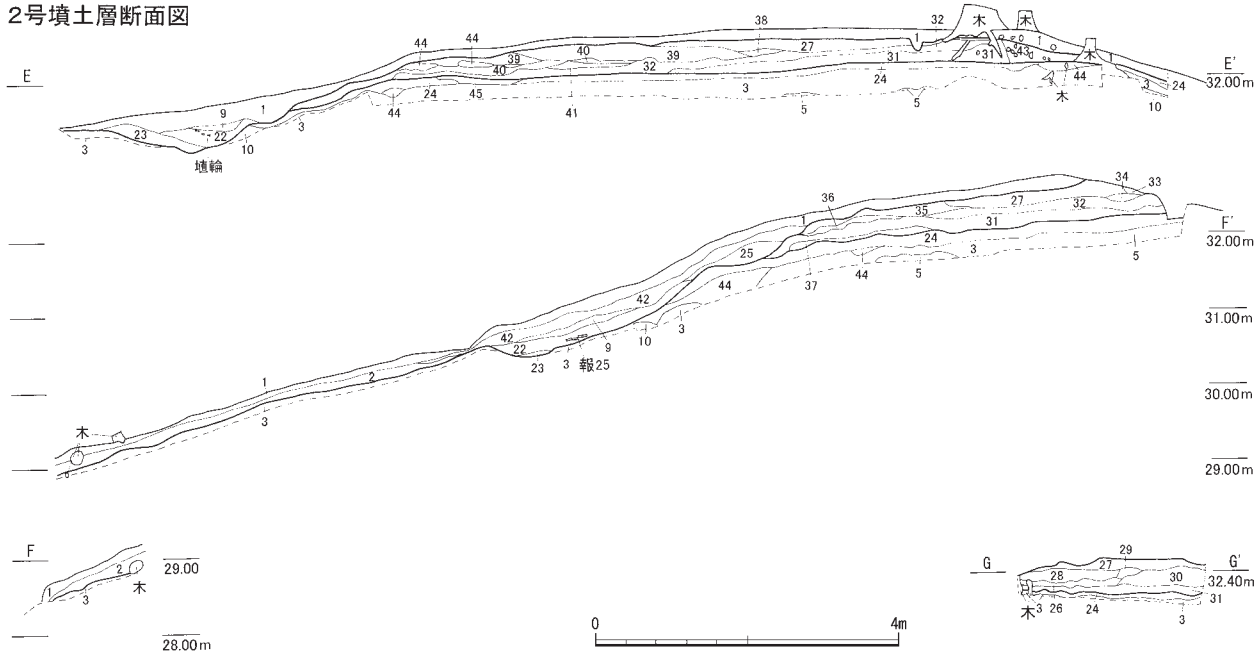
南北土層断面図②



旧4号墳土層断面図



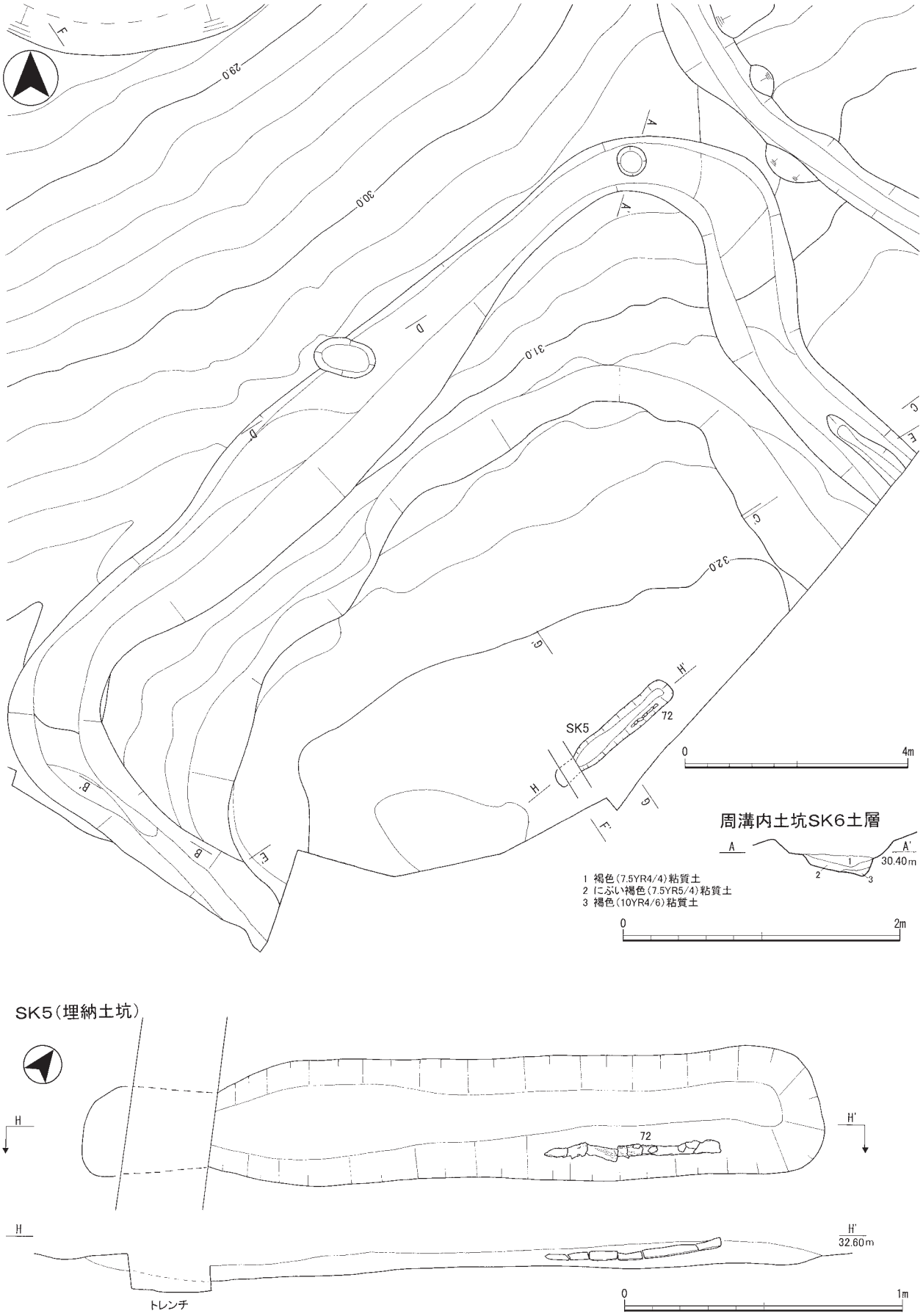
2号墳土層断面図



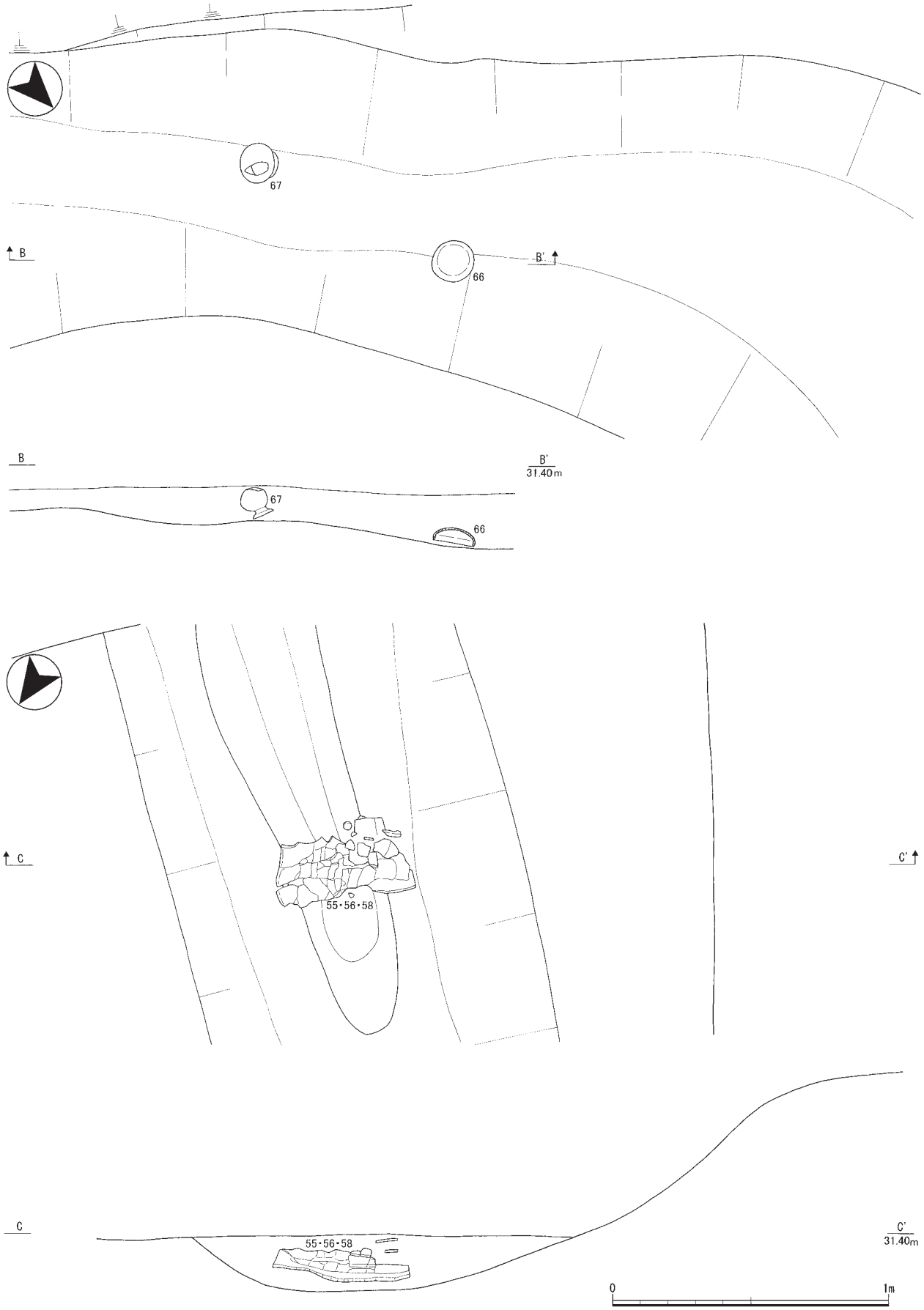
第20図　D地区南北方向・旧４号墳・２号墳土層断面図(1:100)

第２表　Ｄ地区土層断面注記

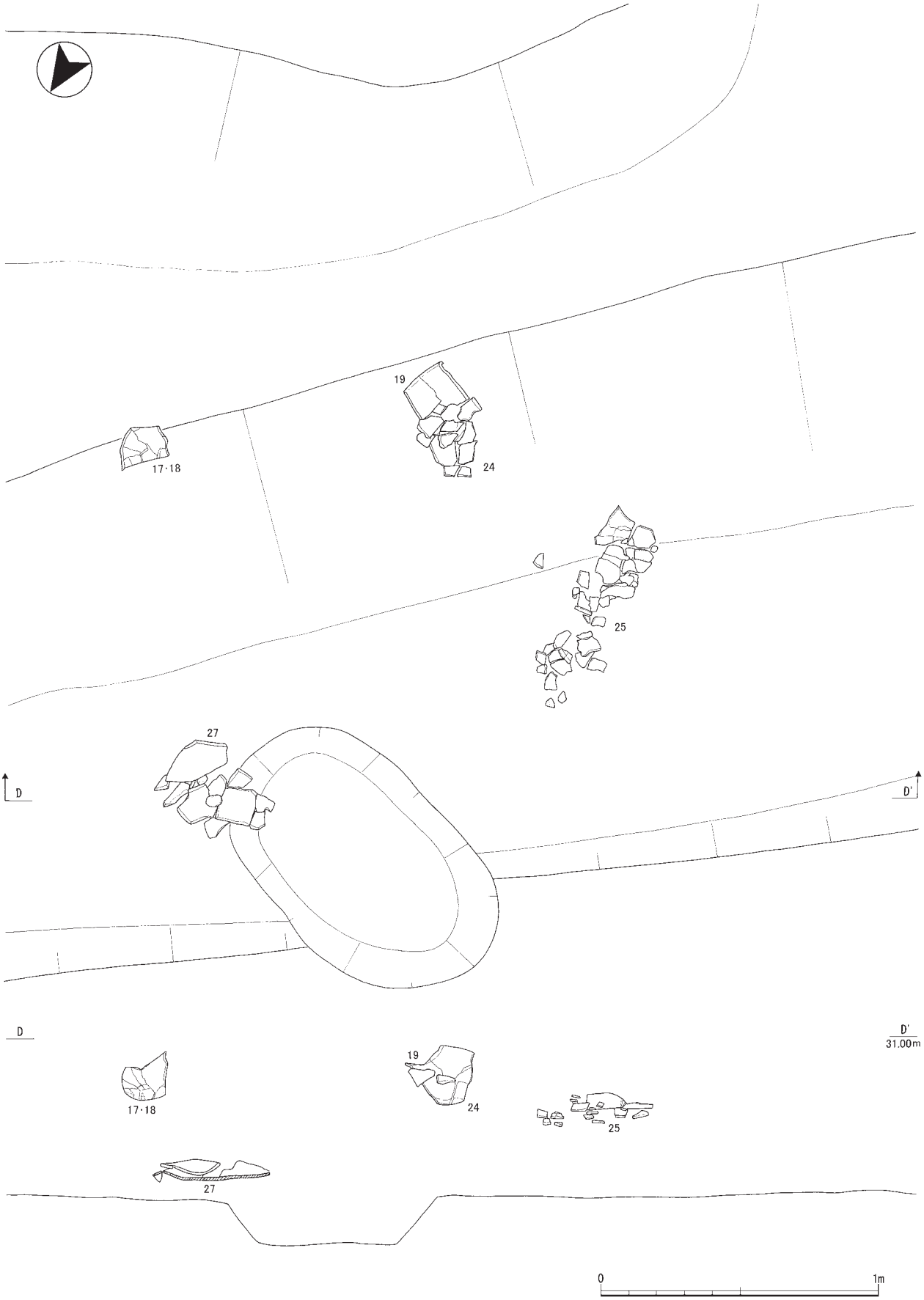
No.	土　色	特記事項
1	表土	表土
2	褐色(10YR4/6)弱粘質土	包含層
3	明褐色(7.5YR5/6)弱粘質土	地山
4	暗褐色(10YR3/4)粘質土(ＳＤ３)	３号墳周溝埋土
5	明褐色(7.5YR5/8)岩　黒色(7.5YR2/1)岩混　褐色(10YR4/6)シルト混じる	地山
6	褐色(10YR4/6)シルトに灰白色(7.5Y8/1)シルト粒多く混じる	地山
7	褐色(7.5YR4/4)粘質土	３号墳周溝埋土
8	明黄褐色(10YR6/8)シルト	地山
9	暗褐色(10YR3/4)シルト	２号墳周溝埋土
10	明褐色(7.5YR5/6)粘質土に浅黄色(5Y7/3)シルトブロック(径1.0～3.0cm程) 下へ行く程密集度高くなり含む	地山
11	にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質土に淡黄色(2.5Y8/4)シルトブロック・明赤褐色(5YR5/6)粘質土ブロック など(いずれも径1.0～2.0cm)を含む	客土
12	褐色(7.5YR4/4)弱粘質土	客土
13	褐色(10YR4/6)粘質土	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
14	橙色(7.5YR6/6)粘質土	客土
15	褐色(7.5YR4/6)シルト	遺構埋土？
16	明赤褐色(5YR5/6)シルト　炭化物わずかに含む	遺構埋土・ＳＫ18
17	明褐色(7.5YR5/6)シルトに明黄褐色(2.5Y7/6)シルト粒(径0.5cm程)が多く含む	遺構埋土地山?
18	黄色(2.5Y7/8)シルト　所々明褐色(7.5YR5/6)シルトが筋状に入る	地山
19	黄褐色(10YR5/6)弱粘質土	２号墳周溝埋土
20	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質　灰白色(7.5Y8/1)シルト粒多く含む	
21	にぶい褐色(7.5YR5/3)粘質土	３号墳周溝埋土
22	暗褐色(7.5YR3/3)粘質土	２号墳周溝埋土
23	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土	２号墳周溝埋土
24	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	２号墳上旧表土
25	明褐色(7.5YR5/6)シルト	崩落土
26	褐色(7.5YR4/4)粘質土　にぶい褐色(7.5YR4/4)粘質ブロック多く含むに 灰白色(10YR8/2)シルトブロック(径2.0cm前後)多く含む	盛土
27	褐色(7.5YR4/6)粘質土　灰白色(10YR8/2)シルトブロック(径2.0cm前後わずか径0.5cm多く)含む	盛土
28	褐色(7.5YR4/4)粘質土　にぶい褐色(7.5YR4/4)粘質ブロック含む	盛土
29	明褐色(7.5YR5/6)粘質土に灰白色(10YR8/2)シルトブロック(径1.0cm)含む	盛土
30	明褐色(7.5YR5/6)粘質土に灰白色(10YR8/2)、明黄褐色(2.5Y6/6)シルトブロック(径1.0～2.0cm)多く 含む	盛土
31	にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質土に褐色(10YR4/4)粘質ブロック多く含む	盛土
32	明褐色(7.5YR4/6)粘質土　褐色(10YR4/3)シルトブロック(径1.0cm)・明褐色(7.5YR5/6)シルトブロック (径1.0cm弱)多く含む	盛土
33	黄褐色(10YR5/8)シルト	ＳＫ５埋土
34	明褐色(7.5YR5/6)粘質土	盛土
35	褐色(7.5YR4/4)粘質土に灰白色(10YR8/2)シルトブロック(径1.0cm以内)わずかに含む	盛土
36	にぶい褐色(7.5YR4/4)シルト	盛土
37	褐色(7.5YR4/6)粘質土ににぶい黄褐色(10YR5/4)シルトが層状に入る	盛土
38	明褐色(7.5YR5/6)粘質土	盛土
39	明褐色(7.5YR5/6)粘質土に灰白色(10YR8/2)・明黄褐色(2.5Y6/6)シルトブロック(径1.0～2.0cm)多く 含む	盛土
40	褐色(7.5YR4/6)粘質土	盛土
41	明褐色(7.5YR5/6)粘質土に灰白色(10YR8/2)・明黄褐色(2.5Y6/6)シルトブロック(径1.0cm以下細か い)多く含む	盛土
42	黄褐色(10YR5/8)極細砂	崩落土
43	黄褐色(10YR5/8)砂質土　径0.1cm程の砂粒わずかに含む	樹木によるカクラン
44	褐色(10YR4/6)粘質土　木の根？	木の根？　盛土
45	オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土	盛土
46	黄褐色(2.5Y5/3)粘質土	盛土
47	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土	盛土
48	黄褐色(7.5YR5/6)粘質土	盛土
49	暗褐色(7.5YR3/4)粘質土	盛土
50	褐色(7.5YR4/6)粘質土	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
51	暗褐色(10YR3/4)シルト	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
52	褐色(7.5YR4/4)粘質土	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
53	明褐色(7.5YR5/6)粘質土	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
54	褐色(10YR4/6)粘質土	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
55	褐色(7.5YR4/3)粘質土	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
56	明褐色(7.5YR5/6)シルト	８号墳周溝埋土(ＳＤ４)
57	明赤褐色(5YR5/6)粘質土	地山
58	橙色(7.5YR6/6)粘質土	
59	明褐色(7.5YR5/6)粘質土	
60	褐色(7.5YR4/4)粘質土　径1.0cm未満の焼土　径2.0cm以下の炭化物多く含む	ＳＫ15
61	明褐色(7.5YR5/6)粘質土　径1.0cm以下の炭化物含む	ＳＫ15
62	暗褐色(10YR3/4)粘質土に褐色(7.5YR4/6)粘質土が径1.0～2.0cm程のブロック状に入る	８号墳周溝埋土(ＳＤ８)



第21図　２号墳遺構図(1:100)、**ＳＫ５遺物出土状況図**(1:20)、**ＳＫ６土層断面図**(1:40)



第22図　２号墳周溝遺物出土状況図１（1:20）



第23図　２号墳周溝遺物出土状況図２（1:20）

墳丘上に立ち並べられ、墳丘からの転落の状況を示していると考えられる（第22・23図）。後で詳述するが、２号墳出土の円筒埴輪は胎土及び色調・調整技法で大きく４種類（Ⅰ～Ⅳ類）に分類できる。この分類に着目して出土状況を見ると、Ⅰ～Ⅲ類は西周溝・北周溝で出土するがⅣ類は破片も見られない。反対に東周溝はⅣ類が主体となり、Ⅱ・Ⅲ類がわずかにみられる程度である。周溝出土の埴輪が、墳丘から転落した状態を示しているとすれば、Ⅳ類の埴輪は墳丘の東面に立てられ、それ以外には立てられていないなど、埴輪を樹立する位置が分けられていた可能性が考えられる。その他に、Ｊ15区（周溝北西コーナー）において家形と考えられる形象埴輪片が出土している。また、墳頂の樹木による撹乱部より家形埴輪片（64）が出土しており、本来は墳丘上に家形埴輪が置かれていたと考えられる。

須恵器杯身（66）・蓋（67）は北西コーナー付近でともに倒立状態で出土している（第22図）。いずれも底面直上からの出土であるが、これが原位置を保っているとは断定できず、墳丘上に置かれたものが古墳築造後間もなく転落した状況を示しているともいえる。蓋は体部下半一部が欠損しており、その欠損部の一部は人為的に外側から打ち欠きが行われたようである。

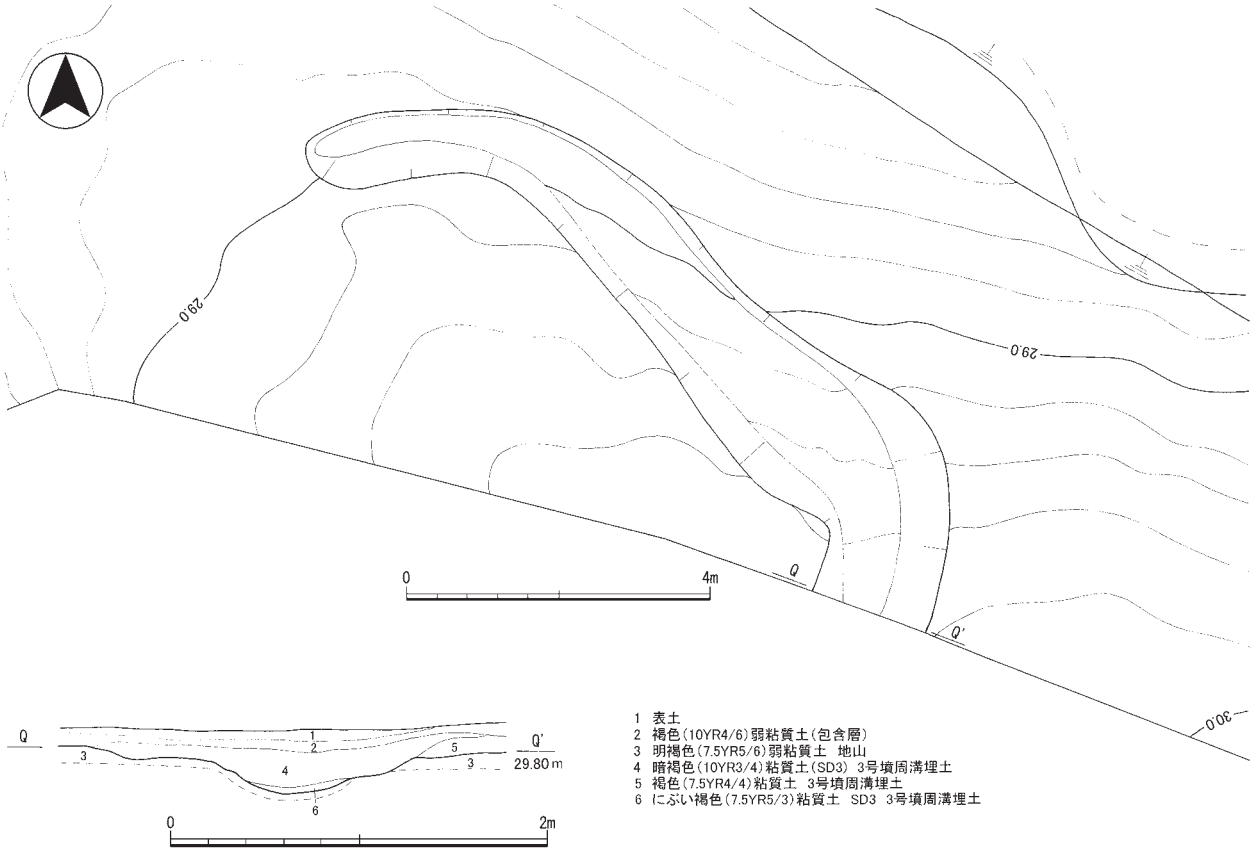
周溝北東コーナー付近からは出土遺物はほとんどないが、その南でこの辺りでは見られない川原石が出土し、一面が磨耗していることから砥石（69）と判断した。

周溝出土須恵器はその特徴からＴＫ208型式併行期のものであり、前述のように須恵器は古墳築造とさほど時期差がないと考えられることから、２号墳は５世紀後半に造営されたのであろう。

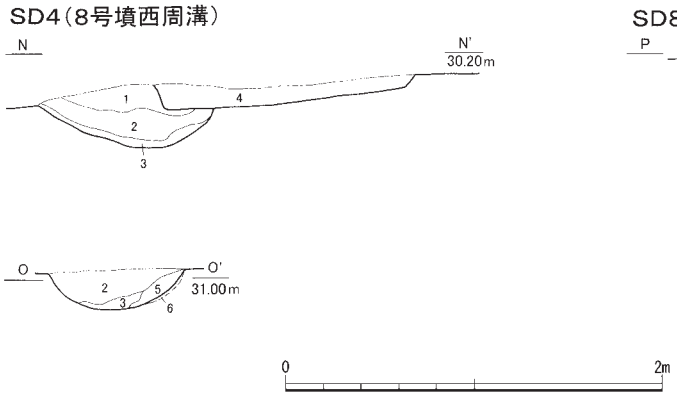
その他、墳丘上旧表土内から土師器高杯片（71）が出土した。これは、廻間Ⅱ式併行期②のものであり、２号墳が築造される以前に台状墓がつくられていた可能性が考えられる③。

（３）３号墳

調査前、Ｃ地区に３号墳があるものと考えられていた。しかし、当初１号墳と考えていた高まりは自然地形であると判断、調査で確定した１号墳の北側、Ｄ地区に方墳が検出され、遺跡地図の位置と合うことからこれを３号墳とした。



第24図　３号墳遺構図(1:100)**、土層断面図**(1:40)



SD8　1 褐色（7.5YR4/4）シルト　カクラン
　　2 暗褐色（7.5YR3/4）シルト
　　3 暗褐色（10YR3/4）粘質土に褐色（7.5YR4/6）粘質土が径1.0～2.0cm程のブロック状に入る
　　4 褐色（7.5YR4/6）シルト
　　5 褐色（7.5YR4/4）粘質土
　　6 黄褐色（10YR5/6～5/8）粘質土
　　7 明褐色（7.5YR5/6）粘質土に淡黄色（2.5Y8/3）シルトブロック（径1.0cm未満）を多く含む　地山

SD4　1 にぶい褐色（7.5YR5/4）粘質土
　　2 褐色（7.5YR4/3）粘質土
　　3 褐色（10YR4/6）粘質土
　　4 褐色（10YR4/4）シルト　カクラン
　　5 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
　　6 明褐色（7.5YR5/6）粘質土　地山

第25図　８号墳遺構図（1：100）**、ＳＤ４・８土層断面図**（1：40）

一辺10.7m・墳高30cm以上の方墳で、古墳のほぼ南半部は工事用道路により掘削されている。出土遺物はなく、築造時期は不明であるが、方墳という墳形を取ることから２・８号墳に近しい時期の古墳と考えられる。

①　墳丘

墳丘部は残存状況が悪く、地山が露出しており盛土は確認できなかった。丘陵端、傾斜が開始する地点に立地することから、盛土は流出してしまったのであろう。

②　周溝

周溝北辺は完存し、東辺の一部と西辺一部が残存する。西周溝は、28.8mの等高線が地形に沿って舌状に張り出すのと異なり、29.0mの等高線がほぼ直線を呈することから、この29.0mのライン付近に周溝があったものと思われる。

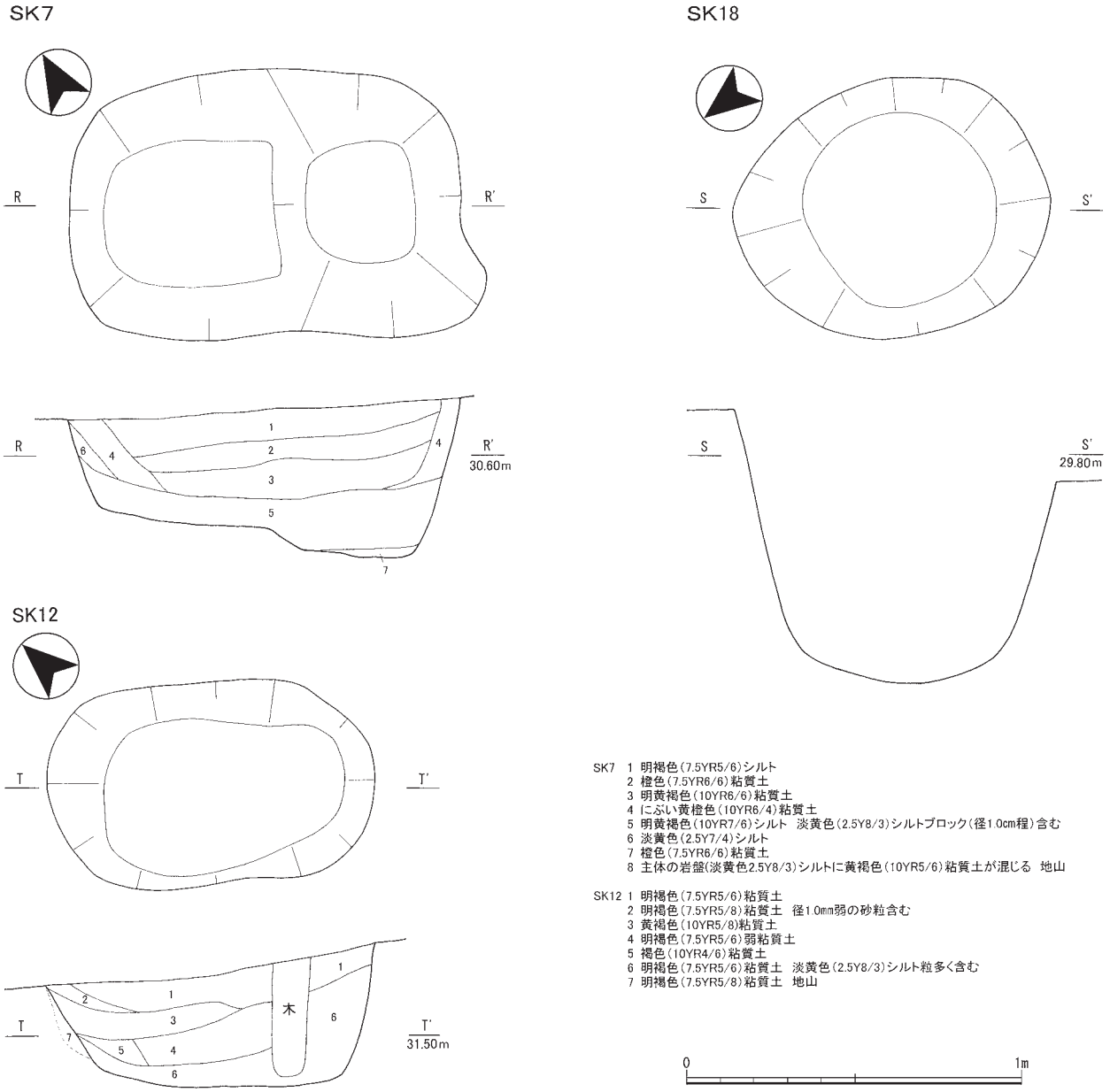
周溝規模は、北周溝中央で幅1.35m・深さ8.0cm、東周溝調査区壁際で幅1.6m・深さ22.0cmである。

③　主体部

墳丘のところでも見たように、墳丘部はすでに地山が露出しており、主体部の痕跡は調査区内では確認できなかった。

④　出土遺物

周溝内や周辺包含層からの出土遺物はない。



SK7　1 明褐色(7.5YR5/6)シルト
2 橙色(7.5YR6/6)粘質土
3 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
4 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
5 明黄褐色(10YR7/6)シルト　淡黄色(2.5Y8/3)シルトブロック(径1.0cm程)含む
6 淡黄色(2.5Y7/4)シルト
7 橙色(7.5YR6/6)粘質土
8 主体の岩盤(淡黄色2.5Y8/3)シルトに黄褐色(10YR5/6)粘質土が混じる　地山

SK12　1 明褐色(7.5YR5/6)粘質土
2 明褐色(7.5YR5/8)粘質土　径1.0mm弱の砂粒含む
3 黄褐色(10YR5/8)粘質土
4 明褐色(7.5YR5/6)弱粘質土
5 褐色(10YR4/6)粘質土
6 明褐色(7.5YR5/6)粘質土　淡黄色(2.5Y8/3)シルト粒多く含む
7 明褐色(7.5YR5/8)粘質土　地山

0　1m

第26図　陥し穴状土坑(ＳＫ７･12･18)遺構図、土層断面図(1:20)

第３表　遺構一覧表

遺構番号	調査区	グリッド	性格	規模			埋土の特徴	時代	主な出土遺物	備考(切合い、特徴等)
				長さ・長径(m)	幅・短径(m)	深さ(cm)				
1		-	欠番							
ＳＤ２	D	C12・D12	溝	3.1(検出時)	1.0(検出時)	12.0	暗褐色粘質土(10YR3/4)	古墳時代中期か	なし	３号墳周溝、掘削後に結合
ＳＤ３	D	D12・D13・E12・E13・F13	溝	8.4(検出時)	1.8(検出時)	27.0	暗褐色粘質土(10YR3/4)	古墳時代中期か	なし	
ＳＤ４	D	M12・M13・N12・N13・013・014	溝	10.8	0.7	36.0	暗褐色粘質土(7.5YR4/3)	古墳時代中期	須恵器瑳・土師器高杯・円筒埴輪	８号墳周溝
ＳＫ５	D	L15・M15	土坑	2.6	0.45	8.0	黄褐色シルト(10YR5/8)	古墳時代中期	鉄剣・家形埴輪片	２号墳埋納土坑
ＳＫ６	D	M13	土坑	0.55	0.5	27.0	褐色粘質土(7.5YR4/4)	古墳時代中期？	なし	２号墳北東隅周溝内
ＳＫ７	D	011	土坑	1.2	0.78	45.0	明褐色シルト(7.5YR5/6)	縄文時代？	なし	
ＳＤ８	D	011・P11	溝	4.2	1.1	24.0	暗褐色シルト(7.5YR4/3)	古墳時代中期	なし	８号墳周溝
ＳＫ９	D	N12	土坑	50	45	17.0	明褐色粘質土(7.5YR5/6)白色ブロック混	不明	なし	
10		-	欠番							
11		-	欠番							
ＳＫ12	D	L14	土坑	1.1	0.6	42.0	明褐色粘質土(7.5YR5/6)	縄文時代？	なし	
ＳＫ13	D	Q7	土坑	0.85	0.6	22.0	褐色粘質土(7.5YR4/4)	不明	なし	
ＳＫ14	D	R7	土坑	0.6	0.58	10.0	褐色粘質土(7.5YR4/4)	不明	焼粘土塊	焼土粒・炭化粒多く含む
ＳＫ15	D	R7・S7	土坑	1.0	0.8以上	28.0	褐色粘質土(7.5YR4/4)	不明	焼粘土塊	焼土粒・炭化粒多く含む
ＳＫ16	D	S5・S6	土坑	1.5	0.8	26.0	褐色粘質土(7.5YR4/4)	不明	なし	
ＳＫ17	D	S4	土坑	1.02	0.75	26.0	明褐色粘質土(7.5YR5/6)	不明	なし	
ＳＫ18	D	T5	土坑	0.9	0.78	78.0	明赤褐色粘質土(5YR5/6)	縄文時代？	なし	

（４）８号墳

一辺11.3m・墳高80.0cmの方墳である。２号墳の東に周溝を接するように位置する。古墳の南東部分が工事用道路により掘削されている。

①　墳丘

墳丘は地山となる奄芸層群由来の白色岩盤が一部露出しており、削平されていると思われる。周溝から円筒埴輪片が数点出土しているが、これは隣接する２号墳の埴輪が混入したもので、８号墳は埴輪を持たなかった可能性が高い。埋葬主体部は検出できなかった。

②　周溝

周溝は、調査区内では北辺以外は掘削されている。北周溝は地形が傾斜していることから、もともと掘削されなかったと思われる。調査区外の拡張部において周溝南西コーナーを検出し、南北方向の古墳規模も東西方向とほぼ同じであると思われる。

③　主体部

墳丘のところでもみたように、墳丘部はすでに地山が露出しており、主体部の痕跡は調査区内では確認できなかった。

④　遺物の出土状況

出土遺物は、西周溝、中でも北に寄った部分で須恵器瑳（73）が出土した。上部の包含層掘削時に一部破片が出土し、周溝掘削時にも破片が点在して埋土中から出土していることから、８号墳の築造時期の下限を示すといえる。

その他、土師器高杯脚部片や円筒埴輪片（74・75）が出土している。前述のように、この円筒埴輪片は２号墳のものと類似することから、２号墳の埴輪片が混入したものと判断した。築造時期は、ＴＫ23型式併行期以前、２号墳と同じ頃もしくはその後と思われる。

（５）土坑

11基の土坑を確認した。ピットも少ないことからある程度の大きさの小穴を全て土坑として番号を与えている。２号墳に伴うＳＫ５・６以外の土坑を見ていくが、詳細は第３表を参照いただきたい。

ＳＫ７・12・18　平面形はＳＫ７・12が長方形、ＳＫ18が円形と異なるが、いずれも検出面よりの深さが40cm以上と比較的深い。底部の形状は、ＳＫ７は片側が一段下がる形状を呈するが、他は平坦である。底部に杭状の痕跡は見られなかった。出土遺物はなく、時期は不明であるが、ＳＫ12が２号墳の墳丘盛土下、旧表土面で検出できたことから、５世紀後半と同じかそれより古い時代のものであるといえ、他例から、縄文時代の陥し穴状遺構と考えられる。

ＳＫ14・15　いずれも埋土に炭化物・焼土を多く含

むという特徴を持つ。特にＳＫ15からは直径２～５㎝程の焼粘土塊が複数出土しており、これはＳＫ15と同じＲ７区の包含層からも焼粘土塊が多く出土していて、これもＳＫ15に伴うものであろう。炭化物・焼土を含む土坑（ピット）はＣ地区でも確認されており、Ｃ地区の焼土を伴うピットからは古墳時代前期以前と思われる土師器細片が出土していることから、この時期にも何らかの人の活動が見られたのであろう。

（６）出土遺物

出土遺物の大半は２号墳からのものである。種類別に詳述する。

①　埴輪

多くが２号墳周溝から出土した。円筒埴輪が主体であり、その中には朝顔形埴輪も若干含まれる。また、形象埴輪として家形埴輪片があり、周溝北西部付近に集中して出土している。しかし、全体の形状がうかがえるほどの出土量ではない。以下、大半を占める円筒埴輪について検討を加える。各部名称は凡例を参照いただきたい。

１）円筒埴輪

ａ　形態と法量

全容が知れるものは２個体（24・27）のみであるが、総じて円筒埴輪の基本的形態は、体部を３段に区分けし、２条の突帯で区切る。１点、スカシを上下別段に一つずつ持つ破片（38）があり、これは４段となる個体の可能性があるが、多くは第２段に対向する方向に円形透孔を開ける。

形状は、第１突帯と第２突帯の直径がほぼ同じとなり、口縁部がやや開き、底部がややすぼむ寸胴のもの（24・27・86など）と、底部から口縁部へと緩やかに開く形状のもの（23・32など）の２種類に大きく分けられる。

法量は、全容が知れる24・27から器高は37.0（27）～38.8㎝（24）の中に収まると思われるが、46のように第３段の幅が広いものがあり、やや大型の個体もあるだろうか。底部・口縁部は歪みがあり復元した直径には幅があるが、底径は12.8～20.0㎝、口径は23.9～28.4㎝となる。

各段の幅は、突帯の頂部中央を計測点とし、器壁に沿った角度で計測した[④]。第１段は、10.8～11.7㎝と12.9㎝前後に大きく分かれるが、前者の方が多い。後述する調整技法で見ると第３段にタテハケを施すものが前者で、ヨコハケの個体が後者となるようである。第２段は10.5㎝以下、11.7～12.3㎝、12.8㎝以上と大きく３つに分類できる。第３段は、11.7㎝、13.4～14.3㎝、14.8㎝以上に分類できる。19は、第２段・３段と同じ11.7㎝幅である。また、23～24・27・32は全ての各段幅が判明する訳ではないが、比べてみると、第１段は11.2～11.7㎝、第２段は12.0～13.0㎝、第３段は13.4～14.3㎝の範囲に収まり、突帯の設定位置に何らかの規格が認められる。

ｂ　成形

底部は3.0～6.0㎝程の粘土帯で作るが、内側から粘土を貼り付け補強した個体も見られる。淡輪技法は見られない。全周する個体が少なく底部の粘土接合痕や接合方法が判断できなかった。

その上に幅1.5～3.0㎝程の粘土紐を輪積みし、内傾接合していくが、１点だけ外傾接合の個体（58）が見られる。粘土紐の接合痕は、内外面とも丁寧に消されているが、86のように特に内側に顕著に残る個体もある。ちなみに、86は底部の厚みが2.0㎝程と分厚く、その自重により外面に横方向のヒビが入る。その他、底部に植物圧痕や工具状圧痕を残すものがある。

ｃ　調整

外面は、特に第２段・第３段は第１次調整にタテハケあるいは左上がりのナナメハケを施すが、第２次調整にヨコハケを施す個体は少数で、多くは省いている。タテハケは、下から上へと施す。27では、突帯下に、突帯貼付ヨコナデで消されなかったタテハケが確認できることから、途中で途切れることもあるかもしれないが底部から口縁部へと一度にタテハケを施したものと思われる。ヨコハケは残存状況がわずかなためはっきりとは言えないが、一定の間隔で静止させるＢ種ヨコハケと、静止状況の確認できないヨコハケを施す個体が見られる。これは回転を利用したＣ種ヨコハケなのかは明確ではない。ハケ目の単位は５～６本／㎝程度であるが、その間隔・パターンの検討はしておらず、原体の検討はできていない[⑤]。第１段は、調整が確認できるものではタ

テハケを施す個体が大半であるが、一部縦方向の板ナデを施すもの、オサエ・ナデ調整のものがある。

口縁部はヨコナデにより強く外側へ屈曲させるもの（ａ）、外側へ屈曲した口縁の内側に広い面を持つもの（ｂ）、ヨコナデを施すがやや内彎させて上方へと立ち上がらせるもの（ｃ）、ヨコナデを施すが、胴部からそのまま斜め方向に立ち上がり、端部は水平に面を作るもの（ｄ）、ｄに類似するが、端部の面は外側に作るもの（ｅ）、端部のヨコナデを外側に強くつまみ出すように施すもの（ｆ）、端部の面が水平方向に作られるが、中央が窪みややM字を呈するもの（ｇ）に分けられる。詳しくは第28図をご覧いただきたい。

内面は、オサエ等の後、縦方向のユビナデを施すものがほとんどであるが、一部口縁部付近にヨコハケを施す。突帯と対応する部分には、ユビオサエが顕著なものが多い。

底部は、底部調整を行うものが主体となる。外面は横方向のナデで、内面はそのナデを支えるために押さえた細かな指圧痕が見られるもの、内面を板状工具で横方向ナデもしくはケズリを施した結果幅２～３㎝の面を持つもの、内面に縦方向のユビオサエを施し面を作るもの、全く調整を行わないものに分けられる。外面に工具による押圧技法は見られない。

ｄ　突帯

突帯は、上辺が尖りながら斜め上方へ向き、下辺がなだらかとなる三角形に近い形状のものと、高い台形状を呈するもの、断面M字状を呈するが低い台形のものに分けられる。突帯の設定は、47に沈線が見られることから、この１個体だけであるが規格性をもって突帯貼付場所を設定し、突帯を貼り付けたものと思われる。

ｅ　透孔・ヘラ記号

透孔は円形で、23の例では第２段胴部の対向する方向に開けられている。また、38は細片であるが、上下二段同じ位置に円形透孔が開く。

確認できるヘラ記号は１種類である。すなわち、８本の線を格子状に組んだ記号で、必ず第３段に施す。第２段の円形透孔との位置関係がわかるものでは、ヘラ記号の位置は透孔とほぼ上下に並ぶように施すか、もしくはわずかに透孔から口縁部側から見て反時計回りにヘラ記号をずらせる個体があり、少ない個体数ではあるが後者の方が多い。27はヘラ記号が確認できるが、摩耗が著しい個体のためこれについても格子状ヘラ記号と考えられる。

ｆ　胎土

素地は比較的密であり、肉眼観察でみられる砂粒は石英・長石を中心に一部チャートが含まれる個体もある。雲母が確認できる個体も僅かにはある（80）。

ｇ　焼成・色調

須恵質あるいは硬質の埴輪はなく、全て土師質である。また、黒斑を有するものは56のみで、主体は無黒斑である。その他、焼成・色調には以下のような特徴がある。

Ⅰ：焼成良好で、淡い褐色（肌色）を呈すもの。外面にタテハケを施すものが大半で、ヘラ記号を持つ。

Ⅱ：全体的に軟質で、赤褐色を呈すもの。外面にタテハケを施し、ヘラ記号を持つ。

Ⅲ：比較的焼成は良好で、暗褐色を呈するもの。外面にタテハケを施しヘラ記号を持つ。

Ⅳ：やや軟質で白色を呈する。第２・３段に２次調整のヨコハケを施しヘラ記号は見られない。

以上、大まかに４種類に分けられる。

ｈ　円筒埴輪の特徴分類

円筒埴輪について、見てきた特徴に基づいて第28図にまとめる[6]。個体数が少ないため大変雑駁な表となってしまったが、外面の２次調整を省略しタテハケのみの個体が大半で、ヘラ記号もこのグループに限られること、口縁部形態もこの外面調整によって分かれることが大まかにいえる。また、底部調整を施す個体が多く、これは外面調整には左右されない。しかし、この表には表していないが、前述の焼成・色調を見てみると、Ⅳ類のグループは底部調整を行わないもの、もしくは内面にのみ行うものに限られる。Ⅳ類のものは２次調整のヨコハケを施すものが大半を占めるが、底部調整は製作工程に含まれなかったのだろうか。

２）形象埴輪

いずれも家形埴輪の破片である。59は片面に剥がれた痕跡が、その反対側はユビナデにより調整する。剥がれの痕跡から壁部もしくは床部の破片の可能性

が考えられる。60は屋根部分であろうか。61は片面が面を持ち屈曲している。壁部コーナーの破片であろうか。62は小片であるが、図の下辺が一部孔が開いた部分のようであり、家形埴輪の壁部か台部の刳り込み部分と考えられる。63・64は裾回り突帯と思われる。

②　土器類

２号墳から須恵器杯身・瑳が出土している。瑳（67）は体部が算盤玉状に張る形状を呈し、頸部から口縁部はずんぐりとして短い。表面に文様はなく、津市平田35号墳出土例と類似し⑦、ＴＫ208型式併行期のものと思われる。８号墳出土の瑳（73）は２号墳例よりはやや細身を帯び、口縁部と体部最大部に波状文が施される。その形状から久居４号窯跡出土例と類似し⑧、ＴＫ23型式併行期のものである。

須恵器以外には、２号墳旧表土から土師器高杯（71）が出土している。また、２号墳周溝内では土師器高杯もしくは小型壺細片が、８号墳では土師器甕もしくは壺体部細片が見られるが、図化できるものはない。

③　その他

ＳＫ５出土の鉄剣（72）は、柄部が欠損する他は完存している。全体を木質が覆い、鞘に入れられていたと思われる。鞘木質部の一部にわずかに繊維状の痕跡が見られ、剣を布状のものでくるんで納めた可能性が考えられる。

その他、２号墳周溝掘削時にＬ13区からサヌカイト製石鏃（70）、Ｋ15区包含層よりチャート製剥片（76）がそれぞれ１点出土した。

【註釈】

① 『三重県津市遺跡地図』津市教育委員会　2011年

② 赤塚次郎「Ｖ考察　１　廻間式土器」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1990年、同「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター　2006年

③ 隣接する鎌切古墳群の調査では、当初２号墳とされた高まりが弥生墳丘墓であることが判明している。西の丘陵でも大ヶ瀬墳丘墓・平栄墳丘墓などがある。

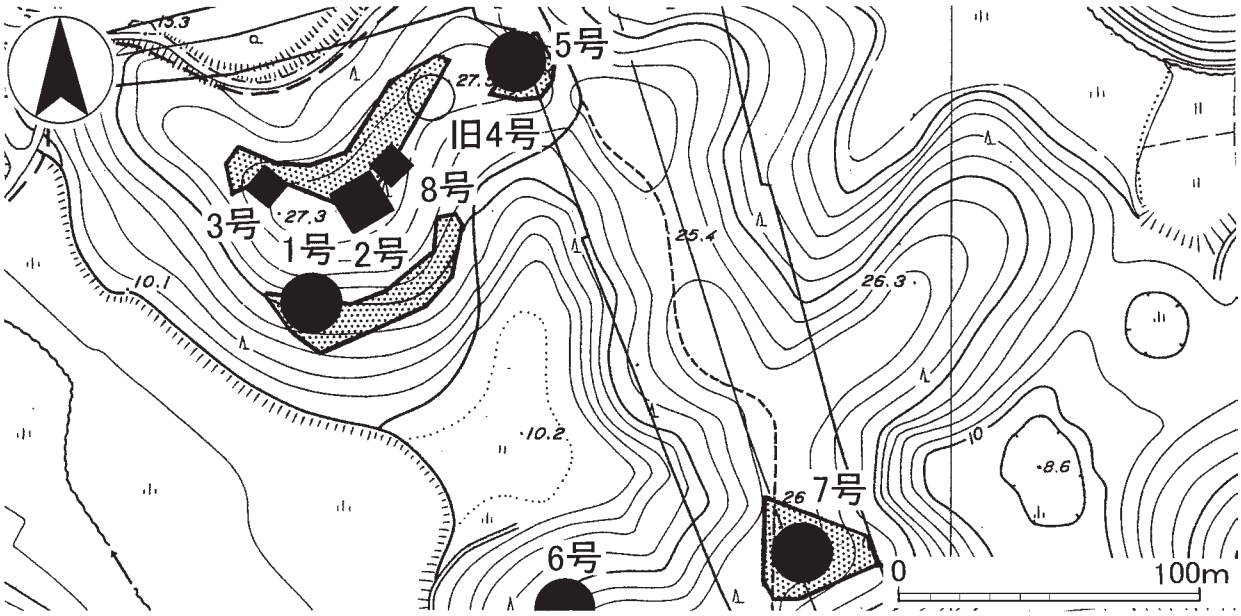
④ これは、突帯間設定技法の存在が考えられるからである。辻川哲朗「円筒埴輪の突帯設定技法の復元－埴輪受容形態検討の基礎作業として－」『埴輪論叢』第１号　埴輪検討会　1999年

⑤ 田中智子「第６節　総持寺古墳群をめぐる埴輪生産と供給」『総持寺遺跡』大阪府教育委員会　2005年

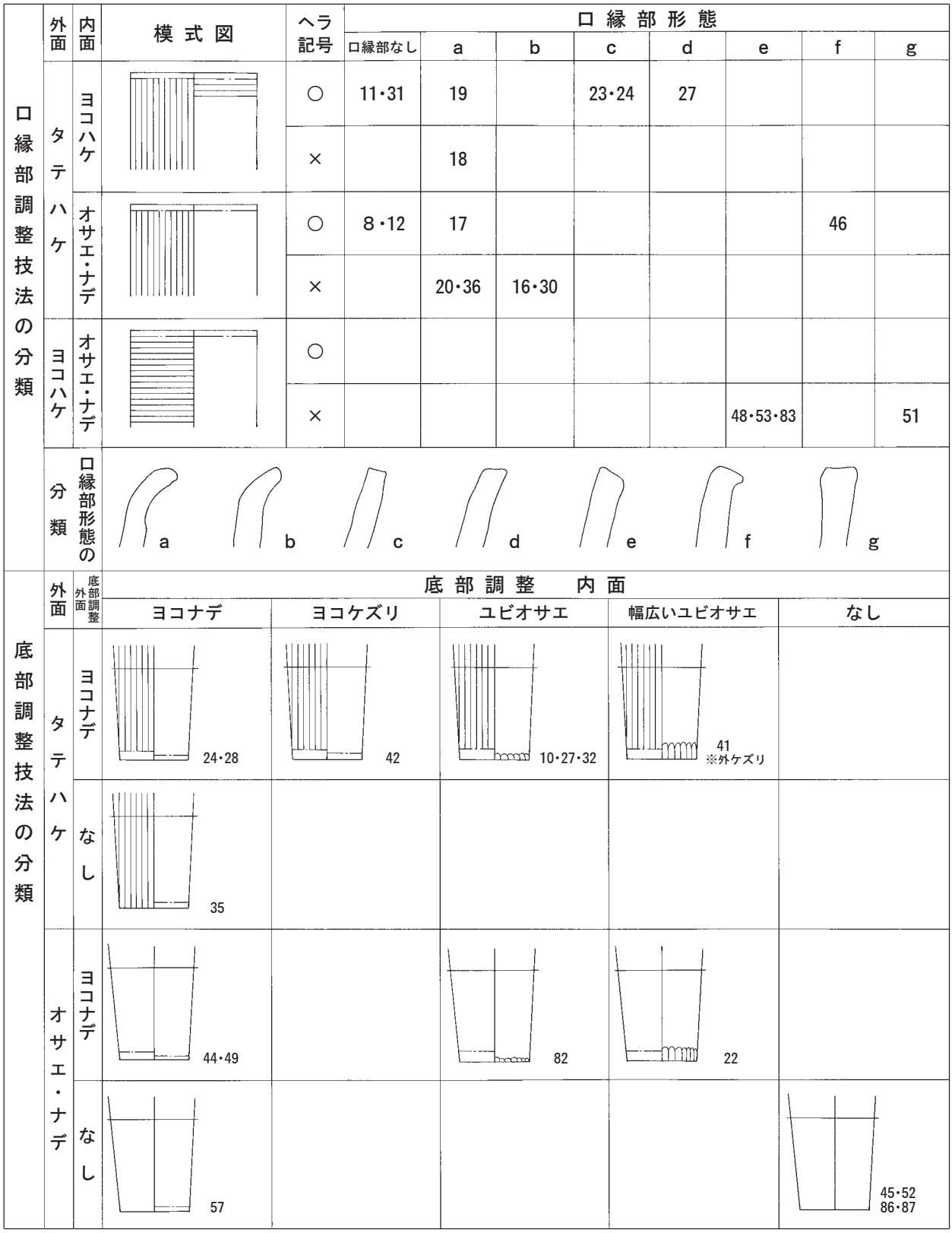
⑥ この分類表作成には、『立命館大学学芸員課程研究報告　第１冊－鳴谷東１号墳第１次調査発掘調査概報－』立命館大学文学部学芸員課程　1987年、藤田充子「１．円筒埴輪・朝顔形埴輪」『藤谷窯跡群発掘調査報告』津市教育委員会　2000年（『津市埋蔵文化財センター年報４　平成10年度』津市埋蔵文化財センター　2000年　に所収）などを参考にした。

⑦ 『三重県安芸郡安濃町　平田古墳群』安濃町遺跡調査会　1987年

⑧ 小玉道明・山澤義貴『久居古窯址群発掘調査報告－２号墳・４号墳－』久居古窯址群発掘調査団　1968年、村木一弥「253 久居窯跡群」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005年



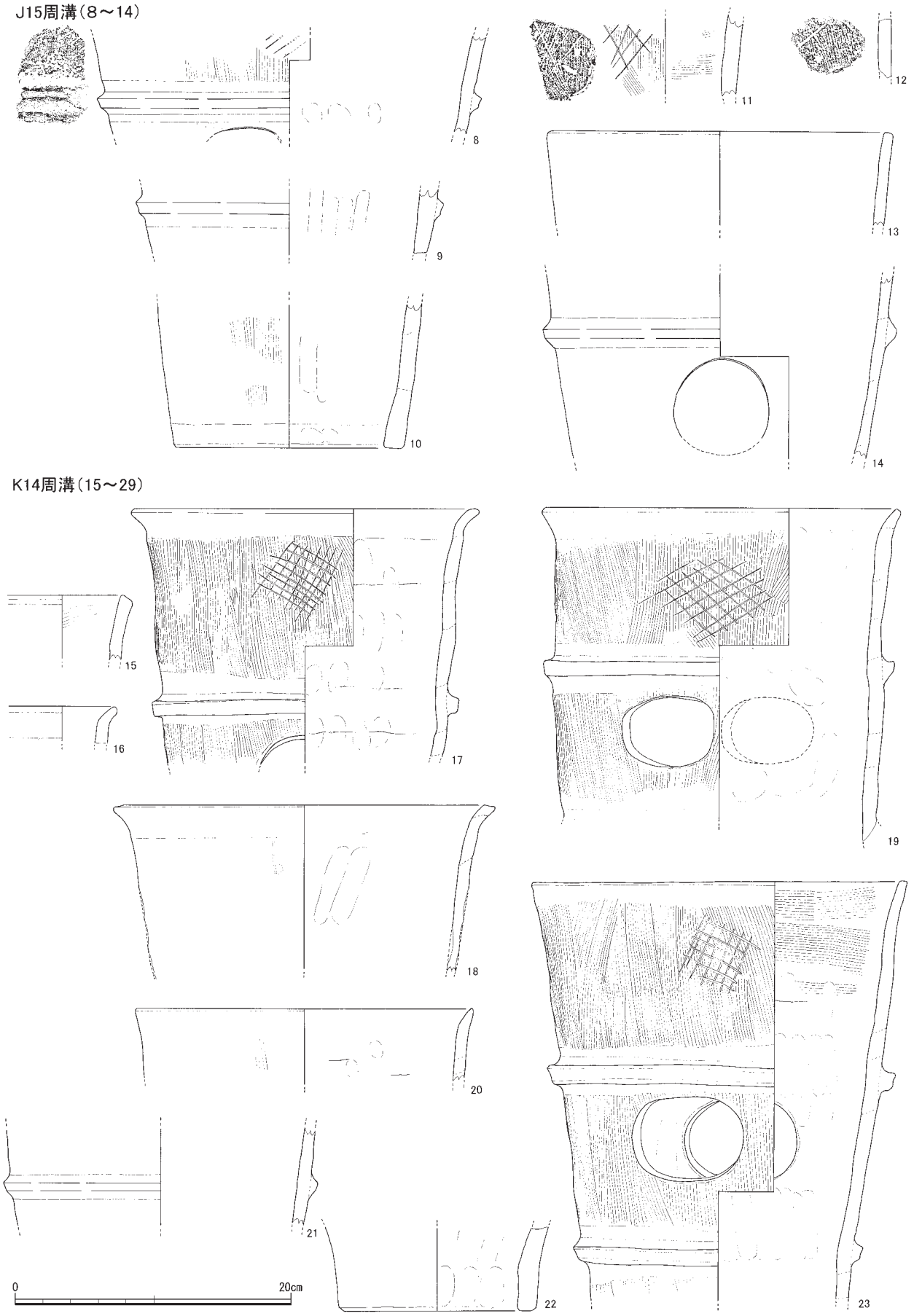
第27図　にんごう古墳群分布図（調査後）（1:2,500）



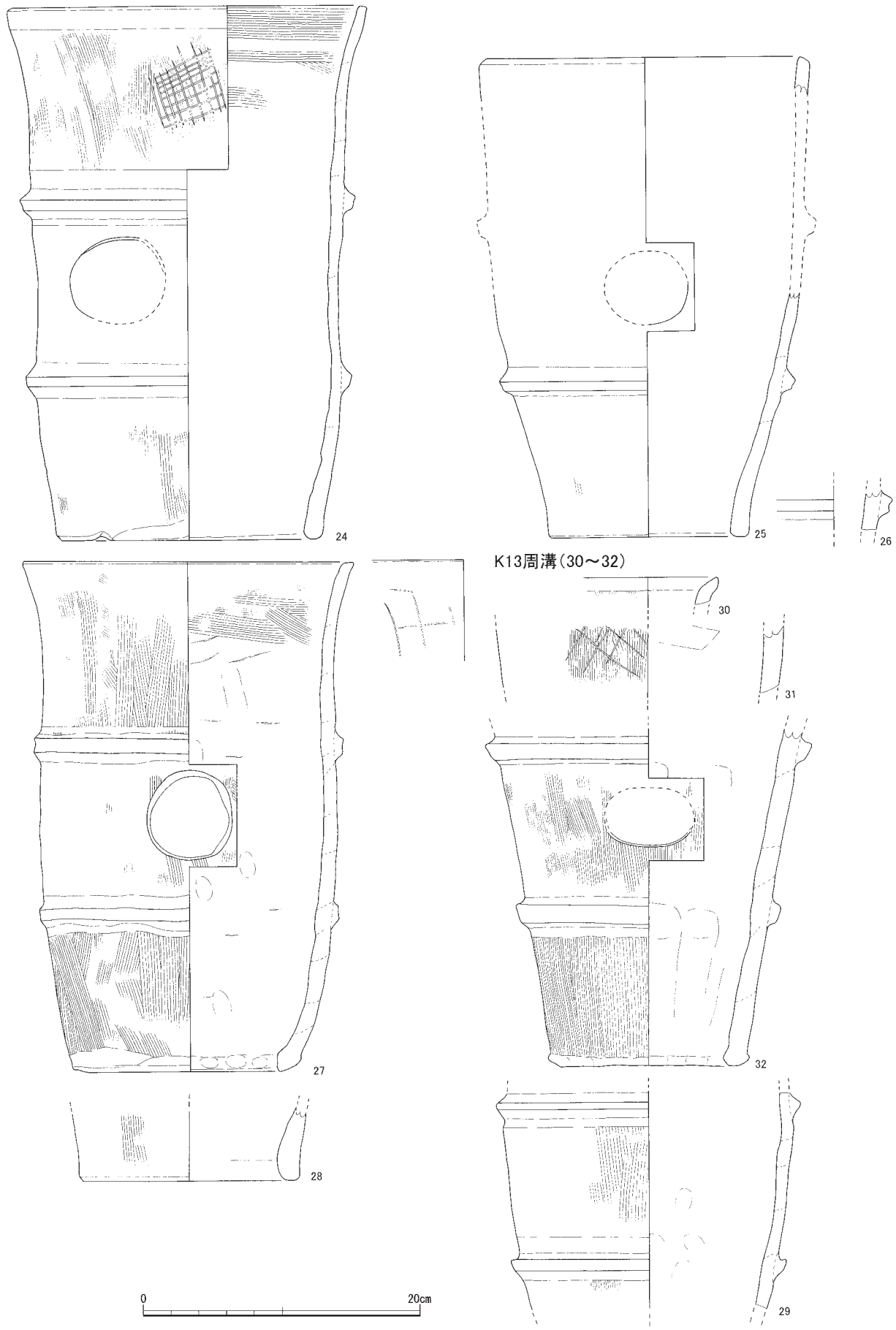
口縁部調整技法の分類	外面	内面	模式図	ヘラ記号	口縁部形態							
					口縁部なし	a	b	c	d	e	f	g
	タテハケ	ヨコハケ		○	11・31	19		23・24	27			
				×		18						
		オサエ・ナデ		○	8・12	17					46	
				×		20・36	16・30					
	ヨコハケ	オサエ・ナデ		○								
				×						48・53・83		51
	分類	口縁部形態の	a b c d e f g									

底部調整技法の分類	外面	底部調整 外面	底部調整 内面				
			ヨコナデ	ヨコケズリ	ユビオサエ	幅広いユビオサエ	なし
	タテハケ	ヨコナデ	24・28	42	10・27・32	41 ※外ケズリ	
		なし	35				
	オサエ・ナデ	ヨコナデ	44・49		82	22	
		なし	57				45・52 86・87

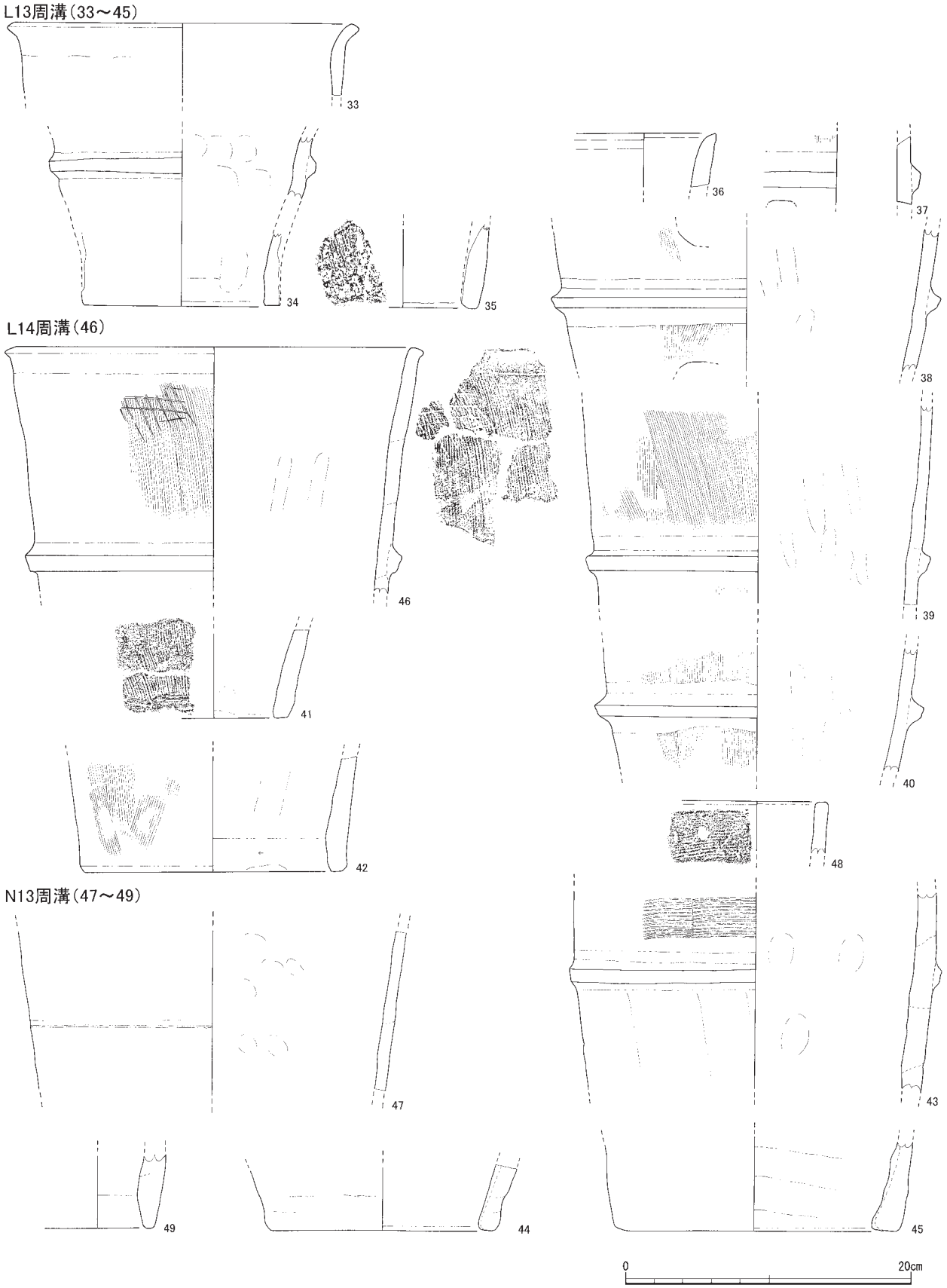
第28図　にんごう古墳群出土埴輪分類図



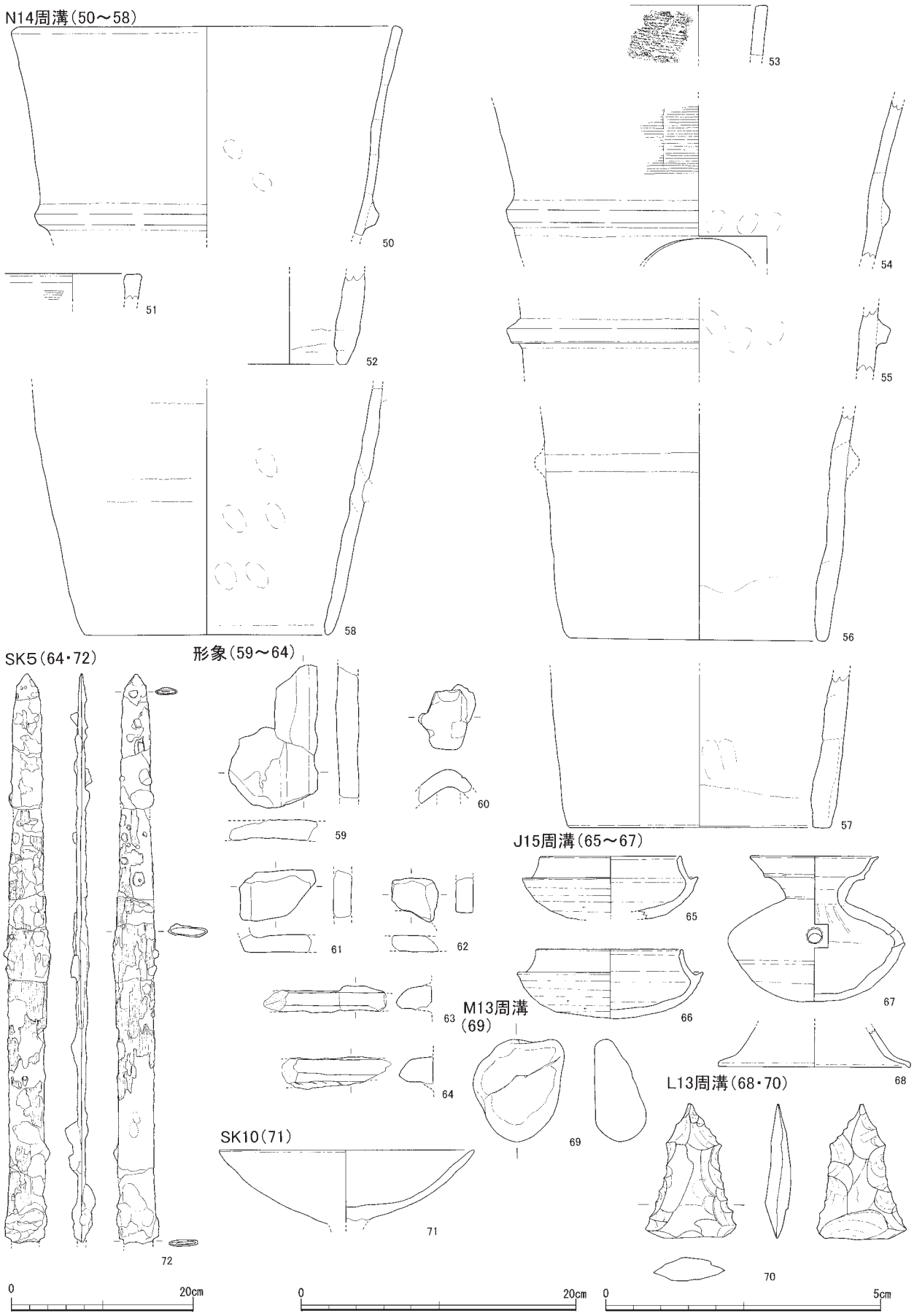
第29図　Ｄ地区２号墳出土遺物実測図１（1:4）



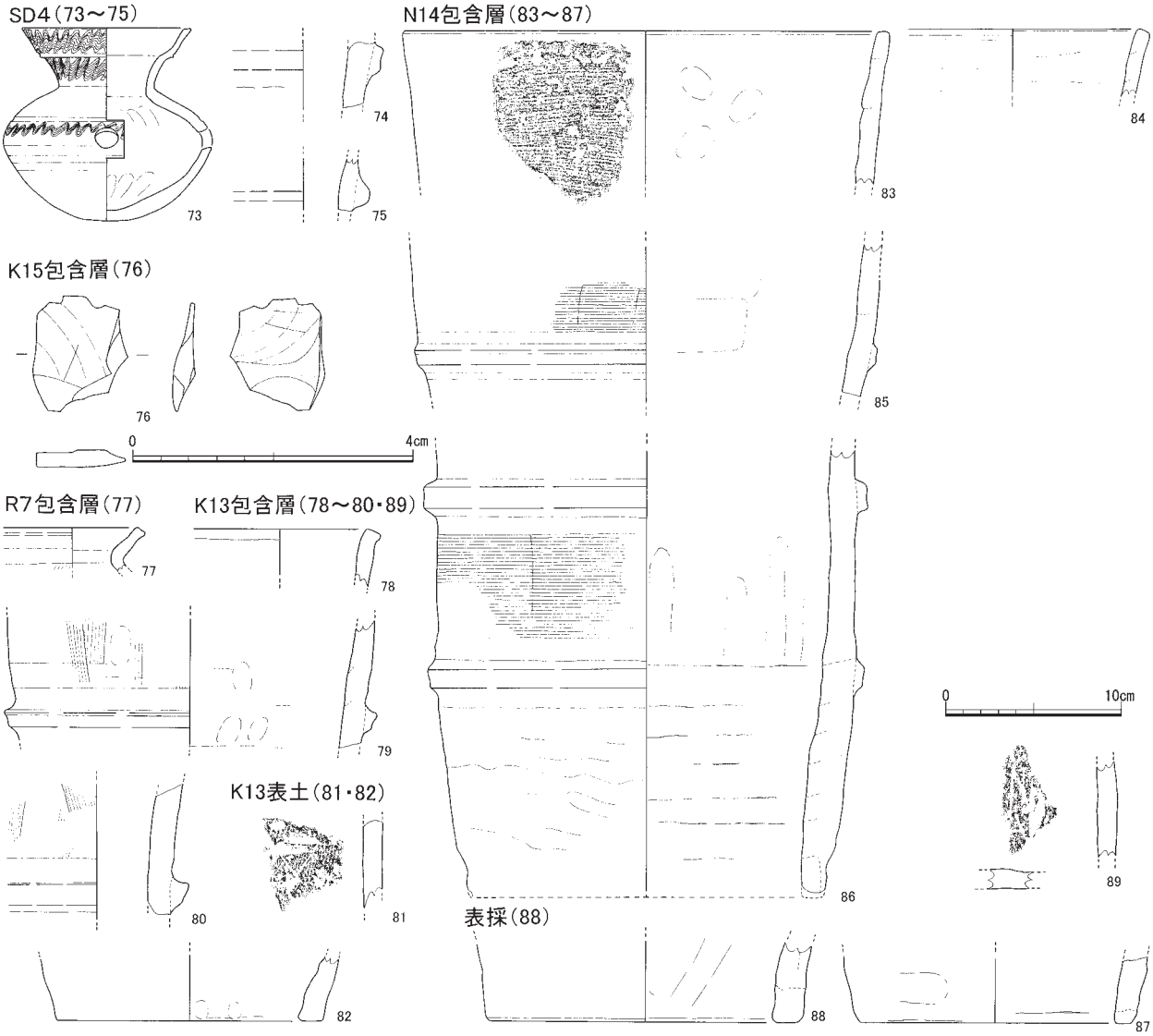
第30図　Ｄ地区２号墳出土遺物実測図２（1:4）



第31図　D地区２号墳出土遺物実測図３(1:4)



第32図　D地区２号墳出土遺物実測図４（50～69・71は1：4、70は1：1、72は1：6）



第33図　Ｄ地区ＳＤ４・包含層他出土遺物実測図（76は1：1、それ以外は1：4）

第４表　遺物観察表１

報告書番号	実測番号	種類	器種	出土地区	号墳遺構	グリッド	法量			技法の特徴	胎土	焼成	色調	胎土分類	残存	特記事項
							口径	底径	器高							
1	00103	須恵器	杯身	A地区	５号墳 周溝					内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰 N5/		小片	
2	00102	須恵器	高杯	A地区	５号墳 周溝		残存径9.4			内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	やや密	良	灰白 5Y7/1		残存径 1/12	内面降灰
3	00101	須恵器	蓋	A地区	包含層		12.0		3.0	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、仕上げ一方向ﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	灰白 5Y7/1		4/5	
4	00202	須恵器	杯蓋	C地区	１号墳 主体部№1		10.7			内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、仕上げ一方向ﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	やや軟	灰白 5Y7/1		5/6	
5	00201	須恵器	杯蓋	C地区	１号墳 主体部№2		11.5		3.4	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、仕上げ一方向ﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	灰白 5Y7/1		9/10	
6	00301	須恵器	杯蓋	C地区	包含層	L26	11.0		3.2	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、仕上げ一方向ﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	灰 7.5Y6/1		口縁部 2/12	
7	00302	銅製品	銅銭 寛永通宝	C地区	包含層	023	直径2.84	厚さ0.12	3.7g							
8	03202	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	J15				内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	Ⅲ	体部片	ﾍﾗ記号 透孔1
9	02308	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	J15				内:ﾅﾃﾞ 外:貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	Ⅲ	ﾀｶﾞ部 2/12	
10	02602	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	J15		16.4		内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	Ⅲ	底部 2/12	
11	02101	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	J15				内:ﾊｹ 外:ﾊｹ	やや密	良	橙 7.5YR6/6		体部片	ﾍﾗ記号
12	02701	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	J15				内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	やや密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	Ⅲ	小片	ﾍﾗ記号
13	03101	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	J15	25.0			調整不明	粗	良	浅黄橙 7.5YR8/6	Ⅲ	口縁部 1/12	
14	02501	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	J15				調整不明	粗	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅲ	体部片	透孔1
15	02302	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№5	K14				口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、調整不明	やや粗	良	橙 7.5YR6/6	Ⅰ	口縁部 小片	
16	02304	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№5	K14				内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	やや粗	良	明黄褐 10YR6/6	Ⅰ	口縁部 小片	
17	01101	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№2	K14	25.2			内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	橙 5YR7/6	Ⅰ	口縁部 6/12	ﾍﾗ記号 透孔1
18	01901	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№2	K14	27.7			内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	密	良	橙 7.5YR7/6	Ⅰ	口縁部 1/12	
19	01201	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№3	K14	26.0			内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	にぶい橙 ７.5YR6/4	Ⅰ	口縁部 3/12	ﾍﾗ記号 透孔2
20	03102	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K14	24.4			内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ	やや粗	良	明黄褐 10YR7/6	Ⅰ	口縁部 1/12	
21	02502	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K14				調整不明	やや粗	良	黄橙 10YR8/6	Ⅰに近い	体部片	
22	01803	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K14		14.3		内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	やや密	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅰ	底部 1/12	
23	01601	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K14	27.2			内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	橙 5YR6/6	Ⅲ	口縁部 6/12	ﾍﾗ記号 透孔2
24	01301	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№4	K14	26.1	18.3	38.8	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	粗	良	明赤褐 5YR5/8	Ⅱ	1/4	ﾍﾗ記号 透孔1
25	01401	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№5	K14	23.8	14.4		内:磨耗 外:磨耗、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	明赤褐 5YR5/8	Ⅱ	底部 4/12	透孔1
26	02305	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K14				内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	橙 5YR6/8	Ⅱ	ﾀｶﾞ部 小片	
27	01001	埴輪	円筒	D地区	２号墳周溝 周溝肩	K14 L13	23.9	16.3	37.0	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	粗	良	明黄褐 10YR6/6	Ⅲ	9/12	ﾍﾗ記号 透孔1
28	02303	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K14		16.0		内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	やや密	良	にぶい褐 7.5YR5/4	Ⅲ	底部 2/12	
29	03201	埴輪	円筒 (朝顔か)	D地区	２号墳 周溝	K14 L13				内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 7.5Y7/6	Ⅲ	体部片	
30	01703	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K13				内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	やや密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	Ⅲ	口縁部 小片	
31	01801	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K13				内:工具ﾅﾃﾞ、ﾊｹ 外:ﾊｹ	やや密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	Ⅲ	体部 小片	ﾍﾗ記号
32	01701	埴輪	円筒	D地区	２号墳周溝 包含層　表土	K13 L13		14.5		内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	橙 7.5YR6/6	Ⅲ	底部 2/12	透孔1
33	01902	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13	24.8			調整不明	やや密	良	橙 5TR7/6	Ⅰ	口縁部 2/12	
34	01802	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13		12.8		内:ﾅﾃﾞ 外:貼付ﾅﾃﾞ	やや密	良	橙 7.5YR7/6	Ⅰ	ﾀｶﾞ部 3/12	
35	01702	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:剥離 外:ﾊｹ	やや密	良	橙 7.5YR7/6	Ⅰ	底部 小片	
36	02703	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	Ⅲ	口縁部 小片	
37	02706	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 5YR7/6	Ⅲ	体部片	透孔1
38	02901	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 5YR7/6	Ⅲ	タガ部 1/12	透孔2
39	02801	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 5YR7/6	Ⅲ	体部 1/12	
40	02802	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙 7.5YR6/6	Ⅲ	体部 1/12	
41	02705	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾊｹ、ｹｽﾞﾘ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	Ⅲ	底部 小片	底部植物 痕？
42	02902	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13		20.0		内:ﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ 外:ﾅﾃﾞ、ﾊｹ	やや粗	良	橙 5YR7/6	Ⅲ	底部 3/12	
43	02202	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13				内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:板ﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅳ	ﾀｶﾞ部 4/12	
44	02201	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13		15.5		内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅳ	底部 2/12	
45	00907	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L13		19.8		内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ	やや密	良	浅黄 2.5Y7/3	Ⅳ	底部 3/12	植物当り 痕

第５表　遺物観察表２

報告書番号	実測番号	種類	器種	出土地区	号墳遺構	グリッド	法量			技法の特徴	胎土	焼成	色調	胎土分類	残存	特記事項
							口径	底径	器高							
46	03302	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	L14	29.4			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ、貼付ナデ	やや粗	良	橙 5YR7/8	Ⅲ	口縁部 2/12	ヘラ記号
47	02601	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	N13				内：ナデ、オサエ? 外：調整不明、突帯設定技法有	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅱ	体部片	
48	02102	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	N13				内：ヨコナデ、ナデ、オサエ 外：ヨコナデ、ハケ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	Ⅳ	口縁部 小片	
49	02103	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	N13				内：ヨコナデ、ナデ、オサエ 外：ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅳ	底部 小片	
50	01501	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№6	N14	28.4			内：磨耗 外：磨耗、貼付ナデ	やや粗	良	淡黄 2.5Y8/3	Ⅱ	口縁部 2/12	
51	02002	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№6	N14				内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	Ⅲ	口縁部 小片	
52	00602	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	N14				内：ナデ 外：ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/4		底部 小片	
53	02001	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№6	N14				内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	Ⅳ	口縁部 小片	
54	02003	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	N14				内：ナデ、オサエか 外：ハケ、貼付ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	Ⅳ	体部片	透孔1
55	02104	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№6	N14				内：ナデ 外：ナデ、貼付ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	Ⅳ	ﾀｶﾞ部 2/12	
56	02401	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝№6	N14		18.5		調整不明	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	Ⅳ	底部 8/12	黒斑
57	00506	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	N14		18.8		内：ヨコナデ 外：ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	Ⅳ	底部 1/12	
58	03001	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝 周溝№6	N14		17.6		内：ナデ、オサエ 外：調整不明	やや粗	やや不良	灰白 2.5Y8/2		底部 3/12	外傾接合
59	00901	埴輪	形象	D地区	２号墳 周溝	J15				ナデ	やや密	良	橙 5YR7/6		家の壁 小片	家形
60	00904	埴輪	形象	D地区	２号墳 周溝	J15				ナデ	やや密	良	橙 5YR7/8	Ⅲ	家の屋根 小片	家形
61	00902	埴輪	形象	D地区	２号墳 周溝	J15				内：ナデ、オサエ 外：ナデ、オサエ	やや密	良	橙 7.5YR6/6	Ⅲ	家の壁 小片	家形
62	00903	埴輪	形象	D地区	２号墳 周溝	J15				内：ナデ 外：ナデ	やや密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	Ⅲ	家の下 くりこみ片	家形
63	00906	埴輪	形象	D地区	２号墳 周溝	K14				内：ナデ 外：ナデ	やや粗	良	橙 5YR7/6	Ⅲ	ﾀｶﾞ片	家形
64	00905	埴輪	形象	D地区	２号墳 墳頂	M15				内：ナデ 外：ナデ、オサエ、ケズリ	やや密	良	橙 5YR7/6	Ⅲ	ﾀｶﾞ片	家形
65	00803	須恵器	杯身	D地区	２号墳 周溝	J15	10.2			内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰 N4/		口縁部 4/12	
66	00802	須恵器	杯身	D地区	２号墳 周溝№1	J15	10.5		5.1	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ナデ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰 N5/		完存	
67	00801	須恵器	瓹	D地区	２号墳 周溝№2	J15	9.4		10.6	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ナデ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ナデ、オサエ	やや密	良	黒褐 2.5Y3/1		4/5	穿孔1
68	02704	土師器	高杯	D地区	２号墳 周溝	L13		14.0		調整不明	やや密	良	橙 2.5YR6/8		底部 2/12	
69	02106	石製品	砥石	D地区	２号墳 周溝	M13	7.47×6.2	厚さ4.0	22.54ｇ							ｽﾘ面1
70	02105	石製品	石鏃	D地区	２号墳 周溝	L13	2.38×1.55	厚さ0.4	1.2ｇ							ｻﾇｶｲﾄ
71	02301	土師器	高杯	D地区	２号墳 旧表土	M15	18.4			調整不明	粗	良	橙 7.5YR6/6		口縁部 1/12	
72	03401	鉄器	剣	D地区	２号墳 ＳＫ５	M15	長さ63.2	厚さ 0.7～1.2	幅 2.4～4.4							木質残
73	00401	須恵器	瓹	D地区	ＳＤ４	M12 N13	11.1		9.6	内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、オサエ、ナデ、シボリ 外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ナデ、波状文	やや密	良	灰 5Y4/1		4/5	
74	00501	埴輪	円筒	D地区	ＳＤ４	N13				内：ナデ 外：ナデ、貼付ナデ	やや密	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅳ	ﾀｶﾞ部のみ	
75	00502	埴輪	円筒	D地区	ＳＤ４	N13				内：ナデ 外：貼付ナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4		ﾀｶﾞ部のみ	
76	00505	石製品	ﾌﾚｲｸ	D地区	包含層	K15	1.62× 1.33	厚さ0.28	0.7ｇ							ﾁｬｰﾄ
77	00503	土師器	甕	D地区	包含層	R7				内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ	粗	良	明赤褐 5YR5/6		口縁部 小片	
78	03301	埴輪	円筒	D地区	２号墳 周溝	K13				内：ヨコナデ、ナデ、オサエ 外：ヨコナデ、ナデ	やや粗	良	橙 5YR7/8	Ⅲ	口縁部 小片	
79	02306	埴輪	円筒	D地区	包含層	K13				内：ナデ 外：ヨコナデ、ハケ、貼付ナデ	やや密	良	橙 7.5YR6/6	Ⅲ	体部 小片	
80	02307	埴輪	円筒	D地区	包含層	K13				内：ナデ 外：ヨコナデ、ハケ、貼付ナデ	やや密	良	橙 7.5YR6/6	Ⅲ	ﾀｶﾞ部 小片	
81	02702	埴輪	円筒	D地区	表土	K13				内：ナデ 外：ハケ	やや粗	良	にぶい橙 ７.5YR7/4	Ⅲ	小片	
82	03002	埴輪	円筒	D地区	表土	K13		15.2		内：ナデ、オサエ 外：ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	Ⅲ	底部 1/12	
83	00507	埴輪	円筒	D地区	包含層	N14	27.6			内：ナデ、オサエ 外：回転ヨコナデ、ハケ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	Ⅳ	口縁部 1/12	
84	00702	埴輪	円筒	D地区	包含層	N14				内：ヨコナデ、ナデ、オサエ 外：ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/3	Ⅳ	口縁部 小片	
85	00703	埴輪	円筒	D地区	包含層	N14				内：ナデ、オサエ 外：ハケ、貼付ナデ	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/4	Ⅳ	体部片	
86	00601	埴輪	円筒	D地区	包含層	N14		約20.0		内：ナデ 外：ナデ、ハケ、貼付ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	Ⅳ	底部 3/12	
87	00701	埴輪	円筒	D地区	包含層	N14		15.6		内：ナデ、オサエ 外：ナデ、オサエ	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/3	Ⅳ	底部 1/12	
88	03103	埴輪	円筒	D地区	表採			17.8		内：ナデ、オサエ 外：調整不明	やや粗	良	浅黄 2.5Y8/4	Ⅳ	底部 2/12	
89	00504	埴輪	円筒	D地区	包含層	K13				内：ナデ 外：線刻	やや粗	良	橙 5YR6/8	Ⅲ	体部 小片	

Ⅳ　自然科学分析

1　自然科学分析の目的

にんごう古墳群が所在する岩田川流域は、北に流れる安濃川とともに北に位置する見当山を中心とした丘陵と南に位置する半田丘陵に挟まれた沖積地を形成している。この中央をにんごう古墳群の調査契機となった中勢道路（中勢バイパス）が南北に貫き、その建設に伴う調査により遺跡の発掘調査が昭和63年度から継続して行われている。この中勢道路建設に伴う発掘調査が行われた門脇北古墳（平成元年度）、西岡古墳（平成４年度）において円筒埴輪を主体とする多くの埴輪が出土し、それぞれ蛍光Ｘ線分析法による胎土分析が実施された。特に、西岡古墳報告書作成時の平成６年度には、安濃川流域の古墳出土埴輪・須恵器の生産地と流通範囲の解明を目的として胎土分析を行った。詳細については、西岡古墳発掘調査報告書をご覧いただきたいが、今回も当時分析をご担当いただいた三辻利一氏に18遺跡計178点の分析を依頼した。しかし、門脇北古墳・西岡古墳以外の分析試料の調整技法等の詳細が不明であり、考古学的検証が不可能となっている。また、三辻氏の分析結果報告を受けての考古学的検討が報告書内もしくはその後もなされておらず、分析依頼時に目的とした「安濃川流域の古墳出土埴輪・須恵器の生産地と流通範囲の解明」はなされていない。

その後当該地域では新たな発掘が続き、埴輪窯である藤谷窯跡群の報告書も刊行され、生産遺跡の状況を知ることができるようになった。そこで、今回にんごう２号墳という新たな資料の追加もあり、改めて安濃川流域の古墳出土の埴輪の胎土分析を三辻氏に依頼した①。

今回特に注意を払ったことは、分析を依頼する試料についての考古学的なデータを明らかにし、後にも検討できるように記録・公開することである。そのため、にんごう２号墳出土埴輪については、報告書掲載遺物についても分析試料とする破片の実測を改めて行い掲載した。他遺跡の試料については同じく破片の実測を行ったが、すでに報告書において実測がなされているものは試料破片の状況を実測、報告書掲載図と併載した。しかし、報告書未掲載もしくは未発表資料については可能な場合は復元実測を行い、そうでない場合は破片の実測を行った。それぞれの試料の考古学的な詳細については第10～17表にまとめているのでご覧いただきたい。また、全試料の写真はカラーで掲載している（図版37～45）。

試料の選定に当たっては、なるべく報告書等で全容が知れるものを選定したが、やはりわずかとはいえ破壊分析となるため、ある程度小さな破片がある資料をピックアップせざるを得なかった。未報告遺物では、調整技法・形状の明確なものを選定した。そのような中で、津市教育委員会には遺物の少ない遺跡もある中、可能な限りの報告書掲載遺物の試料選定・提供にご尽力いただいた。ご担当者の村木一弥氏・藤田充子氏に感謝いたしたい。

また、三辻氏には20年以上前から三重県内の埴輪だけではなく須恵器・土師器・陶器類の分析をお願いしている。埴輪は、津市出土資料だけではなく鈴鹿市・松阪市・伊賀市のものもある。今回、それらの分析試料の詳細は不明ではあるが、今後の課題として含めて検討をしていただいた。

2　分析試料出土遺跡の概要

三重県内で埴輪の生産遺跡が集中して見られるのは津市南部の相川流域で、前述の藤谷窯跡群、法ヶ広窯跡、久居窯跡群がある。久居窯跡群は須恵器主体の窯であるが、円筒埴輪片も出土している。

今回分析対象としたのは、にんごう２号墳を中心とする岩田川・安濃川流域の24遺跡である。このうち、窯関係遺跡は４遺跡で、久居窯跡群・藤谷窯跡群は半田丘陵南側、旧久居市側に位置することから、雲出川流域に所在する３遺跡の試料も追加した。

以下、にんごう２号墳以外の試料採取遺跡について触れる。なお、各遺跡の参考文献は、本書第Ⅱ章で触れたものは省いている。

（１）生産遺跡

藤谷窯跡群　津市大字半田、半田丘陵の南の奥まっ

第34図　胎土分析実施遺跡分布図

た開析谷に位置する。昭和48年に土取りにより多数の土器片が出土しているのが発見され、昭和50年に津市教育委員会により調査された。調査の結果断片的ながら２基の窯体とそれに伴う灰原、溝が確認された。窯はいずれも半地下式の窖窯で、１号窯は少なくとも５回以上の焼成が行われたとされる。焼成の主体は埴輪であるが、灰原の隅から少量ながら須恵器片がまとまって出土しており、埴輪・須恵器併焼窯といえる。埴輪は、円筒・朝顔・形象（家形・器財・人物・動物など）があり、その他円筒棺・陶棺もある。

久居窯跡群　津市久居藤ヶ丘町、半田丘陵に接した独立残丘の南斜面に位置する。発掘調査は昭和38・43年の２回実施されている。調査では、２・３・４号窯が調査され、２・４号窯は県内で最古のＴＫ23型式併行期の須恵器が焼成された窯である。いずれも須恵器主体の窯であるが、２号窯からは須恵質円筒埴輪と土師器台付甕が、３号窯からは円筒埴輪や形象埴輪（人物）が、４号窯からは土師器台付甕が出土した。今回分析した試料は須恵質円筒埴輪であり、２号窯出土のものと考えられる。

内多窯跡[②]　津市安濃町内多、安濃川支流である毛無川の上流域の丘陵裾に位置する。故鈴木敏雄氏収集資料に須恵器・円筒埴輪があり、鈴木氏メモにより３基の窯の存在が指摘されている。須恵器と埴輪の併焼窯と考えられ、須恵器の時期はＴＫ47型式併行期である。埴輪はいずれも硬質で、確認できる底部は淡輪技法を持つ。

ヲノ坪遺跡[③]　津市一身田、標高約20m程の丘陵上に位置する。三重県センター博物館（仮称）建設に伴い調査され、不整形土坑状落ち込みから須恵器・埴輪とともに、被熱して固まったと考えられる赤色粘土塊・窯壁塊が多く出土し、窯から掻き出したものと考えられる。埴輪は、円筒・朝顔形埴輪の他にわずかながら形象埴輪がある。大部分が須恵質あるいは硬質を呈し、底部は淡輪技法を採る。

（２）消費地－古墳－

明合古墳群[④]　津市安濃町田端上野、安濃川右岸の標高40m程の台地上に位置する。全６基の方墳で構成され、昭和27年に国指定史跡となっている。主墳は一辺60mで、両側に造出を持つ双方中方墳である。発掘調査はされておらず、円筒埴輪・形象埴輪・須恵器が採集されている。今回分析した試料はどの古墳から出土したものか不明であるが、一部は昭和38～39年の三重大学歴史研究会による測量時に採集されたものと考えられる。円筒埴輪は土師質であり、黒斑を持つものがある。

稲葉古墳群　津市野田、岩田川右岸に位置する標高約30mの丘陵上、にんごう古墳群から北に延びる尾根上に分布する。昭和59年に発掘調査され、５世紀末～７世紀にかけて築造された木棺直葬を埋葬主体部に持つ円墳５基の古墳群と判明した。埴輪を持つのは３～５号墳で、いずれも円筒・朝顔・形象埴輪を持つ。４号墳墳丘斜面では、円筒埴輪２個を合わせ口にし、円筒・朝顔形埴輪片で底部等を塞いだ埴輪棺が検出された。円筒埴輪はいずれも土師質・須恵質が混在する。多彩なヘラ記号を持ち、３基に共通する記号もある。

鎌切古墳群　津市野田、岩田川右岸に位置する標高約30mの丘陵上、にんごう古墳群から北に延びる、前述の稲葉古墳群とは谷を挟んだ東の尾根上に分布する。昭和59年に稲葉古墳群と同時に発掘調査され、開発範囲外の１号墳、現状保存された隣接するおこし古墳を含めると前方後円墳３基・円墳３基の古墳群と判明した。調査された４基の埋葬主体部はいずれも木棺直葬で６世紀前～中頃の築造と考えられている。埴輪は調査した４基の古墳から出土したが、３号墳は大型円筒埴輪が２点、４号墳は細片のみ、５号墳で確認されたのは墳丘北西部の円筒埴輪棺で、出土量の少ない６号墳も含めて埴輪が墳丘上に並べ立てられた可能性は少ない。

殿村１号墳　津市殿村、安濃川右岸の標高約30mの丘陵部先端に位置する。古墳群は、従来６基の古墳群と認識されていたが、２号墳は弥生時代末～古墳時代初頭の方形台状墓であることがわかった。１号墳は全長28m程の前方後円墳で、埋葬主体部は不明であるが木棺直葬と推定される。埴輪は出土量が多く墳丘上に並べられていたものと思われ、後円部に３点が原位置を保っているのが確認された。埴輪は円筒埴輪の他、多くの形象埴輪もある。円筒埴輪には淡輪技法を持つものも含まれ、底部の技法を見ると外面を板状工具で押さえて調整する押圧技法を持

つものもある。

西河辺古墳⑤　津市河辺町、安濃川左岸の長岡丘陵の南斜面に所在する古墳である。近畿自動車道関・久居線（伊勢自動車道）により墳丘は半壊しており古墳の詳細は不明であるが、平成４年に資料が採集された。埴輪は土師質円筒埴輪のみである。

堂山１号墳⑥　津市安濃町清水、安濃川左岸の長岡丘陵の一部の細い丘陵上にあった方墳と前方後円墳の２基で構成される。昭和48年、方墳である１号墳で調査が実施され、木棺直葬を埋葬主体部とする６世紀前半の古墳と判明した。埴輪は、円筒埴輪が３点で１点が須恵質である。その他、形象埴輪が出土している。底部の判明する円筒埴輪はいずれも淡輪技法は採らない。

元井池古墳　津市半田、岩田川右岸の半田丘陵上に位置する。昭和44年に調査が実施され、自然地形を利用した６世紀前半の円墳と判明した。埋葬主体部に木棺直葬を２基持ち、それぞれの主体部から円筒埴輪が１点ずつ出土している。その他、埴輪は封土内からも出土している。円筒埴輪は土師質で、２条突帯３段のものと３条突帯４段のものがある。

メクサ３号墳　津市分部、安濃川の支流・穴倉川右岸の丘陵上に位置する全９基の古墳群である。いずれも方墳で、３・４号墳が調査されている。３・４号墳は木棺直葬墳である。３号墳の埴輪は墓壙もしくは封土からの出土で個体数が僅かであり、埴輪が墳丘上に立て並べられていたかは不明である。出土した埴輪は円筒埴輪で、いずれも土師質である。第２・３段の外面調整はタテハケ、別個体であるが、第１段の外面調整はナデ調整の他、板圧痕がある。古墳の築造時期は、６世紀前半代とされる。

赤塚古墳⑦　津市安濃町東観音寺、安濃川右岸の台地上に位置する。明治22年に土取り工事中に発見された全長約30mの前方後円墳である。埋葬主体部は横穴式石室で、組合式石棺を使用していた可能性がある。昭和52年に円筒・朝顔・形象埴輪等が表採され、出土状況等から２段の埴輪列が想定される。埴輪はいずれも土師質で、外面調整がわかるものはタテハケ、底部の状況から淡輪技法を用いたものは含まれない。古墳築造時期は６世紀初めと思われる。

日余１号墳⑧　津市安濃町太田、安濃川左岸の細丘陵に位置する。２基の古墳群で構成され、１号墳は方墳、２号墳は円墳とされるが弥生墳丘墓の可能性も指摘される。１号墳は近畿自動車道関・久居線（伊勢自動車道）の路線内にあり、昭和47年に発掘調査され、墳丘上から２基の墓壙が確認されたが墓壙からの出土遺物はない。埴輪は円筒・朝顔・形象埴輪がある。円筒・朝顔形埴輪いずれも土師質・須恵質のものがあり円筒埴輪の外面調整はタテハケのみのものと２次調整として静止痕を持つＢ種ヨコハケを施すものがある。淡輪技法を持つものはないようである。１号墳の築造時期は６世紀前半代とされる。

大里西沖遺跡⑨　津市大里睦合町、志登茂川左岸の浸食段丘上に位置する。調査では古墳時代の遺構として、６世紀前半～中頃の４基の古墳（円墳）と埴輪を埋設した土坑等が検出された。４基の古墳から埴輪が出土したがその量は少ない。しかし包含層から出土したものは多く、円筒・朝顔・形象埴輪がある。円筒埴輪は土師質が大半を占めるが須恵質あるいは硬質といったものも確認できる。また、全容が知れるものは２条突帯３段構成で、底部に淡輪技法を持つものが大半を占める。外面調整はタテハケ後に２次調整としてＢ種あるいはＣ種ヨコハケを施すものが多い。

一色山古墳群⑩　津市久居一色町、雲出川支流の長野川右岸の段丘上に位置する。９基の円墳で構成され、１号墳は横穴式石室、２号墳は竪穴系横口式石室を埋葬主体に持つとされるが古墳群はすでに消滅している。平成８年に調査され、詳細は不明であるが埴輪は２号墳から出土したものと思われる。円筒埴輪は土師質が主体であるが、須恵質のものも確認できる。外面調整はタテハケで２次調整を省略している。底部外面に押圧技法を持つものが見られる。

庄田２号墳⑪　津市久居庄田町、雲出川支流、榊原川左岸沿いの段丘上に所在する全９基の古墳群である。１号墳は方墳で横穴式石室を埋葬主体部に持ち、２号墳は円墳で埋葬主体部は木棺直葬である。その他は円墳とされるが未調査のため埋葬主体部は不明である。２号墳は平成５年に調査された。円筒埴輪は土師質・須恵質で構成され、外面調整はタテハケが主体となる。底部に押圧状の板ナデを施すものがある。

門脇北古墳　津市河辺町、安濃川左岸に横たわる長岡丘陵に位置する円墳である。埋葬主体部は大きく破壊されているが木棺直葬と考えられている。埴輪は墳丘上に並んだ状態で出土し、円筒・朝顔形・形象埴輪がある。円筒埴輪は土師質の他に硬質のものがある。外面調整は２次調整にＢ種ヨコハケを施すもの、タテハケのみで２次調整を省略するもの、板ナデを施すものがある。内面は口縁部付近もしくは口縁部から第２段までヨコハケを施すもの、オサエ・ナデのみのものがある。

西岡古墳　津市河辺町、安濃川左岸の見当山丘陵に位置する方墳である。埋葬主体部は攪乱のため確認できなかった。埴輪は墳丘から転落したと思われる状況で出土し、円筒・形象埴輪がある。円筒埴輪は土師質・須恵質・硬質のものがある。外面調整は２次調整にＢ種ヨコハケを施すもの、２次調整を省略しタテハケのみのもの、板ナデを施すものがある。内面もヨコハケを施すもの、ナデオサエ調整のもの、板ナデのものがある。

（３）その他

志保遺跡⑫　津市片田井戸町、岩田川右岸の河岸段丘上に位置する。埴輪は包含層から出土したが、古墳時代の遺構は確認されず、立地を見ても周囲の古墳からの流れ込みも考えにくい。円筒埴輪が主体を占め、いずれも土師質であるが、手に粉が付きそうな程焼成が甘く大変脆い白色を呈するものや、赤色を呈するものがある。外面調整はタテハケで２次調整は省略する。

迎山遺跡⑬　津市安濃町今徳、安濃川支流である穴倉川左岸、標高約320ｍの長谷山から派生する尾根先端に位置する。古墳時代の遺構はなく、包含層から円筒・朝顔・形象埴輪が多く出土し、同じ尾根のやや上がった位置にある迎山古墳群からの流れ込みと考えられている。円筒埴輪は土師質・須恵質のものがあり、外面調整はタテハケのみのものが大半であるが、粗いＣ種ヨコハケの個体もある。範囲確認調査で出土したものには２条の弧を描くヘラ記号を持つ個体もある。

上野遺跡⑭　津市久居戸木町、雲出川に北面する河岸段丘上に位置する。平成11年～13年に民間調査機関によって調査が実施された。主体は鎌倉～室町時代にかけての遺構であるが、古墳時代の遺構に７基の古墳などがある。埴輪には、円筒・形象埴輪があるが、資料が整理途中段階のため、今回分析を実施した埴輪が出土した遺構の詳細は遺物に添付されたカード記載の情報から知るのみである。外面調整はタテハケのみのもの、２次調整のヨコハケを施すものがある。179と180は細かいハケメを持つが、おそらく同一個体であろう。また、182は土師器甑である。

高茶屋大垣内遺跡　津市城山、伊勢湾を望む高茶屋台地上に位置する。古墳時代が主体となる遺跡であり、中でも後期には土師器生産を主体とする集落が営まれる。埴輪は出土していないが、ここで作られたと思われる土師器と同じ地域で生産された埴輪胎土との共通性の有無を見るために分析試料に加えた。分析対象としたのは、第２次調査で検出されたＳＨ６出土の土師器台付甕である。このＳＨ６からは台付甕が立位で並べられたような状態で出土し、この遺跡で作られた甕を出荷まで保管していた状況を示しているのではと考えられる資料である。いずれも煤などの付着はなく煮炊具としては未使用である。　（山中）

３　三重県内古墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析

（１）はじめに

全国各地の窯跡群出土須恵器の蛍光Ｘ線スペクトルの比較から、K、Ca、Rb、Sr の４元素が地域差を示す元素であることが発見された。地域差は通常、K-Ca、Rb-Sr の両分布図上で比較される。他方、須恵器窯跡群の後背地を構成する岩石は花崗岩類（花崗岩、花崗閃緑岩）である場合が多い。全国各地の花崗岩類の岩片試料を大量に分析した結果、花崗岩類も両分布図上で地域差を示すことが分かった。そして、K と Ca は分布図上で逆相関の関係があることが分かった。K と Ca は花崗岩類を構成する主成分鉱物である長石類（カリ長石と斜長石）中に含まれる主成分元素である。岩石学者久野久の理論によると、マグマから長石類の結晶が生成する過程で、カリ長石と斜長石はイオン置換により逆相関の関係がある。全国各地の花崗岩類の分析データは久野理論を実証したことになる。また、主成分元素 K、Ca

と微量元素 Rb、Sr はそれぞれ、正の相関関係があることも実証された。したがって、Rb-Sr 分布図でも花崗岩類は逆相関状に分布し、「花崗岩類のベルト帯」を形成する。花崗岩類が風化して生成した粘土で作られた窯跡群出土須恵器の地域差の原因は、母岩の長石類にあることも分かった。したがって、窯跡群出土須恵器は地理的情報をもっている訳である。こうした背景から須恵器産地推定法が開発され、古墳出土須恵器が地元産の須恵器であるか、それとも、和泉陶邑からの搬入品であるかを問う２群間判別分析法で、陶邑産須恵器が一方的に全国各地の古墳へ供給されていることが示された。

須恵器産地推定法は種々の土器遺物の生産・供給問題の研究や伝播に関する研究に活用できる。すでに埴輪についても適用されている。埴輪窯跡群が残っている場合には須恵器と同様にして、窯跡群に結び付けることによって古墳出土埴輪の産地を推定することができるが、埴輪には多くの場合、生産地である窯跡群が残っていない。しかし、多数の古墳が集まる古墳群出土埴輪の化学特性は互いに類似している場合が多い。このことは古墳群を形成している地域内で素材粘土は採取され、埴輪が作られたことを意味する。

本研究では、三重県内の古墳出土埴輪はどのような化学特性をもつのかを知るために、県内各地の古墳出土埴輪の化学特性を K-Ca、Rb-Sr の両分布図上で比較した。

（２）分析法

埴輪小破片試料は、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、電動プレッサーで高圧をかけてプレスし、内径20㎜、厚さ５㎜の錠剤試料を作成し、蛍光Ｘ線分析用の試料とした。

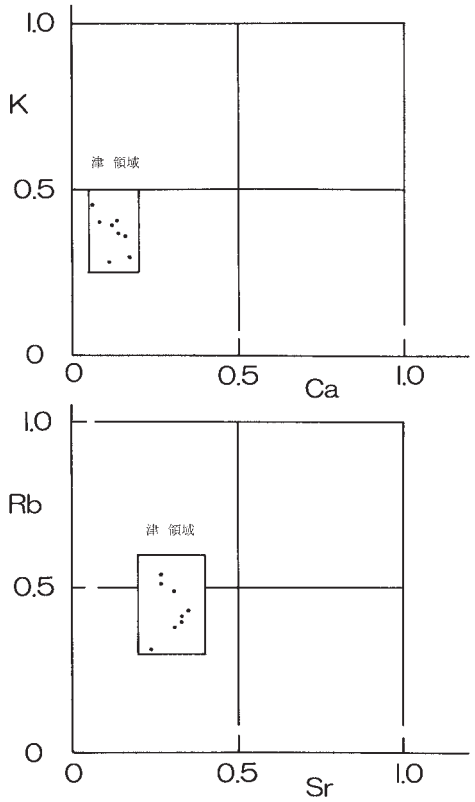
蛍光Ｘ線分析には、理学電機製 RIX2100（波長分散型）の分析装置を使用した。使用したＸ線管球は Rh 管球である。使用条件は50kV、50mA である。この装置には、TAP、Ge、LiF の３枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管とシンチレーションカウンターの二つの検出器が装備されている。これらの分光結晶と検出器は、コンピュータの制御によって、自動的に交換できる完全自動式の蛍光Ｘ線分析装置である。また、この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換機も連結されている。

分析値は、同じ日に測定された岩石標準試料 Jg-１a の、各元素の蛍光Ｘ線強度で標準化した値で表示された。この分析値を使って、K-Ca、Rb-Sr の両分布図を作成し地域差を比較した。

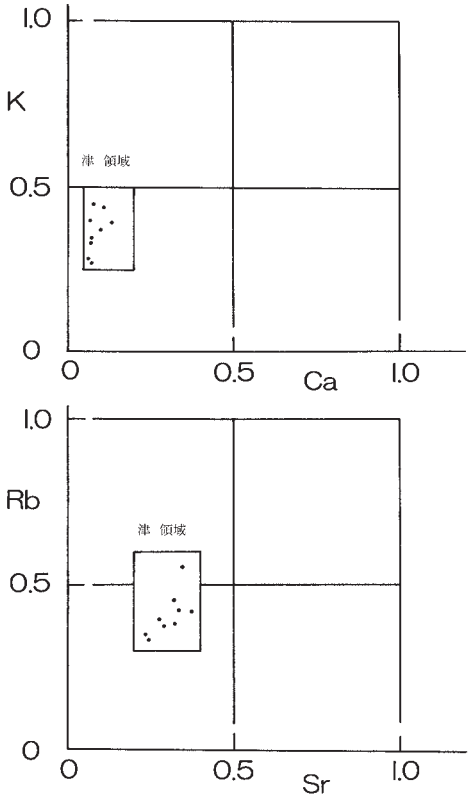
（３）分析結果

今回分析した埴輪の分析値は第６～９表にまとめられている。この結果をもとに K-Ca、Rb-Sr 分布図を作成し、それぞれの古墳から出土した埴輪の胎土を比較した。その場合に比較対照の領域が必要である。古市窯跡群や新池窯跡群のように埴輪窯跡群があれば、窯跡群出土埴輪で比較対照の領域を設定できる。しかし、三重県内には数ヶ所で埴輪窯跡が発見されているが、いずれも数基程度以下の小規模な窯跡群である。これらの窯跡群の埴輪の胎土分析のデータは十分整理されていないため、今回は比較対照の領域とはしなかった。近接して分布する古墳から出土した埴輪の分析値を包含するようにして、比較対照の領域を作った。古墳ごとに埴輪を作っておれば、近接して分布する古墳から出土した埴輪の化学特性は類似すると考えられるからである。第34図には今回分析を行った遺跡の分布図を示してある。

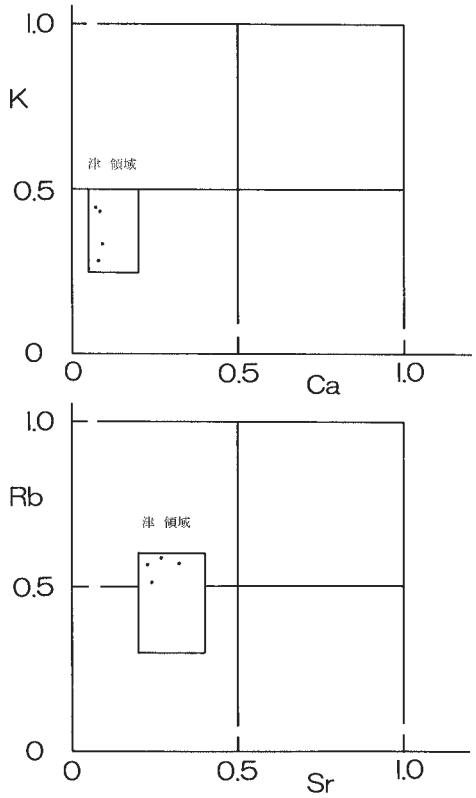
まず、第35図には上野遺跡、第36図には一色山古墳群、第37図には庄田２号墳の両分布図を示す。これらの古墳は旧一志郡内の雲出川の北岸に近接して分布する古墳であり、そこに並べられた埴輪は在地産であれば、類似した化学特性をもつ可能性が高いと考えられた。第35～37図を比較すると、これらの埴輪の両分布図における分布は、必ずしも同じ位置に重なって分布してはいないが、近接して分布していることが分かる。分布位置が重ならないということは、これらの古墳出土埴輪の素材粘土は同じ場所で採取されたものではないことを意味する。しかし、近接して分布することは胎土が類似していることを示しており、これら３古墳の近くで採取された粘土が素材となったことを示唆している。そこで、これら３古墳の埴輪を包含するようにして津領域を長方形で描いた。この領域は定性的な領域ではあるが、他の場所の古墳出土埴輪の胎土と比較する上では必要である。３ヶ所の古墳の埴輪は津領域内で



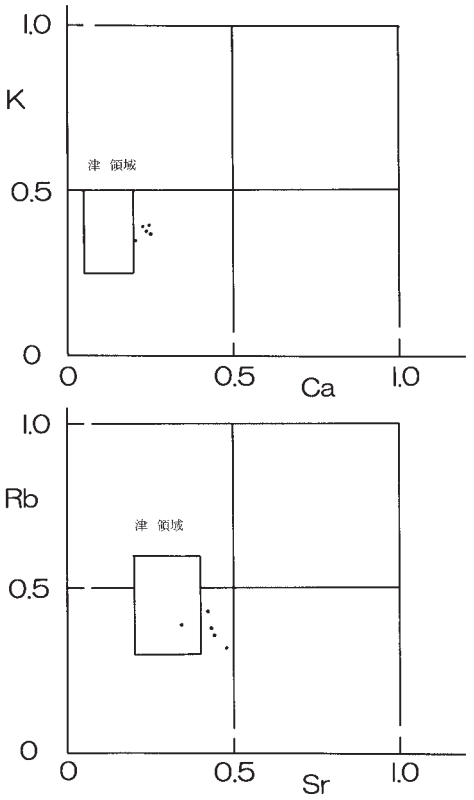
第35図　上野遺跡出土埴輪の両分布図



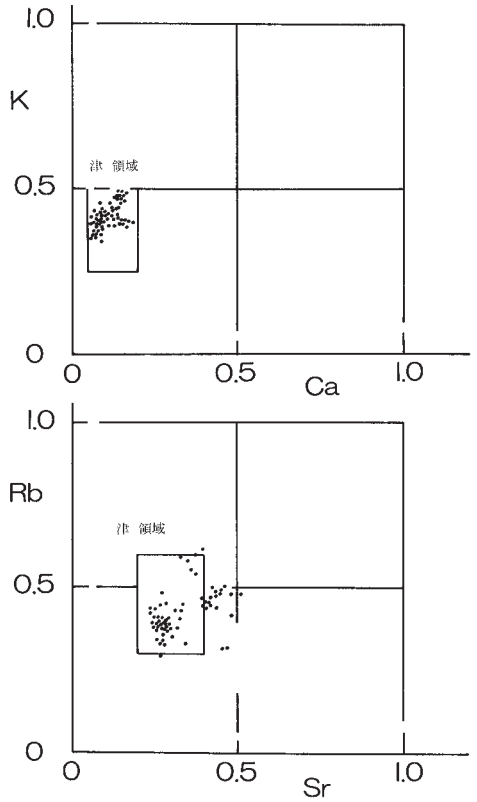
第36図　一色山古墳群出土埴輪の両分布図



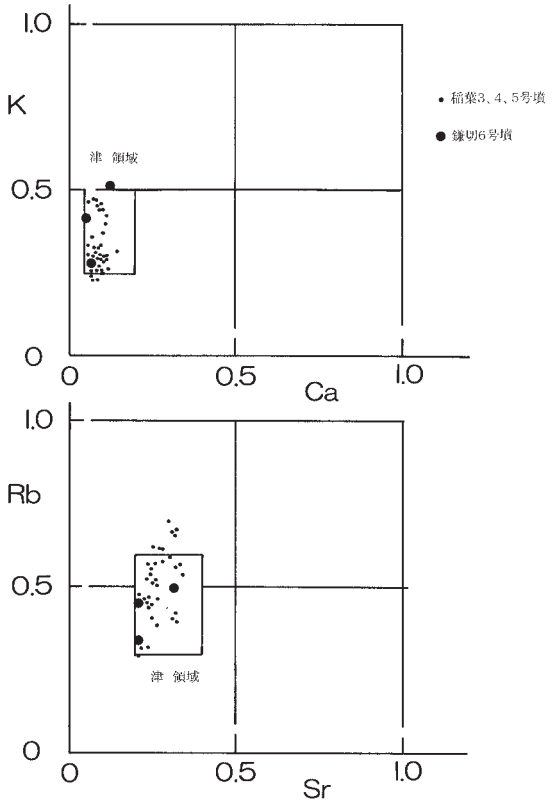
第37図　庄田２号墳出土埴輪の両分布図



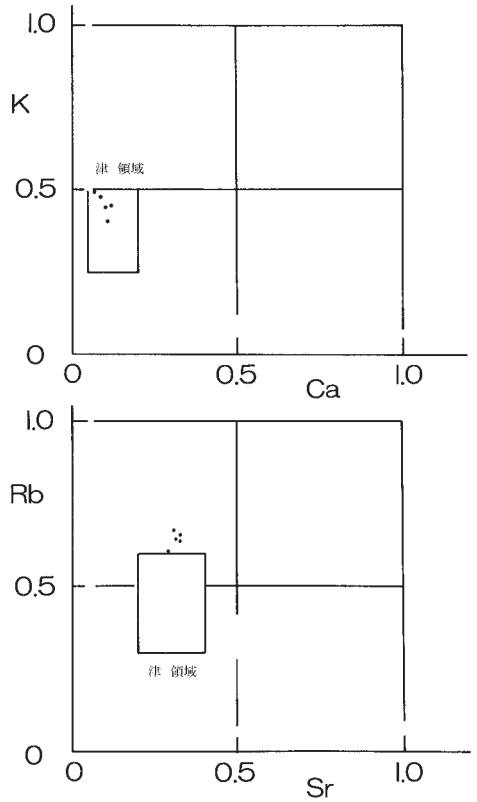
第38図　高茶屋大垣内遺跡出土土師器の両分布図



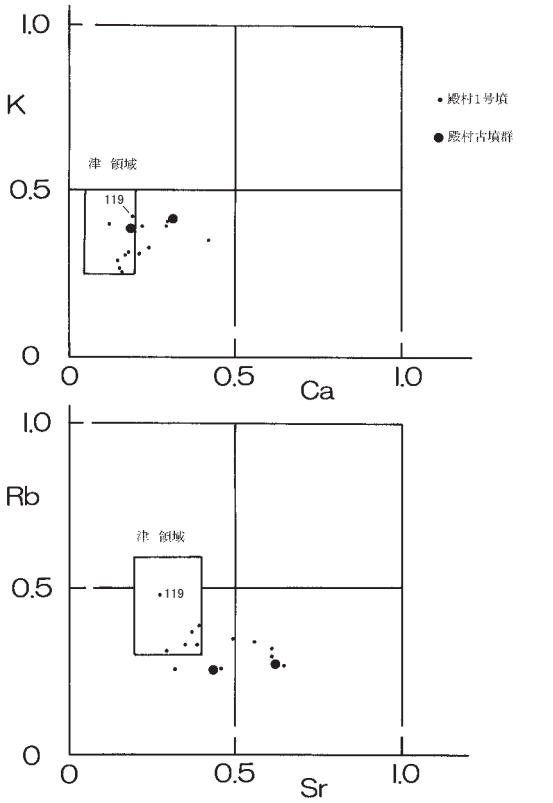
第39図　にんごう２号墳出土埴輪の両分布図



第40図　稲葉３・４・５号墳、鎌切５・６号墳出土埴輪の両分布図



第41図　志保遺跡出土埴輪の両分布図



第42図　殿村１号墳、殿村古墳群出土埴輪の両分布図

別々に分布していることが分かる。古墳ごとに埴輪を作っていたことを示している。

第38図には上記３古墳に距離的に近い、高茶屋大垣内遺跡から出土した土師器甕の両分布図を示す。両分布図で津領域からずれて分布している。このことはこれら土師器甕の素材粘土は埴輪の素材粘土と異なることを示す。一般に、土師器の胎土は埴輪胎土とは異なる場合が多い。上述した３古墳の埴輪胎土とは異なるが、まとまって分布するところから同じ場所で作られた土師器甕であると推察される。

第39図には、にんごう２号墳出土埴輪の両分布図を示す。Rb-Sr 分布図では Sr が比較的少ない集団と比較的多い集団の２群に分かれる。Sr が比較的多い集団は津領域の右側にずれて分布する。K-Ca 分布図でも Ca が比較的多い集団があり、Ca、Sr 因子からみて２群に分かれる傾向がある。別々の２か所で作られた埴輪であることを示している。多数派集団は両分布図で津領域に分布するが、少数派集団は K-Ca 分布図では津領域に分布するものの、Rb-Sr 分布図では津領域の右側にずれて分布する。

第40図には、にんごう２号墳に近接する、稲葉３・４・５号墳と鎌切５・６号墳の埴輪の両分布図を示す。稲葉古墳群の埴輪と鎌切古墳群の埴輪は、津領域内で重なって分布しており、同じ場所で採取した粘土を素材として作られた埴輪であると推定される。これらの古墳の近くで作られた埴輪である可能性が高い。また第39図と比較すると、これらの埴輪は、にんごう２号墳の埴輪の分布とは少し異なる位置に分布し、別場所で作られた埴輪であることを示している。この分布図では平成６年度に分析した試料もプロットしてある。

第41図には志保遺跡出土埴輪の両分布図を示す。K-Ca 分布図ではにんごう２号墳の埴輪と同じ所に分布するが、Rb-Sr 分布図では津領域の上にずれて分布し、同じ胎土ではないことを示す。このように同じ岩田川の支流に分布する古墳ではあるが、古墳ごとに埴輪は両分布図で微妙にずれて分布し、それぞれに埴輪胎土が異なることが分かる。つぎに、安濃川の支流域に分布する古墳出土埴輪の両分布図を示す。

第42図には殿村１号墳と殿村古墳群の埴輪の両分布図を示す。両者は重なって分布しており、埴輪胎土は同じであると考えられる。両分布図で津領域の右側にずれて分布する。

第43図には赤塚古墳、メクサ３号墳と元井池古墳の埴輪の両分布図を示す。それぞれ１点しかないが、殿村古墳群の埴輪と同じ胎土であるとみられる。

第44図には旧安濃町の迎山遺跡出土埴輪の両分布図を示す。この図にも平成６年度に分析した埴輪のデータをプロットしてある。今回分析した埴輪の分布位置と重なった所に分布しており、同じ胎土の埴輪である。また、須恵質埴輪と土師質埴輪も重なって分布していて、同じ素材粘土で作った埴輪である。ただ、焼成の具合で須恵質埴輪になったり、土師質埴輪になったりしたのであろう。素材粘土は同じである。両分布図で志保遺跡の埴輪と同じ位置に分布していることが、第40図と比較すると分かる。

つぎに、安濃川のもう一つの支流にそって分布する古墳出土埴輪の両分布図を示す。

第45図に門脇北古墳出土埴輪の両分布図を示す。全体によくまとまって分布しており、同じ所で作られた埴輪である。少しばらついて分布する埴輪が数点あるが、全体として津領域に対応しており、同じ場所で同じ素材粘土を用いて作られた埴輪であることを示している。第43図に示した赤塚古墳の埴輪の両分布図は、門脇北古墳の埴輪とほぼ重なって分布し、胎土は同じであることを示している。

第46図には西河辺古墳と堂山１号墳の埴輪の両分布図を示す。堂山１号墳の埴輪は１点しかないが、両分布図での分布位置からみて、西河辺古墳の埴輪と同じ胎土であることを示している。近接して分布する古墳であるので、このデータは理解できる。また第45図と比較すると、これらの古墳出土埴輪は門脇北古墳の埴輪と、両分布図でほぼ同じ位置に分布しており、胎土は同じである。

第47図には明合古墳の埴輪の両分布図を示す。津領域内に分布し、門脇北古墳や赤塚古墳の埴輪の胎土とは少し異なる胎土であることを示している。

第48図にはヲノ坪遺跡出土埴輪の両分布図を示す。津領域に分布するが、Ca と Sr が他の古墳の埴輪に比べてやや少なく、上述した他の古墳の埴輪の

胎土とは少し異なる。

第49図には西岡古墳出土埴輪の両分布図を示す。両分布図で津領域の右側にずれて分布する埴輪が多い。円筒埴輪と朝顔形埴輪も重なって分布しており、同じ胎土であると判断される。

第50図には日余１号墳の埴輪の両分布図を示す。第49図と比較すると、両古墳の埴輪はCaとSrが比較的多く、両分布図で類似した位置に分布しており、他の古墳の埴輪とは異なる胎土をもつ。古墳の近くの粘土が素材となったと推定される。

第51図には大里西沖遺跡出土埴輪の両分布図を示す。この遺跡は志登茂川の支流域に所在する遺跡であるが、埴輪は両分布図で津領域に分布する。

このように、津市域の古墳出土埴輪の多くは両分布図で津領域に分布し、津市域内で作られた埴輪であることを示している。中には津領域の右側に少しずれて分布した埴輪もあったが、この分布の違いは同じ地域内における粘土の不均質性によるものなのか、それとも他の地域から持ち込まれた埴輪であるのかの判断は現時点では出来ない。第49図と第50図の西岡古墳や日余１号墳の埴輪のように、近接して分布する古墳の埴輪の胎土がほぼ同じ胎土であるところから、外部から持ち込まれた埴輪というよりも、津市域内における粘土の不均質性による分布位置の違いであり、それぞれの古墳周辺で作られた埴輪である可能性のほうが高いとみられる。次に津市域以外の他域の古墳出土埴輪の両分布図を示す。いずれも以前に分析したデータである。

第52図と第53図は伊賀市の古墳出土埴輪の両分布図である。津領域の端に分布し、津市域の古墳出土埴輪の胎土とは少し異なるが、類似した化学特性をもつことは確かである。第52図と第53図を比較すると、石山古墳、車塚古墳、王塚古墳の埴輪の胎土は同じであるが、新堂古墳の埴輪は両分布図での分布位置が、第52図の３古墳の埴輪の分布位置とは異なる。別胎土である。

第54図、第55図には亀山市の古墳出土埴輪の両分布図を示す。城山古墳と木ノ下古墳の埴輪は、それぞれ２群に分かれる可能性がある。また、木ノ下古墳では円筒埴輪と形象埴輪の胎土が同じであることを示している。

第56～58図には名張市の古墳出土埴輪の両分布図を示す。第56図の馬塚古墳と第57図の娘塚古墳の埴輪は津領域に分布するが、第58図の殿塚古墳、貴人塚古墳の埴輪は津領域の右側に少しずれて分布する。前二者とは異なる胎土の埴輪である。両分布図でこの領域に分布した埴輪は、第49図の津市域の西岡古墳と第50図の日余１号墳の埴輪である。同じ所で作られた可能性もあるが、三重地域内の粘土の不均質性による地域差の可能性もある。埴輪の形式や製作技法の比較研究も必要である。

第59図と第60図には、松阪市の古墳出土埴輪の両分布図を示す。第59図の宝塚２号墳、高地蔵１号墳の埴輪と、第60図の宝塚１号墳の埴輪胎土は異なる。別胎土であると考えられる。宝塚１号墳と２号墳は時期的にも異なるので、胎土も異なることは十分理解出来る。両者の共通点はRbの値が比較的低いことである。もしかしたらこれが松阪市域の古墳の埴輪の胎土の特徴かもしれない。今後の研究課題である。

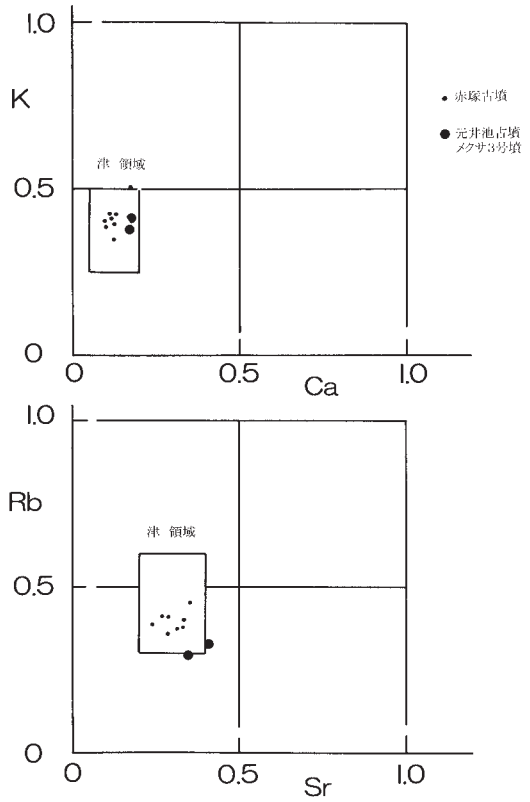
第61図には明和町の高塚古墳の埴輪の両分布図を示す。明らかに津領域には対応しないことが分かる。K、Ca、Rb、Srの４因子で、三重県内の他の地域の古墳出土埴輪に比較して少ない。これが明和町の古墳出土埴輪の特徴であると考えられる。

以上にみてきたように津市、伊賀市、亀山市、名張市域の古墳出土埴輪は、両分布図で津領域にほぼ対応し類似した化学特性をもつことが分かった。同じ三重県内で作られた埴輪で、外部地域から搬入された埴輪はないと考えられる。ただ、古墳ごとに両分布図での分布位置は微妙に異なり、それぞれに作られた埴輪である可能性が高い。もしそうであれば、埴輪の形式や製作技法も古墳ごとに異なる可能性がある。

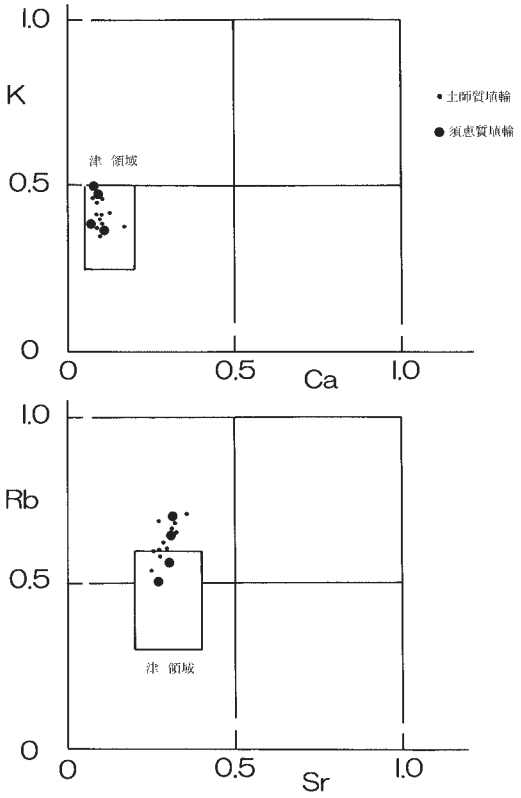
最後に窯跡出土埴輪の両分布図を示しておく。

第62図には津市の藤谷窯跡群出土埴輪の両分布図を示す。大部分の埴輪は津領域にまとまって分布することが分かる。Ca、Srが多く、津領域をずれる№72、79、83の試料の化学特性は理解しがたい。

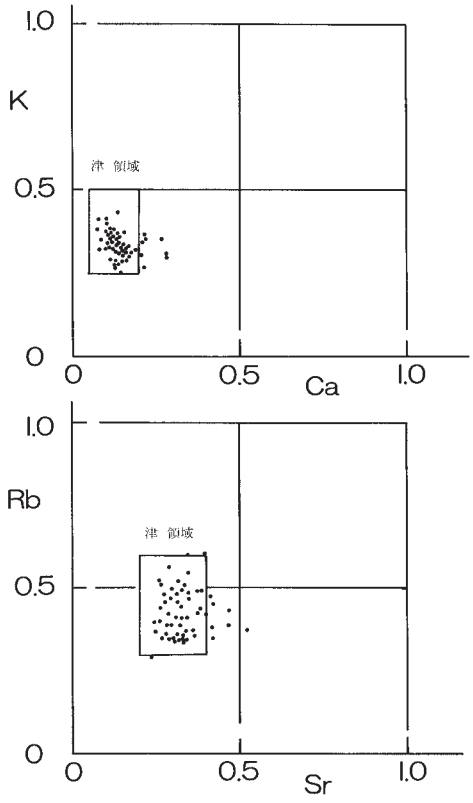
第63図には鈴鹿市の稲生山窯跡群出土埴輪の両分布図を示す。須恵質埴輪も土師質埴輪も混在して分布するところから、同じ胎土であることが分かる。



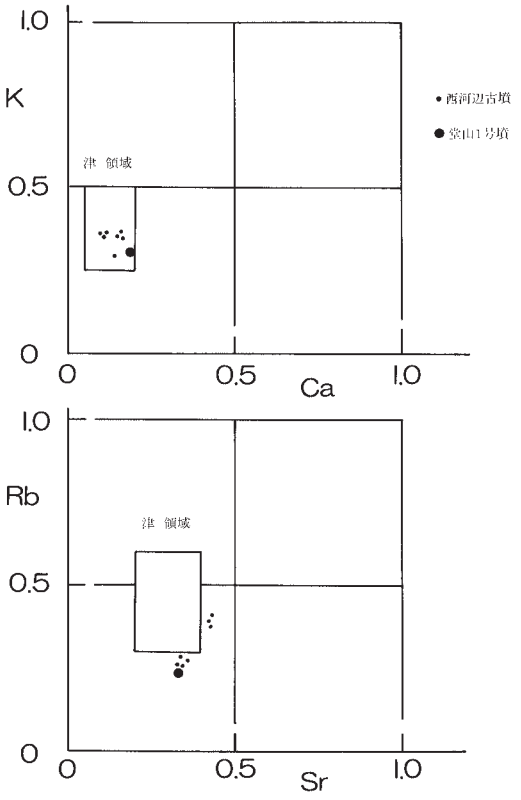
第43図　赤塚古墳、元井池古墳、メクサ３号墳出土埴輪の両分布図



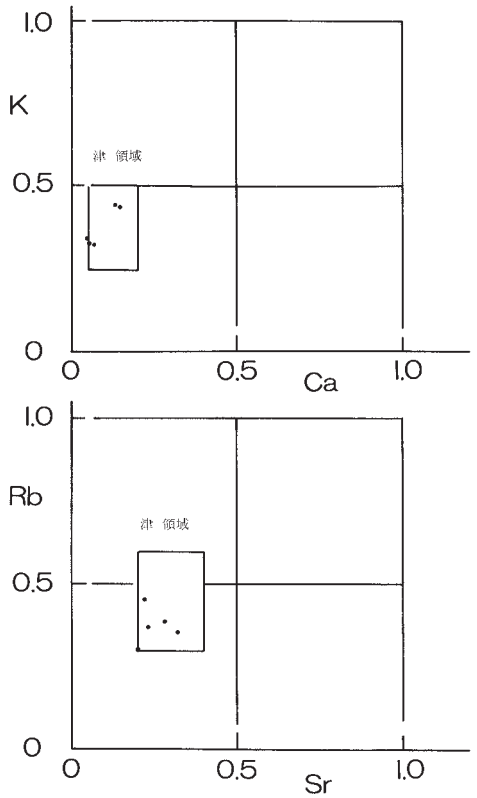
第44図　迎山遺跡出土埴輪の両分布図



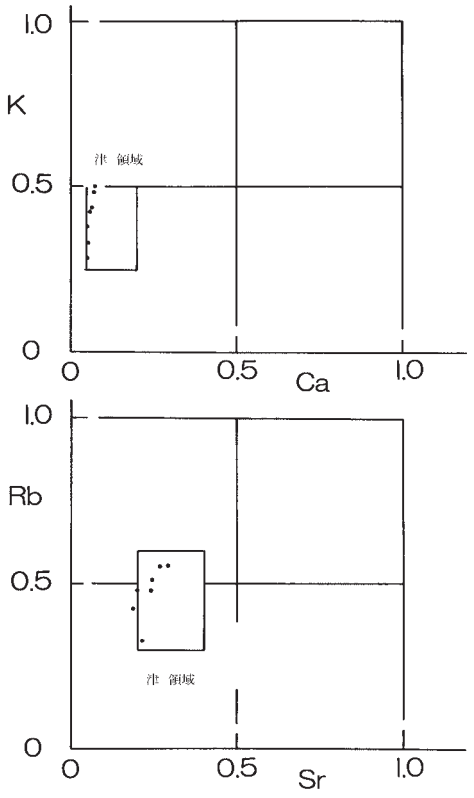
第45図　門脇北古墳出土埴輪の両分布図



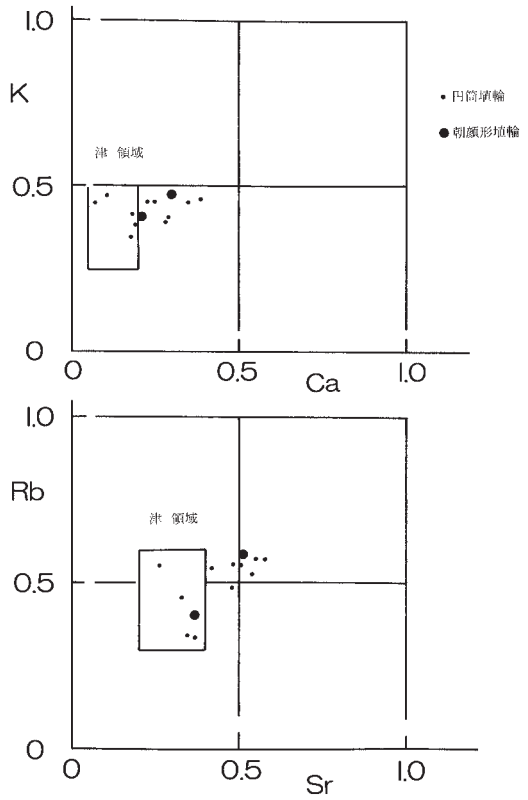
第46図　西河辺古墳、堂山１号墳出土埴輪の両分布図



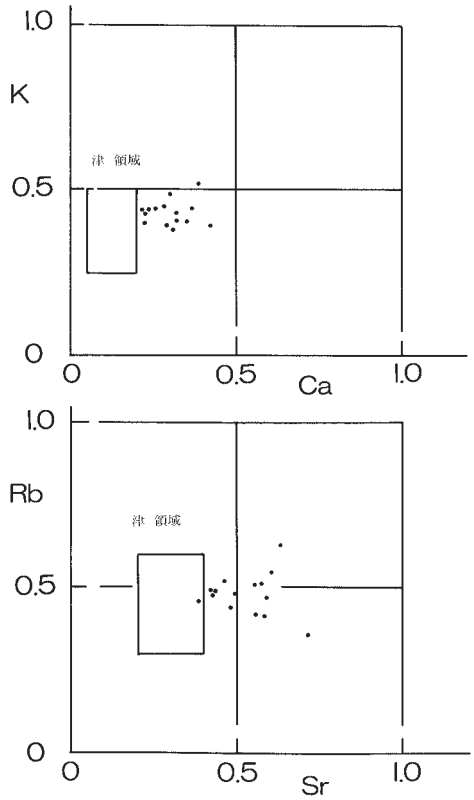
第47図　明合古墳出土埴輪の両分布図



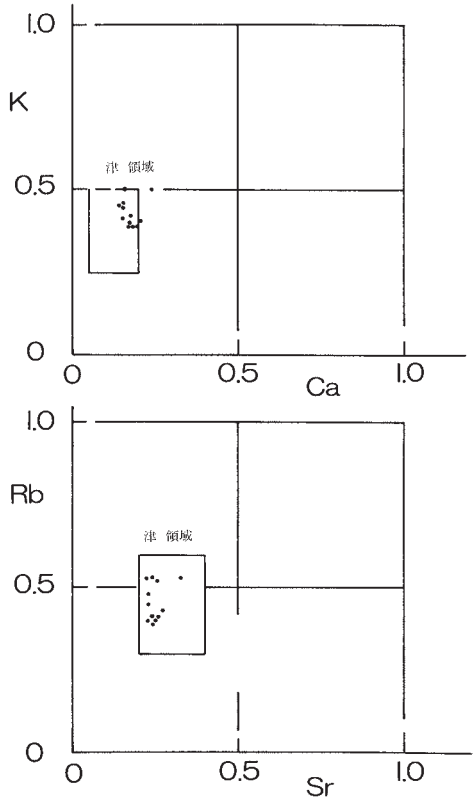
第48図　ヲノ坪遺跡出土埴輪の両分布図



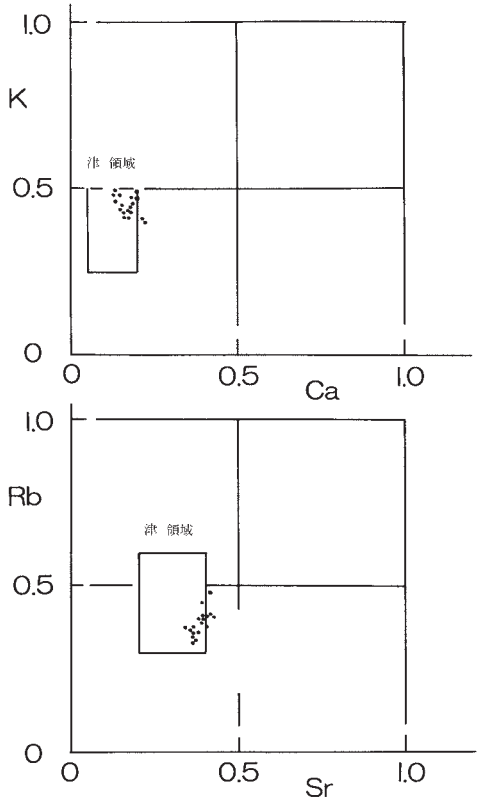
第49図　西岡古墳出土埴輪の両分布図



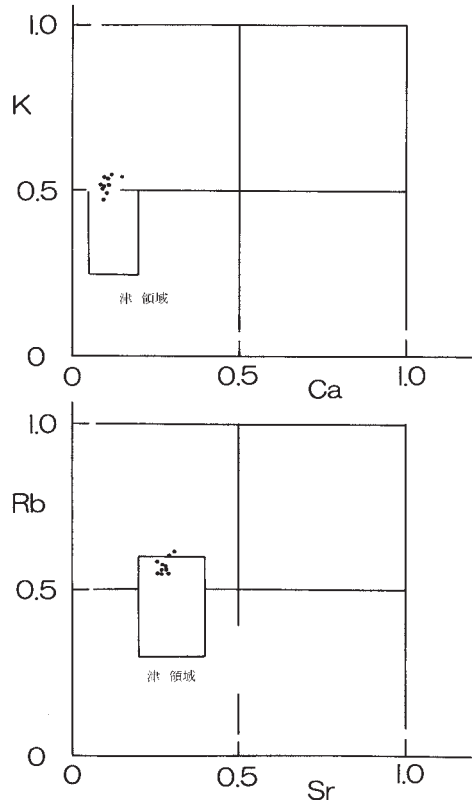
第50図　日余１号墳出土埴輪の両分布図



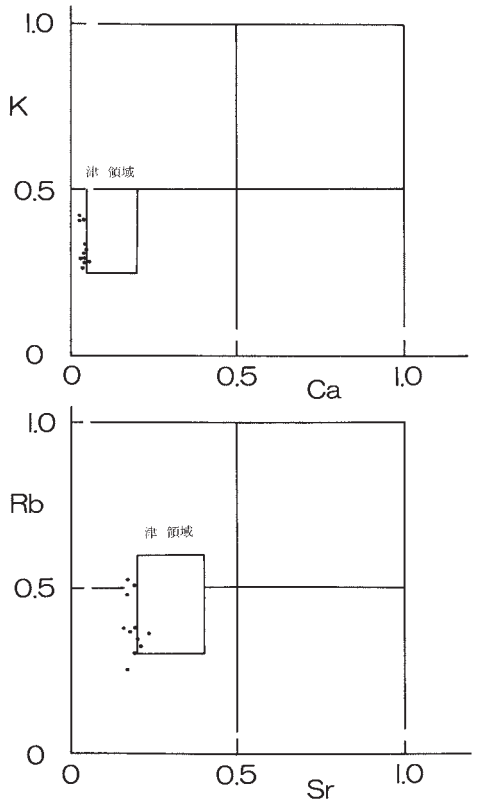
第51図　大里西沖遺跡出土埴輪の両分布図



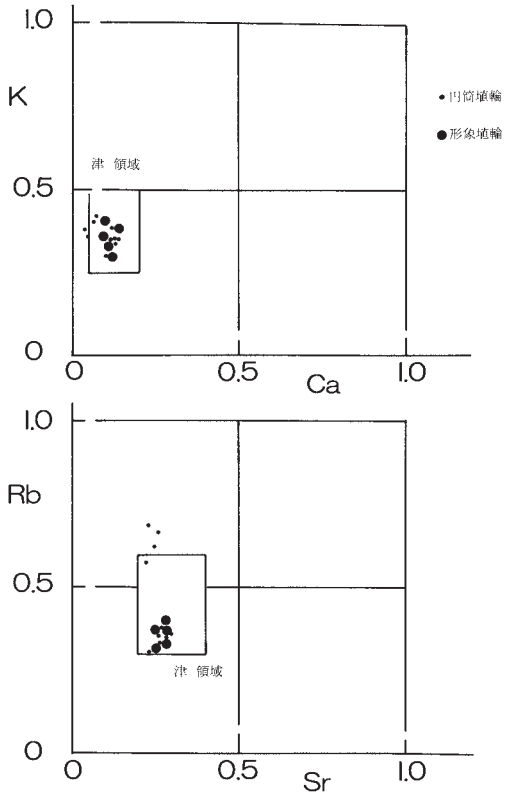
第52図　石山古墳、車塚古墳、王塚古墳(伊賀市)出土埴輪の両分布図



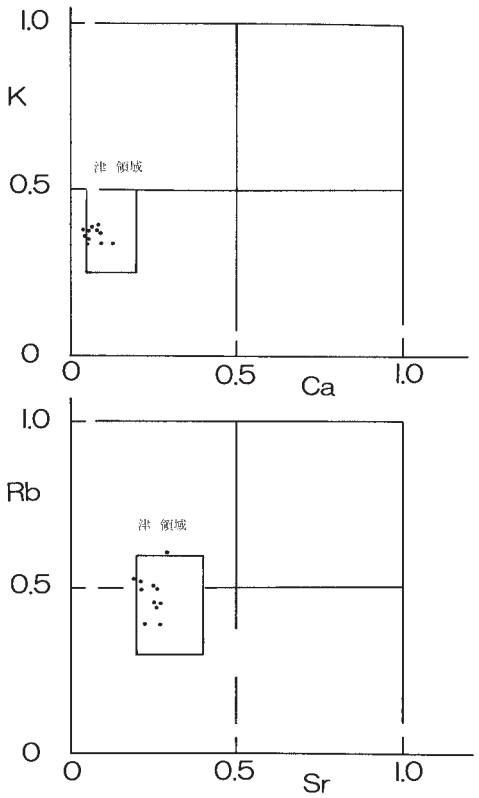
第53図　新堂古墳(伊賀市)出土埴輪の両分布図



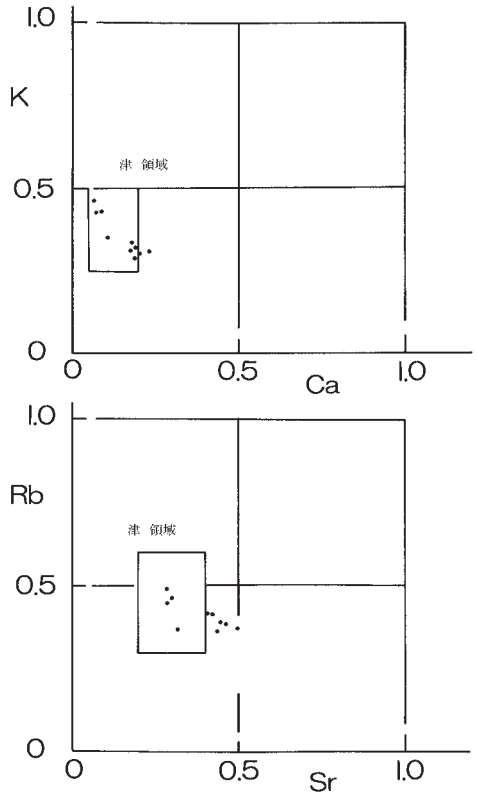
第54図　城山古墳(亀山市)出土埴輪の両分布図



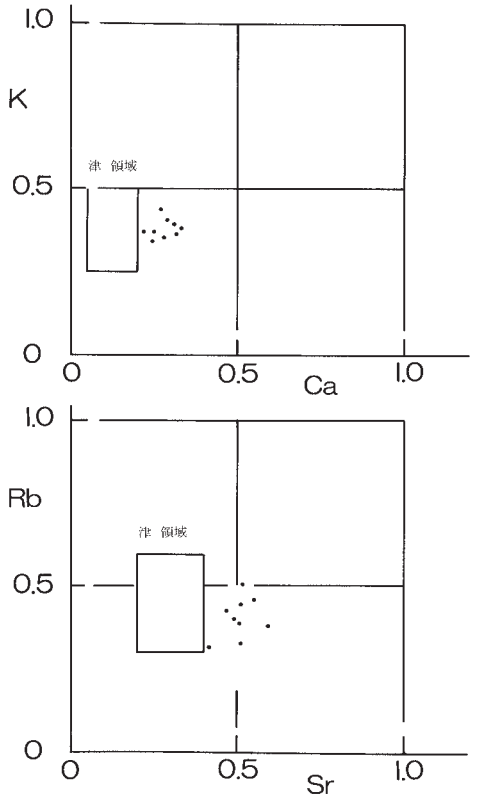
第55図　木ノ下古墳(亀山市)出土埴輪の両分布図



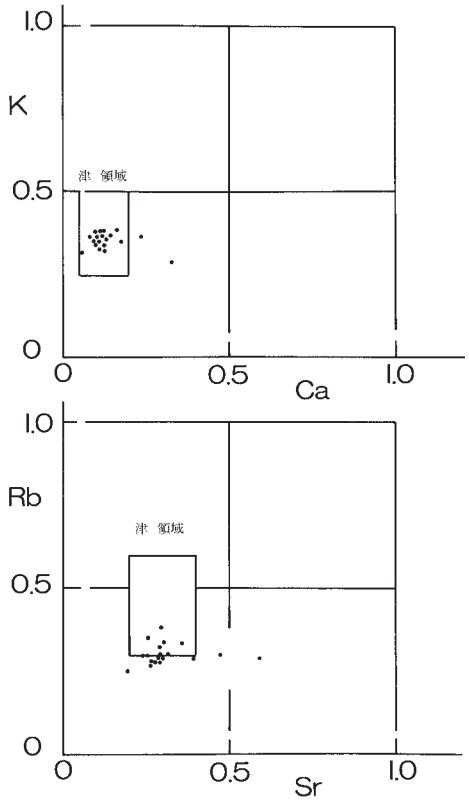
第56図　馬塚古墳(名張市)出土埴輪の両分布図



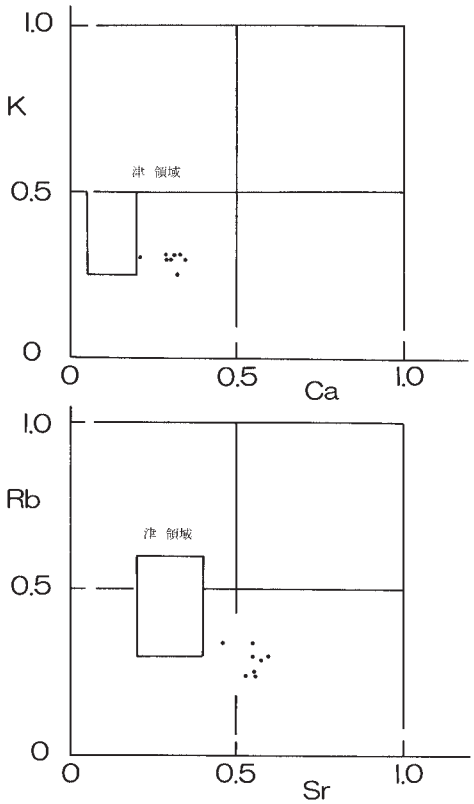
第57図　娘塚古墳(名張市)出土埴輪の両分布図



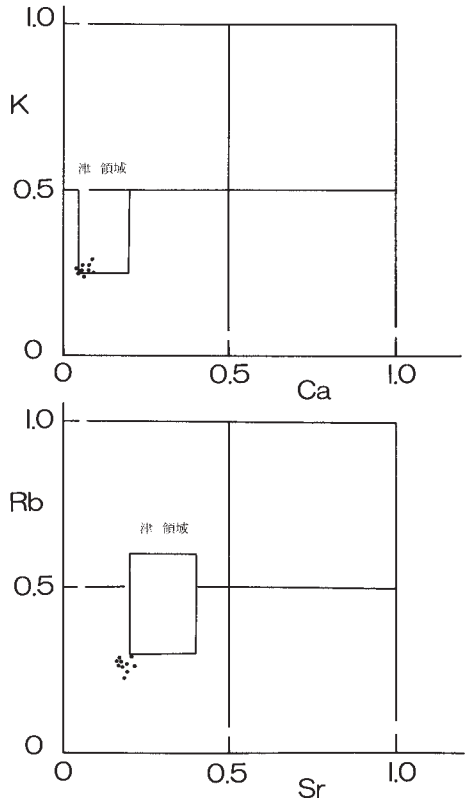
第58図　殿塚古墳、貴人塚古墳(名張市)
出土埴輪の両分布図



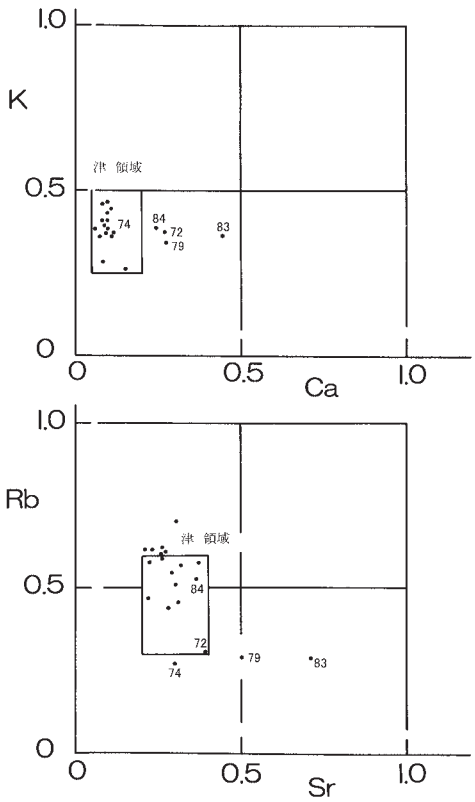
第59図　宝塚２号墳、高地蔵１号墳（松阪市）出土埴輪の両分布図



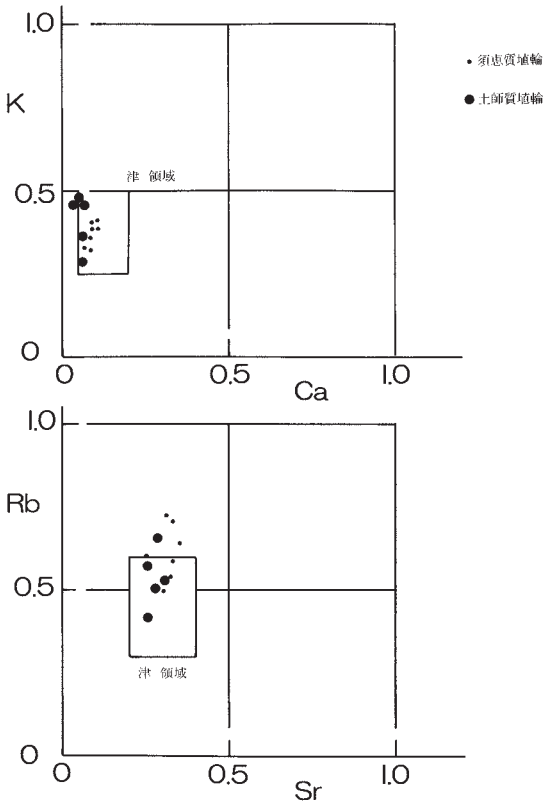
第60図　宝塚１号墳（松阪市）出土埴輪の両分布図



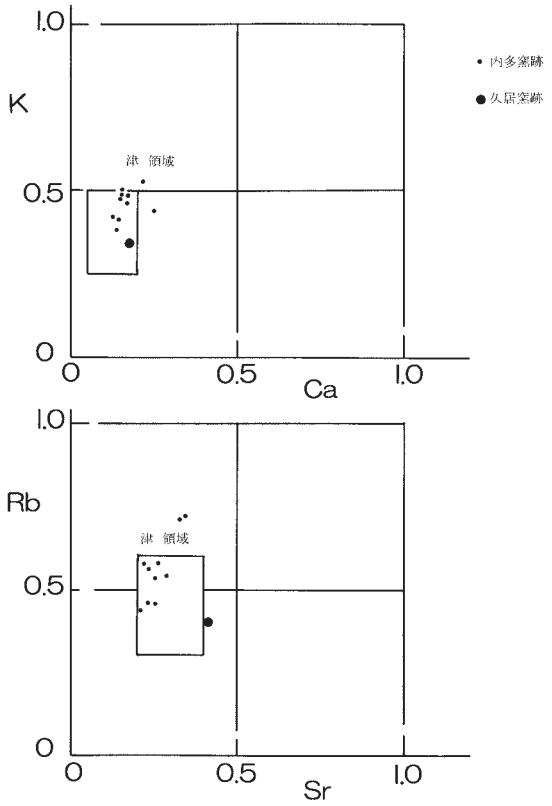
第61図　高塚古墳（明和町）出土埴輪の両分布図



第62図　藤谷窯跡群出土埴輪の両分布図



第63図　稲生山窯跡群（鈴鹿市）出土埴輪の両分布図



第64図　内多窯跡、久居窯跡群出土埴輪の両分布図

また第62図と比較すると、藤谷窯跡群の埴輪の胎土と類似していることが分かる。このことは津市域と鈴鹿市域の粘土が、大きな地域差がないことを示している。

第64図には久居窯跡群、内多窯跡出土埴輪の両分布図を示す。内多窯跡の埴輪の多くも平成４年度に測定したデータである。津領域の端に分布し、藤谷窯跡群の埴輪と胎土は少し異なる。ただ内多窯跡の埴輪にはFeが多く、Fe因子で他の窯跡出土埴輪と識別できるが、Fe因子についてはその地域差の原因が十分研究されていない。今後の研究課題である。

今回の蛍光Ｘ線分析では、三重県内全域の古墳、窯跡出土埴輪の胎土を概観した訳であるが、長石系因子を比較する限りいずれも類似した胎土をもっており、明確に異なる胎土をもつ埴輪は少なかった。恐らく、鈴鹿山脈を構成する同じ花崗岩類に由来する粘土が素材となっていることが、その原因であると推定される。したがって母岩の違いが地域差となったのではなく、自然界に分布する粘土の不均質性が原因となって、両分布図における分布が古墳ごとに微妙に異なったのではないかと考えられた。多くの古墳出土埴輪は古墳ごとに作られた埴輪である可能性が高い。埴輪の大規模な窯跡群が三重県内にないことも、そう考えることの理由の一つである。数ヶ所でいずれも数基程度の埴輪窯跡が発見されているが、その近くの古墳へ供給されていた可能性が高い。他の古墳では、埴輪窯跡が残っていないだけではないかと考えられる。今後、古墳の年代や地域ごとに分けて、埴輪の形式・製作技法や胎土分析のデータを集積し整理していけば、考古学的に有意な情報が得られる可能性がある。　（三辻）

【参考文献】

三辻利一「新しい土器の考古学」同成社　2013年

第６表　胎土分析値一覧表１

番号	遺跡名	報告書番号	胎土分析実測番号	三辻研No.	質	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	にんごう２号墳	10	035-01	25-938	土師質	0.376	0.078	2.60	0.446	0.283	0.099
2	にんごう２号墳	14	035-03	939	土師質	0.393	0.133	2.55	0.603	0.329	0.125
3	にんごう２号墳	14	035-02	940	土師質	0.408	0.159	2.63	0.472	0.417	0.109
4	にんごう２号墳	20	035-04	941	土師質	0.345	0.089	2.83	0.292	0.266	0.093
5	にんごう２号墳	21	035-05	942	土師質	0.370	0.084	2.76	0.325	0.276	0.102
6	にんごう２号墳	23	035-07	943	土師質	0.407	0.071	3.25	0.426	0.242	0.089
7	にんごう２号墳	23	035-06	944	土師質	0.423	0.103	3.13	0.389	0.290	0.095
8	にんごう２号墳	23	035-08	945	土師質	0.455	0.113	3.37	0.366	0.293	0.128
9	にんごう２号墳	24	036-01	946	土師質	0.422	0.101	3.07	0.349	0.297	0.120
10	にんごう２号墳	25	036-02	947	土師質	0.424	0.074	3.09	0.377	0.259	0.070
11	にんごう２号墳	26	036-03	948	土師質	0.406	0.090	3.34	0.394	0.273	0.106
12	にんごう２号墳	27	036-04	949	土師質	0.408	0.072	2.65	0.406	0.271	0.116
13	にんごう２号墳	29	036-05	950	土師質	0.381	0.069	2.57	0.435	0.247	0.103
14	にんごう２号墳	29	036-06	951	土師質	0.386	0.080	2.46	0.447	0.274	0.120
15	にんごう２号墳	32	036-07	952	土師質	0.393	0.109	2.43	0.382	0.317	0.144
16	にんごう２号墳	33	036-08	953	土師質	0.403	0.085	1.90	0.431	0.311	0.145
17	にんごう２号墳	34	037-01	954	土師質	0.392	0.093	1.91	0.433	0.334	0.145
18	にんごう２号墳	39	037-03	955	土師質	0.415	0.097	3.10	0.377	0.270	0.103
19	にんごう２号墳	39	037-02	956	土師質	0.429	0.096	3.38	0.363	0.277	0.119
20	にんごう２号墳	39	037-04	957	土師質	0.418	0.092	3.37	0.375	0.284	0.119
21	にんごう２号墳	42	037-05	958	土師質	0.397	0.092	3.10	0.402	0.293	0.116
22	にんごう２号墳	43	037-08	959	土師質	0.437	0.125	1.41	0.461	0.398	0.215
23	にんごう２号墳	43	037-07	960	土師質	0.421	0.127	1.36	0.438	0.407	0.176
24	にんごう２号墳	43	037-06	961	土師質	0.423	0.126	1.39	0.462	0.404	0.190
25	にんごう２号墳	44	038-01	962	土師質	0.432	0.137	1.32	0.440	0.436	0.207
26	にんごう２号墳	50	038-02	963	土師質	0.392	0.173	1.47	0.315	0.463	0.190
27	にんごう２号墳	56	038-03	964	土師質	0.464	0.150	1.35	0.415	0.477	0.195
28	にんごう２号墳	57	038-04	965	土師質	0.481	0.143	1.23	0.501	0.459	0.239
29	にんごう２号墳	58	038-05	966	土師質	0.403	0.171	1.38	0.316	0.463	0.191
30	にんごう２号墳	74	038-06	967	土師質	0.493	0.149	1.21	0.476	0.505	0.263
31	にんごう２号墳	86	038-08	968	土師質	0.489	0.158	1.22	0.481	0.476	0.253
32	にんごう２号墳	77	038-07	969	土師器	0.395	0.192	2.57	0.332	0.347	0.128
33	にんごう２号墳		039-01	970	土師質	0.401	0.150	2.52	0.547	0.370	0.128
34	にんごう２号墳		039-02	971	土師質	0.395	0.142	2.39	0.603	0.379	0.132
35	にんごう２号墳		039-03	972	土師質	0.411	0.149	2.02	0.619	0.395	0.140
36	にんごう２号墳		039-04	973	土師質	0.381	0.084	2.07	0.382	0.287	0.140
37	にんごう２号墳		039-05	974	土師質	0.371	0.075	2.61	0.344	0.275	0.097
38	にんごう２号墳		039-06	975	土師質	0.402	0.083	2.44	0.391	0.275	0.112
39	にんごう２号墳		039-07	976	土師質	0.377	0.078	2.48	0.381	0.277	0.118
40	にんごう２号墳		039-08	977	土師質	0.365	0.077	2.83	0.328	0.273	0.088
41	にんごう２号墳		040-01	978	土師質	0.435	0.093	3.35	0.381	0.283	0.113
42	にんごう２号墳		040-02	979	土師質	0.486	0.156	1.24	0.479	0.446	0.255
43	にんごう２号墳		040-03	980	土師質	0.439	0.119	1.41	0.471	0.394	0.187
44	にんごう２号墳		040-04	981	土師質	0.440	0.144	1.23	0.464	0.408	0.203
45	にんごう２号墳		040-05	982	土師質	0.446	0.084	2.99	0.386	0.263	0.083
46	にんごう２号墳		040-06	983	土師質	0.373	0.073	2.54	0.435	0.243	0.113
47	にんごう２号墳		040-07	984	土師質	0.470	0.144	1.28	0.450	0.433	0.207
48	にんごう２号墳		040-08	985	土師質	0.403	0.067	2.92	0.380	0.246	0.093
49	にんごう２号墳		041-01	986	土師質	0.369	0.071	2.67	0.339	0.260	0.091
50	にんごう２号墳		041-02	987	土師質	0.404	0.076	2.92	0.389	0.243	0.089

第７表　胎土分析値一覧表２

番号	遺跡名	報告書番号	胎土分析実測番号	三辻研No.	質	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
51	にんごう２号墳		041-03	988	土師質	0.395	0.081	2.43	0.399	0.286	0.113
52	にんごう２号墳		041-04	989	土師質	0.471	0.125	1.39	0.504	0.420	0.213
53	にんごう２号墳		041-05	990	土師質	0.381	0.081	2.38	0.407	0.256	0.108
54	にんごう２号墳		041-06	991	土師質	0.411	0.069	3.30	0.368	0.256	0.070
55	にんごう２号墳		041-07	992	土師質	0.469	0.152	1.25	0.475	0.438	0.249
56	にんごう２号墳		041-08	993	土師質	0.491	0.148	1.22	0.447	0.415	0.247
57	にんごう２号墳		041-09	994	土師質	0.490	0.147	1.20	0.486	0.438	0.238
58	にんごう２号墳		042-01	995	土師質	0.467	0.149	1.24	0.486	0.450	0.238
59	にんごう２号墳		042-02	996	土師質	0.400	0.072	2.91	0.405	0.250	0.103
60	にんごう２号墳		042-03	997	土師質	0.372	0.069	2.51	0.394	0.267	0.092
61	にんごう２号墳		042-04	998	土師質	0.385	0.080	2.53	0.485	0.266	0.115
62	にんごう２号墳		042-05	999	土師質	0.431	0.072	3.02	0.388	0.247	0.102
63	にんごう２号墳		042-06	1000	土師質	0.416	0.144	2.39	0.554	0.359	0.119
64	にんごう２号墳		042-07	1001	土師質	0.437	0.131	1.79	0.585	0.348	0.119
65	にんごう２号墳		042-08	1002	土師質	0.433	0.104	2.60	0.398	0.331	0.136
66	藤谷窯跡群	6	043-01	1003	土師質	0.386	0.114	2.10	0.545	0.285	0.094
67	藤谷窯跡群	11	043-03	1004	硬質	0.537	0.127	1.31	0.576	0.372	0.093
68	藤谷窯跡群	45	043-04	1005	硬質	0.361	0.074	1.45	0.454	0.309	0.094
69	藤谷窯跡群	49	044-01	1006	硬質	0.437	0.104	1.25	0.706	0.301	0.150
70	藤谷窯跡群	54	044-02	1007	硬質	0.406	0.083	1.41	0.594	0.257	0.123
71	藤谷窯跡群	99	044-03	1008	硬質	0.434	0.100	2.02	0.581	0.219	0.081
72	藤谷窯跡群		045-02	1009	須恵質	0.371	0.268	2.97	0.306	0.394	0.188
73	藤谷窯跡群		043-02	1010	土師質	0.380	0.056	1.79	0.517	0.207	0.069
74	藤谷窯跡群		045-03	1011	土師質（裏面やや硬質）	0.370	0.111	3.43	0.270	0.301	0.072
75	藤谷窯跡群		048-01	1012	硬質	0.277	0.082	2.69	0.468	0.221	0.072
76	藤谷窯跡群		046-01	1013	須恵質	0.393	0.086	1.80	0.623	0.257	0.101
77	藤谷窯跡群		045-01	1014	硬質	0.461	0.098	1.41	0.566	0.324	0.113
78	藤谷窯跡群		046-02	1015	須恵質	0.384	0.096	1.52	0.615	0.269	0.117
79	藤谷窯跡群		046-04	1016	須恵質	0.344	0.274	1.98	0.291	0.501	0.179
80	藤谷窯跡群		048-03	1017	硬質	0.368	0.090	1.87	0.605	0.259	0.105
81	藤谷窯跡群		048-02	1018	硬質	0.459	0.082	2.03	0.617	0.233	0.050
82	藤谷窯跡群		047-01	1019	土師質	0.259	0.148	2.47	0.440	0.281	0.071
83	藤谷窯跡群		047-02	1020	土師質	0.358	0.440	1.76	0.287	0.710	0.262
84	藤谷窯跡群		046-05	1021	須恵質	0.376	0.241	2.58	0.532	0.358	0.149
85	藤谷窯跡群		046-03	1022	須恵質	0.411	0.092	1.51	0.506	0.304	0.111
86	内多窯跡		049-01	1023	硬質	0.493	0.148	3.59	0.537	0.246	0.132
87	内多窯跡		049-02	1024	硬質	0.422	0.138	3.86	0.459	0.251	0.109
88	内多窯跡		059-03	1025	硬質	0.497	0.154	4.81	0.575	0.218	0.094
89	久居古窯跡		049-05	1026	須恵質	0.338	0.169	1.57	0.402	0.413	0.128
90	ヲノ坪遺跡		050-02	1027	やや硬質の土師質	0.426	0.057	2.31	0.479	0.239	0.094
91	ヲノ坪遺跡		050-03	1028	須恵質	0.427	0.062	1.86	0.517	0.244	0.093
92	ヲノ坪遺跡		050-01	1029	土師質	0.333	0.053	2.80	0.429	0.184	0.068
93	ヲノ坪遺跡		050-04	1030	土師質	0.279	0.051	2.33	0.327	0.206	0.056
94	ヲノ坪遺跡		050-06	1031	須恵質	0.376	0.049	3.04	0.486	0.195	0.073
95	ヲノ坪遺跡		050-05	1032	須恵質	0.485	0.073	2.09	0.555	0.270	0.125
96	ヲノ坪遺跡		063-01	1033	土師質	0.504	0.071	1.85	0.555	0.285	0.095
97	明合古墳		052-01	1034	土師質	0.326	0.055	2.65	0.300	0.196	0.038
98	明合古墳		051-02	1035	土師質	0.443	0.130	2.87	0.385	0.280	0.159
99	明合古墳		051-04	1036	硬質	0.335	0.047	2.06	0.450	0.218	0.063
100	明合古墳		051-01	1037	土師質	0.320	0.062	2.28	0.370	0.230	0.058

第８表　胎土分析値一覧表３

番号	遺跡名	報告書番号	胎土分析実測番号	三辻研No.	質	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
101	明合古墳		051-03	1038	土師質	0.440	0.145	2.97	0.355	0.321	0.153
102	稲葉３号墳	13	053-01	1039	土師質	0.301	0.108	2.30	0.574	0.258	0.094
103	稲葉３号墳	14	053-03	1040	須恵質	0.330	0.102	2.09	0.581	0.278	0.083
104	稲葉３号墳	30	053-04	1041	土師質	0.276	0.107	2.38	0.567	0.240	0.082
105	稲葉３号墳	37	053-02	1042	硬質	0.312	0.079	2.07	0.466	0.274	0.071
106	稲葉３号墳		054-01	1043	土師質	0.469	0.084	2.33	0.615	0.280	0.123
107	稲葉３号墳		053-05	1044	硬質	0.262	0.119	2.48	0.525	0.261	0.087
108	稲葉３号墳		054-02	1045	土師質	0.297	0.095	2.82	0.470	0.235	0.078
109	稲葉４号墳	21	054-03	1046	硬質	0.245	0.100	2.73	0.470	0.234	0.062
110	稲葉４号墳	31	054-04	1047	土師質	0.232	0.073	2.57	0.330	0.219	0.053
111	稲葉５号墳	17	054-05	1048	須恵質	0.233	0.081	2.45	0.475	0.209	0.068
112	稲葉５号墳	20	054-06	1049	硬質	0.294	0.110	2.47	0.413	0.309	0.087
113	稲葉５号墳	21	054-07	1050	土師質	0.441	0.101	2.19	0.559	0.319	0.125
114	稲葉５号墳	22	055-01	1051	土師質	0.286	0.087	2.28	0.529	0.229	0.073
115	稲葉５号墳	23	055-02	1052	硬質	0.367	0.103	2.00	0.593	0.302	0.109
116	稲葉５号墳	26	055-03	1053	硬質	0.420	0.114	2.34	0.671	0.307	0.149
117	鎌切６号墳	5	055-04	1054	硬質	0.282	0.070	2.05	0.464	0.206	0.073
118	殿村１号墳		055-05	1055	硬質	0.250	0.156	2.59	0.260	0.321	0.094
119	殿村１号墳		055-06	1056	硬質	0.424	0.192	4.64	0.480	0.272	0.096
120	殿村１号墳		055-07	1057	土師質	0.314	0.214	1.50	0.263	0.447	0.135
121	殿村古墳群　不明2		056-01	1058	土師質	0.417	0.314	2.71	0.277	0.616	0.208
122	殿村古墳群　不明2		056-02	1059	土師質	0.387	0.194	2.68	0.263	0.442	0.141
123	西河辺古墳		内04	1060	土師質	0.366	0.157	1.52	0.395	0.418	0.182
124	西河辺古墳		049-03	1061	土師質	0.364	0.117	2.50	0.266	0.363	0.121
125	堂山１号墳	27	057-01	1062	須恵質	0.300	0.190	2.29	0.238	0.327	0.143
126	元井池古墳	12-2	057-02	1063	やや硬質・赤	0.379	0.168	3.41	0.295	0.346	0.120
127	メクサ３号墳	100	058-01	1064	土師質	0.414	0.179	2.81	0.328	0.414	0.166
128	赤塚古墳	4	059-02	1065	土師質	0.385	0.101	2.61	0.389	0.244	0.096
129	赤塚古墳	1	058-02	1066	土師質	0.426	0.109	1.85	0.403	0.335	0.167
130	赤塚古墳	6	059-01	1067	土師質	0.422	0.127	2.84	0.412	0.273	0.102
131	日余１号墳		063-03	1068	土師質	0.396	0.418	2.30	0.363	0.711	0.242
132	日余１号墳		060-04	1069	土師質	0.379	0.306	2.31	0.418	0.552	0.188
133	日余１号墳		063-02	1070	土師質	0.494	0.300	2.06	0.510	0.567	0.207
134	日余１号墳		060-03	1071	土師質	0.433	0.316	2.17	0.513	0.554	0.208
135	日余１号墳		062-02	1072	土師質	0.437	0.222	2.13	0.520	0.462	0.203
136	日余１号墳		062-01	1073	土師質	0.437	0.233	3.43	0.455	0.383	0.187
137	日余１号墳		061-01	1074	須恵質	0.444	0.359	2.08	0.546	0.600	0.237
138	日余１号墳		063-07	1075	須恵質	0.449	0.282	2.89	0.490	0.432	0.214
139	日余１号墳		063-06	1076	須恵質	0.391	0.285	2.64	0.438	0.477	0.210
140	日余１号墳		060-05	1077	硬質	0.401	0.222	2.50	0.493	0.422	0.168
141	日余１号墳		061-02	1078	硬質	0.518	0.381	1.65	0.632	0.633	0.278
142	日余１号墳		063-04	1079	硬質(やや須恵器に近い?)	0.436	0.255	2.50	0.476	0.487	0.202
143	日余１号墳		060-02	1080	硬質	0.438	0.216	3.03	0.485	0.420	0.159
144	日余１号墳		060-01	1081	硬質	0.406	0.351	2.16	0.468	0.590	0.229
145	日余１号墳		063-05	1082	硬質(やや須恵器に近い?)	0.410	0.323	2.75	0.412	0.584	0.192
146	志保遺跡		065-05	1083	土師質	0.405	0.103	2.26	0.641	0.315	0.106
147	志保遺跡		065-03	1084	土師質	0.495	0.069	1.17	0.666	0.306	0.101
148	志保遺跡		065-04	1085	土師質	0.454	0.121	1.71	0.646	0.317	0.120
149	志保遺跡		065-02	1086	土師質	0.446	0.109	2.64	0.606	0.294	0.113
150	志保遺跡		065-01	1087	土師質	0.483	0.085	0.795	0.639	0.323	0.102

第９表　胎土分析値一覧表４

番号	遺跡名	報告書番号	胎土分析実測番号	三辻研No.	質	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
151	迎山遺跡		064-05	1088	土師質	0.368	0.088	2.13	0.544	0.254	0.074
152	迎山遺跡		064-06	1089	土師質	0.408	0.101	1.87	0.610	0.301	0.087
153	迎山遺跡		064-01	1090	土師質	0.460	0.076	1.64	0.596	0.272	0.091
154	迎山遺跡		064-04	1091	土師質	0.354	0.095	2.20	0.577	0.268	0.091
155	迎山遺跡		064-02	1092	須恵質	0.403	0.096	2.19	0.627	0.278	0.114
156	迎山遺跡		064-07	1093	須恵質	0.374	0.173	2.06	0.715	0.355	0.149
157	迎山遺跡		064-03	1094	硬質	0.414	0.084	2.22	0.598	0.259	0.088
158	大里西沖遺跡		066-04	1095	土師質	0.410	0.152	4.73	0.412	0.238	0.072
159	大里西沖遺跡		067-03	1096	土師質	0.495	0.154	4.61	0.534	0.238	0.090
160	大里西沖遺跡		066-07	1097	土師質	0.457	0.151	4.29	0.532	0.232	0.086
161	大里西沖遺跡		066-06	1098	土師質	0.456	0.137	4.57	0.449	0.233	0.083
162	大里西沖遺跡	49	066-01	1099	土師質	0.394	0.184	4.59	0.409	0.250	0.072
163	大里西沖遺跡		066-05	1100	土師質	0.500	0.238	5.13	0.527	0.329	0.107
164	大里西沖遺跡		067-04	1101	土師質	0.454	0.148	3.70	0.481	0.230	0.090
165	大里西沖遺跡		067-01	1102	土師質	0.417	0.167	4.82	0.401	0.249	0.082
166	大里西沖遺跡		066-02	1103	土師質	0.397	0.168	4.43	0.401	0.227	0.072
167	大里西沖遺跡		066-03	1104	土師質	0.386	0.169	4.69	0.387	0.244	0.075
168	大里西沖遺跡		067-02	1105	須恵質	0.438	0.189	4.94	0.526	0.252	0.077
169	大里西沖遺跡		067-05	1106	硬質	0.414	0.199	4.48	0.433	0.271	0.089
170	高茶屋大垣内遺跡	83	068-03	1107	土師器	0.354	0.202	1.86	0.390	0.343	0.124
171	高茶屋大垣内遺跡	84	068-04	1108	土師器	0.384	0.241	1.44	0.431	0.423	0.169
172	高茶屋大垣内遺跡	88	068-05	1109	土師器	0.368	0.239	1.84	0.364	0.443	0.166
173	高茶屋大垣内遺跡	89	068-01	1110	土師器	0.390	0.236	2.09	0.384	0.431	0.158
174	高茶屋大垣内遺跡	91	068-02	1111	土師器	0.391	0.238	1.74	0.320	0.475	0.153
175	上野遺跡		073-01	1112	土師質	0.287	0.173	2.67	0.491	0.312	0.085
176	上野遺跡		074-01	1113	土師質	0.356	0.155	2.34	0.376	0.310	0.126
177	上野遺跡		073-02	1114	土師質	0.449	0.059	1.83	0.510	0.270	0.074
178	上野遺跡		074-02	1115	土師質	0.396	0.078	1.72	0.542	0.271	0.080
179	上野遺跡		073-03	1116	土師質	0.391	0.121	1.69	0.412	0.328	0.145
180	上野遺跡		073-04	1117	土師質	0.397	0.128	1.60	0.404	0.330	0.146
181	上野遺跡		075-01	1118	土師質	0.280	0.108	3.67	0.308	0.244	0.060
182	上野遺跡		075-02	1119	土師質	0.368	0.141	1.61	0.432	0.353	0.136
183	一色山古墳群		069-03	1120	土師質	0.281	0.061	1.38	0.353	0.235	0.074
184	一色山古墳群		070-01	1121	土師質	0.336	0.069	1.36	0.384	0.288	0.084
185	一色山古墳群		069-02	1122	土師質	0.403	0.068	1.31	0.425	0.333	0.093
186	一色山古墳群		071-01	1123	須恵質(硬質)	0.441	0.112	1.28	0.562	0.347	0.155
187	一色山古墳群		069-01	1124	土師質	0.370	0.095	1.49	0.386	0.323	0.097
188	一色山古墳群		070-02	1125	土師質	0.390	0.131	1.54	0.421	0.374	0.112
189	一色山古墳群		070-04	1126	土師質	0.453	0.077	1.47	0.458	0.320	0.117
190	一色山古墳群		070-03	1127	土師質	0.275	0.062	1.46	0.336	0.243	0.067
191	一色山古墳群		069-04	1128	土師質	0.332	0.068	1.36	0.395	0.275	0.091
192	庄田２号墳		072-02	1129	須恵質	0.285	0.079	2.09	0.523	0.241	0.071
193	庄田２号墳		072-03	1130	硬質	0.328	0.088	1.99	0.570	0.227	0.096
194	庄田２号墳		072-04	1131	土師質	0.440	0.082	1.33	0.573	0.322	0.110
195	庄田２号墳		072-01	1132	土師質	0.447	0.067	1.86	0.593	0.270	0.093

4　分析結果を受けて

目的のところで述べたように、にんごう２号墳出土埴輪を通して、安濃川流域を中心とした埴輪の生産・流通体制を明らかにすべく、三辻氏に分析を依頼した。三辻氏の報告の中でもあるように、胎土分析のデータと合わせて埴輪の形式や製作技法のデータ集積・整理が必要である。そこでまず、三重県の埴輪に関する研究状況を確認する。その上で、今回分析を依頼した埴輪類を生産遺跡出土資料、それ以外の遺跡（消費地）出土資料に分けて考古学的に検討し、胎土分析結果との比較を試みる。そして今後の課題を焙り出していくこととする。

（１）三重県の埴輪に関する研究史（抄）

伊勢地方の円筒埴輪については竹内英昭[15]、鈴木敏則[16]、穂積裕昌[17]、豊田祥三[18]による検討がある。竹内氏は、旧国でいうところの伊勢地域の円筒埴輪を４期に分類した上で、川西編年と比較して見えてくる伊勢の地域色を抽出する。その上で、伊勢地方の古墳の動向も含めて円筒埴輪の状況を論じた。鈴木氏は伊勢地域の淡輪系円筒埴輪を集成し、詳細な観察から伊勢地域に淡輪系埴輪が導入された契機などを考察する。それによると伊勢地域では、大規模な古墳造営時に近畿から埴輪工人が派遣され、在地工人と臨時の工人集団が形成されたとする。その派遣された工人は、今後の需要の高まりを背景に、生産を伊勢の地で継続的に行うことを考え、近畿周辺部、具体的には紀伊地方に拠点を置いて淡輪系埴輪をも製作していた須恵器工人であったと推定する。

穂積氏は、５世紀後半以降、伊勢地域に淡輪技法が導入されてからの円筒埴輪と形象埴輪に着目する。形象埴輪に共伴する円筒埴輪が淡輪系か在来系（非淡輪系）かで分類し、それぞれの古墳の分布域や窯と埴輪の需給関係から見える埴輪の生産体制を論じた。豊田氏は、県内出土埴輪の研究が淡輪技法や形象埴輪などに集中し、淡輪技法出現以前もしくは淡輪技法を持たない円筒埴輪の研究が竹内氏以来進んでいないと指摘する。そして、伊勢地方の円筒埴輪を川西氏の分類を概ね踏襲しながらも形態等の諸属性を加味したうえで５期に区分し、北勢・中勢・南勢の各地域毎に検討を加えている。

その後、津市教育委員会により藤谷窯跡群の調査成果が公表された。その中で藤田充子氏は、藤谷窯産埴輪の供給先を埴輪の形態や製作技法等の特徴から述べている。それによると、安濃川流域の古墳はもちろん、安濃川流域を超えて現在の松阪市所在古墳の大型円筒埴輪・形象埴輪等が藤谷窯産埴輪の類例として挙げられるという。そして、実際に拠点生産地としての生産・供給体制が成立していたのかが大きな鍵であり、今後も検討が必要であるとする。

にんごう２号墳の埴輪は竹内氏による編年では３期でも新しい時期、豊田氏による編年では４期に属する。いずれの編年でもＴＫ216～ＴＫ208型式併行期で、県内で須恵器・埴輪の操業が本格化する前段階に当たる。

（２）分析埴輪の考古学的検討

①生産遺跡出土埴輪

まず、今回分析した生産遺跡の操業時期は、久居窯跡群がＴＫ23型式併行期以降、藤谷窯跡群・内多窯跡・ヲノ坪遺跡がＴＫ47型式併行期以降である。

全体の製作技法に着目してみていくと、外面調整は、久居窯跡群では全てＢ種ヨコハケを施す。内面も、口縁部付近もしくは個体によっては第３段全体にヨコハケを施している。底部は確認できる個体がない。藤谷窯跡群は、タテハケのみで２次調整を省略するもの、２次調整にＢ種ヨコハケを施すもの、また僅かであるが板ナデにより調整するものがある。内面は、口縁部付近にのみヨコハケを施すもの、ナデ等のみのものに分けられる。底部は押圧技法により調整するもの、ヨコナデ・ヨコケズリで調整するもの、底部調整を行わないものに分けられる。また、突帯貼付の際に断続ヨコナデ技法が採られる。

内多窯跡は静止痕のないＣ種ヨコハケが２次調整として施される。内面は口縁部付近にのみヨコハケを施す個体と口縁部から第２段まで（それより下は欠損のため不明である）ヨコハケを施す個体がある。

ヲノ坪遺跡は、タテハケ後２次調整としてＣ種ヨコハケを施す。内面は第２・３段でヨコハケを施す個体が主体を占めるようである。

淡輪技法を持つのは内多窯跡・ヲノ坪遺跡で、特に出土量の多いヲノ坪遺跡は、底部は全て淡輪技法による。

埴輪の質に着目すると、須恵質埴輪を持つのは藤谷窯跡群・久居窯跡群・ヲノ坪遺跡、硬質埴輪は藤谷窯跡群・内多窯跡・ヲノ坪遺跡、土師質埴輪は藤谷窯跡群とわずかにヲノ坪遺跡で出土する。

ヘラ記号を見ていくと、藤谷窯跡群は大変バラエティに富んでおり、ヘラ記号の見られる段の違いも含めると26例に及ぶ。今回分析した中にはヘラ記号を持つ個体は含めなかったが、報告書における製作技法とヘラ記号の対照検討から、ある程度の照合は可能であろう。その他の生産遺跡からはヘラ記号を持つ個体は出土していない。

②消費地出土埴輪

消費地とは、ここでは古墳の他に、第１節で「その他」とした性格不明の遺跡も含める。また、鎌切古墳群は、分析を行わなかった３～５号墳についても触れる。全体を詳述するのは紙数に限りがあるため、生産遺跡で着目した点について概観する。

消費地遺跡の年代は、明合古墳が５世紀前半と古く、にんごう２号墳がそれに続く５世紀中～後半のＴＫ208型式併行期である。以下、門脇北古墳・殿村１号墳（ＴＫ23型式併行期）→稲葉３・４・５号墳、鎌切５・６号墳（ＴＫ47型式併行期）→堂山１号墳・日余１号墳・元井池古墳（ＭＴ15型式併行期）、メクサ３号墳・大里西沖遺跡（ＭＴ15～ＴＫ10型式併行期）→鎌切３号墳（ＴＫ10～ＴＫ43型式併行期）とほぼ５世紀後半から６世紀前半が中心となる。

西岡古墳は須恵器は出土していないが副葬品の構成などから６世紀初頭、赤塚古墳は５世紀末から６世紀初頭と推定されている。一色山古墳群、庄田２号墳、西河辺古墳・上野遺跡は共伴する土器等の詳細が不明のため時期は特定できない。また、志保遺跡・迎山遺跡の埴輪は包含層から出土し、古墳時代の遺構が検出されていないため時期特定ができない。

全体の形状は２条突帯３段が基本であり、にんごう２号墳、稲葉古墳群、鎌切５号墳、門脇北古墳、西岡古墳は２条突帯３段のみで構成される。堂山１号墳はいずれも２条突帯３段であるが、タテハケのみの個体は第１段が高い形状、ヨコハケを施す個体は第１段と第３段がほぼ同じ高さの形状と外面調整により各段高が異なる。大里西沖遺跡は全容が知れるのは２個体のみであるが、いずれも２条突帯３段である。その形状は第１段が非常に長く、第１段の２倍近いと特徴的である。

日余１号墳は３条突帯４段で、底部がやや欠損するが36㎝以上の器高を持つ。各段の高さはほぼ10㎝で揃っており、突帯設定技法が採られた可能性がある。鎌切３号墳は３条突帯４段で、60.3㎝と65.7㎝と大型の円筒埴輪を持つ。どちらも第２段が他段に比べて低いという特徴がある。また、内面に同心円文状当て具痕が残り、須恵器製作技法の導入が想定できる[19]。

元井池古墳では２条突帯３段と３条突帯４段があるが、前者の器高は28.5㎝、後者は29.6㎝と１㎝程度しか変わらず、３条突帯４段であっても大型品とは言えない。

製作技法は、まずは外面調整で見ていくと、Ｂ種ヨコハケがどの段階まで見られるかは、ＭＴ15型式併行期の堂山１号墳・日余１号墳でＢ種ヨコハケがあることから、６世紀前半までその技法が残ると言える。２次調整を省略しタテハケのみのものは、明合古墳の５世紀前半からメクサ３号墳のＴＫ10型式併行期、６世紀中ごろまで確認できる。また、Ｃ種ヨコハケは大里西沖遺跡で確認できる。

底部の技法では、押圧技法を持つものは殿村１号墳・稲葉古墳群・一色山古墳群である。ユビオサエやナデなどで底部を整えるのはにんごう２号墳・志保遺跡・門脇北古墳などであるが、他の遺跡でもある可能性はある。また、淡輪技法は殿村１号墳・大里西沖遺跡で見られる。

次に、ヘラ記号に着目する。確認できるヘラ記号毎に古墳・遺跡を列挙する。

口縁部

・「八」：稲葉３号墳・稲葉４号墳・稲葉５号墳
・「∩」：稲葉３号墳・稲葉４号墳・鎌切３号墳・一色山古墳群
・「十」：稲葉３号墳・稲葉４号墳
・「ℵ」：稲葉３号墳・稲葉４号墳？（口縁部かどうかは不明）・一色山古墳群
・内面に「×」：日余１号墳・西岡古墳
・外面に「×」：門脇北古墳
・「⋓」：稲葉３号墳
・「⋃」：鎌切５号墳

・「⊻」：西岡古墳
・「⊞」：にんごう２号墳

胴部

・「⌓」：稲葉３号墳（透かしの向かって左）、稲葉５号墳（透かしの向かって右）
・「⋂」：稲葉３号墳の朝顔形
・「)(」：門脇北古墳、元井池古墳（位置不明）
・「⊣」：日余１号墳・西岡古墳、稲葉４号墳（少し斜めを向く弓？）
・「))」：門脇北古墳

底部

・「⋊」：西岡古墳

場所不明

・「⌒」：迎山遺跡

その他

・「⋀」：日余１号墳の朝顔形埴輪

以上のように多種多様ではあるが、稲葉古墳群と一色山古墳群との共通性、隣接する日余１号墳と西岡古墳の共通性がうかがえる。

最後に埴輪の質に着目する。硬質・須恵質埴輪は、明合古墳、稲葉３号墳・４号墳・５号墳、鎌切６号墳、殿村１号墳、堂山１号墳、元井池古墳、日余１号墳、迎山遺跡、大里西沖遺跡、一色山古墳群、庄田２号墳、門脇北古墳、西岡古墳で出土する。それぞれに差はあるが、この地域で窖窯焼成が始まるＴＫ23型式以降の古墳には硬質・須恵質埴輪が含まれる割合が多くなるといえる。

なお、表採資料や部分的な発掘で出土したものがあり全容は不明ではあるが、にんごう２号墳、鎌切３号墳・５号墳、西河辺古墳、メクサ３号墳、赤塚古墳、志保遺跡、上野遺跡は土師質埴輪のみで構成される。

（３）胎土分析結果から

胎土分析結果全てについて考古学的に検討を加えることはできないが、いくつか特徴の見られた点について検証していく。

にんごう２号墳は津領域に収まるが、その中でもSrの値に着目すると２つに分かれることが指摘された。にんごう２号墳出土埴輪は胎土・色調で４つに分類したが（43ページ参照）、Srの値が0.4に区切ってそれ以上のもの、それ未満のもので抽出すると、Ⅳ類が全て前者のグループにあてはまる。つまり、２次調整のヨコハケを施すグループである。後者は、Ⅰ・Ⅲ類があてはまり、タテハケでヘラ記号を持つグループである。なお、Ⅱ類は報告番号を付与した４試料中１点（報50）が前者に含まれたが、残り３点は後者（報24～26）となった。このことから、にんごう２号墳では外面調整の差異が胎土に現れ、少なくとも２つの異なる状況下で生産された埴輪が調達されたのである。

次に生産地と消費地を比較するために窯資料と古墳・遺跡資料を見ていく。その前に、藤谷窯跡群の資料について、三辻氏は№72・79・83の試料が他と大きくずれることを指摘された。そこでこの３点に着目すると、質で見ると72・79は須恵質、83は土師質である。器種は、83のみ朝顔形埴輪である。外面調整は、72はタテハケ後幅の短いＢ種ヨコハケを、79はナナメハケを施す。これらが今回分析した藤谷窯跡群試料の他の試料と異なる点があるかというと考古学的には差異は見られない。今後更に試料数を増やしての検証が必要となる。

ヘラ記号・製作技法からみて、藤谷窯跡群と稲葉古墳群、また稲葉古墳群と一色山古墳群に共通する点が多くみられた。そこでこれらの結果を見ていくと、一色山古墳群と稲葉古墳群のK-Ca分布図ではドットが左に偏る、つまりCa値が枠の範囲では少ない側に入るといえる。藤谷窯跡群についても前述の枠から外れる一群以外はCa値が枠の左に偏る。ちなみに３遺跡のRb-Sr分布図は藤谷窯跡群のRb値がやや高いという違いはあるが、共通する部分に入るものが多い。

淡輪技法を持つ埴輪群の結果を見ていく。淡輪系埴輪は生産遺跡では内多窯跡・ヲノ坪遺跡、消費地では殿村１号墳・大里西沖遺跡から出土する。大里西沖遺跡では土師質の淡輪系埴輪が主体となる。

殿村１号墳では異なる底部の技法、土師質で異なる色調のものを５点分析した。すなわち、底部に押圧技法を施すもの、淡輪技法を施すもの、土師質で赤味が強いもの（これは遺物ラベルに「殿村古墳群」と記されていたため、分析もこの名称で行った）、白色を呈するものである。この殿村１号墳では、周辺の複数の生産窯から製作技法に関係なく古墳に必

要な量の埴輪が調達されたことが考古学的に指摘されている[20]。分析結果には、平成４年度時の分析結果もドットを落としているため実際の試料数から多くなっているが、この中で淡輪技法を持つ119は、Rb-Sr 分布図で Rb 値が0.48、Sr 値が0.27で他と離れる。K-Ca 分布図では K 値が0.42、Ca 値が0.19と津領域枠の右縦線近くにドットされる（第42図）。１点のみであるのでこれだけで判断するのは危険であるが、試みに淡輪系埴輪を製作した内多窯跡（第64図）とヲノ坪遺跡（第48図）の分布図と比べてみる。すると、ヲノ坪遺跡は Rb-Sr 分布図は殿村１号墳119の近くにドットされるが、K-Ca 値ではヲノ坪遺跡は枠の左端に偏り、119とは大きく異なる。内多窯跡で見ると、両分布図ともそのドット分布域に119は近しい。このことから、殿村１号墳の淡輪系埴輪はヲノ坪遺跡ではなく内多窯跡で作られた可能性があるといえる。

大里西沖遺跡の埴輪は、内多窯跡、ヲノ坪遺跡のどちらとも分布域が一致せず、考古学的検討でも両遺跡以外で作られた可能性が高い。

また、殿村１号墳・殿村古墳群の結果には平成６年度時の分析結果も盛り込まれているが、殿村古墳群とは殿村１号墳試料と同じであり、調査時の表記が統一されていなかったため分析委託時に別古墳の可能性があるものとして扱ってしまった。分析結果では、殿村１号墳と殿村古墳群の結果が重なり、同じ古墳のものと三辻氏も述べられており、実際と合致する結果となった。しかし、殿村１号墳としてはややばらつきがあり、これは殿村１号墳が様々な製作技法の埴輪を持つことを示しているといえるだろうか。

みたように、西岡古墳と日余１号墳はヘラ記号などから考古学的に共通性があることが指摘されている[21]。分析結果でも２古墳の埴輪とも津領域から大きく外れ、それが１基単独ではなく２基の古墳が共通することから、外部から持ち込まれたものではなくそれぞれの古墳周辺で作られたことが指摘される。両古墳に近在し、ほぼ同じ時期である堂山１号墳についてはどうであろうか。分析した埴輪は須恵質１点だけであり何とも言えないが、報告書掲載の土師質埴輪を見ると一つは器高39㎝、もう一つは42.3㎝で、西岡古墳の円筒埴輪で器高の知れるもので最大は32.6㎝とサイズが大きく異なる。西岡古墳試料の中で比較的大型品に復元できそうな個体（報８）の法量と比較しても堂山１号墳のものとは異なる。西岡古墳・日余１号墳には須恵質埴輪もあることから、共通性があればドット域が重なると考えられるが、両古墳の分布域に含まれず近接するといったことしかいえない。考古学的検討は不十分であることから、近接する古墳のあり方については今後の課題であろう。

（４）生産・流通の状況

以上、見てきたことからこの地域における生産地と流通範囲、あり方について触れたい。

この地域では埴輪生産遺跡は今回分析俎上に上げた４遺跡の他、今回分析しなかった法ヶ広窯跡が加わる。藤谷窯跡群の操業と併行する時期に小規模古墳が多く存在することから、埴輪需要の増大に伴い近在する古墳群への供給を想定して藤谷窯跡群が設けられたものと指摘される[22]。そして、稲葉古墳群の円筒埴輪だけでなく、今回は検討対象とはしなかった形象埴輪においても稲葉５号墳の男性人物埴輪・家形埴輪、迎山遺跡の石見型埴輪、上野古墳群（上野遺跡内）の家形埴輪、松阪市駅部田５号墳の家形埴輪、口南戸古墳の大型円筒埴輪・家形埴輪などが藤谷窯跡群産と推定されている。今回、これに考古学的検討・胎土分析から一色古墳群円筒埴輪、庄田２号墳円筒埴輪が加わったわけだが、藤谷窯跡群は特に岩田川と雲出川にはさまれた広い範囲の古墳への供給を担っていたといえる。

三辻氏は、分析の中で窯跡群の規模が小さく、周辺の複数古墳との共通性がさほど見いだせないことから各古墳に１窯というような状況を想定された。日余１号墳と西岡古墳は考古学的特徴においても胎土分析においても類似することから、隣接した同じ窯から調達した可能性がある。

生産地の一つである内多窯跡の淡輪系埴輪は殿村１号墳埴輪との共通性が考えられる。１例だけであるが、三辻氏の指摘するような生産地と消費地が隣接する可能性を持ちながらも、一部は離れた古墳へもたらされたのであろうか。ヲノ坪遺跡の淡輪系埴輪の供給先は考古学的にも不明であり、分析でもヲ

ノ坪遺跡は他と異なるという結果が得られた。また、同じく淡輪系埴輪を持つ大里西沖遺跡は製作技法や形状も他と共通性はなく、胎土分析でも共通する遺跡はなかった。どちらかといえば北に離れることから鈴鹿市域の古墳群との共通性があると考えらえるが、鈴鹿市稲生山窯跡の分析結果とも合致しない[23]。このことから、未発見窯の存在も考えられる。

にんごう２号墳の埴輪は、ヘラ記号は１種類に限られ、外面調整がタテハケのものにのみヘラ記号が見られる。そして、埴輪を持つ同時期の古墳や生産地がないため何とも言えないが、ヘラ記号や口縁部の形態など他に類似するものがない。胎土分析からも２つに分布域が分かれ、それが外面調整がタテハケのみのものとヨコハケを施す個体に対応することがわかった。少なくとも２つの生産地から埴輪を調達した可能性がある。

（５）今後の課題

今回は、調整技法を基にした各古墳間の比較検討がおざなりとなってしまい、当地域の生産体制など、諸氏が行われた検討に遠く及ばなかった。

この地域では遅くまでＢ種ヨコハケが残り、タテハケ調整のものと併存することが指摘されていた。これは、にんごう２号墳の分析結果から、同一窯の工人差ではなく、異なる窯の特性である可能性が考えられた。つまり、従来の技法で作る窯とより進んだ技法（退化した技法ともいえるだろうが）で作る窯とが併存しており、それぞれからの調達が行われていたということである。その古墳専用の窯が複数操業していたのか、複数古墳への調達を目的とした操業がなされたのかといえば、にんごう２号墳の規模を考えると後者の可能性が高い。

また、胎土分析により、この地域の埴輪の胎土はかなりばらつきがあることがわかった。これについて三辻氏は１古墳に１つの窯の操業・調達を想定されたわけであるが、それは考古学的な検討では明らかにすることはできなかった。

この地域での埴輪生産体制について、藤谷窯跡群の成果から近畿や尾張など複数工人の系譜が指摘されている[24]。旧久居市など未整理資料も合わせて、工人の系譜など更に精密な検討を加えることで明らかになる余地はあるであろう。　　（山中）

【註釈】

① 門脇北古墳・西岡古墳の胎土分析試料の詳細・分析数値については各報告書を参照いただきたい。

②「内多古窯跡」『安濃町史　資料編』安濃町　1994年

③『ヲノ坪窯跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997年

④ 浅生悦生「三重県安芸郡明合古墳について」『ふびと』23号　三重大学歴史研究会　1965年、「明合古墳群」『安濃町史　資料編』安濃町　1994年

⑤ 『津市埋蔵文化財センター年報１　平成６年度・平成７年度』津市埋蔵文化財センター　1997年

⑥ 『堂山１号墳』安芸郡安濃村教育委員会　1974年

⑦ 「赤塚古墳」『安濃町史　資料編』安濃町　1994年

⑧ 『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅱ－日余1号墳－』三重県文化財連盟　1974年

⑨ 『大里西沖遺跡（２次）』三重県埋蔵文化財センター　1994年

⑩ 平成７年度に旧久居市教育委員会により調査をされたものであるが、調査報告書あるいは概報、三重県埋蔵文化財センター発行の『三重県埋蔵文化財年報』にも記載が全くなく、残念ながら詳細は全く不明であり、資料も未整理である。今回、試料採取に当たりわずかな時間ながら実見したが、かなり多くの埴輪類が出土しており、概要の報告・資料の整理が待たれる。『三重県津市遺跡地図』津市教育委員会　2011年

⑪ 『平成５年度三重県埋蔵文化財センター年報５』三重県埋蔵文化財センター　1994年、伊勢野久好「59　庄田１・２号墳」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005年。年報には「庄田第１号墳」とあるが、２号墳が正しい。一色山古墳群同様、資料は未整理で、今回、試料採取に当たりわずかな時間ながら実見したが、かなり多くの埴輪類が出土しており、概要の報告・資料の整理が待たれる。

⑫ 『志保遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1983年

⑬ 「Ⅴ　安芸郡安濃町　迎山遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県教育委員会　1989年、「３　迎山遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県教育委員会　1990年

⑭ 『上野遺跡だより』№１～４　久居市教育委員会・上野遺跡調査団　2000～2001年

⑮ 竹内英昭「伊勢地方の埴輪事情」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991年

⑯ 鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie History』Vol.３　三重歴史文化研究会　1991年

⑰ 穂積裕昌「伊勢の埴輪生産－淡輪系と在来系（非淡輪系）-」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号　三重県埋蔵文化財センター　2001年

⑱ 豊田祥三「伊勢における円筒埴輪の生産と展開」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号　三重県埋蔵文化財センター　2001年

⑲ 須恵器系埴輪として尾張型埴輪があるが、その特徴とは合致せず、藤谷窯跡群や久居窯跡群など須恵器埴輪併焼窯が近隣に存在することからあくまでもここでは単発的な須恵器技術の援用と考える。なお尾張型埴輪については赤塚次郎「１．尾張型埴輪について」『池下古墳』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1991年を参照した。

⑳ 藤田充子「津市の埴輪」『埋文センターニュース』第22号　津市埋蔵文化財センター　2005年

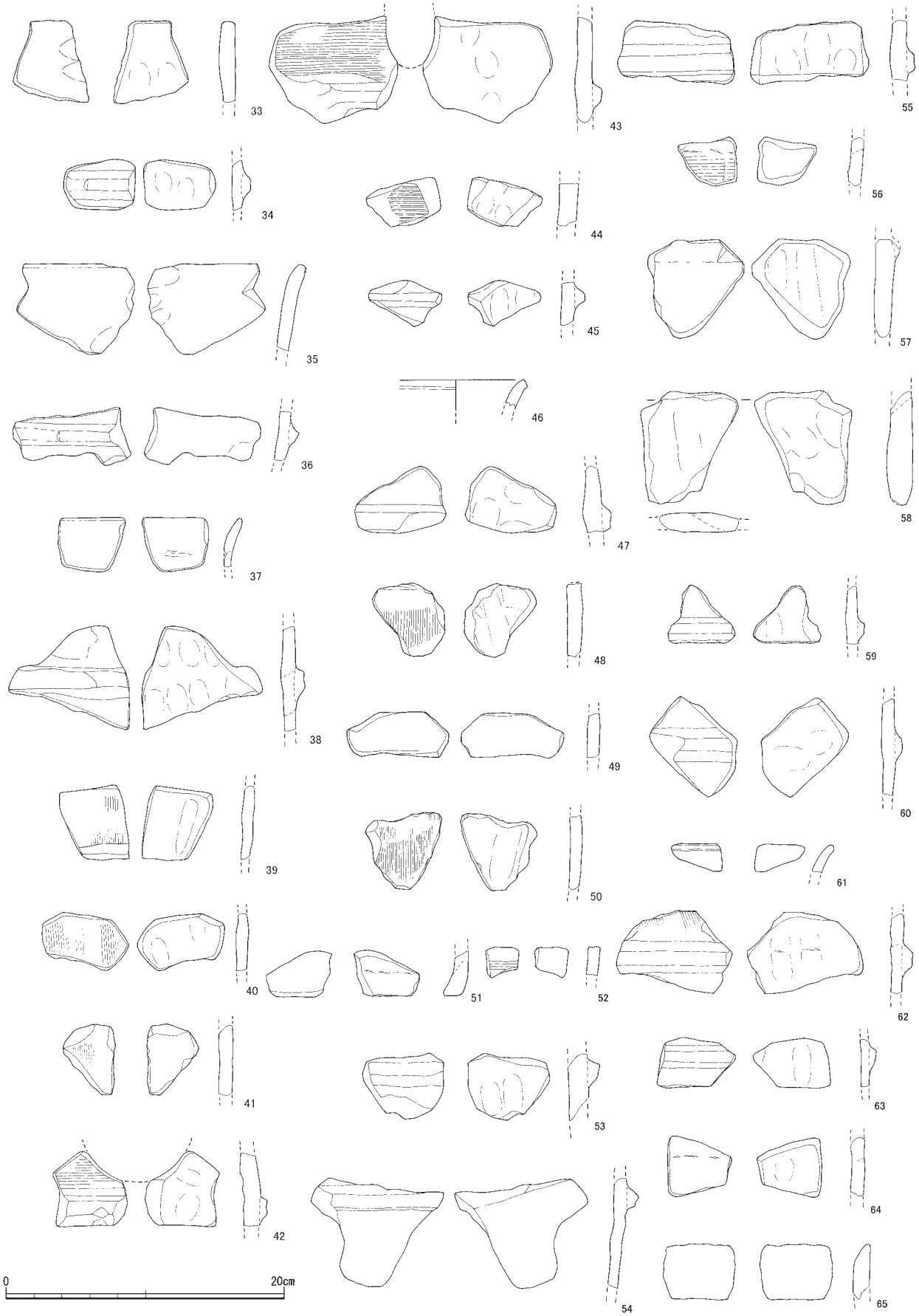
㉑ 中村光司「３．安濃川流域における西岡古墳の位置づけ」『西岡古墳発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995年

㉒ 藤田充子「Ⅴ結語」『藤谷窯跡群発掘調査報告』津市教育委員会　2000年（『津市埋蔵文化財センター年報４』平成10年度　津市埋蔵文化財センター　2000年　に所収）

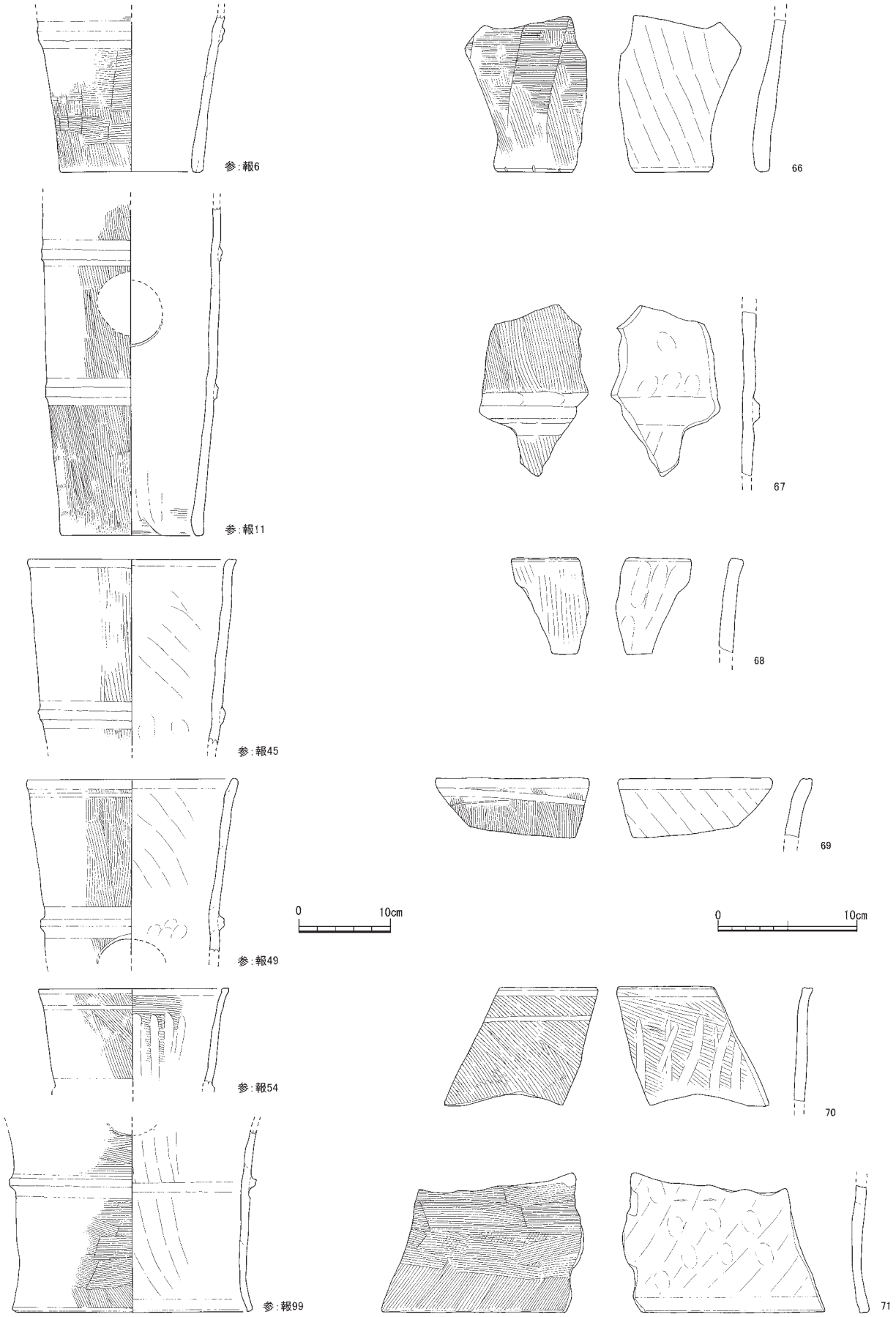
㉓ 稲生山窯跡資料の実見はしておらず、考古学的検討はしていない。

㉔ 前掲註㉒文献。藤谷窯跡群と鎌切３号墳の大型円筒埴輪は、内面に同心円文タタキを持ち、尾張型埴輪の特徴と指摘される。前掲註⑲文献参照。

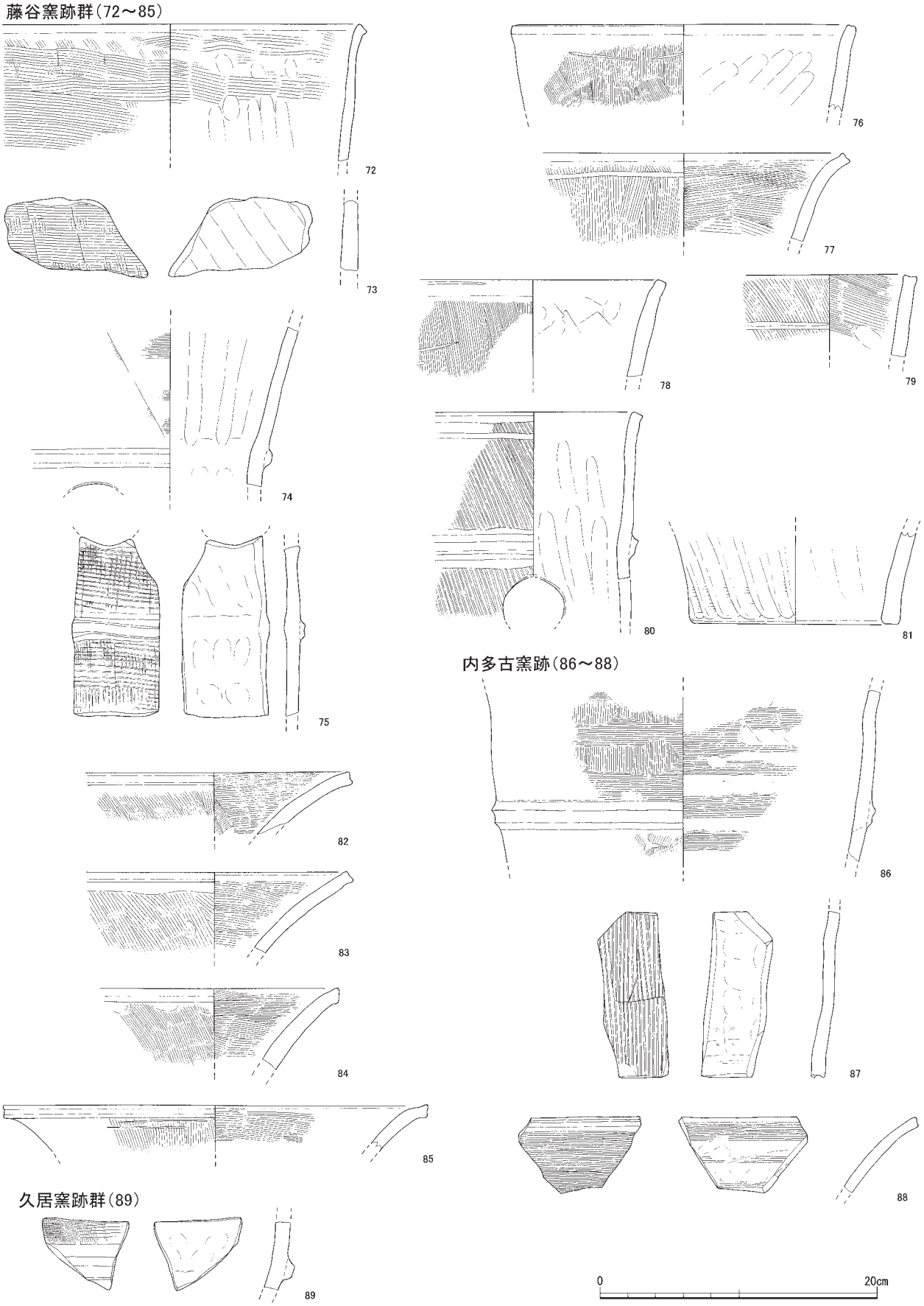
第65図　胎土分析試料１（にんごう２号墳報告書掲載遺物　1:4）



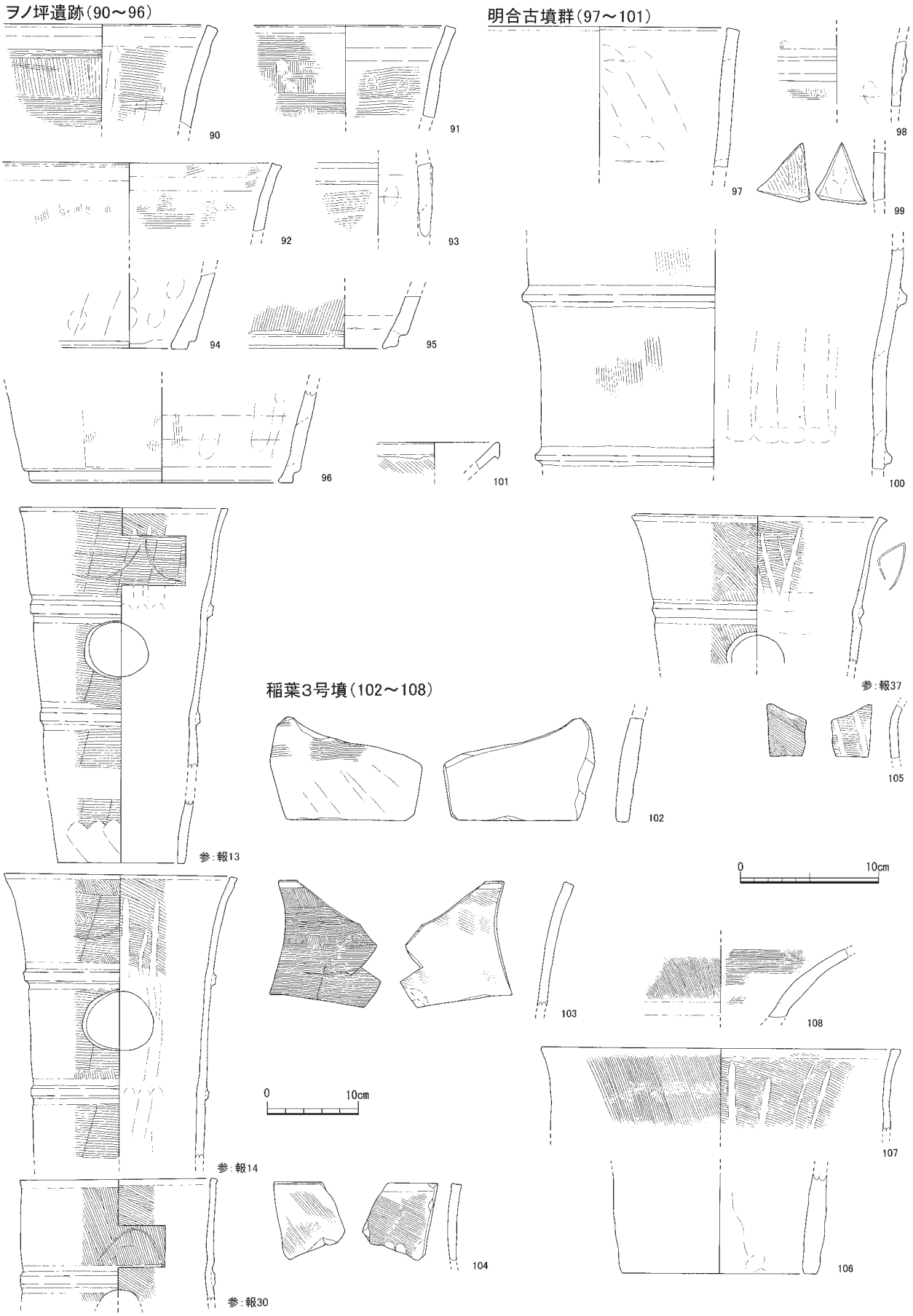
第66図　胎土分析試料２（にんごう２号墳報告書未掲載遺物　1:4）



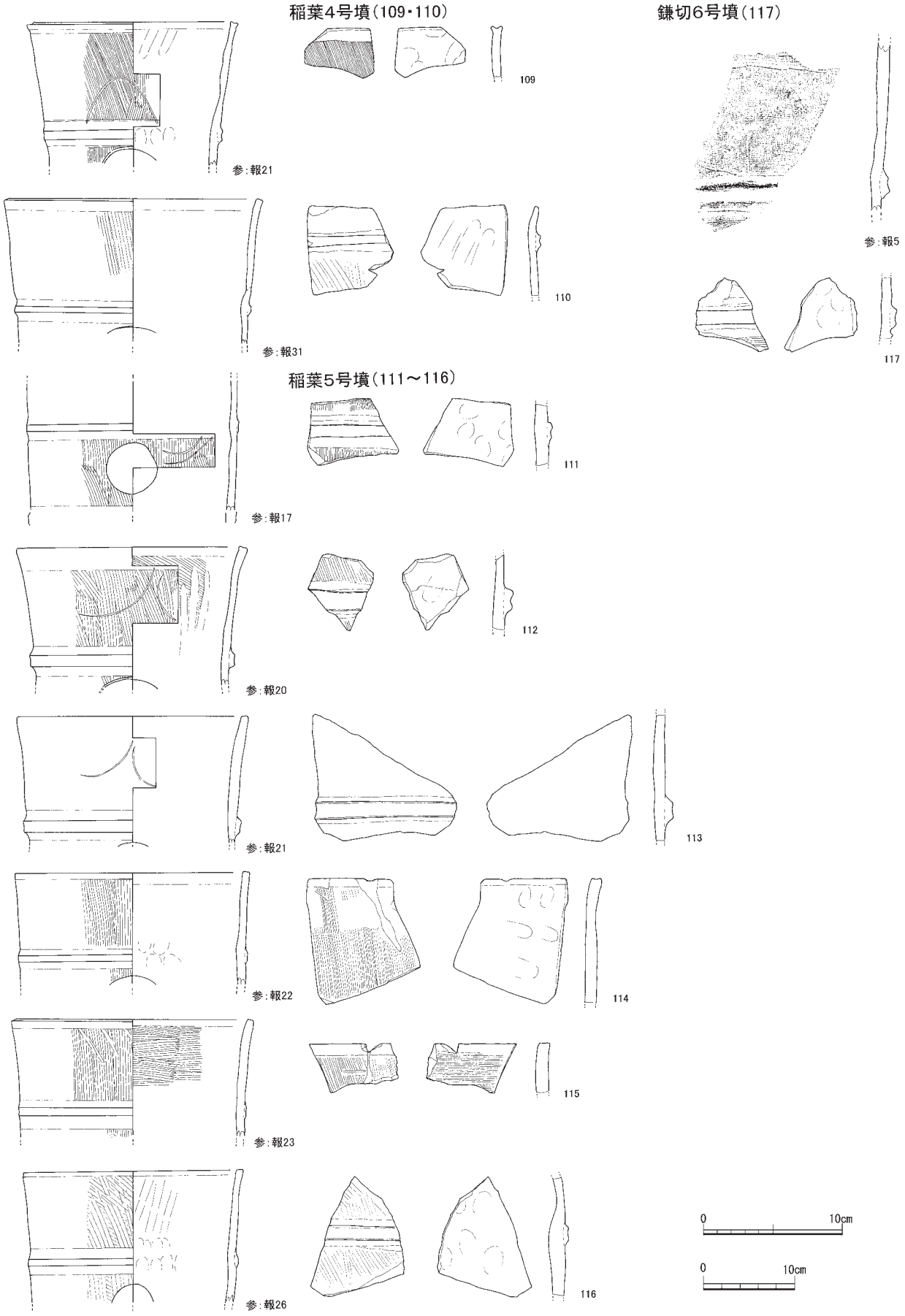
第67図　胎土分析試料３（藤谷窯跡群報告書掲載遺物　1:4、参考　1:6）



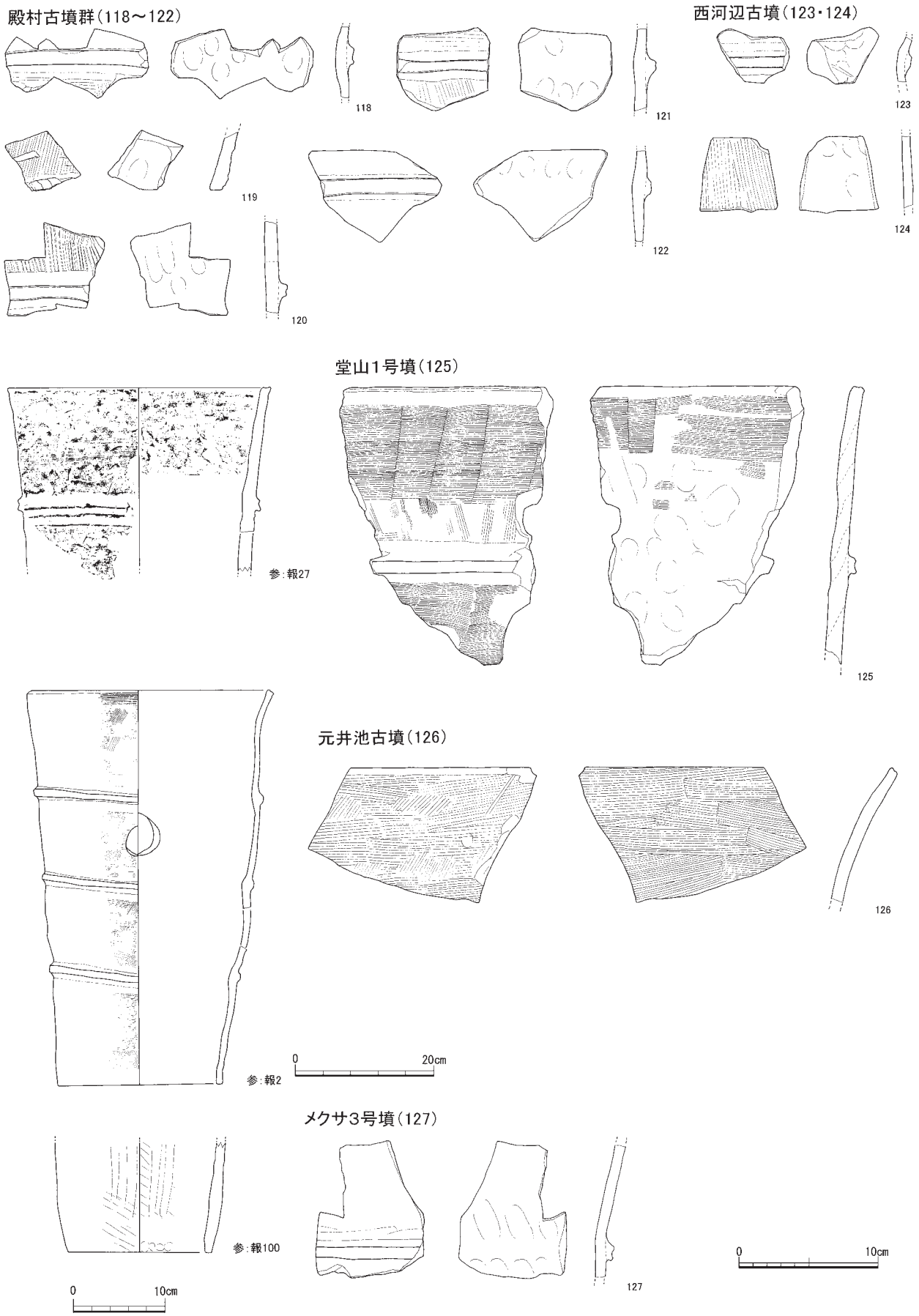
第68図　胎土分析試料４（藤谷窯跡群報告書未掲載遺物・内多窯跡・久居窯跡群　1:4）



第69図　胎土分析試料５（ヲノ坪遺跡・明合古墳群・稲葉３号墳　1:4、参考　1:6）

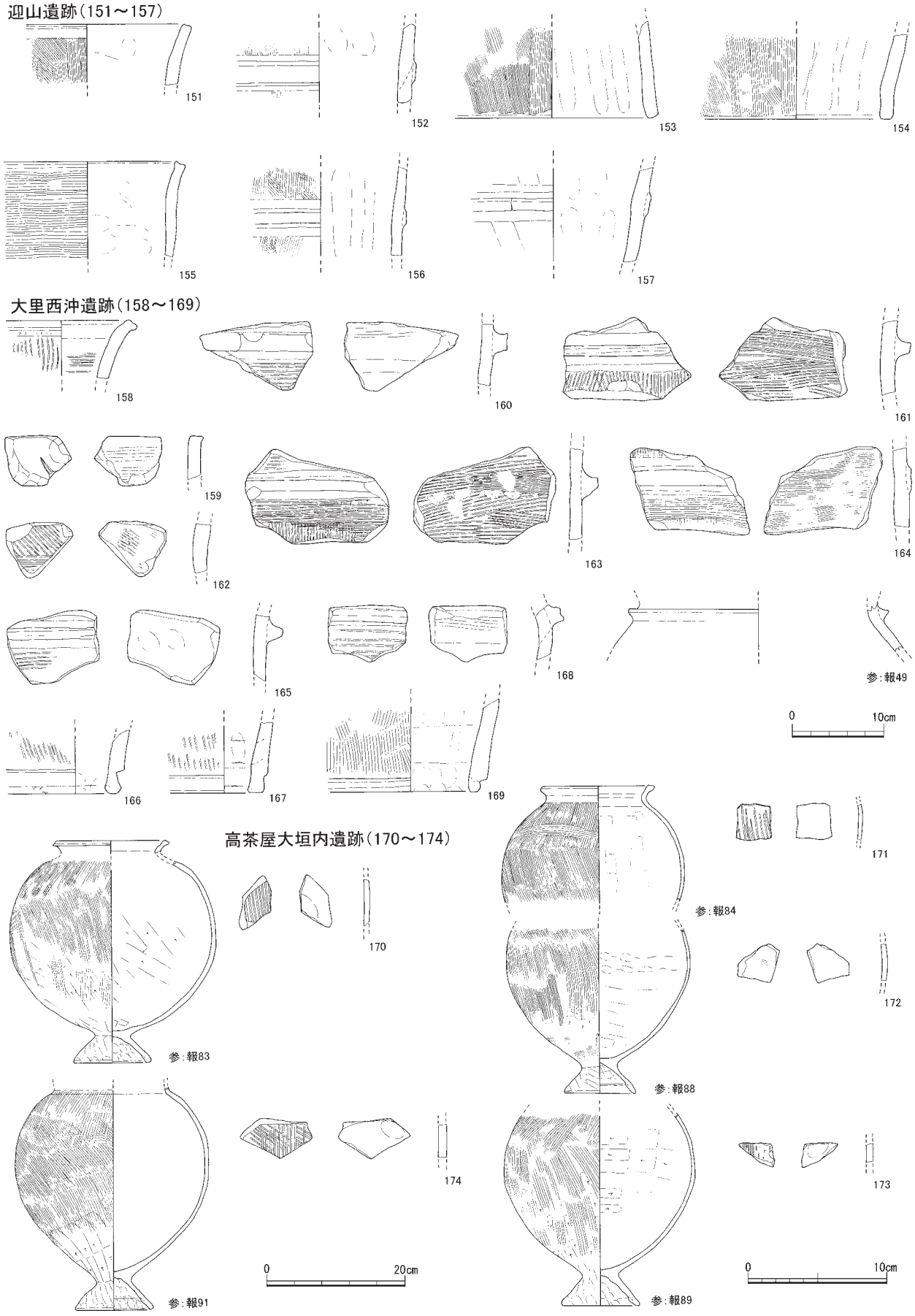


第70図　胎土分析試料6(稲葉4～5号墳・鎌切6号墳　1:4、参考　1:6)

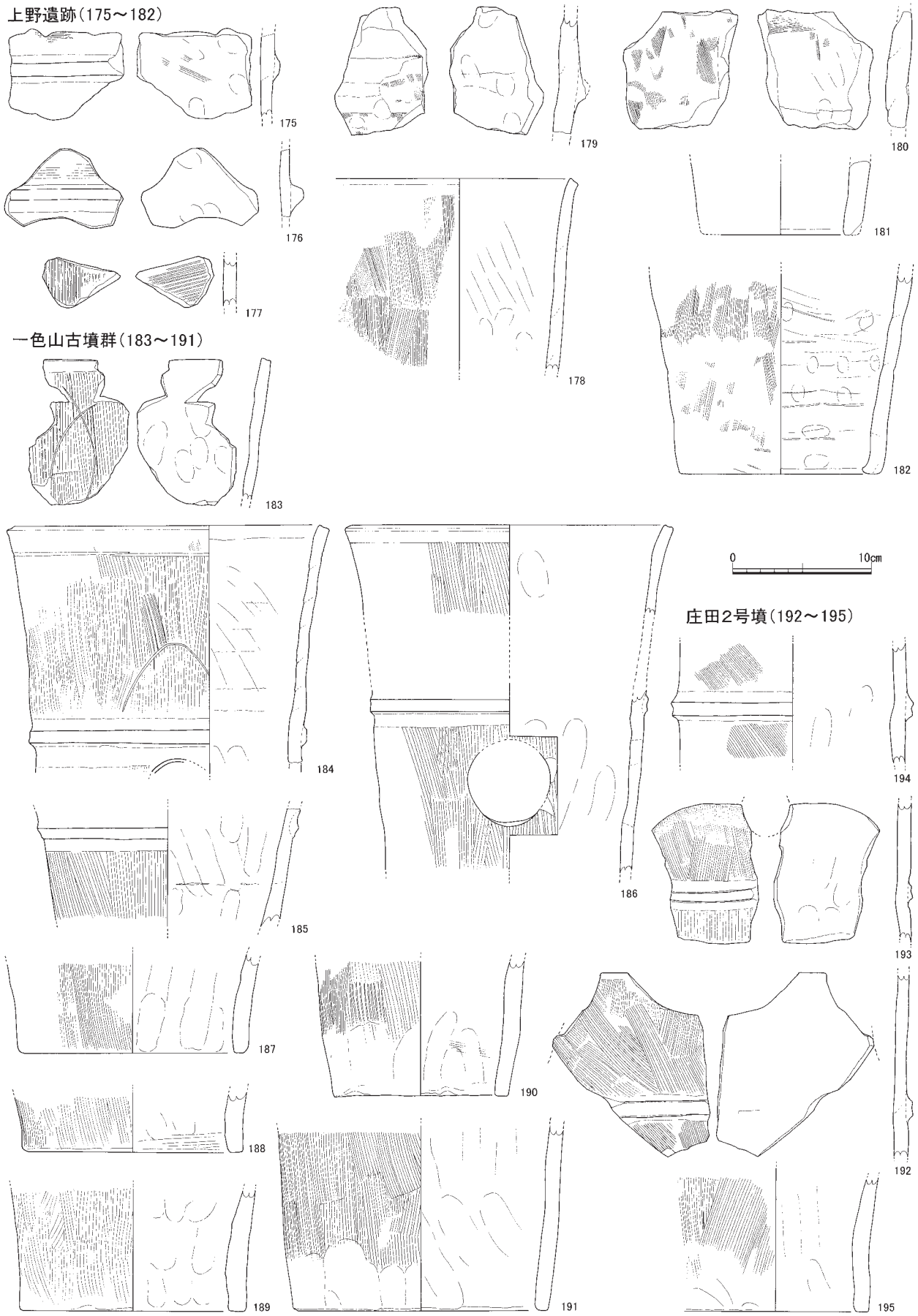


第71図　胎土分析試料７(殿村古墳群・西河辺古墳・堂山１号墳・元井池古墳・メクサ３号墳　1:4、参:報27・100　1:6、参:報２　1:8)

第72図　胎土分析試料８(赤塚古墳・日余１号墳・志保遺跡　1:4、参考　1:6)



第73図　胎土分析試料９(迎山遺跡・大里西沖遺跡・高茶屋大垣内遺跡　1:4　参考　1:8〈参:報49のみ　1:6〉)



第74図　胎土分析試料10(上野遺跡・一色古墳群・庄田２号墳　1:4)

第10表　胎土分析試料観察表１

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法		所蔵	備考		
															質	見た目の色	その他特徴
1	にんごう２号墳	周溝	20130201	10	026-02	035-01	体部	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	
2	にんごう２号墳	周溝	20130201	14	025-01	035-03	体部突帯	粗	～2mm長石石英砂粒 多く含	良	浅黄橙 10YR8/4	調整不明	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	全体風化著しい 断面M字の突帯　透孔1
3	にんごう２号墳	周溝	20130201	14	025-01	035-02	体部突帯	粗	～2mm長石石英砂粒 多く含	良	浅黄橙 10YR8/4	調整不明	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	全体風化著しい 低い台形突帯　透孔1
4	にんごう２号墳	K14　周溝	20130201	20	031-02	035-04	口縁部	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	明黄褐 10YR7/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ	Ⅰ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	明橙	風化著しい
5	にんごう２号墳	K14　周溝	20130108	21	025-02	035-05	体部突帯	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	黄橙 10YR8/6	調整不明	Ⅰに近い	三重県埋蔵文化財センター	土師質	明橙	
6	にんごう２号墳	K14　周溝	20121226	23	016-01	035-07	口縁部近く	やや密	特記事項なし	良	橙 5YR6/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	ヘラ記号 透孔2
7	にんごう２号墳	K14　周溝	20121226	23	016-01	035-06	体部	やや密	特記事項なし	良	橙 5YR6/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	ヘラ記号 透孔2
8	にんごう２号墳	K14　周溝	20121226	23	016-01	035-08	口縁部近く	やや密	特記事項なし	良	橙 5YR6/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	ヘラ記号 透孔2
9	にんごう２号墳	K14　周溝　No.4	20130108	24	013-01	036-01	体部	粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	明赤褐 5YR5/8	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	ヘラ記号 透孔1
10	にんごう２号墳	K14　周溝　No.5	20130121	25	014-01	036-02	体部突帯	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	明赤褐 5YR5/8	内:磨耗 外:磨耗、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	透孔1
11	にんごう２号墳	K14　周溝	20121225	26	023-05	036-03	体部突帯	やや密	～6mm長石石英 チャート(赤)	良	橙 5YR6/8	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	
12	にんごう２号墳	K14　周溝　No.1	20130111	27	010-01	036-04	底部近く	粗	～5mm長石石英 チャート(赤)含	良	明黄褐 10YR6/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	格子？ヘラ記号
13	にんごう２号墳	K14　周溝	20130110	29	032-01	036-05	体部突帯	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	橙 7.5Y7/6	内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	
14	にんごう２号墳	K14　周溝	20130110	29	032-01	036-06	体部	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	橙 7.5Y7/6	内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	
15	にんごう２号墳	K13　周溝	20130201	32	017-01	036-07	体部突帯	やや密	～2mm砂粒含	良	橙 7.5YR6/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	透孔1
16	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	33	019-02	036-08	口縁部	やや密	特記事項なし	良	橙 5TR7/6	調整不明	Ⅰ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	明橙	強く外反する土器風口縁
17	にんごう２号墳	L13　周溝	20130110	34	018-02	037-01	体部突帯	やや密	～1mmチャート石英 わずかに含	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:貼付ﾅﾃﾞ	Ⅰ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	明橙	外面風化著しい
18	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	39	028-01	037-03	体部	やや粗	～1mmチャート長石 石英チャート(赤)多含	良	橙 5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	
19	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	39	028-01	037-02	体部突帯	やや粗	～1mmチャート長石 石英チャート(赤)多含	良	橙 5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	上部がやや突出するM字突帯
20	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	39	028-01	037-04	底部	やや粗	～1mmチャート長石 石英チャート(赤)多含	良	橙 5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	底部端部内面を押さえにより調整
21	にんごう２号墳	L13　周溝	20130107	42	029-02	037-05	底部	やや粗	～2mm長石石英 チャート多含	良	橙 5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ 外:ﾅﾃﾞ、ﾊｹ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	底部端部内面をケズリにより調整
22	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	43	022-02	037-08	体部	やや粗	～４mm長石石英 チャート(赤)含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:板ﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
23	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	43	022-02	037-07	体部突帯	やや粗	～４mm長石石英 チャート(赤)含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:板ﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	丸みを帯びた台形突帯
24	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	43	022-02	037-06	底部	やや粗	～４mm長石石英 チャート(赤)含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:板ﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	成形後不調整の底部
25	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108	44	022-01	038-01	底部	やや粗	～3mm長石石英多含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	倒立後、底部調整あり

第11表　胎土分析試料観察表２

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法		所蔵	備考		
															質	見た目の色	その他特徴
26	にんごう２号墳	N14　周溝　№６	20130122	50	015-01	038-02	体部突帯	やや粗	～2mm長石石英含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:磨耗 外:磨耗、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	台形突帯
27	にんごう２号墳	N14　周溝　№６	20130122	56	024-01	038-03	体部	密	～2mm長石石英含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	調整不明	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	黒斑
28	にんごう２号墳	N14　周溝	20130108	57	005-06	038-04	底部	やや密	～1mm長石石英含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	端部内面横方向ナデ
29	にんごう２号墳	N14　周溝　№６	20130122	58	030-01	038-05	体部突帯	やや粗	～1mm長石石英多含	やや不良	灰白 2.5Y8/2	内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:調整不明		三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	外傾接合
30	にんごう２号墳	N13　ＳＤ４	20130201	74	005-01	038-06	体部突帯	やや密	～1mm長石石英含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	低い突帯
31	にんごう２号墳	N14　包	20130107	86	006-01	038-08	底部？	やや密	特記事項なし	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、ﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	自重のため大きく歪む
32	にんごう２号墳	R7　包	20130115	77	005-03	038-07	土師器甕体部	粗	～1mm長石石英多含	良	明赤褐 5YR5/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ		三重県埋蔵文化財センター	土師器	暗橙	古式土師器甕
33	にんごう２号墳	J15　周溝	20121225			039-01	口縁部	粗	～2mm長石石英 チャート(赤)多含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	
34	にんごう２号墳	J15　周溝	20121226			039-02	体部突帯	粗	～2mm砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	
35	にんごう２号墳	J15　周溝	20121226			039-03	口縁部	粗	～3mm砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外剥離著しい	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	
36	にんごう２号墳	J15　周溝	20121226			039-04	体部突帯	やや粗	～1mm長石石英 チャート(赤)含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内:ｵｻｴ？ 外:貼付ﾅﾃﾞか?	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡赤	上部が突出する突帯
37	にんごう２号墳	K14　周溝	20130109			039-05	口縁部	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	明黄褐 10YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	Ⅰ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	
38	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108			039-06	体部突帯	やや粗	～2mm砂粒含	良	明黄褐 10YR7/6	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	突帯面が平坦な広い台形突帯
39	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108			039-07	体部	やや粗	～5mm砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、縦ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
40	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108			039-08	体部	粗	～3mm長石石英 チャート(赤)多含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
41	にんごう２号墳	K14　包	20121221			040-01	体部	粗	～2mm長石石英多、 チャート(赤)わずかに含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	
42	にんごう２号墳	K14　包	20130107			040-02	体部突帯	やや粗	～2mm長石石英含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	透孔
43	にんごう２号墳	N14　包	20130107			040-03	体部突帯	やや粗	～4mm長石石英含	良	浅黄橙 10YR8/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	透孔 低い台形の突帯
44	にんごう２号墳	K16　３表採				040-04	体部	やや粗	～1mm長石石英含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
45	にんごう２号墳	K16　２表採				040-05	体部突帯	やや粗	～2mm長石チャート(赤)含	良	橙 5YR7/8	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:貼付ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	細めの台形突帯
46	にんごう２号墳	表採	20120614			040-06	口縁部	やや密	～2mm長石チャート(赤)含	良	橙 7.5YR6/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	
47	にんごう２号墳	表採	20120614			040-07	体部突帯	やや粗	～2mm砂粒含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ?、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	幅広い台形の突帯、中央やや～こむ
48	にんごう２号墳	排土	20121213			040-08	体部	やや粗	～2mm長石石英含	良	橙 5YR6/8	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、(貼付)ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	
49	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108			041-01	体部	粗	～3mm長石石英 チャート(赤)多含	良	明黄褐 10YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗黄橙	
50	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108			041-02	体部	やや粗	～3mm長石石英大、 チャート(赤)小含	良	橙 5YR6/6	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	植物含有多い？

第12表　胎土分析試料観察表３

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法		所蔵	備考		
															質	見た目の色	その他特徴
51	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108			041-03	底部	やや粗	～2mm砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	自重によりやや歪む、成形後の調整は行わない。
52	にんごう２号墳	L13　周溝	20130108			041-04	口縁部	やや粗	～1mm砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
53	にんごう２号墳	L14　周溝	20130115			041-05	体部突帯 (第1?)	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)雲母含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗肌色	上方が外側に強くつまみ出される
54	にんごう２号墳	L14　周溝	20130115			041-06	体部突帯	やや粗	～2mm長石石英含、 チャート(赤)多含	良	橙 5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	全体磨滅著しい
55	にんごう２号墳	N14　周溝　No.６	20130121			041-07	体部突帯	やや密	～3mm長石石英 チャート(赤)わずかに含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	強く器壁に押し付けながらﾖｺﾅﾃﾞ
56	にんごう２号墳	N14　周溝　No.６	20130121			041-08	口縁部 近く	やや密	～4mm長石石英わずかに含	良	浅黄橙 10YR8/3	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ？	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
57	にんごう２号墳	N14　周溝	20130201			041-09	体部 (第1段目)	やや密	～2mm長石石英わずかに含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
58	にんごう２号墳	N14　周溝	20130201			042-01	底部	やや粗	～1mm長石石英含	良	淡黄 2.5Y8/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾀﾃﾅﾃﾞ	Ⅳ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	端部外面にﾅﾃﾞ？による面あり
59	にんごう２号墳	周溝	20130205			042-02	体部突帯	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ﾅﾃﾞｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	ｺﾋﾞｵｻｴ＋貼付ﾅﾃﾞ、上方が突出する突帯
60	にんごう２号墳	周溝	20130201			042-03	体部突帯	やや粗	～1mm長石チャート (赤)含	良	橙 7.5YR7/6	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ、	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	扁平台形の突帯
61	にんごう２号墳	周溝	20130201			042-04	口縁部	やや密	～1mm長石チャート (赤)含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	
62	にんごう２号墳	周溝	20130201			042-05	体部突帯	粗	～5mm長石石英 チャート(赤)多含	良	橙 5YR6/6	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅱ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	ｺﾋﾞｵｻｴ＋貼付ﾅﾃﾞ
63	にんごう２号墳	周溝	20121221			042-06	体部突帯	粗	～3mm長石石英 チャート(赤)多含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	Ⅰ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡黄	低い突帯、ｺﾋﾞｵｻｴ＋貼付ﾅﾃﾞ
64	にんごう２号墳	K13　包	20121221			042-07	体部	粗	～3mm長石石英多、 チャート(赤)含	良	淡黄 2.5Y8/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ	Ⅳ？	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡肌色	
65	にんごう２号墳	K14　包	20121220			042-08	口縁部	やや粗	～2mm長石石英 チャート(赤)含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ﾅﾃﾞ 外:調整不明	Ⅲ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	
66	藤谷窯跡群			6		043-01	底部	粗	3mm以下の長石石英 チャート含	良	橙 7.5YR6/5	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ		津市教育委員会	土師質	暗赤	
67	藤谷窯跡群			11		043-03	体部突帯	やや粗	2mm以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内:ｵｻｴ、ｺﾋﾞﾅﾃﾞ、突帯に対応する部分にﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ		津市教育委員会	硬質	やや赤	下方に力のかかるﾖｺﾅﾃﾞにより突帯下辺角が鋭角となる
68	藤谷窯跡群			45		043-04	口縁部	やや粗	1mm以下の長石石英 含	良	浅黄 2.5Y7/3	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ		津市教育委員会	硬質	薄茶	
69	藤谷窯跡群			49		044-01	口縁部	やや粗	1mm以下の長石 チャート(黒)含	良	にぶい橙 7.5YR6/4	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ		津市教育委員会	硬質	茶	
70	藤谷窯跡群			54		044-02	口縁部	やや粗	1mm以下の長石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ﾅﾅﾒﾊｹ後ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ		津市教育委員会	硬質	茶	
71	藤谷窯跡群	R15		99		044-03	口縁部	粗	3mm以下の長石多、 石英含	良	にぶい黄橙 10YR6/3	内:ｵｻｴ後ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ		津市教育委員会	硬質	青灰	
72	藤谷窯跡群	R65				045-02	口縁部	やや密	1mm以下の長石含	良	黄灰 2.5Y6/1	内:ｵｻｴ・ｺﾋﾞﾅﾃﾞ後ﾖｺﾊｹ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ		津市教育委員会	須恵質	灰	
73	藤谷窯跡群	R24				043-02	体部	粗	1mm以下の長石石英 チャート含	良	浅黄 2.5Y7/3	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ		津市教育委員会	土師質	暗黄	報６と近い
74	藤谷窯跡群					045-03	体部突帯	やや粗		良	橙 7.5YR7/6	内:ｵｻｴ・ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ		津市教育委員会	土師質 (裏面やや硬質)	赤	透孔
75	藤谷窯跡群	2H-13　R57				048-01	体部突帯	やや密	2mm以下の長石含	良	にぶい黄橙 10YR6/4	内:ｵｻｴ、ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ		津市教育委員会	硬質	淡橙	透孔 低い断面M字の突帯

第13表　胎土分析試料観察表４

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法	所蔵	備考		
														質	見た目の色	その他特徴
76	藤谷窯跡群					046-01	口縁部	やや密	2mm以下の長石石英含	良	黄灰 2.5Y6/1	内：ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	須恵質	灰	
77	藤谷窯跡群					045-01	口縁部	やや密	1mm以下の長石石英含	良	灰黄 2.5Y6/2	内：ﾖｺﾊｹ 外：ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	硬質	灰	朝顔形
78	藤谷窯跡群	K76				046-02	口縁部	密		良	灰黄 2.5Y7/2	内：ｵｻｴ、工具ﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	須恵質	灰	
79	藤谷窯跡群					046-04	口縁部	やや密	1mm以下の長石石英多含	良	灰黄 2.5Y6/2	内：ｵｻｴ後ﾖｺﾊｹ 外：ﾅﾅﾒﾊｹ	津市教育委員会	須恵質	灰	
80	藤谷窯跡群					048-03	口縁部	やや密	2mm以下の砂粒含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内：ｵｻｴ・ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	硬質	暗橙	上辺がやや突出する断面M字突帯
81	藤谷窯跡群					048-02	底部	やや密	3mm以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR6/3	内：ｵｻｴ・ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾊｹ後工具ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	硬質	暗肌色	
82	藤谷窯跡群					047-01	口縁部	密		良	灰白 2.5Y8/2	内：ﾖｺﾊｹ 外：ｵｻｴ後ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	白	朝顔形
83	藤谷窯跡群					047-02	口縁部	やや密	1mm以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内：ﾖｺﾊｹ 外：ｵｻｴ後ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	肌色	朝顔形
84	藤谷窯跡群					046-05	口縁部	やや粗	3mm以下の長石石英チャート（赤）含	良	灰黄 2.5Y6/2	内：ﾖｺﾊｹ 外：ｵｻｴﾅﾃﾞ後ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	須恵質	灰	朝顔形
85	藤谷窯跡群					046-03	口縁部	やや密	1mm以下の砂粒含	良	灰白 5Y7/1	内：ﾖｺﾊｹ 外：ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	津市教育委員会	須恵質	灰	朝顔形
86	内多窯跡					049-01	体部突帯	やや密	3mm以下の長石石英含	良	外：にぶい橙 5YR6/4 内：黄灰 2.5Y5/1	内：ｵｻｴﾅﾃﾞ後ﾖｺﾊｹ、突帯と対応する部分にﾖｺﾊｹ 外：ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	硬質	外茶、内黒灰	低い突帯、上半部のﾖｺﾅﾃﾞ強くつまむため、下の突出部が強く押される
87	内多窯跡			3		049-02	底部	やや密	2mm以下の長石石英含	良	にぶい橙 7.5YR6/4	内：ｵｻｴﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	硬質	茶	淡輪技法
88	内多窯跡					059-03	口縁部	密	1mm以下の長石含	良	にぶい橙 7.5YR6/4	内：ｵｻｴ・ｺﾋﾞﾅﾃﾞ後ﾖｺﾊｹ 外：ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	津市教育委員会	硬質	外茶内黒灰	朝顔形
89	久居窯跡群					049-05	体部突帯	やや密	2mm以下の長石含	やや不良	灰白 N7/	内：ｵｻｴﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	須恵質	青灰	
90	ヲノ坪遺跡	Ａ地区　Ｊ３ ﾄﾚﾝﾁNo.１　赤色土	19960605			050-02	口縁部	やや密	1mm以下の長石石英含	良	橙 7.5YR6/6	内：ﾖｺﾊｹ後ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾊｹ後ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	やや硬質の土師質	橙	
91	ヲノ坪遺跡	Ａ地区　Ｊ６ ﾄﾚﾝﾁNo.３	19960606			050-03	口縁部	密	特記事項なし	良	灰 5YR6/1	内：ﾖｺﾊｹ 外：ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	灰	
92	ヲノ坪遺跡	Ａ地区　Ｋ５ ＳＫ１	19960624			050-01	口縁部	やや粗	1mm以下の長石石英含	良	橙 7.5YR7/6	内：ｵｻｴ後ﾖｺﾊｹ 外：ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
93	ヲノ坪遺跡	Ａ地区　Ｊ５ ＳＫ１	19960606			050-04	体部突帯	密	特記事項なし	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内：ｵｻｴﾅﾃﾞ 外：ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
94	ヲノ坪遺跡	Ａ地区　Ｊ５ ＳＫ１黒色包含層	19960606			050-06	底部	やや密	1mm以下の長石含	良	灰 5Y6/1	内：ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ｵｻｴ後縦方向ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	灰	淡輪技法
95	ヲノ坪遺跡	Ａ地区　Ｊ６ ﾄﾚﾝﾁNo.３土坑南 褐色土	19960606			050-05	底部	密	1mm以下の長石含	良	灰黄 2.5Y6/2	内：ﾖｺﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	茶	淡輪技法
96	ヲノ坪遺跡	Ａ地区　Ｊ３ ﾄﾚﾝﾁNo1　赤色土	19960605			063-01	底部	密	特記事項なし	良	浅黄橙 10YR8/4	内：ｺﾋﾞﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾀﾃﾊｹ 外：横板ﾅﾃﾞ後ﾀﾃﾊｹ？	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡黄	淡輪技法
97	明合古墳	表採	19830504			052-01	口縁部	粗	1mm以下の長石石英多、雲母含	良	橙 7.5YR7/6	内：ｵｻｴﾅﾃﾞ 外：ﾅﾃﾞ？　黒斑有	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗茶	大型品か
98	明合古墳	南東区　と　附近	19640820			051-02	体部突帯	やや粗	3mm以下の長石石英多含	良	橙 5YR7/6	内：ｵｻｴﾅﾃﾞ 外：（下段）ﾖｺﾊｹ後ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
99	明合古墳	南東区　と　附近	19640820			051-04	体部	密	特記事項なし	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内：ｵｻｴﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	硬質	橙	
100	明合古墳	南東区　と　附近	19640820			051-01	体部突帯	粗	2mm以下の長石石英含	不良	浅黄橙 10YR8/3	内：ｵｻｴ、縦方向ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外：ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	白	

第14表　胎土分析試料観察表５

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法	所蔵	備考		
														質	見た目の色	その他特徴
101	明合古墳	南東区　と　附近	19640820			051-03	口縁部	やや粗	3mm以下の長石石英多含	良	橙 5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
102	稲葉３号墳	No43　H-49		13	025-01 02	053-01	底部	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/3	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾖｺﾊｹ、工具ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	暗黄橙	ヘラ記号 透孔
103	稲葉３号墳	H-42		14	020-01	053-03	口縁部	密	1mm以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内:ﾅﾅﾒﾊｹ、工具ﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	津市教育委員会	須恵質	灰黄	ヘラ記号 透孔
104	稲葉３号墳	H-16		30	015-02	053-04	口縁部	密	1mm以下の砂粒含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ﾅﾅﾒﾊｹ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ	津市教育委員会	土師質	黄	ヘラ記号 透孔
105	稲葉３号墳	H-46		37	022-02	053-02	体部	密	1mm以下の砂粒含	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾖｺﾊｹ後ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ	津市教育委員会	硬質	橙	透孔
106	稲葉３号墳	42			034-01	054-01	底部	密	3mm以下の長石 チャート(赤)含	良	橙 7.5YR7/6	調整不明	津市教育委員会	土師質	橙	
107	稲葉３号墳	H-44			031-02	053-05	口縁部	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/3	内:ﾅﾅﾒﾊｹ後ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ	津市教育委員会	硬質	淡肌色	
108	稲葉３号墳	49			032-01	054-02	口縁部	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾖｺﾊｹ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	肌色	朝顔形
109	稲葉４号墳	墳丘南面H-34		21	013-01	054-03	口縁部	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	津市教育委員会	硬質	淡橙	ヘラ記号 透孔
110	稲葉４号墳	北西		31	017-02	054-04	体部突帯	密	1mm以下の砂粒含	良	橙 7.5YR7/6	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ゆるいﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	橙	風化大 透孔
111	稲葉５号墳	東土坑		17	006-01	054-05	体部突帯	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	須恵質	暗灰黄	低い突帯 ヘラ記号 透孔
112	稲葉５号墳			20	009-01	054-06	体部突帯	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	硬質	肌色	M字突帯 ヘラ記号 透孔
113	稲葉５号墳	西　H-55		21	010-01	054-07	体部突帯	密	4mm以下の砂粒含	良	橙 5YR7/6	調整不明	津市教育委員会	土師質	橙	ヘラ記号 透孔
114	稲葉５号墳	東土坑		22	006-02	055-01	口縁部	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/3	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	白	透孔
115	稲葉５号墳	南　H-54		23	007-01	055-02	口縁部	密	1mm以下の砂粒含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内:ﾖｺﾊｹ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ　赤彩あり	津市教育委員会	硬質	白	
116	稲葉５号墳	南東　H-52		26	011-02	055-03	体部突帯	密	1mm以下の砂粒含	良	灰黄褐 10YR6/2	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾅﾅﾒﾊｹ	津市教育委員会	硬質	やや赤い	低い突帯 透孔
117	鎌切６号墳	北西墳丘		5	002-02	055-04	体部突帯	密	1mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾖｺﾊｹ	津市教育委員会	硬質	白	強いM字突帯＋内ｺﾋﾞｵｻｴ ?
118	殿村１号墳					055-05	体部突帯	密	1mm以下の砂粒	良	にぶい黄橙 10YR7/2	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	硬質	灰色	押圧技法
119	殿村１号墳					055-06	底部	密	2mm以下の砂粒	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	硬質	橙	淡輪技法
120	殿村１号墳	前方部西側斜面 黄茶～黒色土	19900518			055-07	体部突帯	密	1mm以下の砂粒	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	白	
121	殿村古墳群　不明2					056-01	体部突帯	密	2mm以下の長石石英 雲母含	良	橙 7.5YR6/6	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:下段ﾀﾃﾊｹ、上段ﾖｺﾊｹ	津市教育委員会	土師質	赤	細い台形突帯、中央ややへこむ
122	殿村古墳群　不明2					056-02	体部突帯	やや密	3mm以下の砂粒含	良	橙 5YR6/6	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:不明、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	赤	風化大　丸い突帯、中央はややへこむ
123	西河辺古墳		19921213			内04	体部突帯	密	2mm以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ 、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	赤	朝顔形？　低い台形突帯、中央ややへこむ
124	西河辺古墳		19921213			049-03	体部	やや粗	3mm以下の長石石英 チャート(黒)含	良	橙 7.5YR6/6	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	赤	
125	堂山１号墳	墳丘出土遺物 4LDYIV-1　H27		27		057-01	口縁部	やや粗	4mm以下の長石石英 含	良	にぶい黄 2.5Y6/3	内:ｵｻｴ・ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 後ﾖｺﾊｹ、突帯裏面に対応してｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	須恵質	茶	

第15表　胎土分析試料観察表６

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法	所蔵	備考		
														質	見た目の色	その他特徴
126	元井池古墳	埴輪棺　西棺上		12-2		057-02	口縁部	やや密	1mm以下の長石チャート(黒)含	良	橙 5YR6/6	内:ｺﾋﾞﾅﾃﾞ後ﾖｺﾊｹ 外:ｵｻｴ後ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	津市教育委員会	やや硬質・赤	赤	透孔
127	メクサ３号墳	南土層 主体部掘方埋土他	19899429	100		058-01	体部突帯	やや密	2mm以下の長石石英雲母含	良	橙 7.5YR6/6	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	赤	強いﾖｺﾅﾃﾞによるM字突帯
128	赤塚古墳			4	002-01	059-02	底部	密	2mm以下の長石石英チャート(赤)含	良	橙 5YR7/6	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ後底部付近のみﾖｺﾊｹ	津市教育委員会	土師質	赤	
129	赤塚古墳			1	166-01	058-02	口縁部	やや粗	2mm以下の砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ後ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	白	朝顔形
130	赤塚古墳			6	003-01	059-01	体部突帯	密	1mm以下の長石石英、チャート(赤)多含	良	橙 5YR7/6	内:ｵｻｴｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	赤	高い台形の突帯
131	日余１号墳	ＳＷ				063-03	体部突帯	粗	1mm以下の長石石英含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:(下段)ﾀﾃﾊｹ(上段)ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
132	日余１号墳	裾部　ＳＷ	19740118			060-04	体部突帯	やや粗	3mm以下の長石石英多含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:(下段)縦方向ﾅﾃﾞ(上段)ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡黄	
133	日余１号墳	ＳＷ				063-02	体部突帯(ﾊｶﾞﾚ)	やや粗	1mm以下の長石含	良	灰黄 2.5Y6/2	内:縦方向ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗灰	
134	日余１号墳	墳裾東側	19740123			060-03	体部突帯	やや粗	1mm以下の長石石英チャート含	良	橙 7.5YR7/6	内:ｵｻｴ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付突帯	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
135	日余１号墳	墳頂				062-02	体部突帯	粗	4mm以下の長石石英チャート(赤)多含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、ﾀﾃﾊｹ、貼付突帯	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡黄	
136	日余１号墳	墳頂				062-01	底部	やや粗	3mm以下の長石石英含	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ、ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
137	日余１号墳	墳頂				061-01	口縁部	やや粗	4mm以下の長石石英多含	良	灰黄 2.5Y6/2	内:ﾅﾃﾞ ｵｻｴ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ後一部ﾖｺﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	茶灰	
138	日余１号墳	墳裾　ＳＷ				063-07	体部突帯	粗	3mm以下の長石石英含	良	暗灰黄 2.5Y5/2	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	灰	
139	日余１号墳	墳裾　ＳＷ				063-06	体部突帯	粗	1mm以下の長石石英含	良	黄灰 2.5Y5/1	内:縦方向ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	灰	
140	日余１号墳	墳裾東側	19740123			060-05	口縁部	やや粗	3mm以下の長石石英含	良	にぶい橙 7.5YR6/4	内:ﾖｺﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ後ﾖｺﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	硬質	橙	
141	日余１号墳	墳裾　ＮＷ	19740119			061-02	口縁部	やや粗	4mm以下の長石石英含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	硬質	橙	
142	日余１号墳	ＳＷ				063-04	体部突帯	やや粗	2mm以下の長石石英含	良	灰黄 2.5Y6/2	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	硬質(やや須恵器に近い?)	茶	
143	日余１号墳	ハニワ抽出分				060-02	体部突帯	やや粗	1mm以下の長石石英含	良	橙 7.5YR7/6	内:縦方向ｺﾋﾞﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	硬質	肌色	
144	日余１号墳	墳裾　ＳＷ				060-01	体部突帯	粗	1mm以下の長石含	良	浅黄 2.5Y7/3	内:縦方向ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、沈線1条	三重県埋蔵文化財センター	硬質	淡茶	透孔
145	日余１号墳	墳裾　ＳＷ				063-05	頸部	粗	9mm以下の長石多含	良	にぶい黄橙 10YR6/3	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ、沈線2条	三重県埋蔵文化財センター	硬質(やや須恵器に近い?)	橙	朝顔形
146	志保遺跡	Ｂ１～２　包	19830225			065-05	体部突帯	密	3mm以下の長石石英チャート(赤)含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
147	志保遺跡	Ｂ２　包	19830223			065-03	体部突帯	密	2mm以下の長石石英チャート(赤)含	良	灰白 2.5Y8/2	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:(下段)ﾅﾅﾒﾊｹ(上段)ｵｻｴﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	白	ヘラ記号
148	志保遺跡	Ｂ３　包	19830223			065-04	体部突帯	やや粗	1mm以下の長石石英チャート(赤)多含	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:(下段)ﾀﾃﾊｹ(上段)ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	肌色	
149	志保遺跡	Ａ２～３包	19830222			065-02	底部	やや粗	3mm以下の長石石英多含	良	橙 7.5YR6/6	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	

第16表　胎土分析試料観察表７

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法	所蔵	備考		
														質	見た目の色	その他特徴
150	志保遺跡	Ａ－３　包	19830311			065-01	底部	やや粗	3mm以下の長石石英 チャート(赤)含	良	灰白 10YR8/1	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	白	
151	迎山遺跡	Ｂ　土坑	19891109			064-05	口縁部	やや密	1mm以下の長石石英 含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ﾕﾋﾞｵｻｴ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ後ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
152	迎山遺跡	Ｂ　土坑南褐色土	19891110			064-06	体部突帯	やや粗	1mm以下の長石石英 多含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ﾕﾋﾞｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡黄	
153	迎山遺跡	No.3	19890213			064-01	底部	やや粗	4mm以下の長石石英、 雲母わずかに含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:縦方向ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	
154	迎山遺跡	Ｂ　溝	19891108			064-04	底部	やや密	1mm以下の長石石英 チャート(赤)含	良	浅黄橙 10YR8/3	内:縦方向ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	淡橙	
155	迎山遺跡	(Ａ)黒色包含層	19891114			064-02	口縁部	やや密	1mm以下の砂粒含	良	黄灰 2.5Y6/1	内:ｵｻｴ 外:ﾖｺﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	暗灰	
156	迎山遺跡	Ｂ　土坑南褐色土	19891110			064-07	体部突帯	密	1mm以下の長石石英 含	良	灰黄 2.5Y7/2	内:縦方向ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ後ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	淡灰	
157	迎山遺跡	(Ａ)黒色包含層	19891114			064-03	体部突帯	やや粗	3mm以下の長石石英 多、雲母わずかに含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内:ｵｻｴ 外:縦方向工具ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	硬質	橙	
158	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 ＳＫ５３	19931210			066-04	口縁部	密	3mm以下の長石石英 含	良	橙 7.5YR6/6	内:ﾖｺﾊｹ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	赤	
159	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｈ18 ＳＤ２９	19931102			067-03	口縁部	密	1mm以下の長石石英 雲母含	良	にぶい橙 7.5YR6/4	内:ﾖｺﾊｹ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	暗橙	
160	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 ＳＫ５３(上)	19931207			066-07	体部突帯	密	1mm以下の長石石英 雲母含	良	明褐 7.5YR5/6	内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
161	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 ＳＫ５３(上)	19931207			066-06	体部突帯	密	1mm以下の長石雲母 含	良	橙 7.5YR6/6	内:多方向ﾖｺﾊｹ 外:ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
162	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 ＳＫ５３	19931209	49		066-01	笠体部	やや密	1mm以下の長石わず かに含	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾅﾅﾒﾊｹ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ後ﾖｺﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
163	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 ＳＫ５３(上)	19931207			066-05	体部突帯	やや密	1mm以下の長石石英 チャート(赤)雲母多 含	良	橙 7.5YR6/6	内:ｵｻｴ、多方向ﾖｺﾊｹ 外:(下段)ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ(上段)ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
164	大里西沖遺跡	Ｃ地区　Ｆ36 ＳＤ３	19931006			067-04	体部突帯	やや密	1mm以下の長石石英 含	良	にぶい黄橙 10YR6/4	内:ﾖｺﾊｹ 外:(下段)ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ(上段)ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
165	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 包(ＳＤ５３の上)	19931101			067-01	体部突帯	やや密	1mm以下の長石石英 含	良	橙 5YR6/6	内:ｵｻｴ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	
166	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 ＳＫ５３	19931122			066-02	底部	やや密	2mm以下の長石石英 含	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	淡輪技法
167	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 ＳＫ５３	19931122			066-03	底部	密	特記事項なし	良	橙 5YR7/6	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師質	橙	淡輪技法
168	大里西沖遺跡	Ｂ地区　Ｄ19 包(ＳＤ５３の上)	19931027			067-02	体部突帯	密	特記事項なし	良	にぶい黄橙 10YR5/3	内:ﾖｺﾊｹ 外:ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	三重県埋蔵文化財センター	須恵質	灰	
169	大里西沖遺跡	Ｅ16 包(ＳＤ28の上)	19931028			067-05	底部	やや密	3mm以下の長石石英 雲母含	良	にぶい黄橙 10YR6/4	内:ｵｻｴ、ﾖｺﾅﾃﾞ、縦方向ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	硬質	暗橙	淡輪技法
170	高茶屋大垣内遺跡	第2次Ａ区Ｃ－９ ＳＨ６　④	19961106	83	2022-01	068-03	体部	やや粗	1mm以下の長石石英 多含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師器	暗黄	台付甕
171	高茶屋大垣内遺跡	第2次Ａ区Ｃ－９ ＳＨ６　⑳	19961107	84	2023-01	068-04	体部	やや粗	2mm以下の長石石英 雲母含	良	にぶい橙 7.5YR6/6	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師器	暗橙	台付甕
172	高茶屋大垣内遺跡	第2次Ａ区Ｃ－９ ＳＨ６　①	19961121	88	2004-01	068-05	体部	やや粗	2mm以下の長石石英 雲母含	良	浅黄橙 10YR8/3	内:ﾅﾃﾞ 外:ｶｽﾞﾘ	三重県埋蔵文化財センター	土師器	肌色	台付甕
173	高茶屋大垣内遺跡	第2次Ａ区Ｃ－９ ＳＨ６　㉔		89	2012-01	068-01	体部	やや粗	2mm以下の長石石英 含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師器	暗黄	台付甕
174	高茶屋大垣内遺跡	第2次Ａ区Ｃ－９ ＳＨ６　⑨	19961106	91	2021-01	068-02	体部	密	2mm以下の長石石英 含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内:ｵｻｴﾅﾃﾞ 外:ﾅﾅﾒﾊｹ後ﾀﾃﾊｹ	三重県埋蔵文化財センター	土師器	暗黄	台付甕

第17表　胎土分析試料観察表８

番号	遺跡名	地区・取上番号・遺構	年月日	報告書番号	実測番号	胎土分析実測番号	部位	胎土		焼成	土色帳による色調	技法	所蔵	備考		
														質	見た目の色	その他特徴
175	上野遺跡	第4次　ＩＣ-No25 18・19・20　　溝	20041207			073-01	体部突帯	やや密		良	浅黄橙 10YR8/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後一部ﾅﾅﾒﾊｹ 外:(下段)不明(上段)ﾖｺﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	淡肌色	
176	上野遺跡	No186				074-01	体部突帯	やや粗	2mm以下の長石石英 チャート(赤)含、雲母多く含	良	橙 7.5YR7/6	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:(下段)不明(上段)ｵｻｴ後ﾖｺﾊｹﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	暗橙	
177	上野遺跡	４区　未命名ﾋﾟｯﾄ 登録No.6 遺構精査中出土	20000125			073-02	体部	やや粗	1mm以下の長石石英 チャート(赤)含	良	橙 5YR7/6	内:ﾖｺﾊｹ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	淡橙	
178	上野遺跡	４区未命名ﾋﾟｯﾄ 登録No.６ 遺構精査中出土	20000125			074-02	口縁部	やや密	1mm以下の長石石英 多く含、雲母含	良	明黄褐 10YR7/6	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ｺﾋﾞﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	肌色	
179	上野遺跡	６区　S-2467 No474　44	20010111		194	073-03	体部突帯	やや密	2mm以下の長石石英 雲母含	良	橙 7.5YR6/6	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ 外:(下段)ﾅﾅﾒﾊｹ、ｵｻｴ(上段)ﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	暗橙	突帯下にもﾅﾅﾒﾊｹ 180と同一個体か
180	上野遺跡	６区　S-3154-R 380 登録No.73	20001218			073-04	底部近く	やや密	1mm以下の長石石英 雲母含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ﾅﾃﾞ後ﾖｺﾊｹ 外:ﾅﾃﾞ後ﾅﾅﾒﾊｹ	津市教育委員会	土師質	暗橙	179と同一個体か
181	上野遺跡	４区　S1510 登録No.12 遺構１段下げ	20000210			075-01	底部	やや密	1mm以下の長石石英 チャート(赤)含	良	浅黄橙 10YR8/4	調整不明	津市教育委員会	土師質	肌色	形象の円筒部か
182	上野遺跡	６区　S-3133-C No576 ６区　S-3133-E No93	20010118 20001219		281	075-02	底部	やや密	1mm以下の長石石英 雲母含	良	橙 7.5YR6/6	内:ｺﾋﾞｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	暗茶	土師器甑
183	一色山古墳群	２　堀	19960319			069-03	口縁部	やや粗	2mm以下の長石石英 含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗ記号	津市教育委員会	土師質	肌色	ヘラ記号
184	一色山古墳群	墳丘頂上	19960321			070-01	口縁部	密	1mm以下の長石石英 含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、斜ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:(下段)ﾀﾃﾊｹ(上段)ﾀﾃﾊｹ後沈線、ﾖｺﾅﾃﾞ、 ﾍﾗ記号、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	肌色	ヘラ記号
185	一色山古墳群	１　堀	19960223			069-02	体部突帯	やや粗	2mm以下の長石石英 含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、縦ｺﾋﾞﾅﾃﾞ 外:(下段)ﾀﾃﾊｹ(上段)不明、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	肌色	断面低い三角形
186	一色山古墳群	４墳丘	19960314			071-01	口縁部	やや粗	2mm以下の長石石英 含	良	灰白 2.5Y8/2	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:(下段)ﾀﾃﾊｹ(上段)ﾀﾃﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	須恵質 (硬質)	暗茶	透孔
187	一色山古墳群	１　墳丘	19960326			069-01	底部	やや粗	3mm以下の石英長石 チャート(赤)含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	淡黄	
188	一色山古墳群	１－墳	19960221			070-02	底部	やや密	2mm以下の長石石英 含	良	淡黄 2.5Y8/3	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、横方向板ﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	淡黄	
189	一色山古墳群	４墳丘	19960319			070-04	底部	やや密	1mm以下の長石石英 チャート(赤)多く含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ	津市教育委員会	土師質	肌色	
190	一色山古墳群	墳２	19960307			070-03	底部	やや密	1mm以下の長石石英 含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、一部ﾅﾅﾒﾊｹ 外:ﾀﾃﾊｹ後押圧	津市教育委員会	土師質	淡黄	底部に棒状具当たり痕 有
191	一色山古墳群	１　堀	19960221			069-04	底部	やや粗	3mm以下の長石含	良	浅黄橙 10YR8/4	内:ｺﾋﾞｵｻｴ 外:ﾀﾃﾊｹ後押圧	津市教育委員会	土師質	肌色	
192	庄田２号墳	R－４	19930528			072-02	体部突帯	密	1mm以下の長石石英 含	良	灰 5Y6/1	内:ﾀﾃｺﾋﾅﾃﾞ 外:（下段)ﾅﾅﾒﾊｹ(上段)ﾀﾃﾊｹ後ﾅﾅﾒﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	須恵質	灰	上段に透孔
193	庄田２号墳	埋土	19930520			072-03	体部突帯	密	5mm以下の長石含	良	にぶい橙 5YR7/4	内:ﾀﾃｺﾋﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:（下段)ﾀﾃﾊｹ(上段)ﾀﾃﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	硬質	明橙	上段に透孔 扁平な突帯
194	庄田２号墳	西側ﾄﾚﾝﾁ南側 埴輪だまり Ｒ３	19930529			072-04	体部突帯	やや密	2mm以下の長石石英 含	良	灰白 10YR8/2	内:ﾀﾃｺﾋﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:（下段)ﾅﾅﾒﾊｹ(上段)ﾅﾅﾒﾊｹ、貼付ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	暗肌色	
195	庄田２号墳	西側ﾄﾚﾝﾁ南側 埴輪だまり Ｒ３	19930529			072-01	底部	密	1mm以下の長石石英 含	良	橙 7.5YR7/6	内:ﾀﾃｺﾋﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ後板ﾅﾃﾞ	津市教育委員会	土師質	淡橙	底部に植物圧痕有

Ⅴ　調査のまとめ

にんごう遺跡・にんごう古墳群が所在する半田丘陵では古墳時代後期、６世紀代を中心とする古墳が多く造営された。その中には小型前方後円墳が数基含まれ、安濃川上流部右岸丘陵上に数多く造営された古墳群と合わせて、三重の古墳時代を検討する上で重要な地域である。以下、調査成果から導き出された諸要素について若干の考察を加え、今回の調査のまとめとしたい。

１　縄文時代陥し穴状遺構について

にんごう遺跡Ｄ地区では、時期・用途不明の土坑を９基検出した。このうち、ＳＫ７・12・18は遺構の切合いから５世紀後半と同じかそれより古い時代のものと判断し、縄文時代の陥し穴状遺構の可能性を指摘した。

陥し穴状遺構は、平面形は楕円・長楕円・円形など、大小さまざまながら長径２ｍ前後・検出面からの深さ１～２ｍ前後で底に向かって次第に狭くなるのが一般的である。底面に深い小穴が１個ないし数個確認できる事例があり、それは先端の尖った杭を立て、落ち込んだ動物を刺す逆茂木とされている①。

三重県内では、松阪市馬ノ瀬遺跡で縄文時代早期の陥し穴状遺構６基が確認されている。この６基は平面形状と下部施設（棒状埋設物の痕跡）の有無で２つに分類されている。下部埋設物の伴わないⅠ類は、長径1.2～1.3m・短径1.0～1.15m、検出面からの深さ0.5～1.1mで床面は平坦となる。それに比して、下部施設を伴うⅡ類は深さが1.2～1.4mと深い。しかし、このような規模や構造の違いは時間的・空間的な差異を示すものか、あるいは捕獲対象物の相違を示すものかは明確にはできないと結論付ける②。馬ノ瀬遺跡の陥し穴状遺構の立地は、丘陵稜線上付近に立地し、特に並んでいるようには見られず、最も北に位置する土壙５と南に位置する土壙６との距離は約30mである。もちろん、発掘調査範囲は限られており、更に広範囲に分布する可能性はある。

にんごう遺跡の例では深いものでもＳＫ18の78㎝と陥し穴としては浅く、また底面に小穴などは検出できなかった。小穴の有無については、遺跡によりその比率に差があることが指摘されており③、その小穴自体の深さも５㎝程度から１ｍに及ぶものまでがある。この小穴が落ち込んだ動物にダメージを与える逆茂木であれば、５㎝程度しか埋めていない木では暴れる動物に対し何の威力も与えられない。よって、浅い小穴は逆茂木ではなく、別の場所で製作した縦横の棒で組んだ構造物の据え付け痕跡であり、小穴の見られない土坑についてもこのような独立した仕掛けを土坑内に設置していたと指摘する④。

にんごう遺跡の土坑群の立地に着目すると、３基と少なく規則性を見出すことは難しいが、２号墳墳丘部で検出されたＳＫ12と最も東で検出したＳＫ18を結ぶと、３基は丘陵尾根上にほぼ直線に並んで立地する。にんごう遺跡の土坑は、出土遺物もなく縄文時代の遺構が他にないことから、土坑の年代を縄文時代とし、陥し穴と断定することは避けるべきであるかもしれない。しかし、出土遺物がないことはすなわちその土坑が貯蔵穴あるいは廃棄土坑ではないことを示し、縄文時代の他の遺構がないことは、この地が生活の場ではないことを示すといえるのではないだろうか。

ＳＫ12の北、包含層ではあるがＬ13区から石鏃が出土しており、縄文時代にはこの丘陵は狩猟の地であったのであろう。

２　安濃郡における弥生後期～古墳後期の墳墓と集落

にんごう遺跡では、２号墳の盛土直下旧表土から廻間Ⅱ式併行期の土師器高杯片が出土したことから、台状墓の存在が考えられる。ここでは、周辺の弥生時代後期～古墳時代後期の墳墓と集落の状況を概観したい。

近藤義郎⑤は、弥生時代後期になって集団墓から離脱した権力者の墓が弥生墳墓（台状墓）であると指摘する。安濃川・岩田川流域の台状墓には、安濃川左岸で安濃川支流の美濃屋川左岸台地上に位置する大城遺跡群で弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の方形台状墓９基があり、同時もしくはやや先行

する時期の住居群も検出されている。また、大城遺跡群から美濃屋川をやや下った津市安濃町太田で倉谷墳墓群２基が造営される。安濃川右岸を見ると、殿村遺跡とその東に位置する丘陵の平栄遺跡において台状墓が、平栄遺跡に隣接して大ヶ瀬弥生墳墓があり、いずれもほぼ同時期の小規模な住居跡が検出されている。また、そこから谷を挟んだ東丘陵の鎌切遺跡において墳墓２基が調査された。また、鎌切遺跡が位置する半田丘陵を東に行った地点に上村遺跡があり、ここでも遺構は検出されていないが檀状遺構があり墳墓の可能性が、更に東に行ったところに高松弥生墳墓がある。そしてこの同一丘陵上の高松Ｃ遺跡等で当該時期の集落が調査されている。

これらの墳墓は弥生時代後期末以降のもので、弥生時代後期までは安濃川流域の沖積地に立地する惣作遺跡・位田遺跡の方形周溝墓群や替田遺跡の土壙墓群など、低地において造墓活動が見られた。近藤氏の指摘通りの状況を示すと考えられるが、台状墓に対する弥生時代後期末以降の「下層」の墳墓群は未確認である。

古墳時代前期になると坂本６号墳が造営され、弥生時代後期末の台状墓から継続した造墓活動がうかがえる地域といえる。その他に津市安濃町日野丘１号墳出土の車輪石があり、消滅した前期古墳の存在が考えられる。続いて池ノ谷古墳、明合古墳が造営されるが、前者は全長約87ｍの前方後円墳、後者は双方中方墳と特殊な墳形を持つ。それらに対する集落は、池ノ谷古墳は高茶屋大垣内遺跡、明合古墳では周辺で調査がなく、今後発見される可能性がある。

５世紀中頃以降には爆発的に群集墳が造営される。安濃川右岸の長谷山には400基以上の長谷山古墳群があり、長谷山から北～南東に伸びる丘陵上には更に別の古墳群が密集する。墳形は円墳が主体を占め、埋葬主体部が判明するものは横穴式石室である。

安濃川右岸に位置する平田古墳群は、長谷山から北東方向に伸びる丘陵上の40基近い古墳群である。その造墓の契機は方墳である35号墳の築造で、現在の大市神社から尾根を上った位置、標高40.5ｍに位置する。築造時期は、須恵器の型式からにんごう２号墳と同時期のＴＫ208型式併行期である。埋葬主体部は木棺直葬で武器・農工具、滑石製小玉が副葬され、この辺りの中期古墳の副葬品と種類は共通し豊富である。しかし埴輪は持たない。その後、35号墳から尾根を上ったところに円墳が造られ、竪穴系横口式石室という初期横穴式石室の一形態を採用する。そうして円墳の造墓が続き、その後また方墳が採用される。その他に、7世紀前半築造とされる12号墳の磚槨式横口式石槨など渡来系氏族との関係がうかがえる埋葬形態も持ち、長谷山古墳群の副葬品とともに、渡来系氏族の関与が考えられる。

これは、長谷山から安濃川右岸上流側丘陵の古墳群についても見られる特徴である。いずれも墳形に円墳を採用し、埋葬主体部は横穴式石室を持つ。前方後円墳は数基見られるが、古墳群に１基といった状況である。これらに対応する集落は安濃川沖積地の蔵田遺跡（掘立柱建物10棟）等があるが、古墳の数に対応するような大規模な集落はない。

それに対し安濃川左岸では、丘陵毎に２～５基前後の古墳群が造られるが、古くは木棺直葬墳でそれ以降は明確なものがないが、引き続き木棺直葬を採用するようである[6]。集落ははっきりしない。

また、安濃川中流から下流域の右岸丘陵である半田丘陵上では、３～４基の小型前方後円墳が６世紀前半代に造営され、埋葬主体部は木棺直葬に限られる。こちらについても安濃川右岸上流域と同様、古墳数に対して集落の規模が小さい。

副葬品で見ていくと、安濃川右岸上流域の古墳では、時期はやや下るが須恵器平底壺や金属製品でも簪など、渡来系氏族との関連がうかがえるものが見られる。しかし、安濃川右岸中下流域の古墳では鉄刀や馬具、刀子など同時期の県内他地域の古墳副葬品と類似するものである。

第Ⅱ章でも見たように、半田丘陵周辺には生産遺跡が集中する。藤谷窯跡群は胎土分析でも明らかなように比較的広い範囲に埴輪を供給した窯で、埴輪も尾張型埴輪や近畿系埴輪と類似する特徴を持つ。それに先行して操業された久居窯跡群は陶邑窯跡群との関係があり、陶邑から工人が将来したと考えられている。この二つの窯群は隣接し、同じ影響の下で設置されたのであろう。それに加えて、高茶屋大垣内遺跡における土師器焼成土坑と雄略朝における藤形の贄土師部[7]との関連からも、中央政権との結び

つきの強さがうかがえる。このように、中央の影響下で操業を開始した藤谷窯製の埴輪を持つ稲葉・鎌切古墳群は、同様の影響下にあった集団の墳墓群といえるのではないだろうか。

蛇足ではあるが、古墳の墳丘裾等から発見される埴輪棺について清家章[8]は、その古墳の主体埋葬部に対する周辺埋葬として位置づける。そして埴輪棺には、拠るべき主墳を持たず埴輪棺だけで集団墓を形成するものと周辺埋葬型のものがあり、後者の場合、従属する古墳の埴輪を転用することが多いと指摘する。埴輪棺を持つ稲葉４号墳は、墳丘に樹立する埴輪は外面調整がタテハケのみ、埴輪棺の埴輪の外面調整はＢ種ヨコハケと異なるが、ヘラ記号から共に藤谷窯跡群で作られたものである。このような埴輪棺は大里西沖遺跡でも見られ、元井池古墳では主体部に円筒埴輪が樹立していたと指摘される。埴輪を棺として採用するもしくは埋葬部に入れるという意識をこの辺りでは共有していたのであろうか。

中村光司は、池ノ谷古墳につながる小型前方後円墳と、明合古墳を祖とする方墳のグループの２つの異なる集団の存在を指摘した[9]。今回、方墳を採用するにんごう２号墳が確認されたが、にんごう古墳群と隣接する稲葉・鎌切古墳群の間に性格の断絶の有無を判断する要素は全くない。方墳は、５世紀中頃のこの地域の主たる墳形であり、当該時期にあって方墳と前方後円墳は同時併存するのではなく、方墳から前方後円墳という築造の時期差と考えた方が自然ではないだろうか。例外として、平田古墳群のように方墳→円墳→方墳という築造の変遷が見られる古墳群もあり、６世紀以降に造営される方墳に限っては円墳や前方後円墳を造営するグループとは異なるグループのものである可能性がある。想像をたくましくして言うと、前方後円墳を採用する集団は中央政権の影響下にあり、そのような前方後円墳を小型であっても３基以上持つ稲葉・鎌切古墳群は、埴輪からもその可能性が高いのではないだろうか。

にんごう古墳群の方墳が築造され、前方後円墳の築造が見られなくなる時期の存在は、古墳の規制[10]という状況を示しているのであろうか。それまで、中央政権に対し対等とは言わないまでも独自性を保有していたこの地域の集団が、その「規制」後に再度、小型ではあるが前方後円墳を採用し、中央政権の影響下で生産遺跡が展開する。そしてまたそれ以降、安濃川右岸上流域では渡来系文化に影響を受けた集団による造墓活動も行われるのである。

３　総括

最後に、事実報告部分では深く検討できなかったにんごう２号墳に再度着目する。にんごう２号墳では埋葬主体部は検出されなかった。しかし、鉄剣が出土したＳＫ５は、木棺直葬の棺部分の窪みが辛うじて残ったもので、残存した墳丘も削平された南部分に向かって斜めに削平されているため、木棺の掘方等は検出できなかったとも考えられる。そうだとしても、土坑部の残存長は人を埋葬するには小さく、他の副葬品もないことから、やはり剣の埋納土坑であると本書では結論付ける。

周溝出土の須恵器は周溝北西隅付近に集中している。出土したのは杯身２個体分、瑳１点で、瑳は天地逆で出土したが床面から若干浮いた状態であり、当初からその位置に置かれたとは考えられなかった。よって、何処からか移動したもの、墳丘上からの転落の可能性がある。しかし古墳の大半が削平されていたため、古墳に対する祭祀の検討はこれ以上不可能である。

にんごう遺跡・にんごう古墳群の調査は、この地域の歴史復元を行う上でも重要な成果となった。しかし、報告者の力量不足や紙幅の関係で限定的な検討となってしまった。この調査成果から導き出される諸問題の解明は、今後の課題としたい。

【註釈】

① 加藤晋平「落し穴」『日本考古学事典』株式会社三省堂　2002年

② 「４．馬ノ瀬遺跡の調査」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991年

③ 稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴猟」『論苑考古学』株式会社天山舎　1993年

④ 前掲註③文献より

⑤ 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店　1983年

⑥ 君ヶ口古墳の横穴式木芯室のような特殊な形態の埋葬主体部を持つものや、７世紀に属する鳥居古墳など横穴式石室を持つものは存在するがいずれも単独墳である。

⑦ 『日本書紀』雄略天皇十七年条（『日本古典文学大系六七　日本書紀上』岩波書店　1967年）。津市の生産遺跡と『日本書紀』の記述との関連を指摘したものに、岡田登「三重県津市垂水発見の埴輪窯について－藤形の贄土師部との関連をめぐって－」『考古学論叢』第15巻第２号　皇學館大學人文學會　1982年

⑧ 清家章「古墳時代周辺埋葬墓考 － 畿内の埴輪棺を中心に －」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室　1999年

⑨ 中村光司「Ⅱ．位置と環境」『西岡古墳発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995年

⑩ 小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第３号　1970年

写 真 図 版

図版１

Ａ地区調査前（伐採前）状況（北から）

Ａ地区調査前（伐採後）状況（東から）

図版２

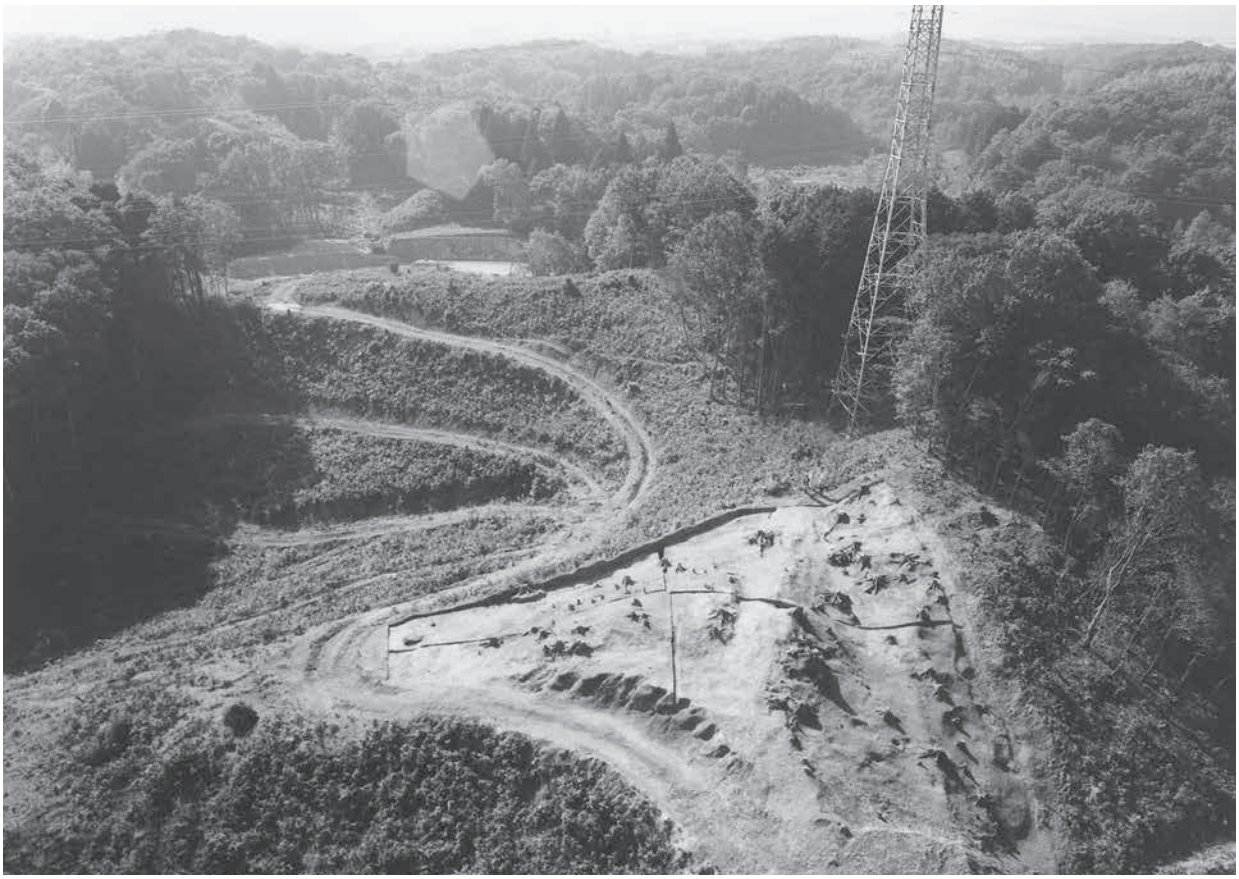
Ａ地区調査後全景（東から）

Ａ地区引き渡し後状況（左下：工事により消滅、北東から）

Ｂ地区調査前状況（南西から）

Ｂ地区調査後全景（南西から）

図版４

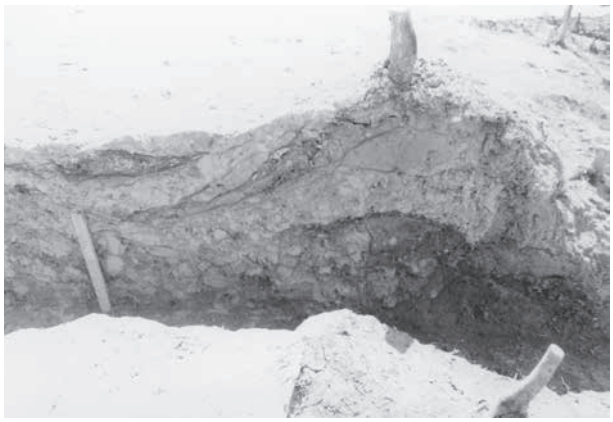


Ｂ地区調査後全景（北から）

Ｂ地区調査後全景（真上から）

７号墳全景（東から）

近代以降の改変（東半部、北から）



近代以降の改変（西半部、北から）

７号墳西部落ち込みと鉄塔への道（北から）

図版６

Ｃ地区（調査前、伐採後）と久居台地を望む（北東から）

１号墳調査前（伐採後）状況（北から）

Ｃ地区調査後全景（西から）

１号墳調査後全景（真上から）

図版８

１号墳墳丘（南東から）

１号墳主体部（西から）

１号墳主体部（南から）

１号墳主体部土器出土状況（西から）

１号墳主体部土層断面（南東から）

１号墳主体部（拡張後）土器出土状況（南から）

１号墳墳丘土層断面（南西から）

１号墳墳丘裾土器出土状況（南から）

１号墳周溝土層断面（南から）

図版10

１号墳谷部断ち割り土層断面１（東から）

１号墳谷部断ち割り土層断面２（東から）

１号墳谷部断ち割り土層断面３（東から）

１号墳谷部断ち割り土層断面４（東から）

Ｃ地区東半部全景（南から）

Ｄ地区調査前（伐採後）状況（北東から）

２号墳調査前状況（北から）

図版12

２号墳調査前状況（真上から）

Ｄ地区調査後全景（真上から）

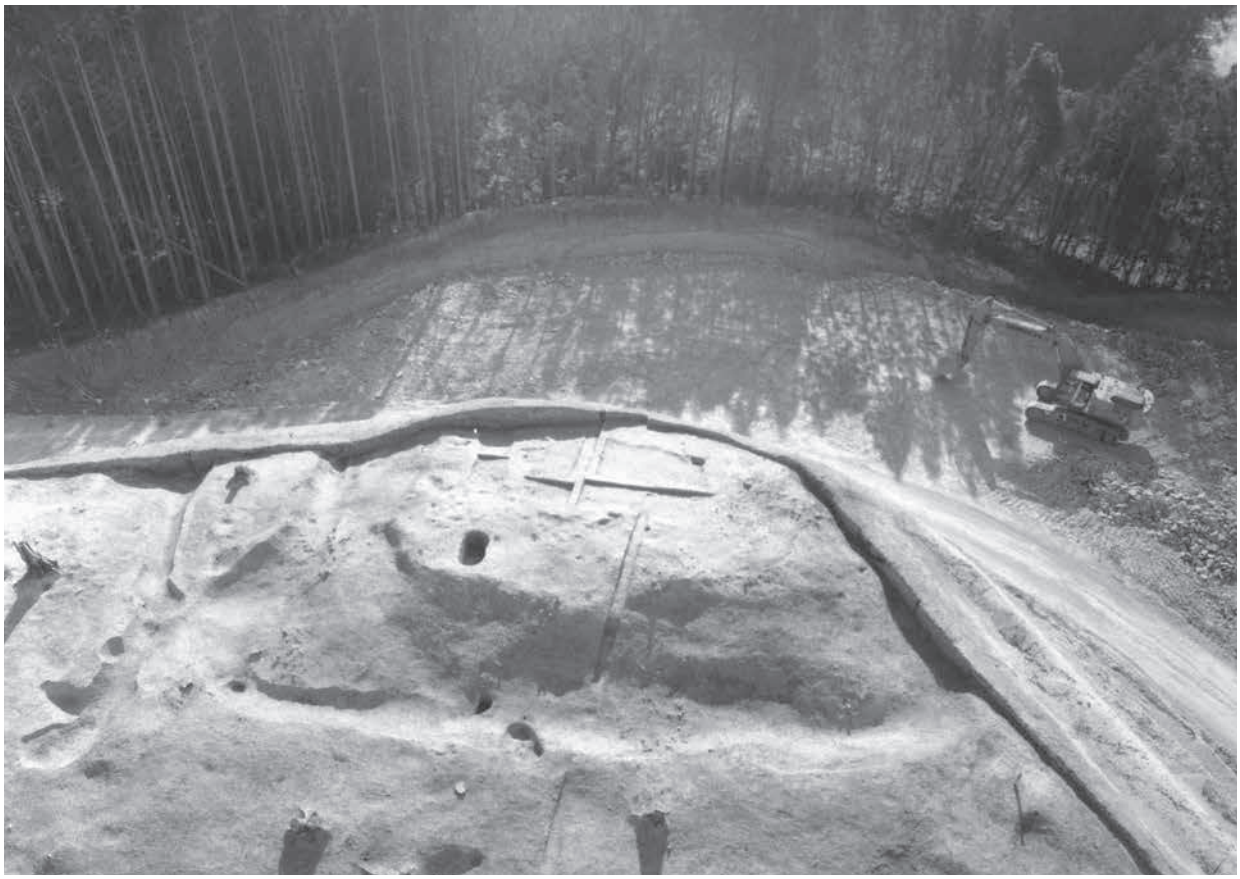
Ｄ地区と西の丘陵を望む（東から）

Ｃ地区（消滅）とＤ地区全景（北から）

図版14

Ｄ地区全景（西から）

Ｄ地区全景（北東から）



２号墳調査後全景（北から）

２号墳調査後全景（北から）

図版16

２号墳周溝北東隅付近と東周溝（北西から）

２号墳北周溝（北東から）

２号墳西周溝（北西から）

２号墳鉄剣出土状況（東から）

２号墳鉄剣出土状況（北西から）

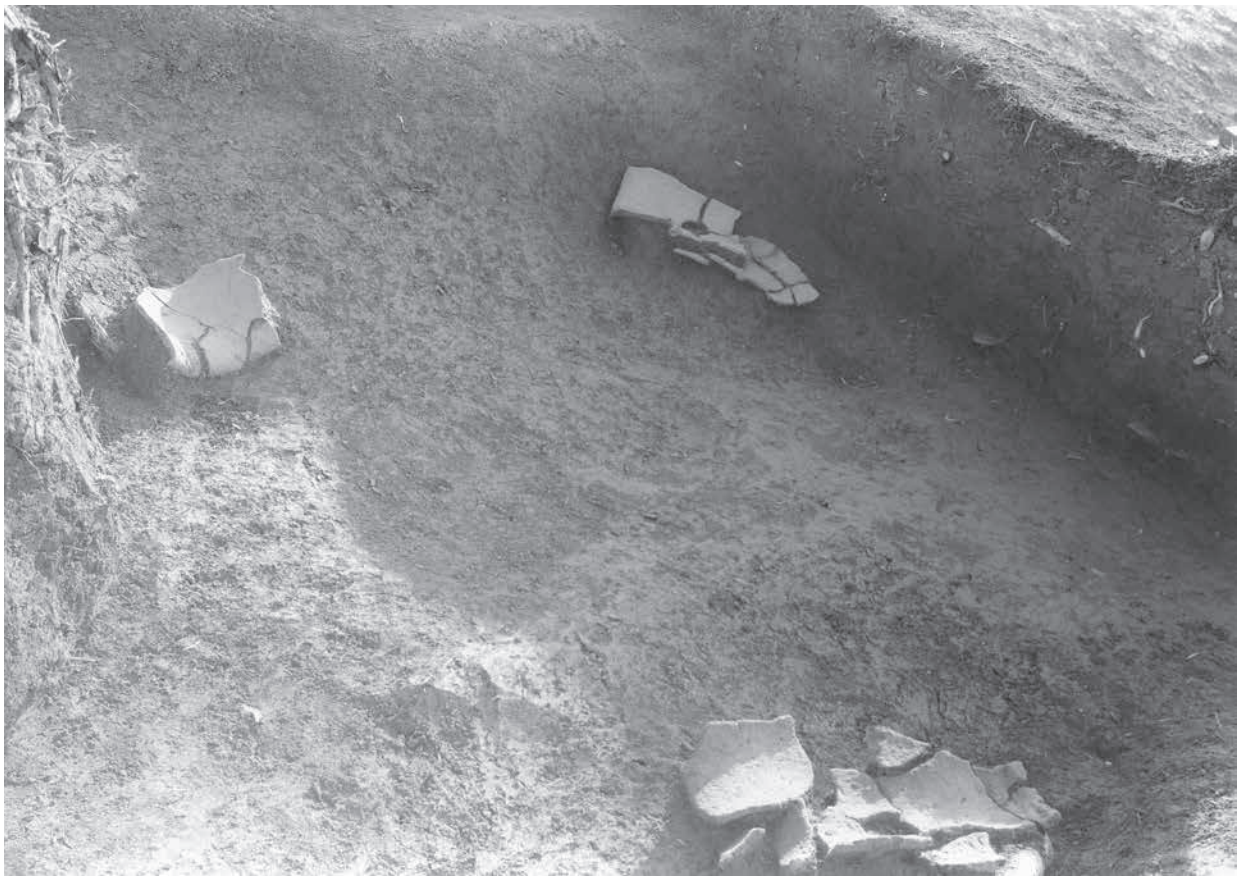
２号墳墳丘土層断面（東から）

図版18

２号墳墳丘土層東西方向南面（南から）

２号墳墳丘土層東西方向北面（北から）

２号墳墳丘・周溝土層断面（西から）



北周溝埴輪出土状況（北から）

図版20

東周溝埴輪出土状況（北から）

東周溝埴輪出土状況（畔撤去後、北西から）

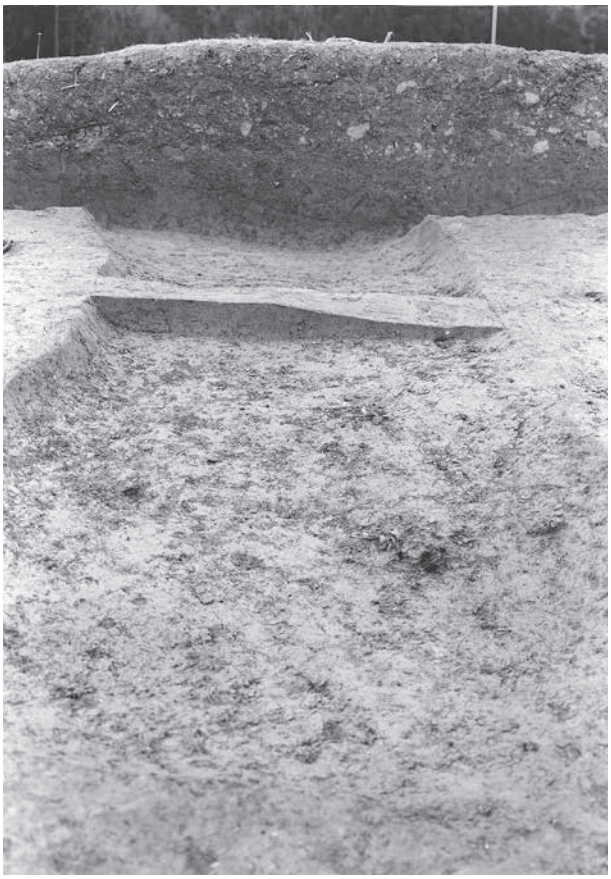
北周溝埴輪出土状況（北西から）

周溝北西隅須恵器出土状況（南から）

西周溝須恵器出土状況（北から）

周溝北西隅付近土層断面（北から）

図版22



２号墳墳丘下旧表土土層断面（北から）

旧表土と旧地山土層断面（西から）

３号墳北周溝土層断面（東から）

３号墳東周溝土層断面（北から）

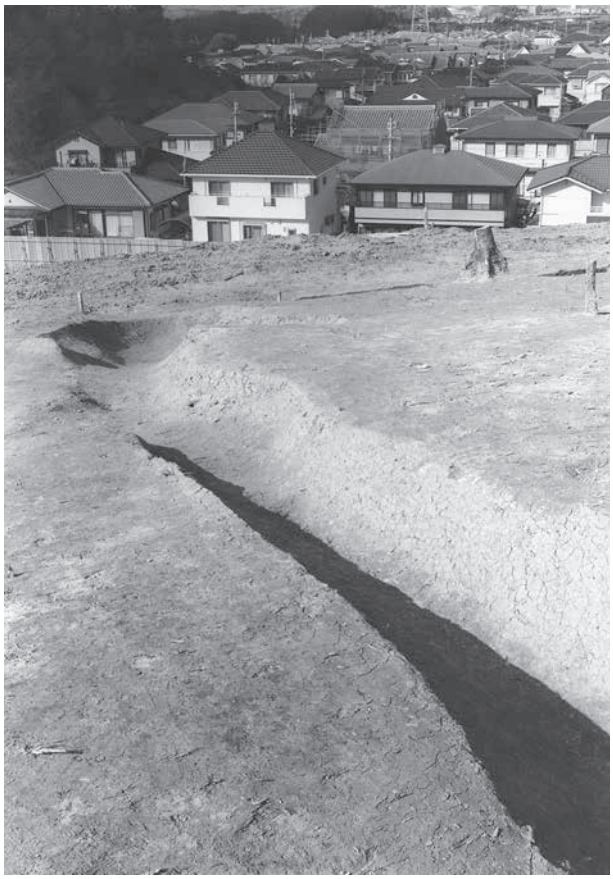
３号墳全景（北西から）

３号墳全景（北東から）

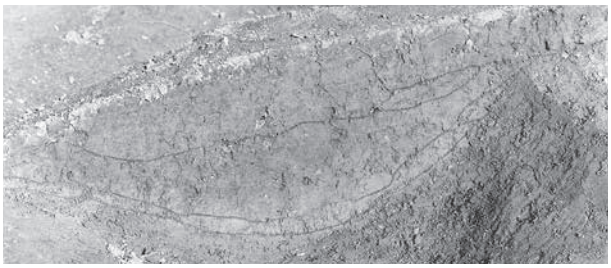
図版24

８号墳と２号墳全景（北東から）

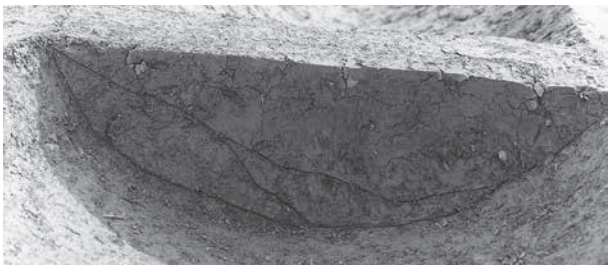
８号墳周溝（ＳＤ４）南西隅土層断面（北から）



８号墳西周溝（ＳＤ４、南から）



８号墳西周溝（ＳＤ４）北土層断面（南から）



８号墳西周溝（ＳＤ４）南土層断面（北から）

８号墳東周溝（ＳＤ８）南土層断面（北から）

８号墳周溝（ＳＤ４）南西隅拡張部（北から）

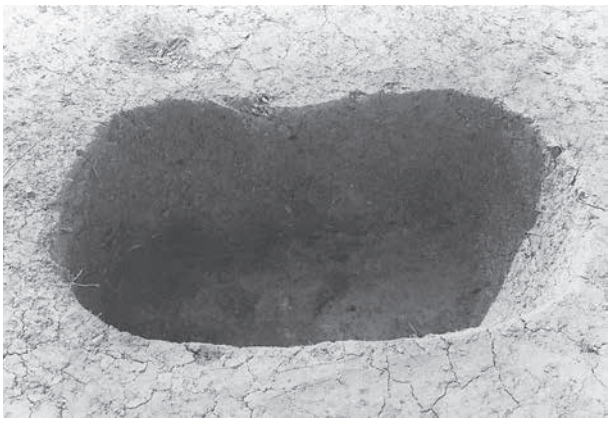
図版26

旧４号墳付近全景（西から）

旧４号墳付近南北方向土層断面（東から）

旧４号墳付近東西方向土層断面（南から）

ＳＫ７完掘状況（南西から）



ＳＫ12完掘状況（北東から）

ＳＫ７土層断面（北から）

ＳＫ12土層断面（西から）

ＳＫ18完掘状況（北から）

ＳＫ17土層断面（北から）

ＳＫ18土層断面（北から）

ＳＫ15土層断面（北から）

図版28

3

66

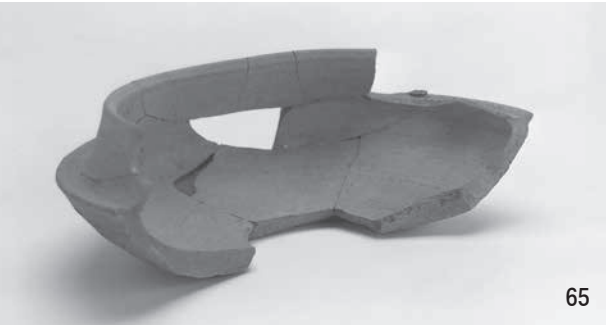
4

67

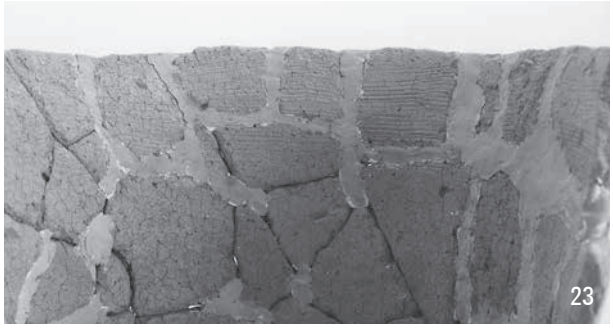
5

6

73


65

出土遺物１



出土遺物２

図版30

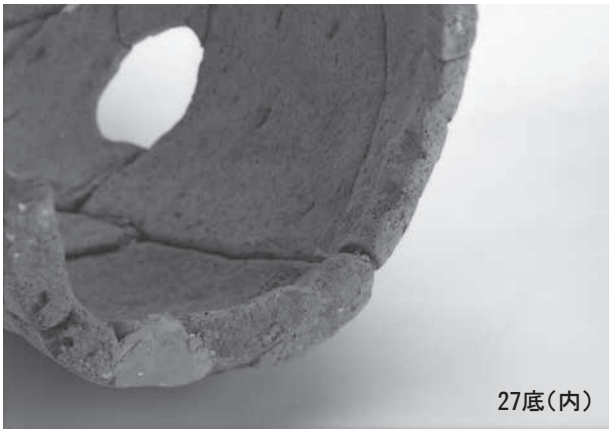
24底

27

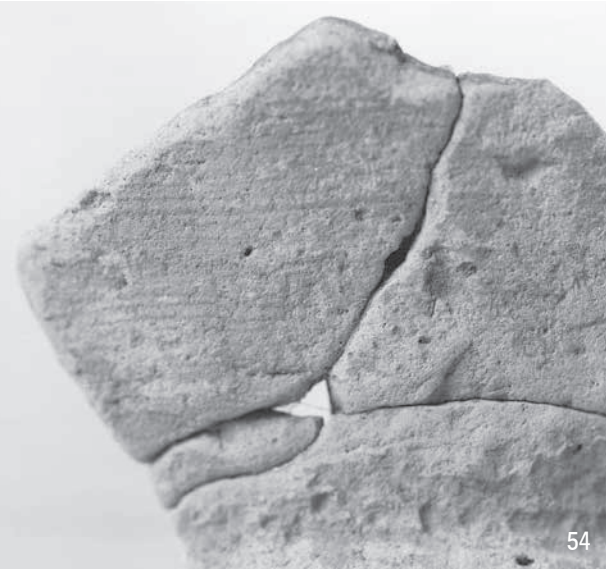
32

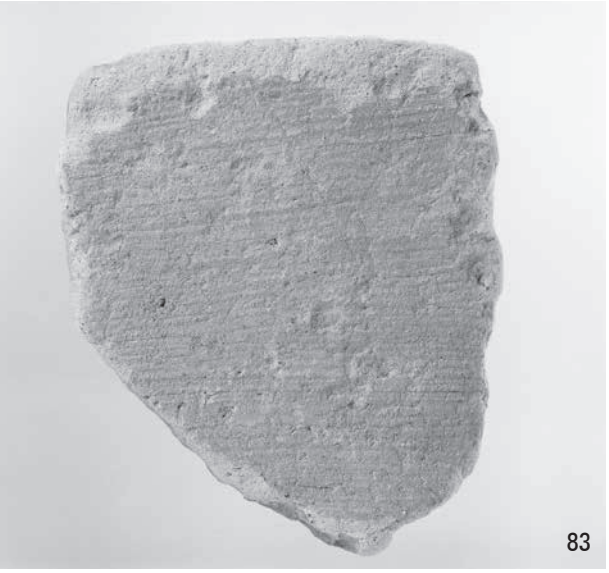
27底（外）

32底


27底（内）

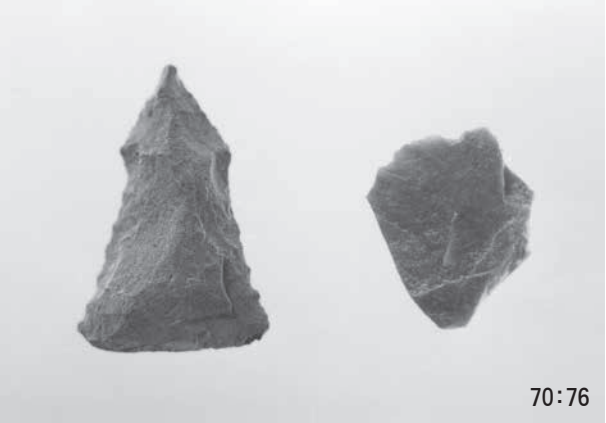
出土遺物３



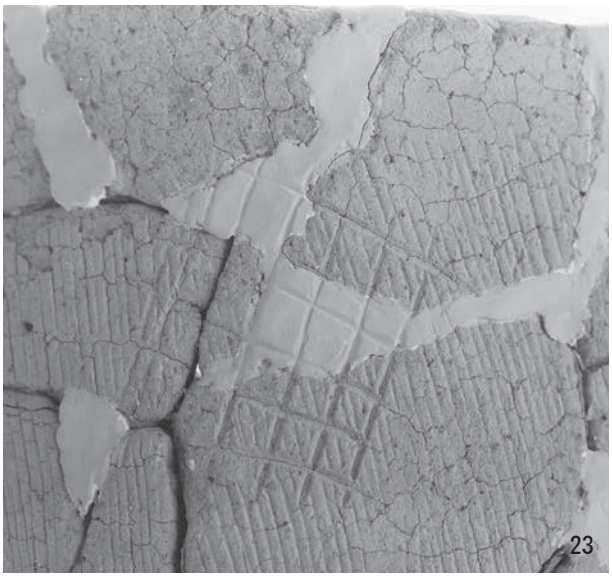


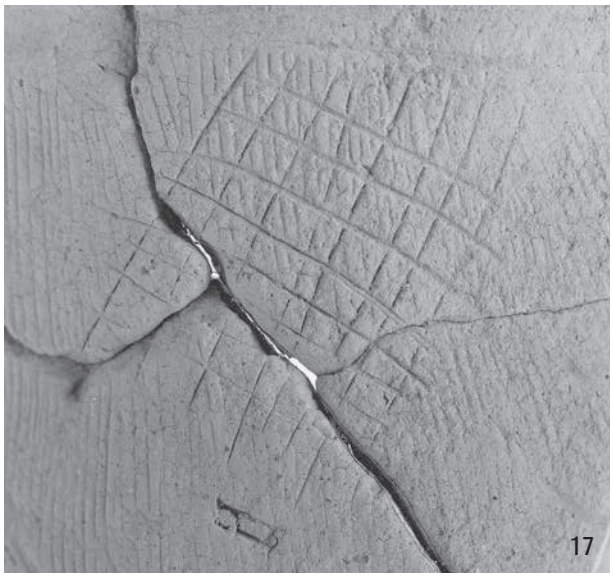
出土遺物４

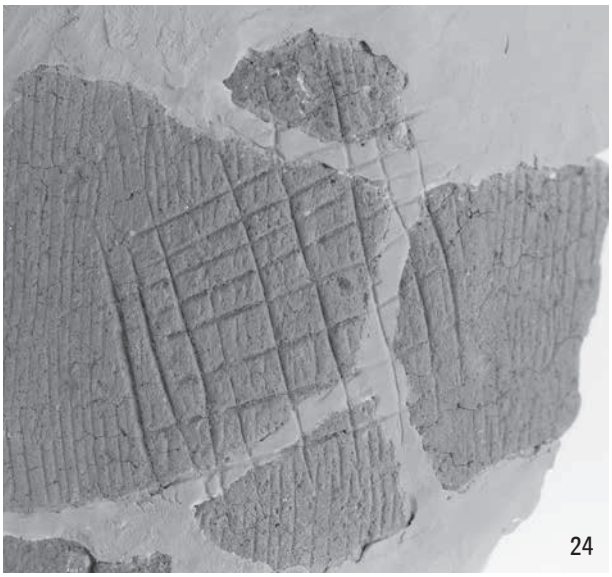
図版32

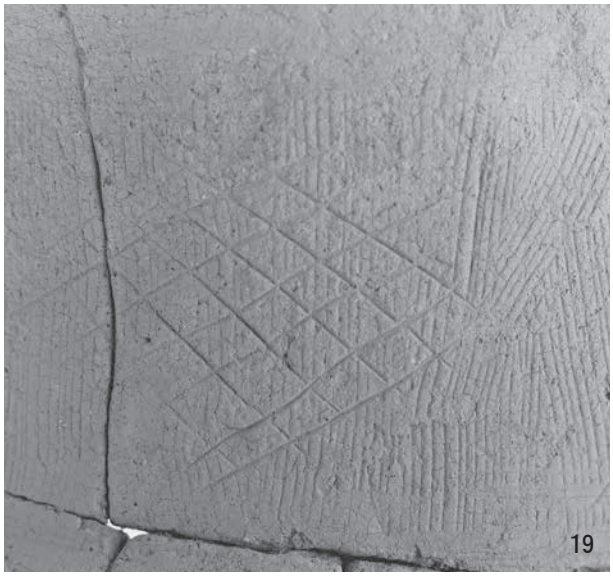


出土遺物５





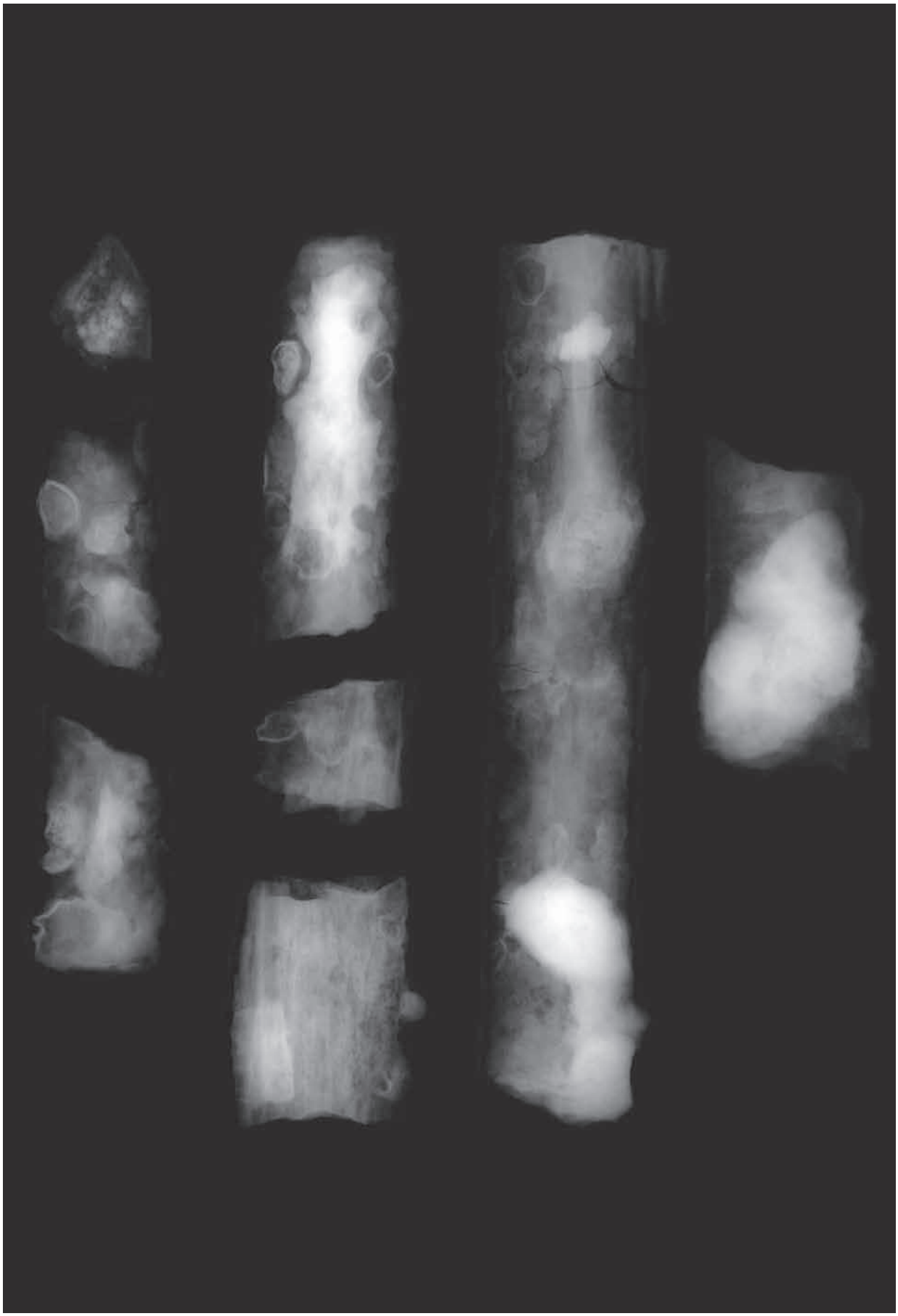




出土遺物６

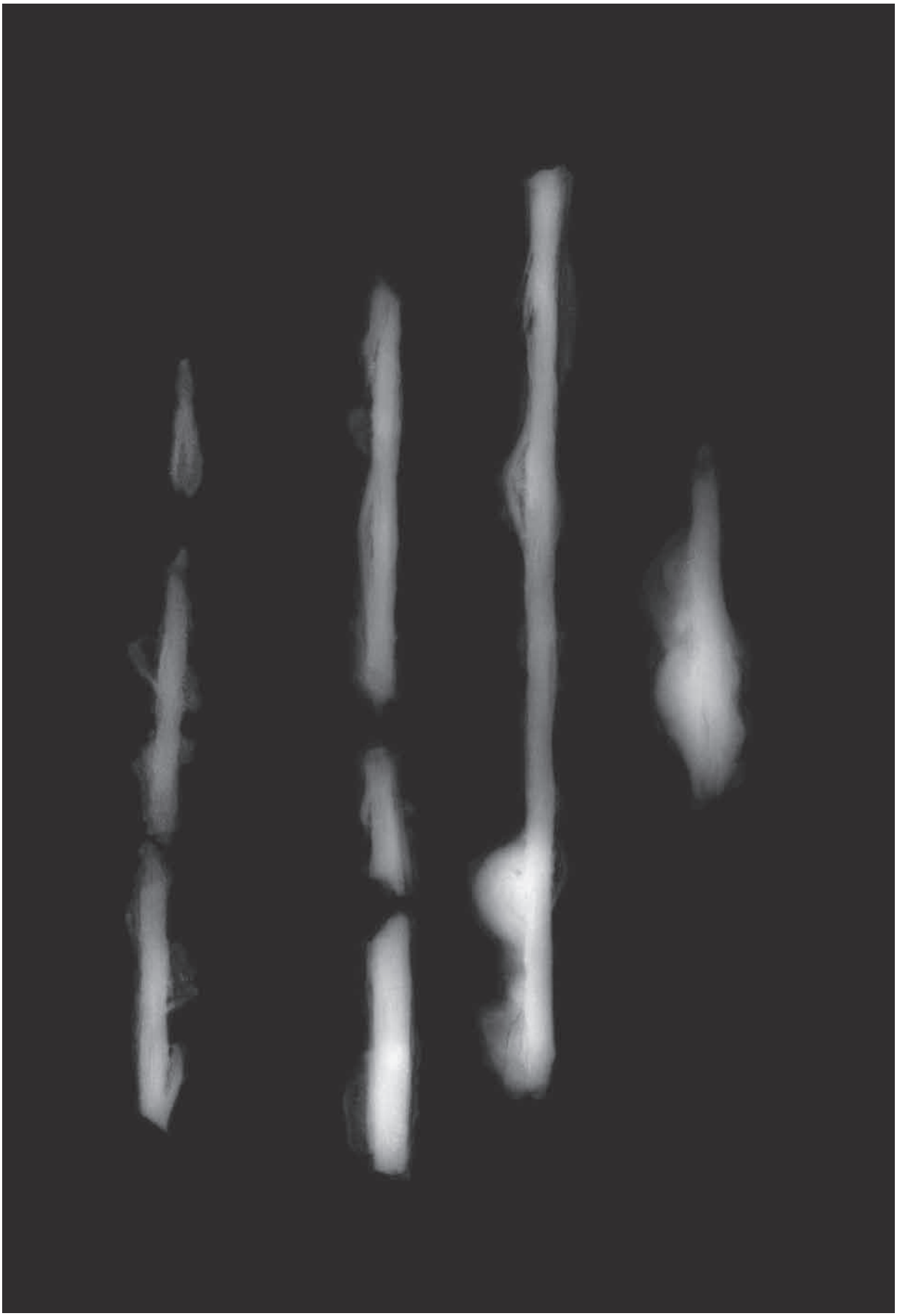
図版34

出土遺物７

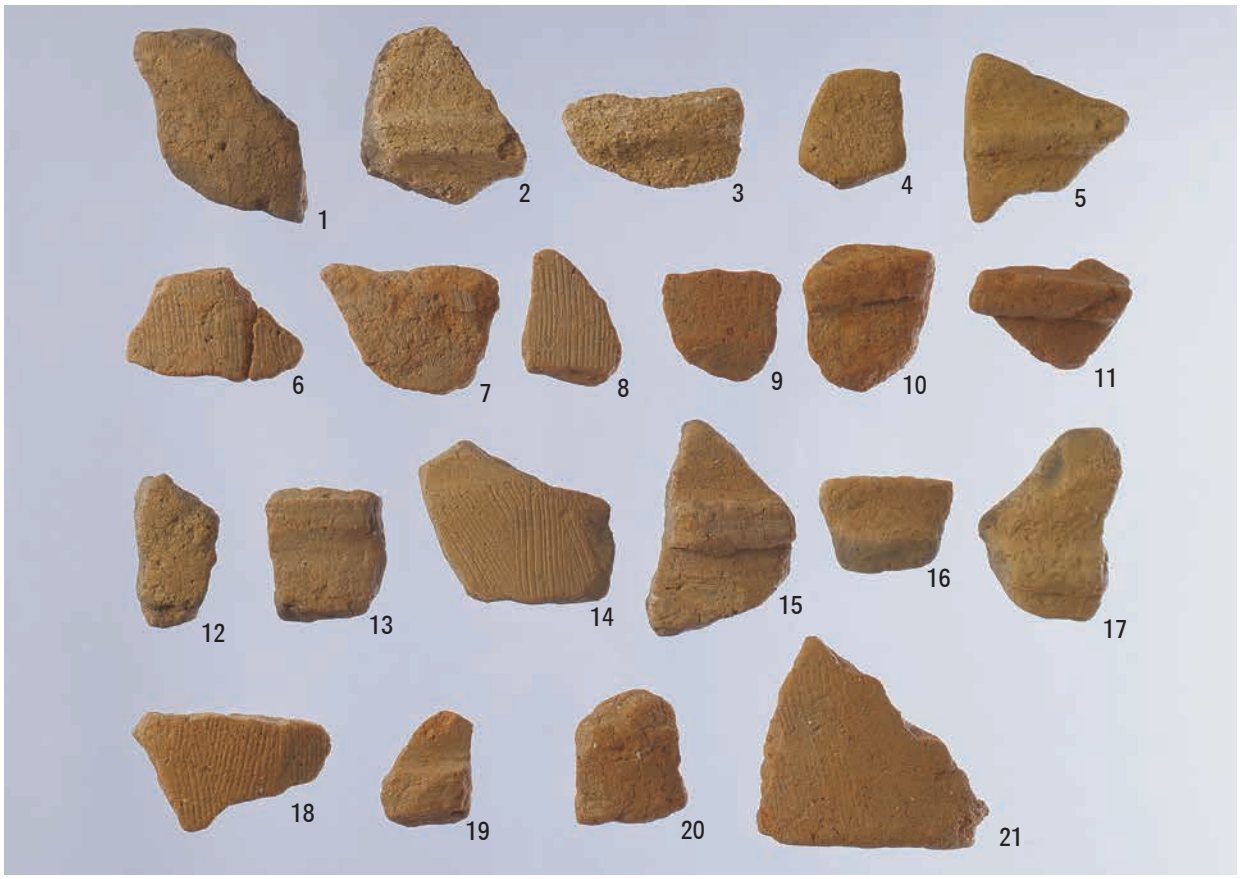


報72(正面)X線透過写真

図版36



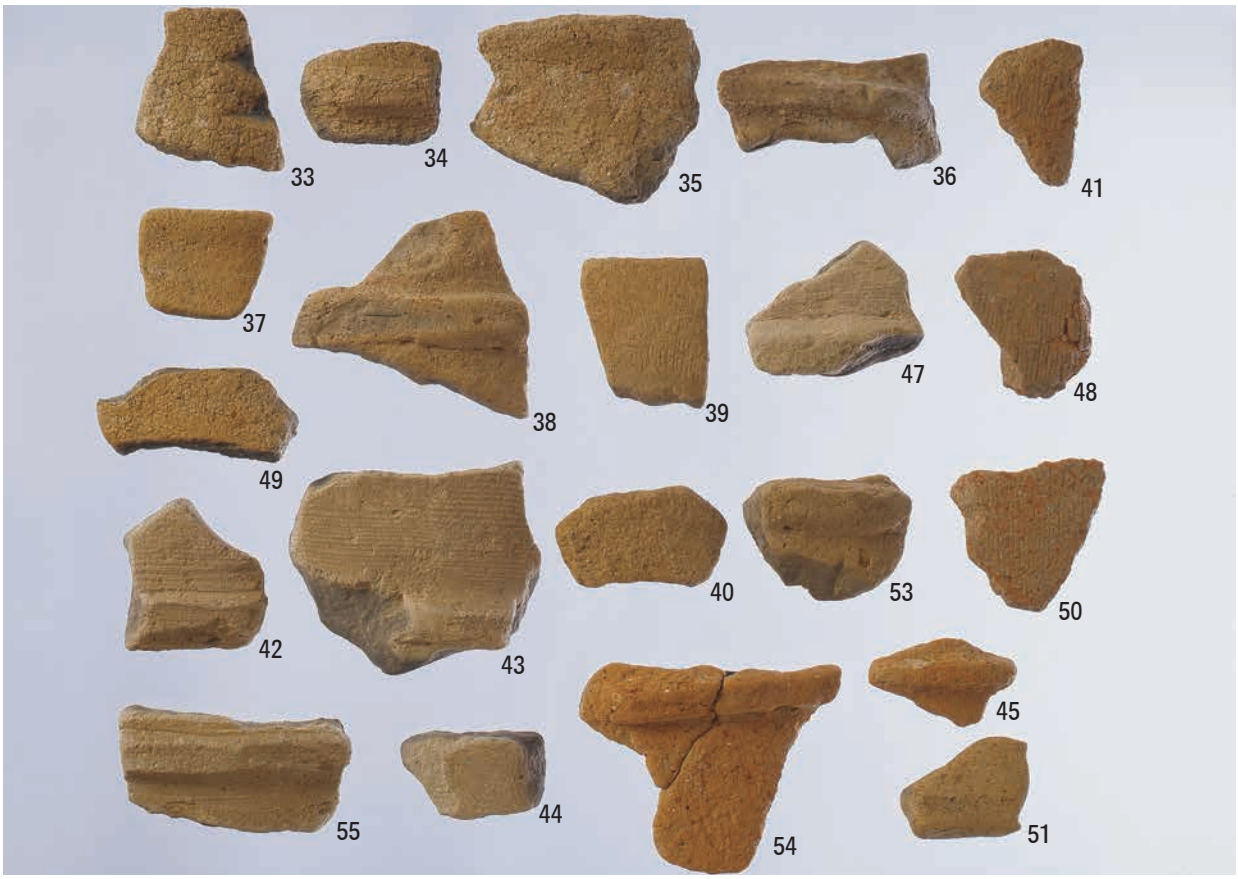
報72(側面)X線透過写真



胎土分析試料１（にんごう２号墳）

胎土分析試料２（にんごう２号墳）

図版38



胎土分析試料３（にんごう２号墳）

胎土分析試料４（にんごう２号墳）

胎土分析試料５（藤谷窯跡群）

胎土分析試料６（藤谷窯跡群）

図版40

胎土分析試料７（内多窯・久居窯跡群・ヲノ坪遺跡）

胎土分析試料８（明合古墳・殿村１号墳・殿村古墳群）

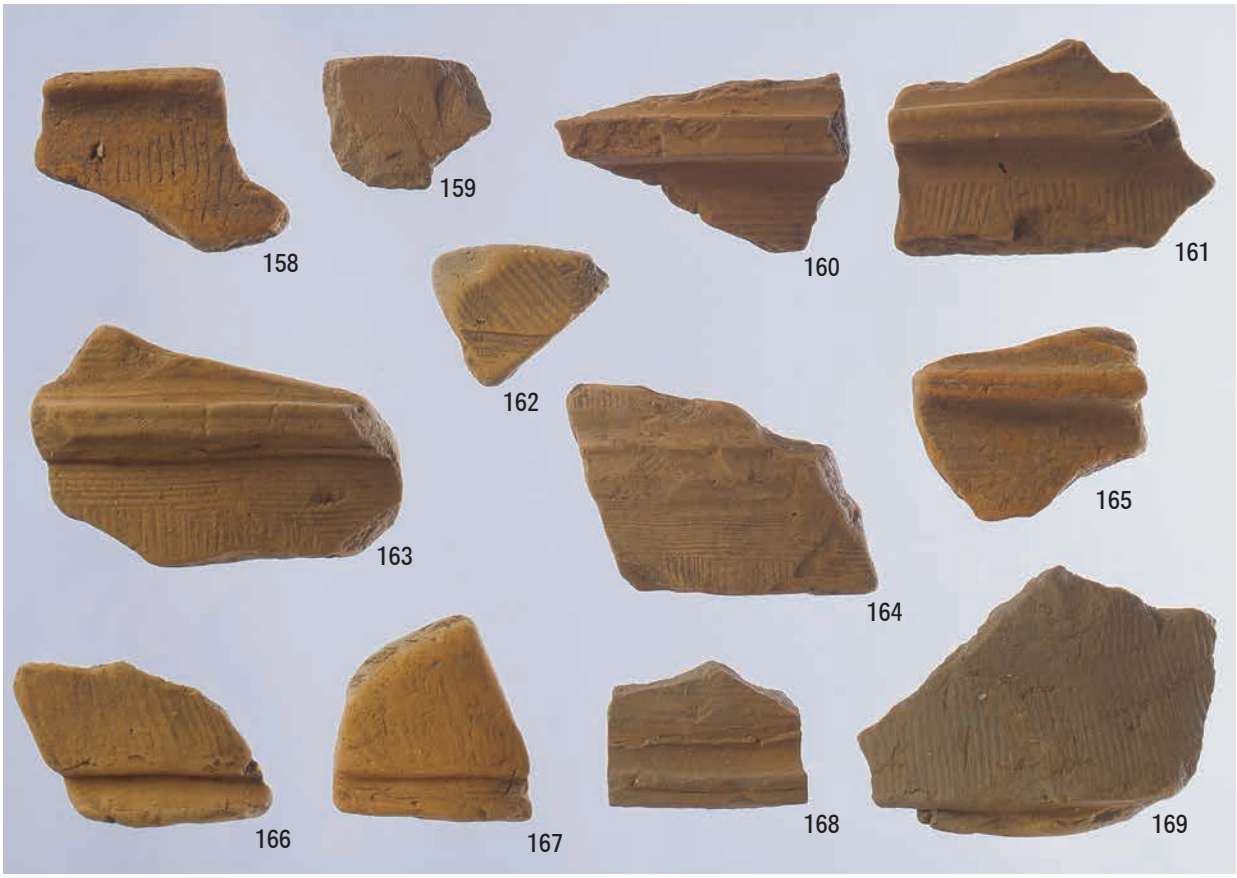
胎土分析試料９（稲葉３～５号墳・鎌切６号墳）

胎土分析試料10（西河辺古墳・堂山１号墳・元井池古墳・メクサ３号墳・赤塚古墳）

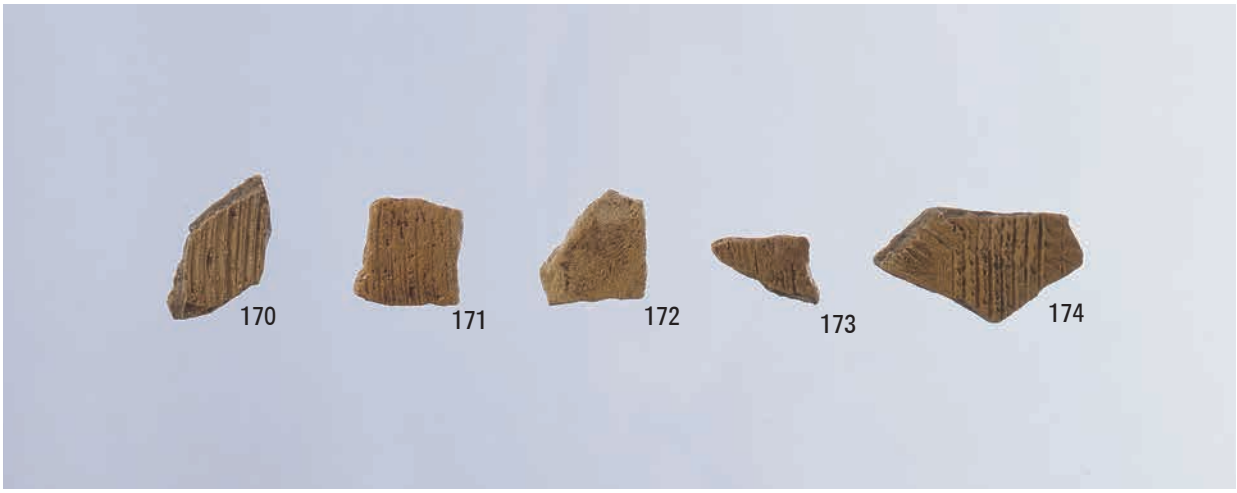
図版42

胎土分析試料11（日余１号墳）

胎土分析試料12（志保遺跡・迎山遺跡）



胎土分析試料13(大里西沖遺跡)



胎土分析試料14(高茶屋大垣内遺跡)

図版44

胎土分析試料15（上野遺跡）

胎土分析試料16（一色山古墳群）

胎土分析試料17(一色山古墳群)

胎土分析試料18(庄田２号墳)

報　告　書　抄　録

ふりがな	いっぱんこくどう23ごうちゅうせいどうろ（10こうく）けんせつじぎょうにともなう　にんごういせき にんごうこふんぐん　はっくつちょうさほうこく
書　　名	一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う　　にんごう遺跡・にんごう古墳群発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１１５－３３
編 著 者 名	山中由紀子・三辻利一
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　　TEL　0596（52）1732
発行年月日	西暦2014年　３月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にんごう遺跡（いせき）・にんごう古墳群（こふんぐん）	三重県津市（みえけんつし）大字神戸（おおあざかんべ）	24201	a774・a775・a776・a777・a880・a882	34°42′26″	136°28′12″	20120709～20120725 20120816～20130222	230 2,689	一般国道23号中勢道路建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
にんごう遺跡 にんごう古墳群	古墳	縄文時代？ 古墳時代	陥し穴状土坑　３基 方墳３基・円墳２基・不明１基	円筒埴輪・形象埴輪・須恵器・土師器・鉄剣・石器	

要　約	三重県津市大字神戸地内に所在するにんごう遺跡・にんごう古墳群の報告書。 調査地は、岩田川右岸、半田丘陵西部に位置する。 調査の結果、縄文時代と思われる土坑（陥し穴状土坑）３基、古墳時代中期の方墳２基と古墳時代末の円墳２基、時期不明方墳１基、墳形・時期等不明１基が確認された。 遺物は、古墳時代中～末の須恵器、円筒埴輪・形象埴輪、供献遺物と考えられる鉄剣が出土した。

三重県埋蔵文化財調査報告115－33

一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う

にんごう遺跡・にんごう古墳群発掘調査報告

2014（平成26）年　３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　光出版印刷株式会社